

# 江尻遺跡・蓑島遺跡発掘調査報告

——能越自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告Ⅳ——

2003年

財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所



上 江尻遺跡 B地区 近世・近代面全景（西から）  
下 江尻遺跡 B 1地区 457号井戸（西から）



上 江尻遺跡 B1地区 201号竪穴住居 弥生時代（北東から）  
下 蓑島遺跡 打製石斧

# 江尻遺跡・蓑島遺跡発掘調査報告

—能越自動車道建設に伴う  
埋蔵文化財発掘報告Ⅳ—

2003年

財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

# 序

能登と越中を結ぶ能越自動車道は、東海北陸自動車道が北陸自動道と交差する小矢部・砺波JCTからさらに北方へ延ばして、福岡町、高岡市、氷見市を通って石川県輪島市に至る高規格幹線道路として計画されました。この能越自動車道及び関連アクセス道の建設に伴い、富山県文化振興財団はその計画路線内の多数の遺跡を発掘調査してまいりました。

本書は平成7年度に調査を実施した、福岡町江尻遺跡・蓑島遺跡の発掘調査報告書です。

江尻遺跡では、縄文時代晩期の谷、弥生時代から古墳時代にかけての竪穴住居や遺物、さらに近世以降の屋敷などがみつかりました。とくに近世の屋敷では、楕円柱穴をもつ建物から土台建物への変遷の過程が明らかになりました。

蓑島遺跡では、縄文時代晩期中葉の特徴をもつ土器が出土しました。

この両遺跡の発掘調査の成果が、文献には表れない人々の生活をひとく一助となり、今後の研究に活用されれば幸いです。

本書をまとめにあたり、関係機関や団体また諸氏のご指導をいただき厚く感謝いたします。

平成15年3月

財団法人富山県文化振興財団

埋蔵文化財調査事務所

所長 桃野真晃

## 例　言

1 本書は富山県西砺波郡福岡町江尻地内に所在する江尻遺跡と、西砺波郡福岡町蓑島地内に所在する蓑島遺跡の発掘調査報告書である。

2 調査は建設省北陸地方建設局（現 国土交通省北陸地方整備局）からの委託を受けて、財団法人富山県文化振興財団が行った。

3 本遺跡の発掘調査期間と本書刊行までの整理期間は下記のとおりである。

調査期間　　江尻遺跡 平成7（1995）年5月19日～平成7（1995）年12月18日

　　　　　　蓑島遺跡 平成7（1995）年5月18日～平成7（1995）年8月11日

整理期間　　平成11（1999）年4月1日～平成13（2001）年3月31日

4 本書の編集・執筆は、森 隆、島田美佐子、金三津道子、新宅 茜、中野由紀子が担当し、執筆分担は文末に記した。

5 遺物の写真撮影は、楠華堂（代表 内田真紀子）に委託した。

6 自然科学的な分析は、以下の諸機関に委託し、その成果について報文を得た。

木製品樹種同定 財団法人 元興寺文化財研究所

植物種子同定 パリノ・サーヴェイ株式会社

7 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大な御教示・御協力を得た。記して謝意を表したい。（敬称略、五十音順）

赤羽久忠、大橋康二、佐伯安一、神保孝造、富山県教育委員会、富山県埋蔵文化財センター、福岡町教育委員会、藤澤良祐

## 凡 例

- 1 本書には本文、挿図及び表、自然科学的分析と写真図版を掲載する。
- 2 時期別に検出した主な遺構・出土遺物の内容については、文末に一覧で掲載している。
- 3 本書で示す方位は全て真北である。
- 4 挿図の縮尺は次の率を基本とし、各図の下に縮尺率を示す。なお遺物写真図版の縮尺は統一していない。  
遺構 建物：1/100, 溝：1/40・1/80, 井戸：1/40, 土坑：1/20・1/40  
遺物 土器・陶磁器：1/3～1/6, 木製品：1/1～1/12, 石製品：2/3～1/8,  
金属製品：1/1～1/6
- 5 遺構の略号は以下のとおりである。  
S B：建物, S D：溝, S E：井戸, S K：土坑, S O：落ち込み, S P：柱穴, S X：その他
- 6 江尻遺跡の遺構番号は、調査時に地区毎に付した番号にある一定の数値を加算して遺構番号とした。番号は遺構の種類に関わらず連番号とするが、近世の建物には新たに番号を付した。各地区的遺構番号に加算した数値は次の通りである。A：加算せず, B 1：200, B 2：500, C：600
- 7 遺物は遺跡毎に連番を付す。遺物番号は遺物観察表及び写真図版中の遺物番号と一致する。
- 8 施釉陶器等の釉の掛かる範囲は1点破線で示した。2種類以上の釉が掛かる場合や絵付けがされている場合はトレースの濃淡で示した。
- 9 遺物の煤付着部分及び漆器の赤色漆の部分等、遺構図中の地山及び炭化物層等はスクリーントーンで示す。以下に図示したもの以外については、それぞれの図・文を参照されたい。



- 10 遺跡の略号は、江尻遺跡「35E J - 地区名」・蓑島遺跡「35M S」で、遺物の注記には略号を用いた。
- 11 遺構一覧及び本文中で用いる遺構についての用語は以下のとおりとする。  
掘立柱建物：用語は『平城宮発掘調査報告Ⅶ』を参考とした。  
遺構一覧・遺物一覧の凡例は以下のとおりである。
  - ① 遺構の埋土に切り合い関係がある場合は、備考欄に新>古のように記号で示す。
  - ② 法量はcm単位で示す。
  - ③ 重量はg単位で示す。計測は大きさによって台秤と電子秤を使い分けた。
  - ④ 胎土・色調・釉調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所 色票監修「新版標準土色帖」・財團法人日本規格協会「標準色票 光沢版」を使用し、釉調の和名は小学館『色の手帖』より似たものを使用した。なお、陶磁器のうち複数の色が見られる場合は、最も多く使用されている色を記し、その他は特記事項に記す。但し透明釉の場合は記入しない。
  - ⑤ 特記事項：陶磁器については窯名・窯詰め技術・墨書・刻印・ヘラ記号等を、弥生土器については赤彩などを記す。木製品のうち漆器は漆の色を記す。

# 目 次

<b>第Ⅰ章 調査経緯</b>	1
1 調査に至る経緯	1
A 調査の契機	1
C 試掘調査	2
2 調査経過	4
A 調査方法	4
C 調査体制	5
E 整理の経過	5
B 分布調査	1
D 本調査	2
F 整理体制	6
<b>第Ⅱ章 立地と歴史的環境</b>	7
1 立地	7
2 歴史的環境	7
<b>第Ⅲ章 江尻遺跡</b>	12
1 調査の概要	12
A 概要	12
B 基本層序	13
2 遺構	13
A 繩文・弥生時代	13
(1) 繩文時代	13
(2) 弥生時代	15
B 中・近世	18
(1) 中世	18
(2) 近世	20
3 遺物	109
A 繩文時代	109
B 弥生時代	109
C 中・近世	111
(1) 土器・陶磁器	111
(2) 木製品	124
(3) 金属製品	129
(4) 石製品	130
<b>第Ⅳ章 蓑島遺跡</b>	183
1 遺跡の概要	183
A 概要	183
B 基本層序	183
2 遺構・遺物	185
A 繩文時代	185
B 弥生時代～古墳時代	188
C 近世以降	188
<b>第Ⅴ章 総括</b>	193
1 近世以前の遺構・遺物	193
2 近世の建物について	195
3 近世の出土遺物について	204
4 近代の屋敷跡について	208
<b>自然科学的分析</b>	
I 江尻遺跡樹種鑑定	215
II 江尻遺跡出土種子分析業務報告	222
<b>図版</b>	

# 卷首図版目次

- 卷首図版 1 江尻遺跡 B地区 近世・近代面全景
- 卷首図版 2 江尻遺跡 B 1地区 457号井戸
- 卷首図版 3 江尻遺跡 B 1地区 201号竪穴住居
- 卷首図版 4 萩島遺跡 打製石斧

# 挿図目次

- 第1図 調査位置図
- 第2図 周辺遺跡位置図
- 第3図 江尻遺跡 区割図
- 第4図 江尻遺跡 繩文・弥生時代・中世遺構全体図
- 第5図 江尻遺跡 A地区 繩文・弥生時代遺構全体図
- 第6図 江尻遺跡 B 1地区 繩文・弥生時代遺構全体図
- 第7図 江尻遺跡 B 2地区 繩文・弥生時代・中世遺構全体図
- 第8図 江尻遺跡 C地区 繩文・弥生時代遺構全体図
- 第9図 江尻遺跡 A～C地区 繩文時代遺構実測図 S D131 S D481 S D703
- 第10図 江尻遺跡 B 1地区 弥生時代遺構実測図 S I 201 S P 479 S D475 S D476
- 第11図 江尻遺跡 B 1地区 弥生時代遺構実測図 S D477 S D472～S D474
- 第12図 江尻遺跡 B 2・C地区 弥生時代遺構実測図 S D554～S D559 S D602 S D603  
S D605～S D607 S D613 S D623  
S D624 S D626
- 第13図 江尻遺跡 B 2・C地区 弥生時代遺構実測図 S D555 S X618 S X627 S X638  
S O563
- 第14図 江尻遺跡 C地区 弥生時代遺構実測図 S D605
- 第15図 江尻遺跡 B・C地区 中世遺構全体図
- 第16図 江尻遺跡 B・C地区 中世遺構実測図 S K551 S K553 S K621 S D470  
S D608～S D610 S D513 S D516 S D616  
S D617 S D620 S D631 S X646
- 第17図 江尻遺跡 近世・近代遺構全体図
- 第18図 江尻遺跡 A地区 近世遺構全体図
- 第19図 江尻遺跡 A地区 近世遺構全体図
- 第20図 江尻遺跡 A・B地区 近世屋敷地遺構平面図 S B 1～S B 3 S B 9 S B 10 S B 14  
S B 15
- 第21図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 S B 1～S B 3
- 第22図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 S E 21 S E 30 S P 14 S P 29 S K 13 S K 16  
S K 18 S K 20 S K 34 S K 35
- 第23図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 S P 51 S P 55 S P 105 S K 40 S K 48 S K 63  
S K 68 S K 75 S K 83 S K 93 S K 98 S K 142
- 第24図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 S E 102 S P 91 S P 125 S P 126 S P 128  
S K 90 S K 114～S K 116 S K 120 S K 129  
S K 130 S K 139

第25図	江尻遺跡	A 地区	近世遺構実測図	S P 17	S P 24	S P 36	S P 37	S P 45	S P 46
				S P 49	S P 54	S P 64	S P 67	S K 11	S K 12
				S K 22	S K 23	S K 31	S K 32	S K 38	S K 41
				S K 53	S K 57	S K 58	S K 60	S K 62	S K 65
				S K 73	S K 77			S K 69	S K 70
第26図	江尻遺跡	A 地区	近世遺構実測図	S P 80	S P 81	S P 96	S P 143	S K 39	S K 71
				S K 74	S K 79	S K 82	S K 87	S K 89	S K 94
				S K 107	S K 108	S K 111	S K 113	S K 117	S K 119
				S K 123	S K 138	S K 140	S K 144		S K 121
第27図	江尻遺跡	A 地区	近世遺構実測図	S D 1 ~ S D 9					
第28図	江尻遺跡	A 地区	近世遺構実測図	S D 10	S D 25 ~ S D 28	S D 43	S D 44	S D 56	
				S D 84	S D 85	S D 101	S D 104	S D 110	S D 118
				S D 122					
第29図	江尻遺跡	B 地区	近世・近代遺構全体図						
第30図	江尻遺跡	B 1 地区	近世屋敷地遺構全体図						
第31図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S B 4	S B 5				
第32図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S B 6 ~ S B 8	S B 11				
第33図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S B 9	S B 10				
第34図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S B 12	S B 13				
第35図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S B 14	S B 15				
第36図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S B 18	S B 19				
第37図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S P 272	S K 274	S K 261	S K 262	S X 457	
				S X 458					
第38図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S P 231	S P 233	S K 230	S K 235	S K 236	
				S K 246	S K 247				
第39図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S K 251	S K 254	S K 258	S K 259	S K 263	
				S K 269	S K 281				
第40図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S P 301	S P 302	S P 333	S P 335	S P 336	
				S P 344	S P 352	S P 365	S K 326	S K 346	S K 366
第41図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S P 319	S P 375	S P 387	S P 390	S K 318	
				S K 367	S K 381	S K 384	S K 388	S K 392	S K 395
第42図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S E 456	S P 425	S P 427	S K 426		
第43図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S P 271	S P 267	S K 234	S K 245	S K 250	
				S K 253	S K 268	S K 270	S K 275	S K 276	
				S K 278	S D 474	S X 460 ~ S X 463			
第44図	江尻遺跡	B 1 地区	近世遺構実測図	S D 222	S D 257	S K 282	S D 286 ~ S D 295		
				S D 297 ~ S D 299					
第45図	江尻遺跡	A · B 1 地区	近代屋敷地遺構全体図						
第46図	江尻遺跡	B 地区	近代遺構全体図						
第47図	江尻遺跡	B 1 地区	近代遺構実測図	S K 201	S K 202	S K 205	S K 206	S K 215	
				S X 224					
第48図	江尻遺跡	B 1 地区	近代遺構実測図	S K 203	S D 218	S D 222	S D 223	S D 286	
第49図	江尻遺跡	B 2 地区	近世遺構全体図						
第50図	江尻遺跡	B 2 地区	近世遺構実測図	S B 16	S B 17	S E 501			
第51図	江尻遺跡	B 2 地区	近世遺構実測図	S P 522	S P 526	S P 527	S P 532		
				S P 534 ~ S P 536	S P 538	S K 503 ~ S K 509	S K 524	S K 525	
				S K 529	S K 533	S K 537	S K 539 ~ S K 542		

第52図	江尻遺跡	B 2 地区	近世遺構実測図	S K507	S D512～S D515	S D517	S D518
第53図	江尻遺跡	C 地区	近世遺構全体図				
第54図	江尻遺跡	C 地区	近世遺構実測図	S D601	S D604	S D610～S D612	S D614
				S D615			
第55図	江尻遺跡	C 地区	近世遺構実測図	S D614	S D616	S D622	S D626
				S D634～S D637	S D639～S D645	S X638	
第56図	江尻遺跡	A～C 地区	遺物実測図	S D43	S D131	S D605	包含層
第57図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	S D43	S D131	包含層	
第58図	江尻遺跡	A・B 地区	遺物実測図	S P272	S K426	S K436	S D131
				S D223	S D299	S D472	S D473
				S D555～S D557	S X459	包含層	S D477
第59図	江尻遺跡	B 1・C 地区	遺物実測図	S P352	S D131	S D289	S D291
				S D298	S D473	S D477	S D605
				S D615	S X459	包含層	S D613
第60図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	S E21	S E102	S D 1	
第61図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	S D 2	S D 3	S D 9	S D10
				S D56	S D118		S D28
第62図	江尻遺跡	A・B 1 地区	遺物実測図	S K18	S K35	S K75	S K98
				S K115	S K120	S D218	
第63図	江尻遺跡	B 1 地区	遺物実測図	S K251	S D218		
第64図	江尻遺跡	B 1 地区	遺物実測図	S K263	S D223	S D287～S D289	
第65図	江尻遺跡	B 1 地区	遺物実測図	S E456	S K208	S K230	S K235
				S D291～S D293	S D295	S D298	S X224
第66図	江尻遺跡	B 1 地区	遺物実測図	S P233	S P243	S K246	S K251
				S K258	S K263	S K281	S D467
第67図	江尻遺跡	B 地区	遺物実測図	S E501	S P272	S P283	S P323
				S P406	S P409	S P427	S K315
				S K355	S K388	S K395	S K434
				S K510	S D131	S D513	S D514
				S D562			
第68図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	包含層			
第69図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	S D 2	包含層		
第70図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	包含層			
第71図	江尻遺跡	B 地区	遺物実測図	包含層			
第72図	江尻遺跡	B 地区	遺物実測図	包含層			
第73図	江尻遺跡	C 地区	遺物実測図	S D601	S D604	S D635	S D636
				S D636	包含層		
第74図	江尻遺跡	C 地区	遺物実測図	S D601	S X629	包含層	
第75図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	木製品	S E102	S K18	
第76図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	木製品	S E102	S D27	S D28
第77図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	木製品	S E102	S K116	S D 2
第78図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	木製品	S P55	S P128	S K142
第79図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	木製品	S P14	S P29	S P51
				S P91	S K40		
第80図	江尻遺跡	A 地区	遺物実測図	木製品	S E21		
第81図	江尻遺跡	B 地区	遺物実測図	木製品	S P428	S K235	S K236
				S K251			
				S K281	S K385	S K551	S D218
				S D223	S D517	包含層	
第82図	江尻遺跡	B 1 地区	遺物実測図	木製品	S K235	S D218	S X457

- 第83図 江尻遺跡 B地区 遺物実測図 木製品 S E456 S K235 S K236 S K261  
S D291 包含層
- 第84図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 S E456 S K215 S K251 S K269  
S D223 包含層
- 第85図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 S P387 S P390 S P428 S K414
- 第86図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 S P301 S P336 S P337 S P344  
S K413
- 第87図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 S P415 S P420 S P427 包含層
- 第88図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 S P352 S P365 S K453 S X460
- 第89図 江尻遺跡 C地区 遺物実測図 木製品 S D604 S D605 S D612 S X629 包含層
- 第90図 江尻遺跡 C地区 遺物実測図 木製品 包含層
- 第91図 江尻遺跡 A～C地区 遺物実測図 金属製品・石製品 S K235 S K254 S K281  
S D1 S D10 S D28 S D56 S D298 S D471 S D604  
S X224 包含層
- 第92図 江尻遺跡 A～C地区 遺物実測図 石製品 S E30 S E102 S E501 S K258  
S K281 S D43 包含層
- 第93図 萩島遺跡 区割図
- 第94図 萩島遺跡 遺構実測図 S D71 S D85 S K100
- 第95図 萩島遺跡 遺物実測図 包含層
- 第96図 萩島遺跡 遺物実測図 包含層
- 第97図 萩島遺跡 遺物実測図 包含層
- 第98図 萩島遺跡 遺物実測図 包含層
- 第99図 萩島遺跡 遺構実測図 S D2 S D23 S D24 S D35 S D51 S D55 S D58
- 第100図 萩島遺跡 遺物実測図 S D2 包含層
- 第101図 建物の変遷
- 第102図 県内の近世建物
- 第103図 用語例・富山県の民家例・福岡町の民家見取図・建物の間取推定復元図
- 第104図 江尻遺跡の近世・近代面陶磁器組成模式図・表
- 第105図 研波民家の類例と屋敷地復元案

## 図版目次

- 図版1 江尻遺跡 全景
- 図版2 江尻遺跡 A～C地区（縄文時代） S D131
- 図版3 江尻遺跡 B地区（弥生時代） B1地区全景 B2地区全景
- 図版4 江尻遺跡 B・C地区（縄文・弥生時代） C地区全景 S D477 S D605
- 図版5 江尻遺跡 A地区（近世） 全景 S B1 S B2
- 図版6 江尻遺跡 A地区 井戸・土坑（近世） S E21 S E30 S E102 S K18
- 図版7 江尻遺跡 A地区 土坑（近世） S K40 S K48 S K63 S K69 S K142
- 図版8 江尻遺跡 A地区 柱穴・溝（近世） S P29 S P81 S P126 S P128  
S D1～S D4
- 図版9 江尻遺跡 B地区（近世） 全景
- 図版10 江尻遺跡 B1地区（近世） 全景
- 図版11 江尻遺跡 B1地区（近世） 全景
- 図版12 江尻遺跡 B1地区 建物（近世） 中央・東側建物群 西側建物群

図版13	江尻遺跡	B 1 地区	建物（近世）	中央建物群	東側建物群
図版14	江尻遺跡	B 1 地区	建物・土坑・溝（近世）	S B 12～S B 15 S D 291	S K 230 S D 223 S D 294 S D 298
図版15	江尻遺跡	B 1 地区	土坑（近世）	S K 235	S K 281
図版16	江尻遺跡	B 1 地区	井戸・土坑（近世）	S E 456	S K 259
図版17	江尻遺跡	B 1 地区	柱穴・土坑・溝（近世）	S P 301 S D 291	S P 344 S K 262 S K 269
図版18	江尻遺跡	B 1 地区	柱穴・土坑（近世）	S P 417 S K 367	S P 419 S K 395 S P 427 S K 426
図版19	江尻遺跡	B 1 地区（近代）	屋敷地全景		
図版20	江尻遺跡	B 1 地区（近代）	屋敷地中央部	屋敷地北半部	S K 204 S K 205 S K 215 S D 218 S X 224
図版21	江尻遺跡	B 2 地区（近世）	全景		
図版22	江尻遺跡	B 2 地区	建物・土坑・溝（近世）	S B 16 S D 517	S B 17 S K 507 S D 513
図版23	江尻遺跡	B 2 地区	建物・井戸・溝（近世）	S B 16	S E 501 S D 514
図版24	江尻遺跡	C 地区（近世）	全景		
図版25	江尻遺跡	出土遺物	土器（弥生時代）	S D 131 包含層	S D 223 S D 477 S D 605 S D 613
図版26	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器（弥生時代・中世）	S D 131 S D 473	S D 289 S D 477 包含層
図版27	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（中世）	包含層	
図版28	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世）	S E 456 S D 223	S K 230 S K 355 S K 454 S D 1 包含層
図版29	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器（中・近世）	S P 427 S D 9	S E 102 S K 281 S D 1 包含層
図版30	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世以降）	S D 28	S D 218 S D 291 S D 298 S D 604 包含層
図版31	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世以降）	S P 409 S D 118	S K 235 S K 258 S K 281 S D 28 包含層
図版32	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器	S D 1～S D 3	
図版33	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器	S D 10 S D 218	S D 28 S D 43 S D 56 S D 118 S D 131
図版34	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器	S K 251	S D 218
図版35	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世以降）	S D 218	S D 223
図版36	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世以降）	S K 263	S D 223 S D 287～S D 289
図版37	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器（近世以降）	S D 291～S D 293	S D 295 S D 298 S D 467
図版38	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器	S D 513 S D 601 S D 636	S D 514 S D 604 S D 605 S D 615 S D 635
図版39	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器	S P 233 S K 114 S K 246	S P 243 S K 115 S K 251 S K 18 S K 35 S K 98 S K 120 S K 208 S K 235 S K 254 S K 258 包含層
図版40	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器	S E 21 S K 510	S E 501 S X 459 S P 272 S K 263 S K 281 S X 629

図版41	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器 S P 283 S P 323 S P 352 S P 353 S P 400 S P 406 S K 75 S K 315 S K 321 S K 328 S K 359 S K 388 S K 395 S K 426 S K 434 S K 436 S K 448	包含層	
図版42	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世以降）	包含層	
図版43	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世）	包含層	
図版44	江尻遺跡	出土遺物	土器・陶磁器（近世以降）	包含層	
図版45	江尻遺跡	出土遺物	陶磁器（近世）	S D 218 包含層	
図版46	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S E 102	
図版47	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S E 102 S K 142	
図版48	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S P 387 S P 420 S E 21 S K 235	
図版49	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S P 91 S P 128 S K 251	包含層
図版50	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S K 235 S K 269 S D 218	
図版51	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S E 456 S K 235 S K 453 S D 223	
図版52	江尻遺跡	出土遺物	木製品	S K 551 S D 604 S D 605	包含層
図版53	江尻遺跡	出土遺物	石製品	S E 30 S D 43	包含層
図版54	蓑島遺跡	全景	遺物出土狀況		
図版55	蓑島遺跡	全景			
図版56	蓑島遺跡	出土遺物	土器（縄文時代）	包含層	
図版57	蓑島遺跡	出土遺物	磁器（近世）	包含層	
図版58	蓑島遺跡	出土遺物	陶器（近世）	S D 2 包含層	
図版59	蓑島遺跡	出土遺物	石器（縄文時代）	包含層	
図版60	蓑島遺跡	出土遺物	石器（縄文時代）	包含層	
図版61	蓑島遺跡	出土遺物	石器（縄文時代）	包含層	
図版62	蓑島遺跡	出土遺物	石器（縄文時代）	包含層	

## 表 目 次

- 第1表 調査結果一覧
- 第2表 調査一覧
- 第3表 遺跡地名一覧
- 第4表 江尻遺跡 柱穴一覧
- 第5表 江尻遺跡 井戸一覧
- 第6表 江尻遺跡 土坑一覧
- 第7表 江尻遺跡 溝一覧
- 第8表 江尻遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧
- 第9表 江尻遺跡 木製品一覧
- 第10表 江尻遺跡 金属製品一覧
- 第11表 江尻遺跡 石製品一覧
- 第12表 蓑島遺跡 遺構一覧
- 第13表 蓑島遺跡 木製品一覧
- 第14表 蓑島遺跡 石製品一覧
- 第15表 蓑島遺跡 土器・陶磁器一覧
- 第16表 近世建物一覧

# 第Ⅰ章 調査経緯

## 1 調査に至る経緯

### A 調査の契機

能越自動車道は、高規格幹線道路網の一環として昭和62年に策定された。路線は小矢部砺波JCT（ジャンクション）から高岡市および氷見市を通過し、石川県輪島市に至り、既存の北陸自動車道、東海北陸自動車道等と連結することにより、富山県北西部地域や能登地域と東京、名古屋、大阪との交流の活性化と、地域幹線道路の交通緩和および災害に強い道路網の形成を目的にしている。道路の総延長は約100kmで、富山県内は約45kmが計画されており、小矢部東・福岡・高岡・高岡北・氷見・灘浦の各IC（インターチェンジ）が設置される。

道路の建設計画は平成2年4月に建設省（現 国土交通省）から富山県教育委員会に示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、建設省北陸建設局・富山県教育委員会・小矢部市教育委員会の三者により協議が行われた。その結果、埋蔵文化財の分布状況を把握するため、小矢部市の用地買収完了地域で早急に分布調査を実施することとなった。以後、平成3年12月に小矢部市域と福岡町域、次いで平成5年3月に高岡市域の分布調査を富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）が主体となり、当該市町教育委員会の協力を得て実施した。

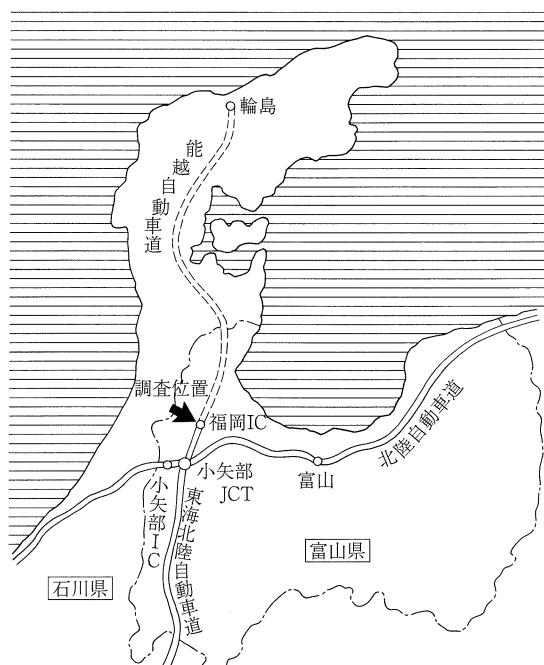
### B 分布調査

平成2年度の分布調査は、小矢部市域の本線敷地内（小矢部砺波JCT～福岡IC間）とアクセス道路敷地内（国道8号線芹川交差点～福岡IC間）を対象として、4月17・18日の2日間で実施し、両地内で新たに6ヵ所の埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。これらは便宜上、本線敷地内をNEJ-01・02・03・04、アクセス道路敷地内をNEJ-A-01・02と仮称した。

平成3年度の分布調査は、福岡町域の本線敷地内（福岡IC～福岡サービスエリア間）、用地買収が完了した小矢部市芹川地内と福岡町域のアクセス道路敷地内を対象として、12月3日に実施し、両地内で4ヵ所の埋蔵文化財包蔵地の存在を確認した。本線敷地内はNEJ-05・06・07、アクセス道路敷地内は前年度のNEJ-A-01が福岡町域で範囲を拡大したため、拡大域をNEJ-A-03、小矢部市芹川地内をNEJ-A-04と仮称した。

平成4年度の分布調査は、本線敷地内の高岡市笹川地内（福岡サービスエリア～JR北陸本線間）を対象として、3月22日に実施し、平成3年度に実施した試掘調査で明らかになった下老子遺跡（NEJ-07）の高岡市域への拡大とみて、NEJ-08と仮称した。

平成5年度の分布調査は、本線敷地内の高岡市笹



第1図 調査位置図

## 1 調査に至る経緯

島・上渡地内（JR北陸本線～県道小野上渡線間）を対象として、3月30日に実施し、位置的状況から近世北陸街道との交錯推定地を確認した。

## C 試掘調査

分布調査の結果報告から、遺跡推定地の今後の取り扱いについて検討が行われた。その結果、遺跡のより明確な範囲と内容について把握するため、試掘調査を実施することとなった。試掘調査は建設省から委託を受け、平成2年度は小矢部市教育委員会が、平成4・6年度は富山県文化振興財団が実施した。

平成2年度の試掘調査は11月1日から12月22日まで実施した。その結果、NEJ-04・NEJ-A-01・NEJ-A-02の3ヵ所で遺構・遺物が確認され、五社遺跡、石名田遺跡、地崎遺跡と命名された。また、本調査の必要な面積は合計約54,000m<sup>2</sup>と確定した。試掘調査の結果は、平成3年2月26日に建設省・富山県道路公社・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・小矢部市教育委員会の協議で報告された。

平成4年度の試掘調査は6月1日から7月7日まで実施した。その結果、NEJ-05・NEJ-06・NEJ-07・NEJ-A-03の4ヵ所で遺構・遺物が確認され、NEJ-05は開辟大滝遺跡、NEJ-06は2地点に分かれて蓑島遺跡・江尻遺跡、NEJ-07は下老子遺跡、NEJ-A-03は石名田遺跡と同一遺跡で範囲が拡大したため石名田木舟遺跡と命名された。また、本調査の必要な面積は合計約130,900m<sup>2</sup>と確定した。試掘調査の結果は、9月17日に建設省・富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センター・富山県文化振興財団の協議で報告された。

平成6年度の試掘調査は6月6日から7月4日まで実施した。その結果、NEJ-08は下老子遺跡と同一遺跡で範囲が拡大したため下老子笛川遺跡と命名された。また、本調査の必要な面積は67,050m<sup>2</sup>と確定した。試掘調査の結果は、9月17日に建設省・富山県埋蔵文化財センター・富山県文化振興財団の協議で報告された。

## D 本調査

本調査については平成3年4月に、建設省・富山県教育委員会（富山県埋蔵文化財センター）・富山県文化振興財団の協議で、遺跡の範囲が確定している五社遺跡、石名田遺跡、地崎遺跡の本調査の要望が出された。その結果、富山県教育委員会及び富山県文化振興財団は、東海北陸自動車道関連の調査が終了する平成4年度から、同財團埋蔵文化財調査事務所が能越自動車道関連の本調査を受託することで合意し、調査体制の整備及び調査方法の検討を進めた。

平成4年度は最も南側に所在する五社遺跡を対象に、7月20日から12月27日まで調査を実施した。調査は一部用地買収の遅れと、新たな下層遺構の検出により平成5・6年度も継続して実施した。

平成5年度は平成7年度末の福岡IC供用開始に向け、開辟大滝遺跡、石名田木舟遺跡を中心に、五社遺跡、地崎遺跡の調査を4月19日から12月21日まで実施した。

平成6年度は石名田木舟遺跡を中心に、用地買収の遅れていた五社遺跡の調査を5月18日から平成7年1月19日まで実施した。

平成7年度は、福岡町域の能越自動車道に係り消滅する町道の代替道路用地内の石名田木舟遺跡の調査を5月17日から7月25日まで実施した。また、福岡IC～福岡サービスエリア間にある蓑島遺跡、江尻遺跡、下老子笛川遺跡の調査を5月18日から12月18日まで実施した。

遺跡名	所在地	面積(m <sup>2</sup> )	調査期間	遺構	遺物	時代	面積(m <sup>2</sup> )
N E J-01	小矢部市水島	分布調査 5,600 試掘調査 271	H 2.4.17~4.18 H 2.11.1~11.2	なし	珠洲・陶器	中世・近世	
N E J-02	小矢部市水島	分布調査 8,000 試掘調査 237	H 2.4.17~4.18 H 2.11.1~11.2	なし	陶磁器	近世	
N E J-03	小矢部市道明	分布調査 16,800 試掘調査 1,184	H 2.4.17~4.18 H 2.11.1~11.2	なし	陶磁器	近世	
N E J-04 (五社遺跡)	小矢部市五社	分布調査 67,000 試掘調査 2,977	H 2.4.17~4.18 H 2.11.6~12.5	掘立柱建物・溝・土坑	土師器・須恵器・製塙土器・中世土師器・珠洲・中国製陶磁器	◎平安時代後半 ◎中世 近世	32,000
		本調査(延べ) 38,100	H 4.7.20~12.27	掘立柱建物・溝・畠・井戸・土坑・集石	土師器・須恵器・灰釉陶器・綠釉陶器・製塙土器・中世土師器・珠洲・中国製陶磁器・木製品・金属製品	◎平安時代後半 ◎中世 近世	
		本調査(延べ) 6,209	H 5.4.19~12.8	堅穴住居・掘立柱建物・溝・畠・集石	土師器・須恵器・木製品	◎古墳時代中期 ◎平安時代前半	
		本調査(延べ) 6,990	H 6.5.18~10.25	掘立柱建物・柵・溝・土坑	土師器・須恵器・製塙土器・中世土師器・珠洲・瀬戸美濃・中国製陶磁器・木製品	◎平安時代後半 ◎中世	
N E J-05 (開辟大溝遺跡)	福岡町開辟・大溝	分布調査 78,400 試掘調査 4,660	H 3.12.3 H 4.6.19~7.7	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	中世土師器・珠洲・近世陶磁器・木製品	◎中世 近世	25,300
		本調査(延べ) 28,063	H 5.5.19~12.21	掘立柱建物・柵・道路・溝・畠・井戸・土坑・石列	中世土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・中国製陶磁器・近世陶磁器・木製品・石製品・金属製品	◎中世 近世	
N E J-06-b (蓑島遺跡)	福岡町蓑島	分布調査 72,500 試掘調査 2,900	H 3.12.3 H 4.6.17~6.29	溝・土坑	縄文土器・近世陶磁器	◎縄文時代晚期 近世	3,400
N E J-06-a (江尻遺跡)	福岡町江尻		H 3.12.3 H 4.6.17~6.29	掘立柱建物・溝・土坑	弥生土器・中世土師器	弥生時代後期 中世 ◎近世	12,100
N E J-07 (下老子遺跡)	福岡町下老子	分布調査 74,800 試掘調査 4,900	H 3.12.3 H 4.6.1~6.17	堅穴住居・掘立柱建物・溝・土坑	弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・中国製陶磁器・近世陶磁器・石器・木製品	◎弥生時代後期・末 古代 中世 ◎近世	68,500
N E J-08 (下老子笹川遺跡)	高岡市笹川	分布調査 76,800 試掘調査 3,800	H 5.3.22 H 6.6.6~7.4	溝・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・石器	◎縄文時代晚期 弥生時代後期 奈良・平安時代 中世	67,050
N E J-A-01 (石名田遺跡)	小矢部市石名田	分布調査 25,200 試掘調査 1,462	H 2.4.17~4.18 H 2.11.30~12.13	掘立柱建物・溝・土坑	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・中国製陶磁器・木製品	◎奈良・平安時代 ◎中世 近世	21,000
N E J-A-03 (石名田木舟遺跡)	福岡町木舟	分布調査 32,600 試掘調査 2,100	H 3.12.3 H 4.6.16~7.1	堅穴住居・掘立柱建物・溝・杭列・礎石建物・根太敷建物・土坑・埋甕状土坑	土師器・須恵器・中世土師器・珠洲・越前・瀬戸美濃・中国製陶磁器・近世陶磁器・木製品・金属製品	◎古代 ◎中世 近世	21,600
		本調査(延べ) 14,493	H 5.5.11~12.15	堅穴住居・掘立柱建物・柵・溝・畠・井戸・土坑	土師器・須恵器・製塙土器・中世土師器・瓦質土器・八尾・珠洲・越前・瀬戸美濃・中国製陶磁器・越中瀬戸・近世陶磁器・土製品・金属製品・石製品・木製品	◎古代 ◎中世 近世	
		本調査(延べ) 40,781	H 6.5.18~H 7.1.19	古墳・堅穴住居・掘立柱建物・土台建物・礎石建物・柵・道路・溝・畠・井戸・土坑	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塙土器・中世土師器・瓦質土器・八尾・珠洲・越前・瀬戸美濃・中国製陶磁器・交趾・越中瀬戸・近世陶磁器・土製品・金属製品・石製品・木製品	古墳 ◎古代 ◎中世 近世	
		本調査(延べ) 2,050	H 7.5.17~7.25	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	中世土師器・瀬戸美濃・珠洲・瓦質土器・越中瀬戸・中国製陶磁器・近世陶磁器・金属製品・石製品	◎中世 近世	
N E J-A-02 (地崎遺跡)	小矢部市地崎	分布調査 19,800 試掘調査 1,049	H 2.4.17~4.18 H 2.11.30~12.21	掘立柱建物・穴	近世陶磁器・木製品	◎近世	1,000
		本調査 1,636	H 5.5.11~7.27	掘立柱建物・溝・井戸・土坑	八尾・珠洲・瀬戸美濃・中国製陶磁器・近世陶磁器・木製品・石製品・金属製品	◎近世	
N E J-A-04	小矢部市芹川	分布調査 19,400	H 3.12.3		近世陶磁器		
近世北陸道	高岡市笹川	分布調査 900	H 4.6.15~6.16	なし	近世陶磁器		
		分布調査 67,200	H 6.3.30		近世陶磁器		

※◎は主体をしめる時代

第1表 調査結果一覧

## 2 調査経過

### A 調査の方法

発掘調査の基準となるグリッドの設定に際しては国家座標を用い、遺跡毎に起点を設定した。江尻遺跡は+70.200-20.400、蓑島遺跡は+77.000-20.700をX 0 Y 0とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。グリッドは2m方眼とし、各グリッド名は右上のX軸とY軸の座標とした。江尻遺跡の発掘範囲はX24-X129、Y61-Y164までであり、調査区は道路によってA、B1、B2、Cに分けている。また、蓑島遺跡の発掘範囲はX40-X77、Y41-Y87までである。

調査は表土・耕作土・無遺物層の除去、包含層の発掘、遺構確認面の精査・遺構の検出、遺構の発掘、遺構の記録、写真撮影、空中写真測量、補足作業の順で行った。

表土・耕作土・無遺物層の除去は、人力掘削による調査の事前準備として、調査員立ち会いのもと、試掘調査の結果をふまえ、基本層序を確認しながら、事業者側が重機により行った。場所によっては無遺物層の除去も行った。

包含層の発掘はスコップ等を用い、人力で掘削した。排土はベルトコンベヤーを使用し、路線敷内の調査区隣接地に集積し、ダンプによる調査区外への搬出は事業者側が行った。

遺構確認面の精査・遺構の検出は、遺構確認面に達するとジョレンやねじり鎌で精査し、検出した遺構はマーキングを行い、遺構概略図を作成した。検出した遺構には遺構番号を付すが、各地区毎に遺構の種類に関わらず通し番号とした。概略図には遺構上面の埋土色を記入し、検討の材料とした。

遺構の発掘は柱穴・井戸・小さい土坑は長軸に沿って半截、大きい土坑は十字またはそれ以上に、溝は適宜に間隔をあけてセクションベルトを残し、移植ごとで発掘した。

遺構の記録は断面図を20分の1で実測し、遺構によっては10分の1の遺物出土状況図を作成した。各遺構の断面は35mmカメラで、出土状況図や個別の完掘写真・ロック写真はブローニー判もあわせて撮影した。調査区の全景写真は4×5インチ判カメラで2方向以上から撮影している。使用したフィルムは、35mmはカラーと白黒、ブローニー判・4×5インチ判はカラースライドと白黒を使用した。遺構の平面図作成には空中写真測量を利用し、撮影にはヘリコプターを使用した。

最後に空中写真測量のために残したセクションベルトなどをはずし、遺構の完掘を確認した。

遺跡	地 区	調査期間	延べ日数	調査面積	調査担当者	検出遺構	出土遺物
蓑島		平成7年5月18日～8月11日	43日間	3,476m <sup>2</sup>	島田美佐子 山元祐人	溝、土坑	縄文土器、土師器、中世土師器、珠洲、越前、中国陶磁器、越中瀬戸、唐津、伊万里、近代陶磁器、土製品、石器、石製品、木製品、銅錢
江尻	A 近代・近世面	平成7年5月19日～7月26日	35日間	3,855m <sup>2</sup>	三島道子 大野淳也	溝、井戸、土坑	越中瀬戸、越中丸山、瀬戸、伊万里、唐津、肥前、瓦質土器、土製品、木製品、石製品、金属製品
	弥生面	平成7年7月31日～11月7日	40日間	3,855m <sup>2</sup>	三島道子 大野淳也	土坑、自然流路	縄文土器、弥生土器、土師器、中世土師器、珠洲、石器
	B1 近代面 B2	平成7年5月19日～6月29日	25日間	1,000m <sup>2</sup>	森 隆 河西英津子	溝、道路、土坑	越中瀬戸、越中丸山、瀬戸、唐津、伊万里、肥前、近代磁器、石製品、木製品
	近世面	平成7年6月30日～9月13日	34日間	2,390m <sup>2</sup>	森 隆 河西英津子	掘立柱建物、土台建物、柱穴、溝、井戸、土坑	越中瀬戸、越中丸山、瀬戸、唐津、伊万里、肥前、木製品、石製品
	中世・弥生・縄文面	平成7年9月14日～11月17日	33日間	2,390m <sup>2</sup>	森 隆	竪穴住居、溝、土坑、自然流路	弥生土器、土師器、中世土師器、珠洲、中国製青磁、石器
	C 近代・近世・中世・弥生面	平成7年7月10日～11月3日	59日間	4,357m <sup>2</sup>	岡本淳一郎 柴口真澄	溝、道路、土坑	弥生土器、中世土師器、珠洲、越前、瀬戸美濃、中国製青磁、越中瀬戸、伊万里、木製品
	縄文面	平成7年11月6日～12月18日	18日間	4,357m <sup>2</sup>	岡本淳一郎 柴口真澄	自然流路	縄文土器、木製品

第2表 調査一覧

## B 調査の経過

平成7年度の調査は、建設省との協議のうえ、石名田木舟遺跡、蓑島遺跡、江尻遺跡、下老子笛川遺跡を対象に、調査員2名1班の体制で行った。江尻遺跡の遺構検出面はA地区で近代・近世面、弥生面の二面、B地区では近代面、近世面、中世・弥生・縄文面の三面、C地区では近代・近世・中世・弥生面、縄文面の二面に分かれており、調査総面積は22,204m<sup>2</sup>、調査期間は5月19日～12月18日である。蓑島遺跡の遺構検出面は近世面、古墳面、縄文面の三面に分かれており、調査総面積は3,476m<sup>2</sup>、調査期間は5月18日～8月11日である。

## C 調査体制

平成7（1995）年度

総括	岸本雅敏	埋蔵文化財調査事務所所長心得
	加藤善吾	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	大房友明	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩崎証意	埋蔵文化財調査事務所主事
調査総括	狩野睦	埋蔵文化財調査事務所調査第二課長
調査員	森隆	埋蔵文化財調査事務所主任
	岡本淳一郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	島田美佐子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	三島道子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	山元祐人	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	大野淳也	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	河西英津子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	柴口真澄	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

## D 現地説明会

発掘調査の結果を広く一般に公開するために、年に1回、調査工程を検討しながら対象地区を選定して現地説明会を実施した。説明会は江尻遺跡にて行い、蓑島遺跡については展示等を行った。

平成7年10月27日 新聞各紙に掲載

11月3日 江尻遺跡を会場に約150名の見学者が訪れた。遺跡各所に調査員を配置し、質問等に対応した。また、出土遺物・写真パネル等の展示・解説コーナー、ビデオ上映を設置した。

## E 整理の経過

出土遺物は各年度内に可能な限り洗浄・注記・分類を行った。木製品・石製品・金属製品はメモ写真を撮影し、整理台帳を作成した。木製品は収納・管理の便宜を図るためにオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし、仮保管している。調査概要については『埋蔵文化財年報』(7),『埋蔵文化財調査概要－平成7年度－』として発刊している。

報告書刊行に向けての本格的な整理は、平成11年4月に開始した。11年度は遺物実測・写真撮影、13年度は遺物実測・写真撮影・挿図と図版作成・原稿執筆・編集、14年度は印刷を行った。

遺物の実測は土器・陶磁器を調査員及び整理作業員が行った。木製品・石製品・金属製品については、業者委託による写真実測で行った。実測図は種類別の遺物カードに直接書き込むか貼り込んで整理した。遺構の実測図・写真・航空測量図は各台帳を作成して整理し、遺構カードとともにパソコン

## 2 調査経過

ルコンピュータを使用してデータ入力した。挿図にある遺構・遺物のデータは、観察表として掲載した。データ入力は人材派遣会社に委託し、整理作業員が補足した。

遺物の写真撮影は業者委託し、4×5インチ判を基本に、白黒とカラースライドフィルムを使用した。写真図版には密着焼付または引き伸ばしたものを使用した。遺構写真・遺物写真のうち重要なものはプロフォトCD化して保存した。

自然科学的分析は平成12年度から平成14年度にかけて専門機関に委託し、結果報告を掲載した。

木製品のうち重要なものは、平成12年度から平成13年度にかけて元興寺文化財研究所に委託し、保存処理を行った。

### F 整理体制

平成11（1999）年度

総括 桃野真晃 埋蔵文化財調査事務所所長  
          谷井保男 埋蔵文化財調査事務所副所長  
          上野章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
総務 宮成真幸 埋蔵文化財調査事務所主任  
          江本裕一 埋蔵文化財調査事務所主事  
整理総括 狩野睦 埋蔵文化財調査事務所調査第二課長  
担当 当島田美佐子 埋蔵文化財調査事務所主任  
          中川道子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
          深堀茜 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成12（2000）年度

総括 桃野真晃 埋蔵文化財調査事務所所長  
          肥田啓章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
          上野章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
総務 竹中慎一 埋蔵文化財調査事務所総務課課長補佐  
          江本裕一 埋蔵文化財調査事務所主事  
整理総括 狩野睦 埋蔵文化財調査事務所調査第二課長  
担当 当島田美佐子 埋蔵文化財調査事務所主任  
          中川道子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
          深堀茜 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成13（2001）年度

総括 桃野真晃 埋蔵文化財調査事務所所長  
          肥田啓章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
          上野章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
総務 竹中慎一 埋蔵文化財調査事務所総務課課長補佐  
          江本裕一 埋蔵文化財調査事務所主事  
整理総括 酒井重洋 埋蔵文化財調査事務所調査第二課長  
担当 当中川道子 埋蔵文化財調査事務所主任  
          新宅茜 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
          中野由紀子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

（新宅茜）

# 第Ⅱ章 立地と歴史的環境

## 1 立 地

富山県は本州のほぼ中央に位置しており、東を北アルプスに、西を両白山地及び西部丘陵に、南を飛騨高地に囲まれ、北は富山湾に面している。飛騨高原山地から北側に接して連なる音川山地、呉羽丘陵は県中央部に突出し、東部の複合扇状地平野（狭義の富山平野）と、西部の砺波平野に二分している。砺波平野北半の大部分は庄川新扇状地を形成し、面積約146 km<sup>2</sup>で日本の沖積扇状地の中でも最大級の面積を有している。扇状地上には庄川の変遷を示す河道跡が放射状に残っている。これに対して小矢部川流域の平野は、庄川新扇状地の発達に押されて狭い低地となっており、小矢部川は丘陵裾を蛇行して北流する。

福岡町は富山県西端部に位置する。西側は丘陵地となり、北は高岡市・氷見市と、南は小矢部市と接している。総面積のうち約4分の1が平地、4分の3が丘陵地である。西部丘陵地は元取山を中心に北に二上山、南に稲葉山・砺波山を配し、宝達丘陵の主峰宝達山に連なっている。平地は庄川、小矢部川及び西部丘陵地からの小川等でつくった、複合的沖積平野である。なお東部には「散居村」地域として著名な砺波平野が広がっている。

江尻遺跡は福岡町江尻地内、蓑島遺跡は福岡町蓑島地内に所在し、小矢部川と岸渡川と荒又川に挟まれた平地に立地する。岸渡川と荒又川は庄川の小分流と自然湧水を集めたもので、等高線10m内外の地帯を浸食していたといわれる。標高は18~20mを測り、庄川新扇状地の扇端部にあたる。遺跡が所在する一帯は、古くから沖積活動によって幾度となく流路を変えた庄川・小矢部川の氾濫による被害を受けてきたことが知られている。標高20~30mの扇端部一帯は湧水地帯としても知られ、また、標高10~15mの末端部では網目状流路をとる大小河川の浸食によって複雑な微地形が発達している。

## 2 歴史的環境

江尻遺跡・蓑島遺跡の周辺では縄文時代から近世まで各時代の遺跡が認められるが、ここでは時代を追って主な遺跡について紹介していく。

縄文時代には小矢部川右岸では下老子笹川遺跡（7）、高田新茅道遺跡（17）、駒方遺跡（22）などがある。3遺跡とも、標高10~20mの庄川扇状地端部に位置する晩期の遺跡である。下老子笹川遺跡は1995年から4年間にわたって調査が行われ、縄文時代晩期では竪穴住居11棟などが検出されている。小矢部川左岸では堂前遺跡（28）、岩坪岡田島遺跡（32）がある。堂前遺跡は溝の中や肩付近から後期前半を主体とする土器が出土した。住居等は検出されなかったが、遺物の量から付近に集落が存在した可能性が高い。岩坪岡田島遺跡は前期中頃から前期末頃にかけての土器が包含層や自然流路から出土した。明確な遺構はなかったが付近に集落が存在したことが考えられる。

弥生時代では小矢部川右岸に下老子笹川遺跡（7）、石塚遺跡（25）がある。下老子笹川遺跡では弥生時代後期から終末期にかけての竪穴系建物27棟が検出された。当該期の土器のほか、水準器である「水盛り」や農耕具などの木製品、製作工程の復元の可能な管玉未成品などが出土している。石塚遺跡は弥生時代中期の拠点的集落として著名である。

古墳時代は小矢部川左岸の丘陵裾沿いの山腹斜面に、頭川城ヶ平横穴墓（30）、江道横穴墓群（38）、

加茂横穴墓群（53）などの横穴墓や、立山古墳群（36）、柴野春日古墳群（37）、麻生谷殿谷内古墳群（43）、馬場古墳群（49）などの古墳群が多く存在する。集落遺跡には間尽遺跡（29）、麻生谷遺跡（40）、麻生谷新生園遺跡（41）がある。また、古墳時代中期から近世までの複合遺跡である五社遺跡（4）があり、5世紀中頃のカマドを有する竪穴建物が確認されている。

古代では、間尽遺跡（29）、麻生谷遺跡（40）、麻生谷新生園遺跡（41）がある。麻生谷遺跡は古代北陸道「川人駅」に関係するとされる。麻生谷新生園遺跡は石敷きの道路が検出され、古代北陸道の一部と推定されている。小矢部市の五社遺跡では条里地割を示す溝が検出され、地割方向が時期によって変化することが確認された。また12世紀後半から15世紀にかけて、7群に区分できる掘立柱建物群が確認され、後白河天皇の皇女室町院の御領「糸岡庄」の所在の中心地と考えられている。古代から中世にかけての砺波平野では、荘園が増大していき、高岡市では東大寺領荘園図にみられる「須加村墾田地」の比定地が含まれる。

中世では丘陵上・台地上に山城・寺院が立地する。山城では笛八口砦跡（34）、麻生谷殿内城跡（44）、柴野城ヶ平城跡（45）、馬場城跡（48）、馬場東城跡（51）、鴨城跡（52）などがある。寺院では釈迦堂遺跡（33）、円通庵遺跡（39）などがある。一方、平野部では開辟大滝遺跡（3）の南西約870mに木舟城跡（9）がある。木舟城は寿永三年（1184）年に石黒氏が築城したものといわれ、砺波地方の北部地域を支配する中心的な勢力となった。戦国時代末期には上杉氏、佐々氏、前田氏の居城となり、天正十三（1585）年の白山大地震によって崩壊したと伝えられている。木舟城の城下町である開辟大滝遺跡では16世紀後半の町屋群が確認され、2本の道路跡と短冊形地割に整然と並ぶ建物や炉関連遺構などが検出されている。また、鍛冶・鋳物関連の遺物が出土しており、鋳物師や鍛冶師などの職人集団が住む城下集落と考えられている。『貴船城古今誌』に掲載されている位置図と比較すると、鉄砲町・鍛冶屋町付近に相当する。木舟城の崩壊後は城主前田氏が今石動城に遷ったため、城下の町人も石動や高岡などに移住し、農村地帯となっていました。

近世以降には砺波平野一帯は加賀藩の支配下に入り、灌漑用水の充実などの開拓政策によって開発が進み、米の生産量は加賀百万石を支える要因ともなった。小矢部川左岸の石動には町奉行が置かれ、北陸道の宿場町としても、年貢米の集散地としても重要な町となっていました。これに対し、小矢部川右岸の平野部では地崎遺跡（6）などで屋敷跡が確認されているが、農村の域を出ることはなかった。現在では豊かな水田地帯となっている。

（中野由紀子）



第2図 周辺遺跡位置図 (1:50,000)

## 2 歷史的環境

番号	遺跡名	所在地	種類	時代	文献
1	江尻遺跡	福岡町江尻	集落	縄文・弥生・古墳・中世・近世	4,8
2	蓑島遺跡	福岡町蓑島	集落・散布地	縄文・弥生・古墳・中世・近世	4,8
3	開鎋大滝遺跡	福岡町開鎋 小矢部市五社	集落	中世・近世	2,4,5,14
4	五社遺跡	小矢部市五社字村中	集落・莊園	古墳・古代・中世・近世	2,3,5,6,11
5	石名田木舟遺跡	小矢部市石名田・五社 福岡町木舟	散布地	弥生・奈良・古代・中世 46,47,49	2,4,5,6,8,19,
6	地崎遺跡	小矢部市地崎	集落・莊園	江戸	2,4,5,14
7	下老子笛川遺跡	福岡町下老子 高岡市笛川	集落	縄文・弥生・古墳・古代・中世・ 近世	4,7,8,9,10,12
8	近世北陸道遺跡	高岡市笛川	道(街道)	近世	12
9	木舟城跡	福岡町木舟字西堀	城館	中世・近世	44
10	五社条里遺跡	小矢部市五社	条里	古代・中世	
11	木舟北遺跡	福岡町木舟	散布地	古代・中世	48
12	大滝遺跡	福岡町大滝・蓑島	散布地	古墳・古代・中世・近世	
13	大滝芋田遺跡	福岡町大滝	散布地	古代・中世・近世	
14	上蓑中田遺跡	福岡町上蓑・蓑島	散布地	古代・中世・近世	
15	下老子北遺跡	福岡町下老子	集落	中世・近世	
16	油屋寺田遺跡	高岡市戸出字油屋	散布地	古墳・古代	
17	戸出後生寺遺跡	高岡市醍醐	散布地	古代・中世・近世	33
18	戸出横越北遺跡	高岡市横越	散布地	古代・中世・近世	33
19	上開発遺跡	高岡市上開発	散布地	古代・中世	
20	今市遺跡	高岡市今市	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世	
21	高田新西後遺跡	高岡市高田新字西後	散布地	縄文(晚)・古代・中世	43
22	駒方遺跡	高岡市駒方	散布地	縄文(晚)・古代・中世	43
23	立野地頭田遺跡	高岡市立野字地頭田	散布地	縄文(晚)・古代	
24	高田新茅道遺跡	高岡市高田新字茅道	散布地	縄文(晚)	43
25	石塚遺跡	高岡市和田・石塚・上北島	集落	弥生(中)・古墳・古代(奈良・ 平安)・中世(鎌倉・室町)	21,24,25,26,28,29, 30,31,34,37
26	東木津遺跡	高岡市東木津・木津	集落	弥生・古代(奈良・平安)・中世	30,34,39,42
27	下佐野遺跡	高岡市佐野・下佐野・西佐野	集落		27,28,30,36
28	堂前遺跡	高岡市五十里	集落	縄文・古代	17,18
29	間尽遺跡	高岡市国吉(手洗野)	集落	弥生・古墳・古墳(飛鳥・白鳳) ・古代(奈良・平安)・中世	40
30	頭川城ヶ平横穴墓	高岡市岩坪	古墳(横穴)	古墳	22,23,41
31	手洗野赤浦遺跡	高岡市国吉	集落	中世	13,15
32	岩坪岡田島遺跡	高岡市国吉	集落	縄文・古代・中世・近世	13,15,16,17
33	釈迦堂遺跡	高岡市 笹八口	社寺(寺院)	中世(鎌倉・室町)	38
34	笹八口砦跡	高岡市 笹八口	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	
35	笹八口古墳群遺跡	高岡市 笹八口	古墳	古墳	
36	立山古墳群	高岡市月野谷	古墳	古墳	
37	柴野春日古墳群	高岡市柴野	古墳	古墳	
38	江道横穴墓群	高岡市江道字高宮	古墳(横穴)	古墳	20,35
39	円通庵遺跡	高岡市江道	社寺(寺院)	中世(鎌倉・室町)	38
40	麻生谷遺跡	高岡市麻生谷・石堤	集落	古墳・古墳(飛鳥・白鳳)・古代 (奈良・平安)・中世	32
41	麻生谷新生園遺跡	高岡市麻生谷・石堤	集落	縄文・古墳・古代(奈良・平安) ・中世(鎌倉・平安)	32,34
42	石堤柏堂古墳群	高岡市石堤	古墳	古墳	
43	麻生谷殿谷内古墳群	高岡市麻生谷	古墳	古墳	
44	麻生谷殿内城跡	高岡市生谷	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	
45	柴野城ヶ平城跡	高岡市柴野	城館(山城)	中世(鎌倉・室町)	
46	赤丸浅井神社古墳	福岡町赤丸	古墳	古墳	
47	赤丸古村遺跡	高岡市六日市	散布地	縄文?・古代(奈良・平安)・中 世(鎌倉・室町)・近世	
48	馬場城跡	福岡町馬場	城館(山城)	中世	
49	馬場古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	44
50	加茂神社古墳群	福岡町馬場	古墳	古墳	
51	馬場東城跡	福岡町馬場	城館(山城)	中世	
52	鴨城跡	福岡町加茂・島倉	城館(山城)	中世	44
53	加茂横穴墓群	福岡町加茂字大松平	古墳(横穴)	古墳	44
54	土屋古墳群	福岡町土屋	古墳	古墳	
55	下向田古墳群	福岡町下向田	古墳	古墳	45
56	西明寺遺跡	福岡町里口	社寺(寺院?)	中世	44
57	上向田古墳群	福岡町上向田	古墳	古墳	
58	上五位神社古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	
59	平尻山古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	
60	上野古墳群	福岡町上向田・上野	古墳	古墳	1,44

第3表 遺跡地名一覧

## 文 献

- 1 小矢部市 1971 『小矢部市史』(上巻)
- 2 小矢部市教育委員会 1991 『富山県小矢部市能越自動車道関係遺跡群試掘調査報告』
- 3 財団法人富山県文化振興財団 1993 『埋蔵文化財年報』(4)
- 4 財団法人富山県文化振興財団 1993 『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－小矢部市～福岡町間－』
- 5 財団法人富山県文化振興財団 1994 『埋蔵文化財年報』(5)
- 6 財団法人富山県文化振興財団 1995 『埋蔵文化財年報』(6)
- 7 財団法人富山県文化振興財団 1995 『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－N E J 08遺跡－』
- 8 財団法人富山県文化振興財団 1996 『埋蔵文化財調査概要－平成7年度－』
- 9 財団法人富山県文化振興財団 1997 『埋蔵文化財調査概要－平成8年度－』
- 10 財団法人富山県文化振興財団 1998 『埋蔵文化財調査概要－平成9年度－』
- 11 財団法人富山県文化振興財団 1998 『五社遺跡発掘調査報告 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第9集』
- 12 財団法人富山県文化振興財団 1999 『埋蔵文化財調査概要－平成10年度－』
- 13 財団法人富山県文化振興財団 1999 『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－N E J 10・N E J 11－』
- 14 財団法人富山県文化振興財団 2000 『開辟大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第11集』
- 15 財団法人富山県文化振興財団 2000 『埋蔵文化財調査概要－平成11年度－』
- 16 財団法人富山県文化振興財団 2001 『埋蔵文化財調査概要－平成12年度－』
- 17 財団法人富山県文化振興財団 2002 『埋蔵文化財調査概要－平成13年度－』
- 18 財団法人富山県文化振興財団 2002 『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告－N E J -13 N E J -14 N E J -20 N E J -21 中尾坊田遺跡 中尾新保谷内遺跡－』
- 19 財団法人富山県文化振興財団 2002 『石名田木舟遺跡発掘調査報告 富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告第14集』
- 20 高岡市教育委員会 1957 『高岡市江道横穴古墳群調査報告書』
- 21 高岡市教育委員会 1982 『昭和56年度高岡市埋蔵文化財調査報告書 石塚遺跡・荒見崎遺跡・利賀野遺跡』
- 22 高岡市教育委員会 1983 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群 第1次緊急発掘調査報告書概要』
- 23 高岡市教育委員会 1984 『富山県高岡市頭川城ヶ平横穴墓群 II次発掘調査報告』
- 24 高岡市教育委員会 1986 『富山県高岡市石塚遺跡調査概報』
- 25 高岡市教育委員会 1987 『石塚遺跡調査概報 I』
- 26 高岡市教育委員会 1988 『石塚遺跡調査概報 II』
- 27 高岡市教育委員会 1992 『高岡市埋蔵文化財調査報告第17冊 下佐野遺跡調査概報 I』
- 28 高岡市教育委員会 1992 『高岡市埋蔵文化財調査報告第18冊 市内遺跡調査概報 I－平成3年度石塚遺跡・下佐野遺跡の調査－』
- 29 高岡市教育委員会 1996 『市内遺跡調査概報 IV』
- 30 高岡市教育委員会 1997 『市内遺跡調査概報 V』
- 31 高岡市教育委員会 1997 『市内遺跡調査概報 VI』
- 32 高岡市教育委員会 1997 『麻生谷遺跡・麻生谷新生園遺跡調査報告』
- 33 高岡市教育委員会 1997 『高岡市埋蔵文化財分布調査概報 VIII－平成8年度 戸出地区西部の遺跡分布調査－』
- 34 高岡市教育委員会 1998 『市内遺跡調査概報 VII』
- 35 高岡市教育委員会 1998 『江道横穴古墳群調査報告』
- 36 高岡市教育委員会 1999 『市内遺跡調査概報 IX』
- 37 高岡市教育委員会 1999 『石塚遺跡調査概報 V』
- 38 高岡市教育委員会 1999 『国吉・石堤地区の遺跡調査概報』
- 39 高岡市教育委員会 2000 『市内遺跡調査概報 X』
- 40 高岡市教育委員会 2000 『間尽遺跡調査報告』
- 41 高岡市教育委員会 2001 『頭川城ヶ平横穴墓群調査報告 III』
- 42 高岡市教育委員会 2001 『市内遺跡調査概報 XI』
- 43 富山県立高岡工芸高校地理歴史クラブ・O B会 1972 『富山県高岡市高田新・駒方遺跡調査報告書』
- 44 福岡町 1969 『福岡町史』
- 45 福岡町教育委員会 1985 『富山県福岡町下向田古墳群試掘調査概報』
- 46 福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター 1995 『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書』
- 47 福岡町教育委員会・富山県埋蔵文化財センター 1996 『富山県福岡町石名田木舟遺跡第3次発掘調査報告書』
- 48 福岡町教育委員会 1997 『民間分譲住宅地造成事業に係る埋蔵文化財発掘調査概要 木舟北遺跡』
- 49 福岡町教育委員会 1997 『富山県福岡町石名田木舟遺跡発掘調査報告書－県指定史跡 木舟城跡隣接地における発掘調査－』

# 第Ⅲ章 江尻遺跡

## 1 遺跡の概要

### A 概 要

江尻遺跡と蓑島遺跡は当初同一遺跡（N E J -06遺跡）と考えられていたが、試掘調査の結果二つの遺跡に分割された。このうち江尻遺跡は北東側に位置する。調査区は中央を主要地方道福光・福岡線に分断されており、さらに既存町道および農道で区画される。南西側からA地区、B地区（B1・B2地区）、県道を挟んで北東側をC地区とし、調査地区の設定をおこなった（第3図）。試掘時の知見では、A・Bの両地区で谷状の落ち込みを検出しており、この谷の上面から切り込む遺構を多数検出した。試掘時には谷からの出土遺物がなく帰属時期が判然としなかったが、その後の本調査で縄文時代の谷であることが明らかとなった。A・B両地区では楕円柱穴などの遺構とともに近世陶磁器が多く出土しており、この時期の建物群の存在が試掘時にも確認できた。またB地区東側の試掘トレンチでは弥生土器が比較的まとまって出土しており、該期の遺構の存在が予測された。本調査においても弥生時代の遺構（竪穴住居、溝など）はこの付近においてのみ検出されている。但し弥生時代の遺構の中心は調査区内ではなく、調査区はちょうど集落範囲の北西側縁辺にあたり、B1地区の南東側一帯に弥生時代集落の中心があるものと推定された。またC地区については、試掘時に中・近世陶磁器の出土がみられたものの、地形がやや低く一帯は広い谷部と推察された。以上の試掘時の知見をふまえて本格調査を実施した。その結果、縄文時代の谷跡、弥生時代の竪穴住居や溝、中世の溝群、近世から近代に至る屋敷地や道路、溝、土坑、柱穴などの多数の遺構を検出した。同時に遺物についても縄文土器・石器、弥生土器、中世から近世・近代に至る時期の土器・陶磁器が多数出土した。これらの遺構・遺物が本報告書の記述の中核となる。



第3図 江尻遺跡 区割図

## B 基本層序

調査区は高速道路の路線敷地内を細長くのびており、各地区の基本層序は旧地形の起伏や制約により少しずつ様相を異にしている。まずA地区の基本層序はⅠ層：耕作土、Ⅱa層：黄灰色砂質土、Ⅱb層：黄灰色シルト、Ⅲb層：黒色シルト、Ⅲc層：灰色粘質土、Ⅲe層：黒色シルト、Ⅳ層：黄褐色シルトとなる。このうちⅡa層が近世の遺物包含層である。Ⅱb層は近世末～近代の整地盛土で、調査区のなかでも北東端付近にのみみられる。Ⅲb層は弥生時代の遺物包含層、Ⅲc～Ⅲe層は調査区の中央で検出された縄文谷の埋土、Ⅳ層が地山となる。遺構面はⅡb層（整地盛土）上面が近代面、Ⅲb層上面が近世の遺構面となる。遺構面の標高は19～19.5mの範囲にある。B地区もA地区とほぼ同様の基本層序である。但しB地区、とくにB1地区については既存宅地であったため、広範囲に現代の搅乱がみられた。従って調査はまず宅地の基礎となっているコンクリートの除去から着手しなければならなかった。次いでA地区のⅡb層に相当する近代の整地盛土が、調査区の南西側の一角に浅い高まりとして残存することが判明した。このⅡb層を削除すると近世の遺構面となるが、B1地区の場合遺構面のベースとなる土層にはかなりの変化がみられる。これはB地区ではA地区から続く縄文谷が、調査地区の中央部分を大きく縦断していることによる。このためB1地区の北側半分は南側に比べやや低くなっている。この付近では縄文谷の埋土上面が近世の遺構面となる。反面B1地区の北端付近はやや高くなっている。耕作土を削除すると礫層基盤の地山が直接露出している。また弥生時代の遺構がみつかったB1地区の西端付近も、後世の削平の結果浅くなっている。近世・近代の遺構が弥生時代の遺構と混在して同一面で検出された。総じてB1地区は層位で遺構面を分離出来る状況ではなく、遺構の埋土と切り合いで数時期の遺構群に分離することとなった。またB2地区はB1地区の北側に町道を挟んで対置する小区画の調査地だが、こちらはA地区のⅣ層黄褐色シルトと同様の地山層であるが、遺構の方は溝が複雑に切り合う状況で、とくに近世以降の屋敷地の北端部を示す状況にあった。なおB地区の遺構面の標高はA地区と同様19～19.5mの範囲にある。最後にC地区であるが、C地区はA・B両地区とはやや様相を異なる。基本層序はⅠ層：暗黄灰色シルト（耕作土）、Ⅱ層：黒褐色土、Ⅲc層：黄灰色粘質土、Ⅲd層：黄灰色シルト、Ⅲe層：黒色粘質土、Ⅳ層：黄灰色砂または礫層となり、Ⅲd層が上層遺構面、Ⅳ層が下層遺構面（地山層）となる。C地区はA・B両地区に比べると約1m低く、下層遺構面の標高は、概ね18.5m前後を数える。

## 参考文献

財團法人富山県文化振興財団 1993 『能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告一小矢部市～福岡町間一』

## 2 遺構

今回の調査のなかで最も遡る遺構は縄文時代のものである。ただし縄文時代については該期の埋没谷と、若干の土器・石器があるに過ぎない。次いで弥生時代の遺構としては竪穴住居がみつかっている。その後の古墳時代から古代にかけての遺構・遺物が欠落しており、その間の様相は判然としない。中世になると再び遺構・遺物がみられるようになるが、建物などは伴っておらず、近隣に中世集落の存在が示唆されるに留まる。近世、とくに16世紀末から17世紀以降になるとA・B地区を中心に屋敷地と建物群の形成が開始され、以後近代まで存続している。以下当調査地の検出遺構について、大きくA縄文・弥生時代、B中・近世（一部近代を含む）にわけて記述していきたい。

## A 繩文・弥生時代

### (1) 繩文時代

縩文時代の遺構では人為的構築の痕跡を示すものは検出されておらず、縩文時代に形成され、弥生時代には埋没したと考えられる谷（S D131）と若干の自然形成の溝が検出されているに過ぎない。

#### 谷・溝

##### 131号谷（S D131, 第9図, 図版2）

A地区の南壁付近に始まり、A地区の中央付近で円弧を描きながら方位を北東に転じ、さらに南西側に向かってのびる。B地区では調査区の中央を大きく縦断し、北東側のC地区に向かっている。谷の規模は、A地区の断面aで幅18m、深さ0.53m、断面bで幅21m、深さ0.43m、B1地区中央付近で幅30m、深さ0.6mを数える。谷の埋土はA地区の断面aでは、上層は黄灰色から白灰色の粘質土を基調とするが、中層以下は黒褐色のシルト質土が厚く堆積する。B地区も同様である。出土遺物は少ないが、A地区出土の打製石斧（第56図11）、B地区出土の打製石斧（第56図12～14）がこれに該当する。この他では若干の縩文時代晚期の土器がA・B地区より出土している（第56図1・4・8・9）。次いで谷の埋没時期であるが、A地区の最上層から弥生土器が出土している他、B1地区では弥生時代の竪穴住居が谷の肩を一部切り込んでいる。従って弥生時代後期頃にはほぼ谷の埋没は終了していたものと考えられる。なお谷自体はA地区のさらに南側へとのびている。B地区の北東側はC地区となるが、またC地区は調査地区自体がA・B地区より一段低い低湿地であり、この付近で谷が開析し肩が消失している可能性が高い。

##### 481号溝（S D481, 第9図）

B1地区の南壁やや西側で検出された溝で、縩文谷S D131と切り合い関係はなく、これに合流する溝である。断面a付近での規模は幅12.4m、深さ0.18m、埋土は縩文谷S D131と同様の黒褐色砂粘質土を基調とする。出土遺物はないもののやはり縩文時代の溝と考えておきたい。

##### 701号溝（S D701, 第8図）

C地区では下層遺構はIV層の上面で検出している。この面の標高は18.2～18.8mで、あきらかにA・B両地区より一段低く、地山面からの湧水も激しい。検出されたのは3本の溝だけで、これらの溝はいずれも自然形成のものと考えられる。このうちS D701は最も西側に位置する溝。S D701はC地区南西辺から北東辺にむけて流下する溝で、幅22m、深さ0.2mの規模である。埋土は黒色粘質土。前述のように溝の西側はA・B地区からのびる縩文谷S D131と接合する可能性がある。C地区においても下層遺構面の調査では縩文時代晚期の土器が少量出土しており、埋土の特徴なども縩文谷S D131と共通しており、S D701も縩文時代の帰属時期が想定できる。

##### 702号溝（S D702, 第8図）

C地区の中央を横断するように流れる溝で、北端部はS D701と合流している。幅2～13m、深さ0.2～0.5mの規模で、北西に行くほど広く深くなっている。埋土はS D701と同様の黒褐色粘質土である。帰属時期も同様に縩文時代晚期と考えられる。

##### 703号溝（S D703, 第9図）

3本の溝中最も東側に位置する溝で、北端がS D701と合流。幅1.6m～1.8m、深さ0.1～0.3mの規模で、北に向かって深く広くなる。埋土は黒色粘質土。縩文時代晚期と考える。

## (2) 弥生時代

## ①A地区

A地区では弥生土器以外は明確な遺物は検出されなかった。弥生土器は既述のように主に縄文谷S D131の最上層埋土に包含される。第57図36の小型鉢、53の壺などがこれに該当する。弥生土器はこの他にも谷の右岸側の包含層から多く出土した。なお下層検出面では縄文谷以外にも若干の土坑類を検出した（SK132～SK137・SK145）が、構築的とは考えられず、本書では記述を省略した。

## ②B地区

B地区でも縄文谷S D131の最上層から弥生土器（第58図72・94・第59図109・111～113・125・129）が出土している。同時に主に縄文谷S D131の右岸側で弥生時代の遺構が検出されている。このうちB1地区では、調査区の北西端付近で竪穴住居が1棟、これに伴う溝群が若干みつかっている。但し付近は近世以降の遺構が濃密に重複し、かなり搅乱・削平されており、遺構自体の残りはよくなかった。B2地区では小規模な溝群が若干検出されただけで、竪穴住居などの遺構はみつかっていない。

## 竪穴住居

## 201号竪穴住居（S I 201、第10図）

B1地区では竪穴住居が1棟検出された。後世の搅乱・削平のため遺存状態がよくないが、平面プランは隅丸の長方形を呈する。長辺7.32m、短辺6.38m、残存深は最大で0.14mである。住居床面の西半側に周溝状の溝がみられ、この溝は住居の北西端から住居の外側へとのびている。住居の北西側は縄文谷S D131に相当する。この頃には縄文谷はほぼ埋没していたと考えられるが、谷の最上層部分は窪地として当時も痕跡を残していたと考えられる。住居から窪地側にのびるこの溝は排水溝であろう。住居の床面には大小の孔がみられる。一部に主柱穴らしきものもみられるが、柱列が揃っておらず、明確に主柱穴と断定できなかった。炉跡の類についても検出できなかった。床面自体が後世の削平を受けている結果と推断される。埋土は黒褐色砂粘質土である。縄文谷S D131の埋土と類似しており、その後の中世以降の遺構埋土とは明らかに異なる。遺物は住居関連の溝中より多く出土している（後述の溝の項で記述）。

## 溝

弥生時代と考えられる溝群は、B1地区の竪穴住居周辺、B2地区で検出されている。このうち竪穴住居周辺の溝群は自然形成のものとは思われず、構築的意図が看取でき、竪穴住居の内部施設（SD475・SD476）と、竪穴住居の外部周溝（SD473・SD474・SD477）と考えられる。B2地区的溝の性格は不明だが、集落地から低地側（縄文谷S D131）へのびており、湿気抜きの溝等の機能を有したのであろう。

## 472号溝（SD472、第11図）

竪穴住居の西側20mほど離れて南北流する小溝で、竪穴住居と直接的な関わりはない。幅0.79m、深さ0.14m。埋土は黒褐色砂粘質土。第58図75・79の甕が出土。

## 473号溝（SD473、第11図）

竪穴住居の北東側1.2mほど離れて並走する短い溝。本来は竪穴住居の周囲を巡る溝と考えられる。最大幅1.3m、最大長5.3m、最大深0.16mの規模。埋土は黒褐色砂粘質土を基調とする。出土遺物は第58図97の壺、第59図122の高杯などがある。

## 474号溝（SD474、第11図）

SD473の南側に位置し、西側を後世の溝に切られている。幅1.06m、残存長2.58m、残存深0.06m。

埋土は黒褐色砂粘質土を基調とする。

#### 475号溝（S D475, 第10図）

竪穴住居の床面の南西側を「L」字状に巡る溝。本来は竪穴住居の壁溝であった可能性が高い。最大幅1.55m, 最大深0.17m。埋土は黒褐色砂粘質土を基調とする。

#### 476号溝（S D476, 第10図）

S D475を起点に縄文谷 S D131に向かって短くのびる溝で、竪穴住居からの排水溝と考えられる。幅0.33m, 長さ0.17m, 深さ0.12m。埋土は黒褐色砂粘質土を基調とする。

#### 477号溝（S D477, 第11図, 図版4）

竪穴住居の北西側約3m程離れて竪穴の長辺に沿ってのびる溝。所々浅く消失している部分がある。幅1.3m, 残存する長さ約7m, 最大深0.17mの規模。埋土は黒褐色砂粘質土を基調とする。このS D477からの出土遺物が最も多く、とくに甕（第58図83）は体部下半を欠失するものの、上半2分の1が溝の中央に据えられたような状態で出土した（第11図の出土状況図参照）。この他にも第58図85・86・96・第59図103・119・120などの遺物が出土している。

#### 554～558号溝（S D554～558, 第12図）

B2地区の小溝群である。それぞれ個別に記述せず一括した。概ね南北方向にのびるものが多いが、いずれも先端は浅く消失している。B1地区の弥生時代の溝や竪穴住居と同様に黒褐色砂粘質土を埋土の基調とするものが多い。出土遺物は多くないが、第58図82がS D555から、第58図81がS D556から、第58図89がS D557からそれぞれ出土している。

### 落ち込み

#### 563号落ち込み（S O563, 第13図）

B2地区の小溝群と重複しこれに切り込まれるが、平面形態も不整形で浅く、構築的な遺構とは思われない。単なる微地形的な窪みと考えられる。

### ③C地区

C地区はA・B両地区より一段低く低湿である。このためかC地区で検出された弥生時代の遺構は溝、不整形土坑が主体で、集落跡はみつかっていない。また水田などの耕作地についても検出できなかったが、S D605では水利関連の遺構が検出された。遺物では木製農具（鍬）も出土しており、近隣に水田跡が存在する可能性が高いものと推断する。

### 溝

#### 602号溝（S D602, 第12図）

調査区西壁中央からS D5へ流れ込んでいる。規模は幅0.4m, 深さ0.1m, 約20m分の長さが検出されている。埋土は黒褐色シルト質土を基調とし、有機物を多く含む。

#### 603号溝（S D603, 第12図）

S D602から分岐して西側に短くのびる溝。延長線上にあるS D607と本来は同じ溝であった可能性がある。幅0.4m, 深さ0.1m。埋土は黒褐色粘質土を基調とする。

#### 605号溝（S D605, 第12・14図, 図版4）

調査区の南壁西側から北壁にむけて調査区を横断する溝で、やや蛇行するものの概ね南北の方位を有する。C地区検出の溝の中でもっとも規模が大きく肩部の輪郭が明瞭である。60m弱の長さが確認できる。最大幅2.95m, 深さ0.47mの規模。溝内の埋土は、下流側は概ね黒褐色有機質土を基調とするが、上流側では下層が暗灰黄色シルト質土となるようである。またこの溝の下流側において、水利

施設と考えられる遺構が検出されている（第14図）。この遺構は、溝の西肩部に沿って平行に何本か杭を打ち、これに板をとめたもの。後に出土などで壊されている可能性もあり、どのような機能・構造を有していたかは不明。しかしSD605自体は農業用の水路と考えられることから、この遺構についても水利関連遺構と捉えておく。SD605からは弥生土器（第59図132・137・139）や加工板（第89図708）、加工棒（第89図709）が出土している。

#### 606号溝（SD606、第12図）

SD605と602との合流点から南側約4mほど上流側に位置し、やはりSD605から分岐する小溝。分岐した後すぐにほぼ直角に屈曲し、その後はSD605の西肩に約12mほど並走し、その後先端が消失している。幅0.5m、深さ0.05m。埋土は灰色シルト質土を基調とする。

#### 607号溝（SD607、第12図）

調査区の西角から東側に短くのびる溝で、約2m程で先端が浅くなり消失する。SD603とその延長上で接合する可能性がある。幅0.26m、深さ0.08m。埋土は黒褐色砂を有す。

#### 613号溝（SD613、第12図）

調査区の北壁中央で強く屈曲して円弧を描く溝。横断面は台形で幅3.20m、深さ0.48mと広く深い溝である。埋土は上層が黒褐色有機質土、下層が黄灰色砂ないしは粘質土を基調とする。このような強い屈曲を有する溝が用水とは考え難いが、遺構の大半が調査区外となるため、遺構の性格自体は判然としない。この溝からは弥生土器甕（第59図135）が出土している。

#### 615号溝（SD615、第54図）

南壁中央付近から西に向かって短くのびる溝で、肩の輪郭は不整形である。最大幅1.75m、深さ0.21mの規模。溝内には暗灰黄色シルト質土の堆積がみられる。

#### 623号溝（SD623、第12図）

調査区南東辺の中央付近、SX618を基端に、ここから西に短く延びる小溝。幅0.98m、深さ0.08m。埋土は黒褐色シルト質土を基調とする。

#### 624号溝（SD624、第12図）

調査区南東壁の東側にあり、SX627から南側へ短く延びている。先端が浅く消失している。幅0.5m、深さ0.08m。埋土は暗灰黄色シルト質土である。

#### 626号溝（SD626、第12図）

SX638とSX627を繋ぐように延びる溝で、南側はSD624に接合する可能性が高い。幅1.2m、深さ0.17m。埋土は黒褐色シルト質土である。

#### 631号溝（SD631、第16図）

SD639と重複しこれを切り込む溝だが、短く屈曲して検出され、両端は消失している。幅0.7m、深さ0.03mを測る。埋土は黒褐色シルト質土。出土遺物なし。

### 不整形土坑

#### 618号不整形土坑（SX618、第13図）

調査区の南壁中央付近に接して位置する。径5～6m、深さ0.1m前後の浅い皿形の形態である。埋土は黒褐色シルト質土を基調とする。

#### 627号不整形土坑（SX627、第13図）

SX618の北東側約10m程離れた位置にある。平面形は不整橢円形で径6～7.5m、深さ0.13mの規模である。埋土は暗黄灰色シルトを基調とする。

## 638号不整形土坑（S X638, 第13・55図）

S X627の北側12m程離れて位置する。平面形態はひしゃげた三角形を呈する。一辺3m前後、深さ0.1mの規模。埋土は黒褐色シルト質土を基調とする。

## B 中・近世

## (1) 中世

今回の調査では、中世に該当する遺構・遺物はそれほど多くない。中世の遺物自体はA～Cの各地区で出土するが、中世の遺構が検出されているのはB2地区からC地区にかけてだけである。またこれらの遺構も溝が中心であり、掘立柱建物など集落に伴うような性格の遺構は検出されなかった。

## ①B地区

## 土坑

## 551号土坑（S K551, 第7・16図）

中世下層の土坑のひとつ。B2地区の中央付近に位置する。平面形は瓢箪形。横断面は袋状で、東半部の三方の下端が上端より内側へオーバーハングして抉りこんでいる。幅0.5m、長さ1.43m、深さ0.43m。土坑内の埋土は褐灰色砂粘質土を基調とする。とくに下層は有機質腐植土を多く含み、底面には小礫が散乱している。礫以外の出土遺物はみられない。

## 552号土坑（S K552, 第7・16図）

中世下層の土坑のひとつ。S K551の南側に接し、S K553の東肩と部分的に重複する不整形土坑。幅0.93m、長さ1.75m、深さ0.11mの規模。埋土は褐灰色砂粘質土を基調とする。図化はできないが、珠洲や弥生土器の小片が出土している。

## 553号土坑（S K553, 第7・16図）

中世下層の土坑で、S K552に重複し西側に隣接する。平面形態は隅丸方形を呈す。一辺1.1～1.2m、深さ0.26m。埋土は上層が黄灰色砂粘質土、下層が褐灰色砂粘質土である。S K551と同様に、土坑の底面には小礫が散乱して検出された。他の出土遺物はなし。

## 溝

## 470号溝（S D470, 第16図）

B1地区東端で検出された溝で、南北方向にのび、北側はB2地区S D513と合流している可能性が高い。幅0.35m、深さ0.18m、長さ9m。埋土は褐灰色砂粘質土を有す。

## 513号溝（S D513, 第16図、図版22）

B2地区の近世遺構と重複して検出された溝。削平のため残存状況はよくないが、一応B2地区の中央を東西に縦断し、ちょうど中央付近で南側のB1地区に向かう溝が直角に分岐している。この溝は先述のようにB1地区S D470と同一の溝の可能性が高い。残りのよい部分で幅3.31m、深さ0.2m、B1地区に向かう溝の南壁断面では幅1.6m、深さ0.2mを測る。埋土は褐灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物には中世土器・陶器の他に近世陶磁や弥生土器が混入する。

## 560号溝（S D560, 第7図）

B2地区下層の弥生時代遺構の検出時に、同時にみつかった溝。以下このような遺構を中世下層遺構と呼んでおく。遺構面を新たに設定するほどの内容ではなく、弥生時代の遺構平面図に併せて掲載する。このうちS D560は、B2地区の小溝群を横切るように短く円弧を描いてのびる溝。両端が浅く消失している。最大幅1.53m、深さ0.09m。黒褐色砂粘質土の埋土を有する。

### 561号溝（S D561, 第7図）

中世下層で検出された溝のひとつ。S D560付近から北側にのびる溝で、長さは短く北端が浅く消失する。最大幅2.1m, 深さ0.26m, 長さ5.7m。埋土は黒褐色砂粘質土。

### 562号溝（S D562, 第7図）

中世下層の溝で、一端はS D513に、他端は3.5m程で浅く消失する。最大幅0.7m, 深さ0.07m。埋土は黒褐色砂粘質土。13世紀代の珠洲擂鉢（第67図331）が出土。

## ②C地区

### 土坑

#### 621号土坑（S K621, 第16図）

S D620の南端に重複し、これを切り込む。平面形態は橢円形で、長径0.97m, 短径0.84m, 深さ0.15mの規模。埋土は黒色シルト質土である。出土遺物なし。

### 不整形土坑

#### 646号不整形土坑（S X646, 第15・16図）

S D617の北東端付近に位置する土坑状の遺構。やや不整形だが、概ね長方形を呈している。幅1.74m, 長さ2.56m, 深さ0.11mの規模。埋土は黒褐色シルト質土を基調とする。

### 溝

#### 608号溝（S D608, 第16図）

西壁近くで南北方向にのびる小溝で、長さ13m程で両端が浅く消失し、中央も一ヵ所途切れている。最大幅0.36m, 深さ0.07m。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物なし。

#### 609号溝（S D609, 第16図）

S D608・S D620の南側に位置し、これとは直交する東西方向に延びる溝。東端は長さ20m程で浅く消失。最大幅0.46m, 深さ0.05m。埋土は黒褐色砂質土。出土遺物なし。

#### 610号溝（S D610, 第16・54図）

S D609の南側に位置する小溝。S D609と同じ東西方向にのびるが、東端は浅くなり消失。幅0.6m, 深さ0.1m。溝内の埋土は黒褐色シルト質土。出土遺物なし。

#### 616号溝（S D616, 第15・16・55図）

S D617と対となって道路の側溝を構成する2条の溝のひとつ。S D616はこのうち南側に位置する溝。緩やかに円弧を描きながら約45m程のび、両端は浅くなり消失している。幅1.7m, 深さ0.2mの規模。埋土は暗灰黄色シルト質土を基調とする。溝内から珠洲の小片が出土している。

#### 617号溝（S D617, 第15・16図）

S D616と対となる溝で、北側に位置する。やはり緩やかに円弧を描きながらのびるが、S D616よりやや短い40m弱で両端が浅く消失している。幅2.05m, 深さ0.1mの規模。埋土は黒褐色シルト質土を基調とする。溝内から珠洲の小片が出土している。以上のS D616とS D617は互いに一定の間隔を保ちながら並走しており、両溝は道路遺構の側溝と考えられる。この道路は両溝の心々距離で約3～3.3m, 内側路肩間で約2.4mの幅員を有している。但し東西両端が消失しているため、B2地区の溝S D513などと接合するかどうかは不明である。

#### 620号溝（S D620, 第16図）

S D608の北側に接して位置する小溝で、方位も同じくする。長さ約10mほどで両端が浅く消失する。南端についてはS K621と重複し、これに切り込まれている。最大幅0.49m, 深さ0.09mを測る。

埋土は暗灰黄色シルト質土。出土遺物なし。

(森 隆)

## (2) 近世

近世の遺構はA～Cの全地区で検出されており、今回の調査のなかで遺構数も多く、出土遺物も他の時代のものと比べ卓越している。以下にこれらの遺構について、各調査区ごとに概述する。

### ① A地区

調査区は遺跡の西端に位置しており、北東4分の1ほどに集中して掘立柱建物3棟、井戸3基、土坑、溝があり、「L」字状に曲がる溝S D 2の内側で検出された。北東隅の一部で、近世以降（近代）の整地盛土層が検出されており、基本的にはこの盛土層下の面で検出される遺構を近世面の遺構としているが、盛土上面で検出された遺構のうち、北側の盛土が薄い部分で検出された近世に属すると考えられる遺構についてはここで扱っている。

#### 建物

##### 1号建物（S B 1, 第20・21図, 図版5）

A地区北東隅に位置し、調査区北側へ伸びる2間×2間以上の掘立柱建物である。桁行長6m以上、梁行長8.4m、平面積50.4m<sup>2</sup>以上を測り、主軸方位はN-6°-Wでやや西に振れる南北棟の建物である。柱間は不規則で、間仕切り等の柱穴も含むものと思われる。柱穴は直径44cm～76cmの平面円形を呈するものと、長軸75cm～113cmを測る平面楕円形<sup>注1</sup>の2種があり、混在している。S P 126・S P 128では柱根が残っており、S P 81でも断面観察から柱痕が確認できた。建物に付属する井戸、土坑等の施設については不明である。出土遺物は柱根のみであるが、小矢部市地崎遺跡の例などから17世紀後半代の建物と想定している<sup>注2</sup>。

##### 2号建物（S B 2, 第20・21図, 図版5）

A地区北東隅に位置する掘立柱建物で、調査区北側に伸びる4間×4間以上の南北棟である。桁行長11m以上、梁行長11.6mを測り、平面積127.6m<sup>2</sup>以上である。S B 2は4間×4間以上の規模を持つ建物であるが、S P 51・S P 54・S P 125・S P 64・S P 143の柱列までの4間×3間以上を基本として南側に1間分拡張したような構造をとる。主軸方位はN-20°-Wを測る。柱穴の平面形はいずれも楕円形を呈し、柱穴の長軸方向がそれぞれ桁行・梁行の両方向と一致する傾向がみられる。柱穴の長軸は60cmから164cmまであるが、100cmを越える比較的大型のものが半数を占めており、S B 1に比べて相対的に大型になる。S P 14・S P 51・S P 55・S P 91では柱根が残っている。またS B 2に付属する施設としては、井戸S E 102と土坑S K 142があり、いずれも建物西側に位置している。S B 2はS B 1と重複しており、ほぼ同位置での建て替えと考えられ、建物の時期は18世紀代と考えられる。

##### 3号建物（S B 3, 第20・21図）

A地区の東端に位置し、調査区東側に伸びる3間×1間以上の東西棟の建物。桁行長2.6m以上、梁行長6.2m、平面積16.12m<sup>2</sup>以上である。主軸方位はN-16°-Wを測る。柱穴の平面形はいずれも楕円形を呈す。柱穴の長軸は77cm～107cmを測り、梁行方向と一致している。SP29では柱根が残る。

S B 3は農道を挟んで東隣のB地区へ伸びる土台建物の可能性が考えられる。区画溝S D 2と並行する東西棟で、A地区S P 37～S P 29の柱列からB地区S K 46・S K 47を囲む範囲を1棟の建物と想定しており、この場合桁行長13mを測り、平面積80.6m<sup>2</sup>となる。また、図示している柱列の西側にS K 38・S K 40・S K 31のラインまで1間分が庇あるいは、拡張部分とすると建物規模はさらに大きくなり、桁行長15.8m、平面積97.96m<sup>2</sup>となる。付属する施設としては、井戸S E 30とB地区土坑S K 46・S K 47がある。建物の時期は18世紀後半以降と推定している。

## 井戸

### 21号井戸 (S E21, 第22図, 図版6)

調査区東端のS B 3北西隅付近に位置する。平面形は120cm×95cmの南北方向に長い楕円形を呈する石組井戸で、深さは石組上端から156cmを測る。石組は上段5~6段は二重に組まれているが、6段目以下は一重となり井戸側または水溜として、上段に削り抜きの丸太、中段・下段に底を抜いた木臼の3段（第80図632~634）が用いられている。石組は井戸側の中段までは組まれているが、下段になると拳大の礫が乱雜にあるのみとなり、人為的には組まれていない。井戸側内部の埋土は中段までは、黄褐色砂混じりの黒褐色砂質シルトで、中段には竹・枝状・葉・豆などの植物遺体と径5cm~20cmの礫が詰め込まれているが、下段は黄褐色砂のみとなる。これらのことから、下段の木臼は井戸側というよりは、水溜としての用途で用いられていたものと考えられる。出土遺物には越中瀬戸の皿（第60図160~162）がある。S E21は盛土の上面から確認できた遺構で、時期は18世紀後半以降、19世紀代と思われる。

### 30号井戸 (S E30, 第22図, 図版6)

調査区東端のS B 3の南西隅に位置し、S B 3に伴う井戸と考えられる。145cm×132cmのやや歪んだ円形を呈し、深さ86cmを測る素掘りの井戸である。埋土は黒褐色粘質土がブロック状に混じる黄灰色シルトで、木片が混じる。底面から15cm~20cmの礫と石臼（上臼、第92図911）が出土している。時期は18世紀後半代と考えられる。

### 102号井戸 (S E102, 第24図, 図版6)

調査区北辺に位置し、S D56を切っている。S B 2の西側にあり、S B 2に伴う井戸と考えられる。一部調査区排水溝に切られているが、平面形は径150cmの円形を呈する。桶積み上げ井戸で、深さ130cmを測る。上段桶（第77図620）は側板長約45cm、径64cmを測るもので、上段桶のタガで締められた部分の内側に下段桶の上端がくるように積み上げられている。下段桶（第76図615）は径60cm、側板長92cmを測る大型のもので、側板内面には樹皮が残る箇所がみられ、3段のタガで締めたものである。掘り方埋土は灰色砂質土がブロック状に混じる褐灰色砂質シルトで、桶内部の埋土は上段・下段ともに黒褐色砂質シルトで枝状またはワラ状の植物遺体が多量に混じる。最下部には15cm~20cmほどの礫が投げ込まれたような状態で入っている。出土遺物は下段桶の埋土を中心に、漆椀・下駄・箸・栓・蓋・小型の桶・加工板・竹などの木製品（第76図610・612・614・616・617・第77図619）や伊万里（第60図163）などの陶磁器、石臼の破片と思われる加工石（第92図918）などがある。時期は18世紀代と思われる。

## 土坑

### 11号土坑 (S K11, 第25図)

S B 2の南側に位置する径約40cmの円形の土坑で、深さは17cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトの単層である。盛土の上面で確認できた遺構で、19世紀代のものと思われる。

### 12号土坑 (S K12, 第25図)

S B 2の南西隅付近に位置する平面楕円形の土坑。長軸147cm、短軸48cm、深さ74cmを測る。埋土は浅黄色砂質土・黒色シルトがブロック状に混じる灰黄褐色砂質土である。盛土上面で確認でき、19世紀代と思われる。

### 13号土坑 (S K13, 第22図)

S K12の東側に位置する長軸107cm、短軸62cm、深さ63cmを測る楕円形の土坑である。埋土は浅黄

色砂質土・黒色シルトがブロック状に混じる暗灰黄色シルトである。S B 2 の柱穴 S P 14 と, S K 15, S D 8 を切っており, 盛土の上面で確認された遺構であるので, 19世紀代のものと考える。

#### 15号土坑 (S K 15, 第25図)

S B 2 の南側柱列付近に位置する。68cm×58cm以上の平面円形を呈する深さ14cmの土坑。S P 14・S K 13 に切られる。埋土は黒色粘質土がブロック状に混じる黄灰色シルト。18世紀代と考える。

#### 16号土坑 (S K 16, 第22図)

S B 2 の南側柱列付近に位置する。長軸125cm, 短軸87cm, 深さ55cmを測る楕円形の土坑である。埋土は浅黄色砂質土・黒色シルトがブロック状に混じる灰黄褐色シルト。S B 2 の柱穴 S P 17 と S D 8 を切っている。盛土の上面で確認された遺構で, 19世紀代のものと思われる。

#### 18号土坑 (S K 18, 第22図, 図版6)

S D 8 と S D 44 に挟まれた所に位置する。平面隅丸方形を呈し, 長辺142cm, 短辺112cm, 深さ25cmを測る土坑である。埋土は浅黄色砂・黒色シルトが混じる灰黄褐色シルトで, 10cm~20cmの礫が埋土中位から底にかけて乱雜に入るが, 人為的に組まれたような痕跡はない。礫に混じって越中瀬戸・唐津などの陶器, 土鈴 (第62図191), 下駄などの遺物が出土している。他の遺構からやや離れて位置しており, 性格は不明である。盛土上面で検出されており, 19世紀代のものと考えられる。

#### 19号土坑 (S K 19, 第25図)

S K 18 の東側に位置している。平面隅丸方形で, 長辺130cm, 短辺83cmを測る。深さ8cmの浅い皿状の土坑である。埋土は黒褐色シルト・暗灰黄色粘質土がレンズ状に堆積している。盛土上面で検出された遺構で, 19世紀代と考える。

#### 20号土坑 (S K 20, 第22図)

S B 3 の北側に位置する, 径86cmの円形土坑。深さは9cmと浅く, 埋土は灰黄褐色シルトの単層。伊万里が出土している。S D 44 を切っている。盛土上面で検出しており, 19世紀代と考えられる。

#### 22号土坑 (S K 22, 第25図)

S B 3 の北側柱列付近に位置するやや歪んだ楕円形の土坑である。長軸104cm, 短軸68cm, 深さ50cmを測る。埋土はにぶい黄色砂質土・黒色粘質土が混じる暗灰黄色砂質シルトの単層である。S D 43 を切っており, 盛土上面で検出された。時期は19世紀代と思われる。

#### 23号土坑 (S K 23, 第25図)

S B 3 の北西隅付近に位置する。長軸90cm, 短軸78cmを測り, 深さ12cmの浅い皿状の土坑で, 平面楕円形を呈している。埋土は黒色シルト混じりの黄灰色シルトの単層である。S B 3 の柱穴 S P 36 を切っており, 盛土上面で検出されている。19世紀代のものと思われる。

#### 31号土坑 (S K 31, 第25図)

S B 3 の南西隅に位置する。S D 2 に切られており, 平面形・規模については不明であるが, 残存部長85cm, 深さ29cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト, 灰色粘質土の2層である。S B 3 の西側柱列の1間分西に位置し, S K 38・S K 40と列が通ることから S B 3 の庇あるいは拡張部分となり, S B 3 の柱穴である可能性が考えられる。S B 3 との関係から時期は18世紀後半以降と思われる。

#### 32号土坑 (S K 32, 第25図)

S B 3 の南西隅付近に位置する楕円形の土坑。長軸37cm, 短軸30cm, 深さ28cmを測る小型の土坑で, 埋土は灰白色土混じりの黄灰色シルトである。時期は18世紀~19世紀と思われる。

## 34号土坑（S K34, 第22図）

S B 3 の西側柱列付近に位置する。長軸76cm以上、短軸68cm、深さ20cmを測る楕円形の土坑で、埋土は黒色シルトがブロック状に混じる暗灰黄色シルトである。S B 3 の柱穴 S P 24に切られている。箱状の石製品が出土している。時期は18世紀代と考えられる。

## 35号土坑（S K35, 第22図）

S B 3 の西側柱列付近に位置している。長軸57cm、短軸48cm、深さ15cmを測る小型の楕円形土坑である。埋土は灰白色シルト・黒色シルトが混じる暗灰黄色シルトの単層である。埋土からは唐津・越中丸山（第62図192）が出土している。時期は18世紀～19世紀と思われる。

## 38号土坑（S K38, 第25図）

S B 3 の北西隅に位置する。長軸78cm、短軸46cm、深さ13cmを測る楕円形土坑である。埋土は浅黄色砂・黒色シルト混じりの灰黄色シルトの単層である。S K31と同様にS B 3 の庇あるいは、1間拡張部分となり、S B 3 の柱穴である可能性が考えられる。S B 3 の柱穴であった場合、土坑の長軸方向は建物の梁行方向と一致する。時期は18世紀後半以降と思われる。

## 39号土坑（S K39, 第26図）

S B 3 の西側に位置する。長軸150cm、短軸67cm、深さ65cmを測る大型の楕円形土坑である。埋土は浅黄色シルト・黒色シルト・灰白色シルトがブロック状に混じる褐灰色シルトの単層である。S K40を切っており、時期は18世紀～19世紀と思われる。

## 40号土坑（S K40, 第23図、図版7）

S B 3 の西側に位置する楕円形の土坑である。長軸72cm、短軸35cm、深さ35cmを測る。埋土は黒色シルトがブロック状に混じる灰黄色シルト、黒色粘質土の2層である。S K39に切られている。S K31・S K38と同様にS B 3 の庇あるいは1間拡張部分にあたり、S B 3 の柱穴である可能性が考えられる。S K40は柱根が残っており、土坑の長軸方向が建物の梁行方向と一致していることからも、柱穴の可能性は高いといえる。時期は18世紀後半以降と考えられる。

## 41号土坑（S K41, 第25図）

S B 3 の西側に位置している。長軸45cm、短軸27cm、深さ19cmを測る小型の楕円形土坑。埋土は灰黄色シルト、黄灰色粘質シルトの2層である。時期は18世紀～19世紀と思われる。

## 48号土坑（S K48, 第23図、図版7）

S B 2 の東側柱列付近に位置する。径約80cmの円形土坑で、深さは6cmと浅い。埋土はオリーブ褐色砂質土で、拳大以下の小礫が乱雜に詰まっている。S B 2 の東側柱列に位置しており、小礫を礎石または根石とした柱穴である可能性が考えられる。<sup>註3</sup>時期は18世紀代と考えられる。

## 50号土坑（S K50, 第25図）

S B 2 の東側柱列付近に位置している。平面楕円形を呈し、長軸50cm、短軸24cm、深さは西側で32cmと一段深くなる小型の土坑である。埋土は黒褐色粘質土混じりの暗灰黄色シルトの単層である。盛土上面で検出しており、19世紀代のものと思われる。

## 52号土坑（S K52, 第25図）

S B 1 の南東隅に位置する、長軸54cm、短軸26cm、深さ23cmを測る楕円形土坑である。埋土はオリーブ黄色砂質シルトがブロック状に混じる暗灰黄色シルトの単層。18世紀～19世紀と思われる。

## 53号土坑（S K53, 第25図）

S B 1 の南東隅付近に位置する。長軸52cm、短軸29cm、深さ35cmの楕円形土坑。埋土は黒褐色粘質

土がブロック状に混じる暗灰黄色シルトである。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 57号土坑（SK57, 第25図）

S B 1 の南側の土坑群に位置する。径64cmの円形土坑で、深さ40cmを測る。埋土は暗灰黄色シルト、にぶい黄色砂質シルトの2層である。盛土上面で検出しており、時期は19世紀代と考えられる。

#### ・58号土坑（SK58, 第25図）

S B 2 の南側柱列付近に位置する。平面不整形で、S D 8 に切られており残存部で長辺145cm、短辺118cm以上、深さ10cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトがブロック状に混じる黒褐色粘質土の単層で、浅い皿状に堆積している。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 60号土坑（SK60, 第25図）

S B 1 の南側の土坑群に位置している。長軸178cm、短軸57cm、深さ40cmを測る楕円形土坑である。埋土はにぶい黄色砂質シルト・黒褐色粘質土がブロック状に混じる暗灰黄色シルトの単層。底面の中央やや東よりに柱痕が認められ、柱穴となる可能性がある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 62号土坑（SK62, 第25図）

S B 1 の南側の土坑群に位置している。試掘トレーナにより半分が削られているが、残存部で長軸95cm、短軸36cm、深さ10cmを測る楕円形土坑である。埋土は黒褐色粘質土がブロック状に混じる暗灰黄色シルトである。18世紀～19世紀のものと思われる。

#### 63号土坑（SK63, 第23図、図版7）

S B 1 の南側の土坑群に位置する。平面楕円形を呈し、長軸145cm、短軸58cm、深さ58cmを測る。埋土は淡黄色シルト・黒色シルトがブロック状に混じる暗灰黄色砂質シルトで、北西隅に柱根が残っている。このことから、柱穴となる可能性が考えられる。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 65号土坑（SK65, 第25図）

S B 1 の南西隅付近に位置している。長軸50cm、短軸25cm、深さ26cmを測る小型の楕円形土坑である。埋土は灰黄褐色シルトの単層。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 68号土坑（SK68, 第23図）

S B 2 の東側柱列付近に位置する。長軸90cm、短軸55cm、深さ53cmを測る楕円形土坑である。埋土は暗灰黄色シルト、浅黄色砂質土、暗灰黄色シルトの3層で、上面に拳大の礫が円状に集積されている。S B 2 の東側柱列上に位置しており、SK48と同様に集積された礫が礎石または柱の根石となる柱穴の可能性が考えられる。しかしながら、S B 2 の柱穴 S P 105を切っており、盛土上面で検出されていることから S B 2 に伴う柱穴であるのかについては不明である。出土遺物には近世陶器片がある。時期は19世紀代かと思われる。

#### 69号土坑（SK69, 第25図、図版7）

S B 1 の東側柱列付近に位置する。長軸90cm、短軸60cm、深さ30cmを測る楕円形土坑。埋土は浅黄色シルト・黒色シルトが混じる暗灰黄色シルトの単層で、柱痕がみられ、柱穴となる可能性がある。時期は18世紀～19世紀と考えられる。

#### 70号土坑（SK70, 第25図）

調査区北辺に位置し排水溝に切られるが、径40cmの円形を呈すると思われる。深さは46cmを測り、埋土は浅黄色砂・黒色シルトが混じる暗灰黄色シルトの単層。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 71号土坑（SK71, 第26図）

S B 1 の南西隅付近に位置する。長軸132cm、短軸67cm、深さ60cmを測る楕円形土坑である。埋土

は黒色シルト混じりの灰黄褐色シルトの単層で、南側が一段深くなる。盛土上面で検出しており、時期は19世紀代と考えられる。

#### 73号土坑（SK73, 第25図）

S B 1 の南西隅付近に位置する。SK74・SK99に切られているが、残存部で長軸62cm、短軸50cm、深さ34cmを測る楕円形土坑である。底面に20cm代の礫が2つ入っている。埋土は暗灰黄色砂質シルトの単層である。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 74号土坑（SK74, 第26図）

S B 1 の南西隅付近に位置している。長軸123cm、短軸80cm、深さ54cmを測る楕円形土坑である。埋土は浅黄色シルト・黒色シルトがブロック状に混じる暗灰黄色シルトの単層。SK73・SK76を切っている。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 75号土坑（SK75, 第23図）

S B 1 の南西隅付近に位置する。径36cmほどの円形土坑で、深さは18cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトの単層。底面に10cm～15cmの礫が詰め込まれたような状態で入り、柱の根石等になり、柱穴となる可能性がある。越中瀬戸の皿（第62図188）が出土している。時期は18世紀～19世紀と考える。

#### 77号土坑（SK77, 第25図）

S B 1 の南西隅付近に位置する。長辺76cm、短辺54cm、深さ40cmを測る平面不整形の土坑である。埋土は浅黄色シルト・黒色シルトがブロック状に混じる灰黄褐色シルト。北側に柱根が残り、柱穴になる可能性がある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 79号土坑（SK79, 第26図）

S B 1 の南側柱列付近に位置する。長軸70cm、短軸45cm、深さ39cmを測る楕円形土坑である。埋土は黒色シルト混じりの黄灰色シルトの単層。盛土上面で検出しており、19世紀代と考えられる。

#### 82号土坑（SK82, 第26図）

S B 1 の西側柱列付近に位置している。長軸117cm、短軸69cm、深さ72cmを測り、平面楕円形を呈する。埋土は浅黄色シルト・黒色シルトがブロック状に混じる暗灰黄色シルト、黄灰色粘質土の2層で、南側が一段深くなる。SD84に切られている。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 83号土坑（SK83, 第23図）

S B 1 の西側柱列付近に位置する。長軸140cm、短軸72cm、深さ48cmを測る楕円形土坑である。埋土は淡黄色シルト・黒色シルトがブロック状に混じる灰黄褐色シルトの単層で、北側が一段深くなる。埋土から伊万里が出土している。SD85に切られている。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 87号土坑（SK87, 第26図）

S B 1 の西側柱列付近に位置する。長軸70cm、短軸53cm、深さ75cmを測る楕円形土坑である。埋土は淡黄色シルト・黒色シルトがブロック状に混じる灰黄褐色シルトの単層。SD85に切られている。時期は18世紀～19世紀と考えられる。

#### 89号土坑（SK89, 第26図）

S B 2 の西側柱列付近に位置する。長軸80cm、短軸36cm、深さ25cmを測り、楕円形を呈する。埋土は黒色シルト混じりの暗灰黄色シルト、褐灰色砂質土の2層。時期は18世紀～19世紀と考える。

#### 90号土坑（SK90, 第24図）

S B 2 の西側柱列に位置し、135cm×115cm、深さ60cmを測る平面不整形の土坑。S B 2 の柱穴SP91に切られる。埋土は褐灰色シルト、浅黄色砂質土、浅黄色砂質土・黒褐色シルト混じりの褐灰色シ

ルト、オリーブ黄色砂質土、黒褐色粘質土がレンズ状に堆積する。時期は18世紀代と考える。

#### 93号土坑（SK93、第23図）

S B 2 の西側に位置する。長辺260cm、短辺182cm、深さ30cmを測る平面不整形の土坑である。埋土は浅黄色シルトがブロック状に混じる暗灰黄色シルトの単層で、底面は平坦である。S D 56を切っている。埋土から伊万里・唐津・瀬戸・近世陶磁器の他、ガラス片などが出土しており、19世紀以降のゴミ捨て穴の可能性がある。

#### 94号土坑（SK94、第26図）

S B 2 の西側に位置する。S D 56に切られており残存部で長辺55cm、短辺26cm、深さ25cmを測る。埋土は浅黄色シルト・黒色シルト混じりの暗灰黄色シルトの単層。18世紀～19世紀と思われる。

#### 95号土坑（SK95、第26図）

S B 2 の西側に位置し、SK94と並ぶ。S D 56に切られており残存部で長辺33cm、短辺28cm、深さ31cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 97号土坑（SK97、第26図）

S B 2 の西側柱列付近に位置する。長辺75cm、短辺53cm、深さ28cmを測る平面不整形の土坑である。埋土は黒色シルト混じりの暗灰黄色シルトの単層。S B 2 の柱穴 S P 96、S E 102に切られている。時期は18世紀代と思われる。

#### 98号土坑（SK98、第23図）

S B 2 の西側に位置する。長軸67cm、短軸53cm、深さ22cmを測る楕円形土坑である。埋土は暗灰黄色シルト、黒褐色シルトの2層で、埋土上面に径3cmほどの小礫が乗る。埋土から瓦質土器（第62図190）が出土している。S D 56・S D 101を切っており、時期は19世紀代と思われる。

#### 107号土坑（SK107、第26図）

S D 2 の南側に位置する。長軸65cm、短軸43cm、深さ31cmを測る楕円形土坑。埋土は黒色シルトがブロック状に混じる灰黄色砂質シルトの単層である。盛土の範囲外であるが、他の遺構よりも若干高い位置から掘り込まれており、19世紀代と思われる。

#### 108号土坑（SK108、第26図）

S D 2 の南側に位置する楕円形土坑。長軸88cm、短軸42cm、深さ30cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂質シルトの単層。SK107と同様に掘り込み面がやや上にあり、時期は19世紀代と思われる。

#### 111号土坑（SK111、第26図）

S D 2 の南側に位置し、排水溝に切られており残存部は長辺81cm、短辺47cm、深さ44cm。埋土は灰オリーブ色シルトの単層。SK107と同様に掘り込み面がやや上にあり、19世紀代と考える。

#### 113号土坑（SK113、第26図）

S D 2 の南側に位置する。長軸100cm、短軸37cm、深さ30cmを測る楕円形土坑。埋土はオリーブ黄色シルト、黒褐色粘質土の2層で、東側が一段深くなる。S D 110を切っている。SK107と同様に掘り込み面が上にあり、19世紀代のものと思われる。

#### 114号土坑（SK114、第24図）

S B 2 の西側、溝群の中に位置する。92cm×85cmのやや歪んだ円形土坑で、深さは44cmを測る。埋土はオリーブ褐色シルト、オリーブ黄色砂質土の2層。埋土からは近世磁器（第62図189）が出土している。S D 3を切っており、18世紀～19世紀のものと思われる。

## 115号土坑（S K115, 第24図）

S B 2 の西側、溝群の中に位置している。長軸153cm、短軸85cm、深さ28cmを測る楕円形土坑。埋土は暗灰黄色シルトの単層で、炭化物が混じる。底面からは拳大以上の礫が投げ込まれたような状態で出土し、やや西側に偏って検出した。また、礫に混じって伊万里・唐津・瀬戸・近世磁器（第62図183～185）が出土している。S D 3・S D 104を切っており、時期は18世紀～19世紀と考えられる。

## 116号土坑（S K116, 第24図）

S B 2 の西側、溝群中に位置する。長軸85cm、短軸60cm、深さ45cmを測る楕円形土坑。埋土は暗灰黄色シルト、浅黄色砂がブロック状に混じる黄灰色砂質シルト、灰黄褐色粘質土がレンズ状に堆積し、1層と2層の間に5cm～8cmの厚さで炭化物層が入る。焼土等は検出されておらず性格は不明である。出土遺物は底板（円形板、第77図618）がある。S D 3を切っており、18世紀～19世紀と思われる。

## 117号土坑（S K117, 第26図）

X 55 Y 85付近に位置する。長軸107cm、短軸64cm、深さ10cmの楕円形土坑である。埋土は黒色シルトがブロック状に混じる灰黄色砂質シルトの単層。時期は19世紀代と思われる。

## 119号土坑（S K119, 第26図）

S B 2 の西側、溝群中に位置する。62cm×53cmの歪んだ円形土坑で、深さ14cmを測る。埋土はにぶい黄色砂質土混じりの黒褐色シルト。S D 28を切っており、時期は18世紀～19世紀と考える。

## 120号土坑（S K120, 第24図）

S B 2 の西側、溝群中に位置する。362cm×195cm、深さ30cmを測る平面不整形の土坑である。埋土は径3cm～5cmほどの小礫混じりの暗灰黄色砂質シルトの単層で、炭化物粒が混じる。出土遺物には伊万里・唐津・瀬戸・珠洲（第62図186・187）がある。S D 28を切っており、時期は18世紀～19世紀と思われる。

## 121号土坑（S K121, 第26図）

X 45 Y 67付近に位置する。長辺327cm、短辺105cm、深さ14cmを測る平面不整形の土坑。埋土はにぶい黄褐色シルトの単層で、炭化物粒を含む。1基だけ離れて位置し、時期・性格は不明である。

## 123号土坑（S K123, 第26図）

X 41 Y 80付近に位置する。径40cmの円形土坑で、深さは6cmを測る。埋土は灰白色シルト混じりのにぶい黄色シルト。1基のみ離れて位置し、時期・性格は不明である。

## 129号土坑（S K129, 第24図）

S B 1 の南側土坑群に位置している。長軸145cm、短軸63cm、深さ43cmを測る楕円形土坑。埋土は浅黄色シルト・黒褐色シルトがブロック状に混じる黄灰色砂質シルトの単層。柱痕が残り、柱穴になる可能性がある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

## 130号土坑（S K130, 第24図）

S B 2 の東側柱列付近に位置し、排水溝に切られる。残存部で長軸82cm、短軸20cm、深さ18cmを測る楕円形土坑。埋土は浅黄色砂質土・黒褐色シルト混じりの黄褐色シルト、灰オリーブ色シルトの2層で、埋土上面に径15cm位の礫が160cm×40cmの範囲で集積される。時期は18世紀～19世紀か。

## 138号土坑（S K138, 第26図）

X 62 Y 73付近に位置する。長軸150cm、短軸97cm、深さ28cmを測る楕円形土坑。埋土は黒褐色砂質土の単層。時期・性格ともに不明である。

## 139号土坑（S K139, 第24図）

S B 2 の西側柱列付近に位置する。長軸97cm, 短軸52cm, 深さ65cmの楕円形土坑である。埋土は浅黄色砂質土・黒褐色シルト混じりの褐灰色シルトの単層。S B 2 の柱穴 S P 91を切っており, 18世紀～19世紀のものと思われる。

## 140号土坑（S K140, 第26図）

S B 2 の西側柱列付近に位置する。80cm×75cmの平面不整形土坑で, 深さ26cmを測る。埋土は浅黄色砂質土・黒褐色シルトが混じる褐灰色シルトの単層。時期は18世紀～19世紀と思われる。

## 142号土坑（S K142, 第23図, 図版7）

S B 2 の南西隅に位置する。長軸155cm, 短軸104cm, 深さ61cmを測る楕円形土坑。南端に底を抜いた桶が埋め込まれており, 桶外側の埋土は浅黄色砂質土・黒褐色粘質土がブロック状に混じる褐灰色シルト, オリーブ灰色砂質土で, 内側は褐灰色シルト, にぶい黄色砂質土, 灰オリーブ色粘質土, 黒褐色粘質土となる。これは, 穴を掘った後, 桶を据えて北側半分を埋め戻したためと思われる。S B 2 の柱穴 S P 55を切っているが, S B 2 に伴う遺構と考えられ, 底を抜いた桶（第78図624）が使用されていることなどから便所跡ではないかと想定している。時期は18世紀代と考える。

## 144号土坑（S K144, 第26図）

S D 2 の東側に位置する。長辺140cm, 短辺120cm, 深さ17cmを測る方形土坑。埋土は褐灰色シルトの単層。底面が波打つ浅い土坑で, 風倒木痕の可能性もあり時期・性格は不明である。

## 溝

## 1号溝（S D 1, 第27図, 図版8）

調査区の東西を横断する幅3.8mの溝で, 埋土は灰黄褐色砂質シルト・黒褐色砂質シルト・暗オリーブ褐色砂質シルトである。出土遺物は伊万里・唐津・瀬戸・越中瀬戸・近世陶磁器, 釘, 加工板（第60図145～159）などがある。S D 2 が埋まった後に重複して流れしており, ほ場整備以前の昭和20年代の地籍図<sup>注4</sup>に記された水路の位置と一致することなどから, 19世紀以降現代まで続く水路の可能性が考えられる。

## 2号溝（S D 2, 第27図, 図版8）

調査区北東隅の遺構群を囲むように「L」字状に曲がる幅2.4mの溝で, 東西方向に曲がった部分からはS D 1 に切られている。遺構の大半はS D 2 に囲まれた内側で検出されており, 近世の屋敷地を区画する区画溝と考えられる。出土遺物には伊万里・唐津・瀬戸・越中瀬戸・珠洲, 木箱・加工板（第61図164～166）などがある。時期は18世紀～19世紀と考えられる。

## 3号溝（S D 3, 第27図, 図版8）

S B 2 の西側溝群のほぼ中央に位置し, 「L」字状に曲がる幅1.6mの溝である。2本の溝が合流したように底部が2つに分かれしており, ある程度埋まった後に再び一定量の水量があり, その後埋まつたと考えられる。埋土には枝状の植物遺体が多く含まれ一部でレンズ状に堆積する。唐津・越中瀬戸・瓦質土器など（第61図167～169）が出土している。S D 2 ・S D 4 ・S D 5 などに切られており, 溝群の中では古手のものと思われる。S B 1 ・S B 2 に伴う区画溝と考えられ, 17世紀～18世紀代の時期を想定している。

## 4号溝（S D 4, 第27図, 図版8）

溝群の東端に位置する南北方向の最大幅1.8mを測る溝で, S D 1 に切られている。北から南に向かって広くなり, 南側を中心に, 底面に木皮が敷かれたような状態で検出された。編み物など人の手

が加わった痕跡は認められず、木の皮をそのまま剥いだものである。出土遺物には伊万里・唐津・瀬戸がある。盛土上面で検出されており、19世紀代のものと考えられる。

#### 5号溝（S D 5, 第27図）

溝群の南端付近を東西に横切る幅60cmの溝。S D 4に切られているが、S D 3・S D 6・S D 28・S D 118を切っており、溝群の中では新しい時期のものである。近世陶器が出土している。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 6号溝（S D 6, 第27図）

溝群の南西隅付近に位置し、幅80cm、深さ7cmを測る南北溝。時期は18世紀～19世紀と考える。

#### 7号溝（S D 7, 第27図）

溝群の南端付近に位置する幅40cmの南北溝で、S D 2・S D 4に切られており、S D 3を切っている。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 8号溝（S D 8, 第27図）

S B 2の南側に位置する幅60cmの東西溝。S K 13・S K 16・S P 17に切られており、S K 58を切っている。時期は18世紀～19世紀と考えられる。

#### 9号溝（S D 9, 第27図）

溝群の東端付近に位置する幅1.3mの南北溝。S D 4・S D 27・S D 101に切られている。S D 4に切られる付近でゆるく東に曲がっており、「L」字状に曲がってS D 43と一続きの溝になる可能性がある。出土遺物には瀬戸（第61図170）がある。時期は17世紀～18世紀代と思われる。

#### 10号溝（S D 10, 第28図）

溝群の西端付近に位置する幅1mの南北溝で、S D 2・S D 118を切ってゆるく西へカーブしている。出土遺物には伊万里・唐津・珠洲、加工板、砥石（第61図171・第91図909）がある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 25号溝（S D 25, 第28図）

溝群の東端付近に位置する幅35cmの南北溝。S D 9に切られている。時期は18世紀～19世紀。

#### 26号溝（S D 26, 第28図）

溝群の中央付近に位置する幅40cm、深さ8cmを測る小規模な南北溝。時期は18世紀～19世紀。

#### 27号溝（S D 27, 第28図）

溝群の中央付近の幅93cmを測る東西溝。S D 3・S D 4に切られており、S D 9を切る。出土遺物に漆器椀（第76図613）がある。時期は17世紀～18世紀代と思われる。

#### 28号溝（S D 28, 第28図）

溝群の中央付近に位置する幅1.3mの南北溝。S D 5・S D 118・S K 106・S K 119・S K 120に切られている。埋土は暗灰黄色シルト、黒褐色粘質土の2層で、ある程度埋まった後に、再び水が流れその後一気に埋まったと考えられる。出土遺物は多く伊万里・唐津・瀬戸・越中瀬戸・珠洲、漆器椀・箸・加工板、硯（第61図172～177・第76図611・第91図903）などがある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 43号溝（S D 43, 第28図）

S B 3の北側に位置する幅60cmの東西溝。S D 4・S K 22に切られている。S D 9と一続きの溝になる可能性がある。唐津、打製石斧（第56図10・第61図178・179）が出土している。打製石斧は、S D 43が下層の包含層を掘り込んでいるため、下層の遺物が混ざり込んだと思われる。時期は17世紀

～18世紀代と思われる。

#### 44号溝（S D44, 第28図）

S B 3 の北側に位置する幅1.2mの東西溝で、 S D 4 ・ S K 20に切られている。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 56号溝（S D56, 第28図）

S B 2 の西側に位置する幅1.2mの南北溝。S K93・S K98・S D101・S E102に切られており、S K94・S K95を切っている。出土遺物には伊万里・唐津・越中瀬戸・近世陶磁器、釘状の金属製品などがある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 84号溝（S D84, 第28図）

S B 1 の南西隅付近に位置する幅32cmの東西溝。S K82を切る。時期は18世紀～19世紀か。

#### 85号溝（S D85, 第28図）

S B 1 の西側に位置する南北溝。幅22cm、深さ 6 cmの浅い溝で、S K83・S K87・S D100を切る。時期は19世紀代と思われる。

#### 101号溝（S D101, 第28図）

S B 2 の西側に位置する幅44cmの東西溝。S K98に切られており、S D 4 ・ S D 9 ・ S D56を切っている。時期は19世紀代と思われる。

#### 104号溝（S D104, 第28図）

溝群の中央付近に位置する幅40cmの南北溝。S K115に切られている。南側は広く浅くなっている、S D 3 に流れ込んでおり S D 3 を切っている。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 110号溝（S D110, 第28図）

S D 1 の南側に位置する幅40cmの南北溝。S D 1 ・ S K113に切られている。盛土の範囲外であるが、遺構が若干高い面より掘り込まれており、時期は19世紀代と思われる。

#### 118号溝（S D118, 第28図）

溝群の西端付近に位置する幅2.6mの南北溝。S D 2 ・ S D 5 ・ S D10に切られており、S D28を切っている。埋土は底面付近に枝状の植物遺体を多く含んでいる。出土遺物には伊万里・唐津・越中瀬戸などがある。時期は18世紀～19世紀と思われる。

#### 122号溝（S D122, 第28図）

X48の南側に位置する幅47cmの東西溝。他の遺構から離れて位置しており、時期は不明であるが、昭和20年代の地籍図に記された水路または水田境と一致することから現代の水路等の可能性がある。

（金三津道子）

注1 河西健二 1994 「第IV章 まとめ 3 中世末から近世の建物」『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺構編）』 財団法人富山県文化振興財団

注2 越前慎子 2000 「第V章考察 4 地崎遺跡における若干の考察」『開辟大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』 財団法人富山県文化振興財団

注3 近世掘立柱建物の柱穴に根固め、礎石と思われる集石を持つ柱穴・土坑の例がみられる。

財団法人富山県文化振興財団 1996 『梅原加賀坊遺跡・久戸遺跡・梅原安丸遺跡・田尻遺跡発掘調査報告』  
2000 『開辟大滝遺跡・地崎遺跡発掘調査報告』

注4 福岡町 1969 『福岡町史』

江尻周辺のは場整備は昭和26年に開始され、昭和44年にはほぼ完了している。地籍図はは場整備以前のもので、昭和20年代前半頃のもの。

## ②B地区

B地区での検出遺構としては近世の建物跡18棟（うち1棟はA地区と同一のもの）、石組井戸、土坑、溝などがある。建物跡には楕円柱穴を有する掘立柱建物と、これに時期的に後出する土台建物がある。またA地区の北東部でみられた近世以降の整地盛土層がB1地区にも続いており、大溝で区画された北東側に広がりをみせる。この上面において建物跡の基礎と思われる遺構が検出されており、近代の屋敷地跡と考えられる。この整地盛土層を掘削・除去すると近世の遺構面となる。過半の遺構が縄文谷SD131の黒褐色砂粘質土の上面で検出されるが、谷の右岸側付近では淡黄褐色砂質土が地山となり、さらに南端の一部では礫層が露出する部分もみられる。これらの部分では弥生時代以降の遺構が同一面で重複して検出される。また後世の宅地によって攪乱されている部分も多く、遺構面自体はやや荒れた状況にある。B2地区はほぼ縄文谷SD131の範囲におさまる、主に溝状遺構が多く検出されている。B地区の記述では一応B1地区とB2地区に分けて行うこととする。

### B1地区

#### 建物

##### 4号建物（SB4、第30・31図）

北壁中央付近に位置する掘立柱建物で、建物自体はさらに北側にのびる。現状で1間×3間以上が検出されている。桁行5.2m以上、梁行8.4m、床面積43.7m<sup>2</sup>以上の規模。建物の主軸方位はN-13°-Wで、やや西に振れる建物方位を有す。一応南北棟建物と考えておく。柱穴形態は円形と楕円形が混在する。柱穴の大きさは、楕円形の大きなもの（SP339）で長径0.9m、短径0.5m、深さ0.23m。円形の小さなものの（SP376）で径0.55m、深さ0.26m程度の規模。柱根痕跡は認められない。遺物の出土も稀少で、SP340から唐津の小片が出土している程度である。柱穴形態や建物方位から、最先行期の建物のひとつと捉えている。

##### 5号建物（SB5、第30・31図）

SB4の東側に隣接して位置する掘立柱建物で、SB4と同様建物自体は調査区のさらに北側にのびている。SB4との重複もなく、同時期併存の建物と考えられる。現状で1間×3間以上が検出される。桁行7.6m以上、梁行8m、床面積60.7m<sup>2</sup>以上。建物の主軸方位はN-16°-Wで、ほとんどSB4の建物方位と同じである。柱列が確認できるのは梁行だけで、柱穴形態は楕円形と円形の混在型である。桁行方向には柱穴を確認することができず、掘立柱式以外の柱列構造が予測される。柱穴は大型楕円形のSP429が長径0.94m、短径0.55m、深さ0.04m、小型円形のSP415が長径0.79m、短径0.65m、深さ0.37mの規模である。柱穴内からの出土遺物は認められないが、柱穴形態、建物方位からSB4と同様最先行期の建物のひとつと考えている。

##### 6号建物（SB6、第30・32図）

SB5の南側に重複はしないものの接して位置する建物。1間×1間の小規模な掘立柱建物である。桁行3.2m、梁行2.4m、床面積7.7m<sup>2</sup>の規模。建物の主軸方位はSB5と同じN-16°-Wである。柱穴規模はSP267で長径1.19m、短径0.72m、深さ0.48m。出土遺物はないが、時期はSB4・SB5と同時期と考えられる。単独所在の住居棟建物ではなく、納屋などの補助的小屋、ないしはSB5に付設された小屋などの機能が想定される。

##### 7号建物（SB7、第30・32図）

SB5・SB6の南側数m離れて位置する2棟の建物のひとつ。建物自体はさらに南側へとのびる。現状で3間×2間以上が検出される。桁行6.4m以上、梁行5.2m、床面積33.3m<sup>2</sup>以上の規模を有す。

建物の主軸方位N-8°-Wの南北棟の建物である。柱穴形態は楕円形、円形の混在型と考えられる。柱穴は概ね長径0.7m、短径0.4m、深さ0.2m~0.3mの規模。S P 369から唐津の小片が出土している。またS P 387からは、側面に枘穴を有する柱（第85図682）が出土している。建物方位はS B 4~S B 6とやや異なるものの、最先行期の建物群に含めて考えておく。

#### 8号建物（S B 8, 第30・32図）

S B 7と一部柱列が重複して検出された掘立柱建物。建物自体はさらに南側の調査地区外へとのびている。現状で2間×3間以上が検出される。桁行6m以上、梁行6.8m、床面積40.8m<sup>2</sup>以上の規模を有す。建物の主軸方位はN-8°-Wで南北棟の建物。主軸方位はS B 7と同じである。柱穴形態は楕円形、円形の混在型。柱穴は大型楕円形のS P 386で長径0.75m、短径0.64m、深さ0.4m、小型円形のS P 486で径0.6m、深さ0.14mの規模である。柱根痕跡のみられるものはないが、S P 386から伊万里の小片が出土している。先後関係は明確ではないものの、S B 7とS B 8はどちらかが一方の建て替えと考えられよう。時期はやはり最先行期と考えておく。

#### 9号建物（S B 9, 第30・33図）

調査区中央やや西よりで、S B 10と重複しこれに直交する方向で検出された掘立柱建物。これまでの建物が南北棟基調だったのに対し、この建物は東西棟の建物方位を有する。桁行3間（10m）×梁行2間（7.2m）、床面積72m<sup>2</sup>の規模。建物の主軸方位はN-86°-W。柱穴は一応楕円形・円形混在型であるが、楕円柱穴の形態がかなり明確に整ってきている。この建物の楕円柱穴は、例えば梁行中央に位置するS P 487のようなものでも、梁行方向に直交し、桁行方向に向いた長軸方位を有している。柱穴規模は、例えばS P 330では長径1.34m、短径0.77m、深さ0.39m、S P 441では長径1.03m、短径0.67m、深さ0.22mの規模を有する。S P 441から柱が出土した。またS P 233から唐津の陶胎染付の椀の破片（第66図290）が、S P 400から蛇の目凹高台を有する伊万里の磁器染付の鉢（第67図322）が出土した。S B 4~S B 8の建物群より後出する時期が想定される。

#### 10号建物（S B 10, 第30・33図）

S B 9と位置的に重複し、これと直交する棟方向を有する掘立柱建物。こちらの建物は南北棟の棟方向を有す。西側の桁行に沿って補助屋と考えられる張り出しが1間分付設される。母屋部分は、桁行2間（10.7m）×梁行1間（7.2m）、床面積77.8m<sup>2</sup>の規模である。補助屋部分は8.4m×2m、床面積16.8m<sup>2</sup>の規模。両者を合わせた建物占有面積は94.6m<sup>2</sup>である。建物の主軸方位はN-7°-Eで、ほぼ真北方位の棟方向である。柱穴形態では、まず母屋部分の柱穴は明確に楕円柱穴のみで構成されている。これに対し補助屋部分は楕円柱穴と円形柱穴が混在する。補助屋部分は柱穴の配置にバラツキがあり、何回か増改築された可能性が高い。母屋部分での柱穴規模はS P 333で長軸1.32m、短軸0.62m、深さ0.34m、S P 490で長軸1.67m、短軸0.84m、深さ0.18m。補助屋部分の柱穴では、例えば楕円柱穴のS P 307では長軸1.02m、短軸0.61m、深さ0.44m、円形柱穴のS P 465では径0.5m、深さ0.45mの規模を有す。柱穴からの出土遺物では、S P 301から柱（第86図688）が、S P 231からは瀬戸の小片が、S P 465からは越中瀬戸の小片が出土している。詳細時期の検討は第V章総括にゆずるが、S B 10については、一応S B 9に後出し、これを建て替えた建物と考えておく。

#### 11号建物（S B 11, 第30・32図）

調査地区の東端付近に位置する掘立柱建物。S B 5~S B 7と位置的に重複し、これに後出する時期の建物。一応南北棟の建物と考えるが、ほぼ方形の平面プランである。梁行南側の柱列に1間分の張り出しがみられ、S B 10と同様の補助屋と考えられる。母屋部分は桁行2間（6.8m）×梁行2間

(6.4m), 床面積43.5m<sup>2</sup>の規模。補助屋部分は3.2m×1.2m, 3.8m<sup>2</sup>の規模。合計で47.3m<sup>2</sup>の建物占有面積となる。建物の主軸方位はN-8°-Eの方位をとる。柱穴形態は基本的に楕円柱穴と考えられる。柱穴規模は、例えば梁行南側中央のS P 264では長径1.64m, 短径0.8m, 深さ0.24mの楕円柱穴, 桁行西柱列中央のS P 428では長径2.04m, 短径0.7m, 深さ0.34mの楕円柱穴である。補助屋部分では例えばS P 332では径0.8m, 深さ0.62mの円形形態となる。これらの柱穴に柱根痕跡がみられるものはない。S P 272からは2点の越中瀬戸（第67図307・308）が出土している。また建物の東側に接して位置するS X 461・S X 463もS B 11の付帯施設であった可能性がある。これはこのS B 11の建て替えと考えられる土台建物S B 18にも同じ様な土坑状施設が伴っており、内部に桶の底板が残存することから、この部分にS B 18のトイレ施設が想定されることに起因する。とくにS X 463の一段落ち窪んだ円形の部分は、次の土台建物期のトイレ遺構と考えられるS K 269出土の桶の底板の大きさと一致している。なおS B 11の時期については掘立柱建物のなかで最後出する時期に比定できる。本遺跡ではこれが掘立柱建物の最後の段階であり、次段階の建物構造は土台建物に変化するものと考える。

#### 12号建物（S B 12, 第30・34図, 図版14)

S B 11の西側5m程離れて位置する南北棟の大型建物で、S B 11とS B 12の梁行北側柱列が一直線に揃う他、棟方向も同一であり、両者は連接して所在する同時期併存の建物と考えている。S B 12はさらに、後述のように桁行西側柱列の南西側に接して小規模な納屋的建物1棟（S B 13）を伴う。またS B 12の北側に近接して位置する石組井戸S E 456も、この建物に伴う井戸と考えている。建物の柱列配置は変形した総柱風の不均等配置のもの。桁行・梁行とも内部を間仕切る柱列がみられる。また梁行北柱列にも庇状の1間分の張り出しがみられる。一応桁行4間（14.4m）×梁行2間（7.2m）、床面積103.7m<sup>2</sup>の建物規模と考えておく。建物の棟方向はN-6°-Eの主軸方位をとる。柱穴は楕円形・円形混在型である。柱穴規模は、例えば楕円柱穴S P 338では長径1.03m, 短径0.31m, 深さ0.27m, 楕円柱穴S P 344では長径1.03m, 短径0.48m, 深さ0.6m, 楕円柱穴S P 390では長径1.04m, 短径0.72m, 深さ0.25mの規模である。この建物の柱穴には比較的多くの柱根が残存している。柱根はS P 337（第86図685）、S P 344（第86図689）、S P 352（第88図696）、S P 365（第88図695）、S P 390（第85図681）から出土している。柱根以外ではS P 273から磁器染付の小片が、S P 344から唐津の小片が、S P 353から越中瀬戸の小皿（第67図311）が、S P 374から瀬戸の小片が出土する。建物の時期はS B 11と同様、掘立柱建物の最後出段階の建物と考える。

#### 13号建物（S B 13, 第30・34図, 図版14)

S B 12の桁行西柱列の南西側に接して位置する小規模な南北棟の掘立柱建物。納屋などS B 12の付属屋と考えられる。同様の事例は、後述のS B 14・S B 15でもみられる。桁行2間（4.8m）、梁行1間（3.2m）、建物の床面積15.4m<sup>2</sup>の規模。建物の棟方向は、N-6°-W。柱穴は大小のバラツキはあるが、基本的に楕円柱穴で構成される。柱穴規模は、楕円形態のS P 332で長径0.88m, 短径0.45m, 深さ0.22m、同じく楕円形態のS P 335で長径1.07m, 短径0.55m, 深さ0.35mを測る。柱根はS P 336から出土している（第86図686）。その他の出土遺物はなし。

#### 14号建物（S B 14, 第30・35図, 図版14)

S B 12・S B 13の西側に隣接する2棟の建物のうちの大型建物。南北棟の棟方向を有す。建物の柱列配置はS B 12に類似し、建物の主軸に沿って内部を二つに間仕切るような柱列がみられ、一見総柱風の柱穴配置となる。但しS B 12北梁行のような1間分の張り出しや、建物に直接付設される補助屋はみられない。建物の主軸方位はN-4°-W。桁行4間（14.4m）×梁行2間（10.4m）、床面積149.8m<sup>2</sup>

の規模を有す。柱穴は楕円柱穴・円形柱穴混在型で、柱穴規模にも大小のバラツキがある。柱穴規模は例えば楕円柱穴 S P 302では長径1.45m, 短径0.62m, 深さ0.35m, 同じく楕円柱穴 S P 409では長径1.58m, 短径0.53m, 深さ0.05mを測る。後世の搅乱が激しいため、柱穴の残りが総じてよくない。柱根の出土する柱穴もみられない。陶磁器類では S P 237から伊万里や瀬戸の磁器染付が、S P 409から越中丸山の施釉陶器（第67図315）が出土している。建物配置からみて S B 13・S B 14と同時期併存と考える。最終段階の掘立柱建物と考えている。

#### 15号建物（S B 15, 第30・35図, 図版14)

S B 14の桁行西柱列に接する小規模な南北棟の掘立柱建物。S B 12・S B 13の組み合わせに例えればS B 13に相当する。建物の主軸方位はN-5°-W。桁行2間（5.6m）×梁行1間（3.2m）、床面積17.9m<sup>2</sup>の規模である。柱穴は楕円柱穴のみで構成される。柱穴規模は、例えば隅丸円形柱穴のS P 322では径0.6~0.8m, 深さ0.17m, 楕円柱穴 S P 313では長径0.94m, 短径0.72m, 深さ0.15mを測る。柱穴内からの柱根の出土はみられない。土器・陶磁器類では S P 243から越中瀬戸の擂鉢（第66図291）が出土している。建物時期は S B 12~S B 14と同時期と考える。

#### 18号建物（S B 18, 第36図)

本建物は掘立柱式ではなく土台建物の形式と考えている。建物規模や構造は遺構の痕跡に乏しく不明な点が多いが、整地盛土の痕跡範囲や区画溝、土坑などの広がり、先行する掘立柱建物の配置や規模などを手掛かりとして、土台建物を推定復元した。このうち S B 18は調査地区の東端付近にあり、S B 11にはほぼ重複する位置にある建物で、S B 11の建て替えと考えられる。S B 18の場合、S K 269を建物の東辺、S D 293・S D 295で区画される範囲を北・西辺、東西に細長いS K 268を南辺に、これに囲まれた部分に建物の本体を想定した。建物の規模は一応桁行8m, 梁行7.6m, 床面積60.8m<sup>2</sup>と考えておく。棟方向は南北棟とし、建物の主軸方位はN-5°-Wをとる。建物の中央部分に不整形な土坑状の落ち込みが浅く広がっており、この部分の土層が大きく反転されていた。この土層を掘削・除去してはじめて掘立柱建物 S B 11の柱穴が確認できたこともあり、S B 11廃絶後、S B 18の建築時に土層の入れ替えと整地作業を行っているものと判断できる。なお S B 18に隣接して S K 269が所在する。S K 269の底面からは桶の底板（第84図678）が出土しており、S B 18に付設されたトイレ遺構の可能性が考えられる。このことからも S B 11と S B 18は、建物の形式が掘立柱式、土台式と異なりながらも、建物配置や規模、付設されるトイレ遺構の位置など、きわめて相似した様相を呈していることになる。S B 18を S B 11の建て替えと考える所以でもある。

#### 19号建物（S B 19, 第36図)

本建物も S B 18と同様に土台建物と考えられる。このため柱穴などが直接確認できないが、「L」字状に屈曲するS D 289と、東西方向にのびる小溝 S D 290およびS K 261・S K 262で囲まれる部分を建物範囲と考えた。この建物範囲の内部にはS K 259・S K 261・S K 262などがあり、土台建物の何らかの付帯施設の可能性もある。S B 19は先行するS B 12の建て替えと考えられるが、建物の棟方向は90°直交しており、東西棟となっている。建物の主軸方位はN-84°-Eをとる。建物規模は一応桁行12m, 梁行8.4m, 床面積60.8m<sup>2</sup>と考えておく。S B 18のようにトイレ遺構などの外部施設は伴っていないが、S D 288・S D 297・S D 291によって東・北・西の三方が区画され、概ね東西40数m, 南北50数mが屋敷地の範囲として認識される。

## 柱穴

### 231号柱穴（S P 231, 第38図）

S B 10の西梁行中央やや北側に位置する柱穴。大型の楕円土坑の中心に小柱穴がみられる。母屋建物の柱穴ではなく、補助屋の柱穴である。長径3.07m, 短径2.17m, 深さ0.2mの規模。小柱穴は径0.4mの円形。埋土は褐灰色砂粘質土である。瀬戸の小片が出土。

### 233号柱穴（S P 233, 第38図）

S B 9の北西角の柱穴で、S B 10のS P 231と一部重複し、これに切り込まれる。このことからS B 9がS B 10に先行する時期の建物であることがわかる。柱穴形態は楕円形で、長径2.27m, 短径1.29m, 深さ0.2m。埋土は灰白色微砂粘質土である。唐津の小片が出土。

### 267号柱穴（S P 267, 第43図）

小型建物 S B 6 の南西角の柱穴。平面形態は楕円形で、長径1.28m, 短径0.57m, 深さ0.48m。埋土は黄灰色土・褐灰色土・黒褐色土がブロックで混在する。柱穴を埋める際に混ぜられたのであろう。本遺跡の柱穴や土坑では、このようなブロック土の混在がしばしば観察される。出土遺物なし。

### 271号柱穴（S P 271, 第43図）

S B 11北東角の柱穴で、東西に長いやや不整形な楕円形を呈す。長径0.8m, 短径0.38m, 深さ0.17mの規模。埋土は褐灰色土に黄褐色土・黒褐色土が霜降状に混じる。出土遺物なし。

### 301号柱穴（S P 301, 第40図, 図版17）

S B 10のS P 231の西側に対置する柱穴で、S P 231と同様の補助屋の柱穴と考えられる。柱穴の形態は楕円形で、長径1.07m, 短径0.44m, 深さ0.23mの規模。埋土は黒褐色砂粘質土を基調とする。柱穴内の西隅から柱が据え置かれた状態で検出された。

### 302号柱穴（S P 302, 第40図）

S B 10の補助屋の西柱列、ないしはS B 14の梁行西柱穴のひとつと考えられる。南北に長い楕円形の形態。長径1.45m, 短径0.62m, 深さ0.35m。埋土は褐灰色土に黒褐色土がブロック状に混じる。北側の一段落ち窪んだ場所で、柱根がやや南側に傾いた状態で検出された。

### 319号柱穴（S P 319, 第41図）

S B 14の中央を間仕切るように並ぶ桁行方向の柱穴。長径0.76m、短径0.5mの楕円形で、深さは0.3m。埋土は黄褐色土と黒褐色土がブロックで混在する。柱根が据え置かれた状態で検出された。

### 333号柱穴（S P 333, 第40図）

S B 10の北東角の柱穴。南北方向に長い楕円柱穴の形態。長径1.32m, 短径0.62m, 深さ0.34mの規模。埋土は褐灰色土に黒褐色土がブロック状に混じる。出土遺物なし。

### 335号柱穴（S P 335, 第40図）

S B 13桁行東側中央の柱穴。南北に長い楕円形の形態。長径1.07m, 短径0.55m, 深さ0.35mの規模。埋土は黄灰色砂質土に若干の黒褐色土が混じる。出土遺物なし。

### 336号柱穴（S P 336, 第40図）

S B 13北東角の柱穴で、平面形態は南北に長い楕円形である。長径1.17m, 短径0.47m, 深さ0.21mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土に黒褐色土がわずかにブロック状に混じる。中央底面で柱根が検出されるが、残存状況はあまり良好ではなかった。

### 344号柱穴（S P 344, 第40図, 図版17）

S B 12の北梁行中央やや西よりの柱穴。平面形態は東西に長い楕円形。長径1.03m, 短径0.48m,

深さ0.6mの規模を測る。埋土は黄褐色から黄橙色の砂粘質土に黒褐色土がブロック状に混じる。柱穴中央の底面に据え置かれたように柱根（第86図689）が出土した。

#### 352号柱穴（S P 352, 第40図, 図版41）

S B 12の東桁行柱列の南から3番目の柱穴。平面形態はやや不整な楕円形で、長径1.02m, 短径0.68m, 深さ0.23mの規模である。埋土は黄灰色砂粘質土。柱穴の底面には小礫がまかれ、その中央に柱根が残存するが、残りは悪い。出土遺物は弥生土器（第59図110）、柱（第88図696）がある。

#### 365号柱穴（S P 365, 第40図）

S B 12の西側桁行柱列の中央に位置する柱穴。東西に長い楕円形の形態で、長径0.93m, 短径0.45m, 深さ0.23mの規模である。埋土は灰黄褐色砂質土に若干の黒褐色土がブロック状に混じる。柱穴底面の中央でやや東に傾いた状態で柱根（第88図695）を検出した。

#### 375号柱穴（S P 375, 第41図）

S B 12東桁行柱列の中央やや北側に位置する柱穴。南北に長い楕円形の平面形態である。長径1.04m, 短径0.48m, 深さ0.3mの規模。埋土は上層に若干のブロック土がみられるものの、黄灰色から褐灰色の砂粘質土を基調とする。土坑底面で小礫の散乱が検出されたが、柱根は出土しなかった。

#### 387号柱穴（S P 387, 第41図5）

S B 7の西桁行柱列の南側に位置する柱穴。南北に長い楕円形を呈する。長径0.78m, 短径0.35m, 深さ0.31mの規模。埋土は黄灰色粘質土の単層構成である。柱穴底面の北側で垂直に据え置かれたように柱根（第85図682）が出土した。

#### 390号柱穴（S P 390, 第41図）

S B 12の東側桁行柱列の南から2番目の柱穴。南北に長い楕円形の平面形態。長径1.04m, 短径0.72m, 深さ0.25mの規模を測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトの単層構成である。柱穴中央の底面に垂直に据え置かれた状態で柱根（第85図681）を検出した。

#### 425号柱穴（S P 425, 第42図）

S B 11の北角付近で検出された柱穴。平面形態はやや不整形な楕円形を呈する。長径1.5m, 短径0.67m, 深さ0.57mの規模を測る。埋土は5～6層に分層されるが、概ね黄灰色から浅黄色の砂粘質土を基調とする。また西隅の上面で柱の残欠が検出された。

#### 427号柱穴（S P 427, 第42図, 図版18）

S P 425の南側に隣接する柱穴。平面形態は長楕円形。長径2.03m, 短径0.93m, 深さ0.64mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土である。上層から中層にかけての埋土から小礫が多く検出された。また越中瀬戸1点（第67図314）も上面から出土した。この他にも上面から打ち込まれた杭を何本か検出している。さらに下層まで掘り下げると、ちょうど中央に据え付けられたように柱（第87図694）が出土した。S B 11に帰属する掘立柱建物の柱と考えられる。

### 井戸

#### 456号井戸（S E 456, 第42図, 図版16）

B 1地区では石組井戸1基が検出されている。北側の掘り方と石組部の一部が近代の溝によって破壊されているが、下半および基底部は良好に残存する。井戸の掘り方は円形で、擂鉢状の形態である。石組はこの掘り方の中央に設置される。構築方法は、まず掘り方の底面に天井部を穿孔した木臼（上臼, 第84図680）を倒立させて据え置く。ついで木臼の上面がほとんど見えなくなるまで掘り方を埋め戻し、周辺を平坦にならす。そこから小礫を一段ずつ輪積みし、掘り方の埋め戻しを一段ごとに繰

り返し行う。井戸の規模は、掘り方上面の径約1.6m、石組の上面の内径0.75m、検出部から井戸底面までの深さ約0.5mを測る。井戸は廃絶後底面から木臼の上面あたりまで小礫を詰め、その上に越中瀬戸2点（第65図276・277）を供献する。従って井戸の廃絶時期は18世紀代と考えられる。S E456は、S B11～S B13に伴う井戸と考えられる。

### 土坑

#### 201号土坑（SK201、第47図）

A地区から続くSD218が北へ方向を転じる屈曲部の北西側で検出された土坑。平面形態は橢円形で、長径1.27m、短径0.82m、深さ0.09mの規模。埋土は黄灰色シルト質土。瓦片の出土がみられる。近代の屋敷地の整地土縁辺に位置し、この時期の遺構と考えられる。

#### 202号土坑（SK202、第47図）

SD218を挟んでSK201と反対の南側に位置する土坑。平面形態は不整橢円形を呈する。長径2.1m、短径0.93m、深さ0.19mの規模。埋土は暗灰黄色シルト質土を基調とする。唐津の小片が出土している。埋土の特徴からSK201と同様の、近代の時期と考えている。

#### 203号土坑（SK203、第48図）

調査地西壁南側に位置し、土坑の北半を近代溝SD218に切り込まれている。平面形態はやや不整な方形で、幅1.81m（残存部のみ）、長さ2.73m、深さ0.22mの規模を測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトを基調とする。出土遺物なし。近代溝に切り込まれこれに先行することから、一応近世の時期に比定しておく。

#### 205号土坑（SK205、第47図、図版20）

B1地区西壁中央やや北寄りに位置する石組の長方形土坑。掘り方の規模は幅約1.5m、長さ2m弱、石組の壁の内側の規模は幅0.65m、長さ1.1m、深さ0.45mを測る。石組は最上面一段のみにみられ、土坑側面は全面石壁とはなっていない。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。この土坑は近代の屋敷地の整地盛土層の上面から切り込み、構築されていることから、近代屋敷の建物に付随する何らかの施設のひとつと考えられる。

#### 206号土坑（SK206、第47図）

SK205の南西側約4m程離れて位置する土坑。小礫が長方形状に散乱しており、SK205のように石組土坑が破壊された状況と考えられる。掘り方はあまり明確でない。一応幅0.75m、長さ0.95mの平面規模と考えておく。土坑内からの出土遺物は認められないが、近代の整地盛土層の上面から切り込んでおり、同時期の所産と考えられる。

#### 215号土坑（SK215、第47図、図版20）

近代屋敷地の整地盛土層の北側に位置する土坑。平面形態は円形で、径0.9m弱、深さ0.34mが残存する。横断面は円筒状で、壁に接して桶の底板（第84図679）と側板が残存していた。埋土は黒褐色混じりの黄灰色粘質土で、出土遺物にはゴムなど工業製品が混じる。位置的にみて、近代屋敷地の建物跡に付随するトイレ遺構の可能性が高い。

#### 230号土坑（SK230、第38図、図版14）

建物跡SB14の北側に位置する土坑。平面形態は三角形で、幅2.56m、長さ4.37m、深さ0.15mの規模を測る。埋土は黄灰色砂質土を基調とする。出土遺物には越中瀬戸（第65図281・282）がある。近世の土坑と考えられる。

## 234号土坑（SK234、第43図）

SK230の東側に重複し、これに切り込まれている土坑である。平面形態は不明。残存部での規模は幅1.38m、長さ2.47m、深さ0.26m。埋土は上層が暗灰黄色シルト質土、下層が黒褐色粘質シルトとなる。出土遺物なし。

## 235号土坑（SK235、第38図、図版15）

SB15の北側、調査区の北西角付近に位置する2基の土坑のうちの一つ。平面形態は隅丸の長方形を呈する。幅1.76m、長さ3.43m、深さ0.33mの規模を測る。埋土は3層程度に分層できるが、概ね黄灰色から暗黄灰色の粘質土が基調となる。土坑内の全体から主に陶磁器、木製品からなる遺物が大量に出土した。破棄土坑としての性格が考えられる。出土遺物の内訳では、陶磁器類として中国青磁（第65図284）・越中瀬戸（第65図285）・唐津・伊万里の小片などが、木製品では加工板（第82図656・657・662・第83図669）・部材（第82図658～661・665・第83図667・670）・漆器（第81図635）・筒形容器（第81図642）、石製品では砥石（第91図907）などがある。次に述べるSK281と組み合わせとなる破棄土坑と捉えておく。この2基の土坑は、掘立柱建物SB14・SB15ないしは土台建物SB3との共伴関係が想定される。時期については、概ね近世後期（18世紀）以降と考えておく。

## 236号土坑（SK236、第38図）

SK250の北側に接して位置する。平面形態は橢円形で、幅1.48m、長さ1.95m、深さ0.65mの規模を測る。土坑内の埋土は黄褐色から褐灰色の砂粘質土を基調とする。出土遺物には唐津の小片の他、柱（第83図671）・ヘラ形木製品（第81図646）などがある。

## 245号土坑（SK245、第43図）

SB14の南側に位置し、平面形態は不整形。幅2.03m、長さ2.79m、深さ0.06mの規模である。埋土は白灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

## 246号土坑（SK246、第38図）

SK203の北側、SK245の西側に近接して位置する。ほぼ長方形プランの平面形態。幅2.54m、長さ3.56m、深さ0.14mを測る。埋土は灰黄色砂粘質土を基調とする。17世紀末～18世紀前後の唐津陶胎染付（第66図292）が出土している。

## 247号土坑（SK247、第38図）

SK246の北西側に近接して位置する不整形土坑。西半部が調査地区外となる。このため正確な規模は不詳だが、現状で最大幅2.79m、長さ2m以上、深さ0.3mを測る。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

## 250号土坑（SK250、第43図）

SB14の西桁行柱列の中央付近に位置する。平面形態は橢円形。長径40.8m、短径1.37m、深さ0.48mを測る。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物は認められないが、中央をSB14の柱穴が切り込み、これに先行する時期の土坑であることがわかる。

## 251号土坑（SK251、第39図）

近世屋敷地の洗い場と考えられる方形土坑の北西隅で検出された土坑である。長径4.33m、短径3.06m、深さ0.38mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土。出土遺物には伊万里・唐津・瀬戸などがある。

## 253号土坑（SK253、第43図）

調査区の北東隅に位置する土坑で、過半が調査地区外となる。現状で最大幅2.43m、長さ0.2m以上、深さ0.14mを測る。埋土は褐灰色砂粘質土。出土遺物なし。

## 254号土坑（SK254、第39図）

土台建物SB19の区画溝SD289のちょうど屈曲部の外側に隣接する土坑。平面形態は橢円形を呈する。長径3.75m、短径2.17m、深さ0.27mの規模を測る。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。溝底面に有機質腐植土の堆積がみられ、この土坑がある一定期間開削されたままオープンな状態にあったことがわかる。SD289との切り合い関係は判然としないが、あるいは同時期併存し、土台建物の雨落ちを集めていた土坑の可能性もある。出土遺物には越中瀬戸（第66図293）・瀬戸などの陶磁器がある他、椀形津（第91図814）も出土している。

## 258号土坑（SK258、第39図）

SK258はSB12の西側、SB13の北側に近接するが、土台建物SB19とは重複する位置関係にある。平面形態は隅丸長方形で、幅1.26m、長さ1.51m、深さ0.33mの規模を測る。埋土は3層程度に分層されるが、概ね黄灰色砂粘質土を基調とする。遺構掘削時の上層面で、小礫が散乱して検出される状況がみられた。出土遺物には唐津の三島手の椀（第66図294）・擂鉢（第66図296）・越中瀬戸の切り高台の皿（第66図295）・伊万里の小片などに他に、加工石（第92図921）の出土などもみられる。出土遺物は概ね18世紀代の様相を示す。前述のSB14・SB15に対するSK235の関係のように、SB12・SB13に伴う破棄土坑の一種と考えておく。

## 259号土坑（SK259、第39図、図版16）

SK258の東側に隣接する大型土坑。平面形態は不整橢円形。長径2.84m、短径1.78m、深さ0.54mの規模。埋土は概ね黄灰色砂粘質土を基調とする。土坑埋没時に南側から流れ込んだ状態で小礫が大量に出土している。出土遺物には越中瀬戸・唐津・珠洲などがあるが、いずれも小片である。SK258などと同様に近世後期以降の時期と考えておく。

## 261号土坑（SK261、第37図）

SK259とSD292の間に位置する土坑。SK262と重複しこれを切り込む。瓢箪形に近い不整形な平面形態。幅1.36m、長さ4.14m、深さ0.35mの規模。埋土は上層が褐灰色砂粘質土、下層が黒褐色粘質土となる。上層と下層の境界には炭化物が薄くレンズ状に堆積していた。出土遺物には唐津・越中瀬戸の小片、建築部材と考えられる木製品（第83図672）がある。

## 262号土坑（SK262、第37図、図版17）

SK261とほぼ同位置で重複しこれに切り込まれる土坑。平面形態や本来の規模は不明。径2.3~2.4mの円形プランの可能性が高い。検出面からの深さは0.28mを測る。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。瓦・越中瀬戸などの小片が出土している。

## 263号土坑（SK263、第39図）

SD292の南半部に接してこれに切り込まれる土坑で、本来の形態や規模は窺い知れない。現況で幅2.11m、残存長1.16m、深さ0.59mの規模。埋土は褐灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物には越中瀬戸（第66図297~301）・唐津などがある。

## 268号土坑（SK268、第43図）

調査区の西端側、SB11と重複する位置にある小土坑。平面形態は隅丸方形。幅0.68m、長さ0.85m、深さ0.06mの規模を測る。埋土は黄灰色砂質土。出土遺物なし。

## 269号土坑（SK269、第39図、図版17）

土台建物SB18の東側に接して位置し、建物の一部を構成すると考えられる土坑である。平面形態は隅丸長方形で、幅1.11m、長さ1.86m、深さ0.24mの規模を測る。土坑の北側の壁に接して桶の底

板（第84図678）が据え付けられたような状態で出土した他、反対側の南隅では建築部材と考えられる材木片が散乱している。埋土は中層の黒褐色砂粘質土を挟んで上層が褐灰色砂粘質土、下層が黄褐色砂粘質土となる。木製品以外の遺物では伊万里の小片が出土している程度である。本土坑については、土台建物 S B 18のトイレ遺構の可能性を想定している。

#### 270号土坑（S K270, 第43図）

S X461の南側に接してこれに切り込まれる土坑で、現状で幅1.92m、残存長1.22m、深さ0.12mの規模。埋土は褐灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

#### 275号土坑（S K275, 第43図）

S K269の南側に近接して所在する土坑。平面形態は長楕円形。幅0.57m、長さ1.5m、深さ0.24mの規模を測る。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

#### 276号土坑（S K276, 第43図）

S D288の屈曲部の西側に位置し、これを切り込む。平面形態は方形で、一辺2m前後、深さ0.33mの規模。埋土は暗灰黄色シルト質土の单層。出土遺物なし。

#### 278号土坑（S K278, 第43図）

土台建物 S B 18に位置的に重複する小土坑。平面形態は円形で、径1.1～1.2m、深さ0.37mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土を基調に黒褐色・灰色・赤褐色のブロック土が混じる。出土遺物なし。

#### 281号土坑（S K281, 第39図、図版15）

調査区の北西隅近く、S K235の南側に連接して位置する土坑。平面形態は隅丸方形。一辺2～2.3m、深さ0.36mの規模を測る。土坑内の埋土は黄灰色から褐灰色の砂粘質土を基調とする。また東西方向の断面の西側において1・2層に切り込まれるように黒褐色砂礫（3層）の堆積がみられる。出土遺物の範囲もこの付近で途切れることから、別の土坑がS K281に切り込まれている可能性もある。この土坑内の東側3分の2の範囲内で、建築部材や漆器などの木製品（第81図639・643）や石製品（第92図913・919・920）、金属製品（第91図806）、陶磁器片などが散乱して検出された。出土した陶磁器には伊万里（第66図302～304）・越中瀬戸（第66図305・306）・唐津などがある。18世紀代を主体とする遺物相である。このような遺物の出土状況はS K235と共通しており、少なくとも本遺構の最終的な機能は破棄土坑であったと考えられる。

#### 282号土坑（S K282, 第44図）

S B 9・S B 10の東側、S K281の南側に近接して位置する土坑。平面形態は不整長方形である。幅0.43m、長さ1.32m、深さ0.04mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

#### 326号土坑（S K326, 第40図）

S B 10の南側に近接して位置する小土坑。平面形態は楕円形で、土坑の南側底面に2個の小礫が配石される。長径0.87m、短径0.63m、深さ0.32m。埋土は褐灰色砂粘質土。出土遺物なし。

#### 346号土坑（S K346, 第40図）

S B 12と重複し、S K259の南側に近接する小土坑。平面形態はやや不整な楕円形。長径0.82m、短径0.45m、深さ0.25mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。

#### 366号土坑（S K366, 第40図）

S B 12に重複し、S D292の南側に位置する小土坑。平面形態は円形で、径0.55m、深さ0.26mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。土坑内の底面に小石を軽く敷き詰め、中央に柱を据えている。但し柱の残りはよくない。掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

## 367号土坑（S K367, 第41図）

S K366の東側に隣接する小土坑。平面形態は不整円形。幅0.57m, 長さ0.62m, 深さ0.22mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。土坑内の底面には小石が散乱する状態で検出された。

## 381号土坑（S K381, 第41図）

南北に長い楕円形の平面形態の土坑。長径1.43m, 短径0.58m, 深さ0.45mの規模。埋土は褐灰色・黄灰色の砂粘質土に黒褐色土がブロック状に混じる。土坑のちょうど中央に小礫の配石がみられ、その中央に柱根の痕跡が検出された。

## 384号土坑（S K384, 第41図）

S E456の東側に隣接する小土坑。平面形態は楕円形。長径0.93m, 短径0.54m, 深さ0.28mの規模。埋土は黄灰色砂粘質土。土坑内には小礫・小石が僅かに散乱し、中央に柱の残欠が確認できた。その他の出土遺物はなし。掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

## 388号土坑（S K388, 第41図）

S B 7・S B 8の柱穴に一部重複する位置にある。平面形態は楕円形を呈する。長径1.06m, 短径0.53m, 深さ0.38mの規模。埋土は黄褐色土・灰褐色土・黒褐色土がブロック状に混在する。中央底面から柱の残欠が出土した。掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。出土遺物はこの他に土製品（第67図316）・漆器（第81図638）・唐津の小片などがある。

## 392号土坑（S K392, 第41図）

S B 11の北西角付近の土坑で、東西に長い楕円形の平面形態である。長径0.92m, 短径0.25m, 深さ0.14mの規模を測る。埋土はオリーブ色系のシルト質土である。底面に小礫が散乱し、西端付近で残りの悪い柱根の痕跡を検出した。掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

## 395号土坑（S K395, 第41図, 図版18）

S B 12の南側に隣接する大型土坑。平面形態は楕円形で長径1.28m, 短径0.72m, 深さ0.5mの規模を測る。埋土は暗灰黄色砂質シルトに黒褐色やオリーブ灰色の砂質土がブロック状に顕著に混じる。土坑の中央には柱根が直立した状態で残存していた。掘立柱建物の柱穴の可能性が高い。出土遺物はこの他に唐津（第67図320）がある。

## 426号土坑（S K426, 第42図）

S E456の南側に隣接して位置し、中央を S D291に切り込まれている大型土坑。平面形態は円形に近い楕円形を呈す。長径1.89m, 短径1.67m, 深さ0.46mの規模を測る。埋土は黄褐色・黒褐色・褐灰色の粘質土がブロック状に堆積するものとなっている。このような埋土のあり方は近世でも古手の時期の土坑や柱穴に多く観察される様相である。土坑のほぼ中央の中層からやや東側に傾いた状態で柱が検出されるが、底面に据えられていた様子ではなく、本土坑に直接帰属する柱かは定かではない。出土遺物はこの他に唐津の小片がみられる。

## 溝

## 218号溝（S D218, 第48図, 図版20）

S D218は、遺構番号は異なるがA地区 S D 2の東側延長部にあたる同一の溝である。この溝はB 1地区に入ると約12~13mで向きを北側に転じ10数mのびた後、さらにクランク状に東・北に短く屈曲し、その後直線的にのびてB 1地区の調査地外へと至っている。溝の規模はA地区の延長部位にある南側が大きく横断面も逆台形を呈する。付近での溝の規模は幅1.5m~2.5m, 深さ最大0.7mほどを測る。溝内の埋土は概ね上層が黄灰色シルト質土、下層が黒褐色砂質シルトとなるところが多い。こ

の南側付近から屈曲部にかけての溝底面から丸太や厚い板材などの建築材が多く出土した。一方北に転じた後の S D218はやや溝幅を減じており、浅くなっている。この溝については後述の土台建物期以降近代の屋敷地の区画溝として継続して使用されていったものと考えられる。出土遺物には伊万里・瀬戸・関西の磁器染付・明治以降の瀬戸銅版プリントの染付・越中瀬戸・越中丸山・瓦質土器(第62図193~204)などがある。総じて近世末期のものが多いが、一部に近代のものが混じる点に特徴がみられる。日常的な食器にも磁器染付や施釉陶器が使われるようになった結果、食器の耐用性が高まり、容易に損壊しなくなったのであろう。溝の廃絶時期を示す明治期の遺物が少ないのも、このような事情が反映しているためと考えられる。

#### 222号溝 (S D222, 第44・48図)

調査区の北西角付近で検出された小溝で、S D286を切り込みこれに後出する。幅0.38m, 深さ0.15mの規模。褐灰色砂粘質土の埋土である。出土遺物なし。

#### 223号溝 (S D223, 第48図, 図版14)

S D290の北側に並走する溝だが、規模がより大きく構築的である。試掘トレンチによって中央部分を大きく破壊されるが、概ね現町道に沿った方向で東から西側にのび、S D218に切り込まれた後北側に方向を転じ、調査地区外へとのびる。最大幅1.73m, 深さ0.46mの規模。横断面の形状は肩がほぼ垂直に落ちる長方形に近いもの。埋土は、上層が黄灰色から褐灰色の砂粘質土、下層が黒褐色シルト質土である。この溝からは陶磁器や木製品が多く出土している。陶磁器類では越中瀬戸が多く、次いで伊万里・瀬戸などの製品、関西系の鉄釉擂鉢などもみられる(第64図229~250)。磁器染付の中には明治以降の銅版プリントのものがみられる。木製品では栓・底板・「戸長役場」と記された木札などが出土している(第81図644・645・84図674)。

#### 257号溝 (S D257, 第44図)

調査区南壁中央付近で検出された小溝で、「L」字状に屈曲し両端は消失する。最大幅0.44m, 深さ0.2m。埋土は褐灰色砂質土を主体とする。近代の溝と考えている。

#### 286号溝 (S D286, 第44・48図)

調査区の北西角付近で検出された小溝で、S D222と重複し切り込まれている。幅1.4m, 深さ0.06mの規模。埋土は黄灰色砂質土を基調とする。伊万里の小片が出土。

#### 287号溝 (S D287, 第44図)

近代溝 S D218で区画された西側の整地盛土層の上面で検出された溝。幅0.9m, 深さ0.1mの規模。溝内の埋土は暗灰黄色砂質土が主体となる。出土遺物には伊万里・越中瀬戸・唐津擂鉢などがみられる(第64図252~256)。出土遺物は近世が主体だが、近代の屋敷地に伴う整地盛土層の上から切り込む溝のため、屋敷と同時期の明治以降の溝と判断できる。

#### 288号溝 (S D288, 第44図)

土台建物 S B19の西側の境界を区画する溝。北端は直角に屈曲して東側にのびる。途中一部途切れものの本来は S D297と同一の溝と考えられる。幅0.8m, 深さ0.2mの規模。埋土は上層が暗黄灰色砂質土、下層が褐灰色砂粘質土となる。出土遺物には越中瀬戸(第64図257・258)の他に伊万里・唐津・越中丸山などの磁器染付や施釉陶器類がある。

#### 289号溝 (S D289, 第44図)

土台建物 S B19の外郭線を区画する溝。南と西側に沿って「L」字状に屈曲する。幅1.8m, 深さ0.1m。埋土は黄灰色砂粘質土を主体とする。出土遺物には越中瀬戸(第64図259・260)がある。

## 290号溝（S D290, 第44図）

S D223の南側に並走する小溝。幅0.38m, 深さ0.15mの規模。灰黄褐色砂粘質土の埋土。出土遺物はないが、S D223とともに道路遺構の側溝であると考えている。時期は近代以降と捉えられる。

## 291号溝（S D291, 第44図, 図版14・17）

土台建物 S B19の東側を区画する南北方向の溝で、同じく土台建物 S B18の西側区画溝 S D293と併走し、両者の間が土台建物間を抜ける小路となっている。幅0.8m, 深さ0.12m, 長さは約16mが検出される。北端部はS E456と重複しこれを切り込む。南端部は南壁の手前で浅く消失している。埋土は黄灰色砂質土が主体をなす。出土遺物には越中瀬戸・越中丸山・関西系施釉陶器（第65図261～263）の他、唐津・伊万里・瀬戸などの磁器染付や施釉陶器も出土している。また木製品では板（第83図666）が出土している。

## 292号溝（S D292, 第44図）

土台建物 S B19の東梁行に隣接して平行にのびる土坑状の溝。土台建物 S B19や掘立柱建物 S B12に関連する施設の可能性もある。幅2.9m, 深さ0.48m, 長さ約9m程で、両端の肩が持ち上がっていいる。埋土は褐灰色砂粘質土が基調となる。出土遺物には越中瀬戸（第65図264～267）の他に、越中丸山・伊万里・唐津・瀬戸・関西など各地の磁器・施釉陶器がある。

## 293号溝（S D293, 第44図）

土台建物 S B18の西側を区画する溝で、S D291と向い合せに南北方向に並走する。長さ約13m程が検出され、北端は浅く消失し、南端は調査地区外へとのびている。幅0.75m, 深さ0.07mを測る。黄灰色から褐灰色の砂粘質土が埋土の主体となる。出土遺物には越中瀬戸・唐津の陶胎染付（第65図268～270）などがみられる。

## 294号溝（S D294, 第44図, 図版14）

S D293に位置的に重複しこれに切り込まれる溝で、このため幅・長さとも不明。深さは0.07m。埋土は黒褐色砂粘質土の単層構成である。出土遺物なし。

## 295号溝（S D295, 第44図）

調査区東端から西に向かってのびる溝で、土台建物 S B18の北側を区画する溝である。同時にこの土台建物に時期的に先行する掘立柱建物 S B11の柱列や、この建物の付属施設と考えられる S X461やS X463と重複し、これを切り込む。幅0.4m, 深さ0.06mを測る。埋土は褐灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物には伊万里花瓶の底部破片（第65図271）などがある。

## 297号溝（S D297, 第44図）

S D288の東端の延長にある溝で、本来両者は同一の溝と考えられる。この溝は同時に土台建物 S B19の北側の区画溝でもある。肩の一部を試掘トレンチによって大きく搅乱されるが、幅0.7m, 深さ0.06mの規模である。埋土は黄灰色砂粘質土。出土遺物には越中瀬戸・唐津・珠洲がある。

## 298号溝（S D298, 第44図, 図版14）

S D290の東側延長上にあり、中途が消失するものの同一の溝である可能性が高い。また土台建物 S B18の区画溝 S D295と位置的に重複し、これを切り込む。S D223と対置する道路の側溝と考えられる。幅0.62m, 深さ0.1mの規模。埋土は黄灰色砂質土である。出土遺物には伊万里（第65図272～275）・唐津・越中瀬戸などの陶磁器類の他に、釘（第91図804）・砥石（第91図906）などが出土地。遺物は近世主体だが、近代の溝と考えている。

## 299号溝（S D299, 第44図）

調査地の東端を南北に横切っている溝で、わずか3mほどが検出されたに過ぎない。幅0.69m, 深さ0.14mを測る。埋土は褐灰色砂粘質土。出土遺物には弥生土器の小片がある。

## その他の遺構

## 224号建物関連遺構（S X224, 第47図, 図版20）

調査地西側の近代の屋敷地に伴う整地盛土層の上面で検出された遺構。この遺構は地中に掘り込まれたものではなく、整地土上面に構築された建物構造の一部が建物取り壊し後も残存したものと考えられる。遺構の範囲は幅1m, 長さ1.5mで、平面は長方形を呈する。この部分にまず整地土上面に小礫を敷きつめ、次いで施釉された平瓦を数枚積み重ねながら二列に東西方向に並べている。ただしきれいに並べられた状態で遺存しておらず、半壊状態である。この二列の置き瓦の中央、中軸線に沿って両者を間仕切るように材木を横向けに据えている。間仕切りの南側部分において、3点の磁器（第65図278～280）と石臼が検出された。これらはほぼ東西に一列に並んで配置されていた。一番西側の磁器碗（280）は正立、二番目の磁器染付碗（278）は倒立、三番目の磁器猪口（279）は倒立て、いずれも完形で出土した。最後に一番東側に表面が非常に摩滅した石臼が据え置かれていた。これらの遺物はこの遺構が半壊状態になってから据え置かれたもので、遺構廃絶時の祭祀・供献遺物の一種と考えられる。なお出土した磁器類はいずれも明治以降の製品で、近世に溯るものはみられない。

## 460号不整形土坑（S X460, 第43図）

調査区の東端付近で検出された不整形土坑のひとつ。幅1.46m, 長さ1.82m, 深さ0.19mの規模を測る。埋土は褐灰色・黄灰色・黒褐色の砂粘質土がそれぞれブロック状に混在する。出土遺物なし。

## 461号不整形土坑（S X461, 第43図）

掘立柱建物S B11の東側に隣接して位置し、その一部外部施設を構成していた可能性のある遺構である。幅3.1m, 長さ4.85m, 深さ0.27mの規模を測る。埋土は概ね黄灰色砂粘質土を基調とする。出土遺物には唐津・越中瀬戸などがある。

## 462号不整形土坑（S X462, 第43図）

S X460の南東側に隣接する不整形土坑で、S X461に切り込まれる。幅1.25m, 長さ1.43m, 深さ0.15mの規模。埋土は上層が褐灰色砂粘質土、下層が黄灰色砂粘質土である。出土遺物なし。

## 463号不整形土坑（S X463, 第43図）

S X461の中央近くに位置し、S X461の一部遺構であった可能性が高い。径1.2m, 深さ0.2m。埋土は黄灰色砂粘質土を基調とする。とくに土台建物S B18とそのトイレ遺構S K269の関係において、S K269の内部から桶の底板が据え置かれた状態で出土したが、この桶の直径が本遺構の規模とほぼ同じである。土台建物S B18は、同位置で先行する掘立柱建物S B11の建て替えと考えられることから、S X461・S X463もその配置関係からS B11に付属するトイレ遺構である可能性が高い。

## B 2地区

## 建物

## 16号建物（S B16, 第50図, 図版22・23）

B 2地区南壁中央付近で検出された南北棟の掘立柱建物で、過半が調査地区外となる。現状で3間×1間以上が検出される。桁行3.6m以上、梁行6.8m、建物の床面積24.5m<sup>2</sup>以上の規模となる。建物の主軸方位はN-5°-W。柱穴形態は楕円形。柱穴規模は、例えばS P538では長径1.34m、短径0.77m、深さ0.35mの規模、S P535では長径1.05m、短径0.53m、深さ0.46mの規模を測る。柱根の残る

柱穴は認められない。柱穴からの出土遺物では、S P 538で伊万里と越中瀬戸の小片がある程度。周辺遺構との組合せでは、石組井戸 S E 501が本建物に付随するものと考えられる。さらにB 1地区の建物群との関係では、本建物が掘立柱式であること、建物の棟方位がS B 11～S B 15と一致することなどから、これらの建物群と同時期共伴の建物と考えておきたい。

#### 17号建物（S B 17, 第50図, 図版22）

S B 16の西側に近接して位置する小型の掘立柱建物。2間×2間の東西棟建物。建物の規模は桁行3.2m, 梁行2.8m, 床面積9m<sup>2</sup>を測る。建物の主軸方位はN-10°-Wをとる。柱穴形態は楕円形と円形の混在型である。柱穴規模は、例えば楕円柱穴 S P 527では長径0.72m, 短径0.36m, 深さ0.25m, 円形柱穴 S P 528では径0.4m, 深さ0.13mを測る。柱根や遺物の出土は認められない。建物の主軸方位がS B 16とやや異なるが、同時期併存の建物と考えておく。

#### 柱穴

##### 522号柱穴（S P 522, 第51図）

S B 17南西角の柱穴。平面形態は楕円形を呈す。長径0.59m, 短径0.37m, 深さ0.12mを測る。埋土は灰黄褐色と黒褐色の砂粘質土が混在する。出土遺物なし。

##### 526号柱穴（S P 526, 第51図）

S B 17桁行南側柱列の中央に位置する円形の柱穴。径0.3m, 深さ0.07mの規模。埋土は灰黄褐色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

##### 527号柱穴（S P 527, 第51図）

S B 17南東角の柱穴。平面形態は楕円形を呈する。長径0.72m, 短径0.36m, 深さ0.25mの規模。埋土は灰黄褐色・褐灰色・黒褐色の砂粘質土が混在する。出土遺物なし。

##### 532号柱穴（S P 532, 第51図）

S B 17北西角の柱穴。平面形態は楕円形。長径0.53m, 短径0.33m, 深さ0.14m。埋土は灰黄褐色砂粘質土に暗灰色土がブロック状に混じる。出土遺物なし。

##### 534号柱穴（S P 534, 第51図）

S B 17桁行北側柱列の中央に位置する楕円形の柱穴。長径0.4m, 短径0.32m, 深さ0.1mの規模。埋土は黄灰褐色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

##### 535号柱穴（S P 535, 第51図）

S B 16梁行北側柱列の楕円形柱穴。長軸が東西方向を向く。長径1.05m, 短径0.53m, 深さ0.46m。埋土は灰黄褐色土に黒色土・灰色土がブロック状に混じる。出土遺物なし。

##### 536号柱穴（S P 536, 第51図）

S B 16の柱穴の一つで、S P 535の東側に位置する。楕円形で長軸は南北方向。長径0.82m, 短径0.41m, 深さ0.24m。埋土は灰黄褐色砂粘質土に黒色土・灰色土が霜降状に混入。出土遺物なし。

##### 538号柱穴（S P 538, 第51図）

S B 16北西角の柱穴。平面形態は楕円形を呈し、長軸は南北方向を向く。長径1.34m, 短径0.77m, 深さ0.35mの規模を測る。埋土は黄灰色・灰黄褐色・灰白色の砂粘質土などが混在してみられる。柱穴内からは、越中瀬戸・伊万里などの小片が出土している。

#### 井戸

##### 501号井戸（S E 501, 第50図, 図版23）

S B 16の北側に隣接して位置する石組井戸である。検出当初において、井戸の本体部分一面に礫が

充填されていた。これをさらに半裁し断面を観察したところ、井戸の底面までびっしりと礫を充填していることが確認されると共に、最上層には小礫を多く配していることが明らかとなった。いずれにせよ井戸廃絶時において丁寧に礫詰めして埋めもどしていることがわかる。井戸の掘り方自体は円形で、擂鉢状の横断面の形態である。B 1 地区の石組井戸 S E456のように、下層に木臼を転用するような構造ではなく、井戸上面から底面まで石組だけされる。石組はこの掘り方の南側に片寄せて、掘り方の肩を利用して設置している。石組は明らかな螺旋積みはみられず、基本的に輪積みと考えられる。井戸の規模は、掘り方上面の径1.9~2.1m、石組の上面の内径0.5m、検出部から井戸底面までの深さ約0.96mを測る。石組の裏込め土の中から越中瀬戸の鉄釉擂鉢の破片が2点（第67図328・329）出土している。また井戸本体内からは充填礫とともに石臼の破片（第92図912）が出土している。本井戸は、掘立柱建物 S B16に伴う井戸と考えられる。

### 土坑

#### 503号土坑（S K503、第51図）

S D541の北岸に接して位置する土坑。平面形態は隅丸長方形で、長径1.1m、短径0.6m、深さ0.15mの規模。埋土は褐灰色と黒褐色の砂粘質土が混在する。出土遺物なし。

#### 504号土坑（S K504、第51図）

S B16の北東角に隣接する楕円形の土坑。長径1.05m、短径0.58m、深さ0.52m。埋土は黄灰色土・黒褐色土が縞状に混在。出土遺物なし。掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

#### 505号土坑（S K505、第51図）

S D514の北岸に位置する土坑で、平面形態は不整楕円形。幅0.76m、長さ2.2m、深さ0.18m。埋土は上層が褐灰色砂粘質土、下層が黄灰色砂粘質土となる。出土遺物なし。

#### 506号土坑（S K506、第51図）

S B16の東側に隣接して位置する大型の長方形土坑。幅1.85m、長さ3.52m、深さ0.22mの規模を測る。埋土は褐灰色砂粘質土に黒褐色土がブロックで縞状に多量に混入する。珠洲や瀬戸の小片が出土地しているが、埋土の特徴などから近世の土坑と考える。

#### 507号土坑（S K507、第51図、図版22）

S K506の北側に隣接する不整形土坑で、S D513を切り込み、S D517に切られる。幅1.5m、長さ5.73m、深さ0.4m。埋土は灰黄色砂粘質土に黒褐色土がブロック状に混じる。出土遺物なし。

#### 508号土坑（S K508、第51図）

S D514の屈曲部東側に近接して位置する楕円形土坑。長径2.05m、短径0.93m、深さ0.07mを測る。埋土は灰黄色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。

#### 509号土坑（S K509、第51図）

S D514の北岸に接して位置する不整円形の土坑。径0.8m、深さ0.08mを測る。埋土は上層が灰黃褐色砂粘質土、下層が褐灰色砂粘質土となる。出土遺物なし。

#### 524号土坑（S K524、第51図）

S B17の南側に接して位置する楕円形の土坑。長径0.63m、短径0.37m、深さ0.2mの規模を測る。埋土は灰黃褐色と黒褐色の砂粘質土がブロックで混入する。出土遺物なし。

#### 525号土坑（S K525、第51図）

S E501の西側に隣接する楕円形の土坑。長径1.09m、短径0.82m、深さ0.07mを測る。埋土は暗灰黃褐色砂粘質土の単層構成である。出土遺物なし。

## 529号土坑（S K529, 第51図）

S B17の中央に位置する楕円形の土坑。長径0.66m, 短径0.53m, 深さ0.25mを測る。埋土は灰黃褐色砂粘質土を基調とする。出土遺物なし。S B17の柱穴の可能性がある。

## 533号土坑（S K533, 第51図）

S D515に北接しこれに切り込まれる土坑で、半裁された楕円形を呈する。長径0.32m以上、短径0.3m、深さ0.11m。埋土は灰黃褐色砂粘質土。出土遺物なし。

## 537号土坑（S K537, 第51図）

S B16と重複する位置にある楕円形の土坑。長径1.09m, 短径0.59m, 深さ0.32mの規模を測る。埋土は灰黃褐色と褐灰色の砂粘質土が混在する。出土遺物なし。掘立柱建物の柱穴の可能性がある。

## 539号土坑（S K539, 第51図）

S D514に北接する楕円形の土坑。長径0.81m, 短径0.28m, 深さ0.11mを測る。埋土は上層が黄灰色砂粘質土、下層が黒褐色砂粘質土となる。出土遺物なし。

## 540号土坑（S K540, 第51図）

S D514に北接してこれに切り込まれる土坑。半裁された楕円形を呈する。長径0.76m, 短径0.3m以上、深さ0.11m。埋土は黄灰色砂粘質土に黒褐色土がブロック状に混じる。出土遺物なし。

## 541号土坑（S K541, 第51図）

S K506の南側に近接し、南半が調査区外となる。幅0.79m, 長さ0.23m以上、深さ0.2m。埋土は灰黃褐色砂粘質土に黒褐色土がブロックで縞状に混入する。出土遺物なし。

## 542号土坑（S K542, 第51図）

S B16の北側に接する楕円形の土坑。長径0.63m, 短径0.59m, 深さ0.35mを測る。埋土は灰黃色砂粘質土に黒褐色土がブロックで縞状に混入する。出土遺物なし。

## 溝

## 512号溝（S D512, 第52図）

S B17の西側に位置する小溝で、調査区の南壁から南北に6m程の長さが検出される。北端は西向きに直角に屈曲し、調査地区外へとのびている。ちょうど屈曲部付近をS D517に切り込まれているが、同時にS D513を横断しこれを切り込んでもいる。切り合い関係を整理するならば、(新) S D517→S D512→S D513(古)となる。溝の最大幅0.4m、深さ0.08mを測る。埋土は、灰黃褐色砂粘質土の単層構成である。出土遺物なし。

## 513号溝（S D513, 第16・52図, 図版22）

S D513は、西壁付近からでて東西方向に調査区を縦断した後、中央付近で直角に屈曲し南側へさらに調査地区外へと延びている。またこれとは別に東側へのびる溝も一連の続きと考えられるが、きれいな「T」字状の輪郭は描いておらず、むしろ「L」字の溝を二つ背中合せで接合したような様相を呈する。既述のように、S D512・S D517との切り合い関係では、最も先行する時期の溝である。溝の規模は場所により変化するが、最大幅で3.31m、検出面からの深さ0.2mを測る。溝内には黄灰色砂粘質土ないしは褐灰色砂粘質土の堆積がみられる。溝内からは弥生土器・中世土師器・珠洲などが混在して出土する。越中瀬戸(第67図325・326)が溝本来の帰属時期のものであろうが、溝の開削自体は中世まで溯り得る可能性もある。

## 514号溝（S D514, 第52図, 図版23）

S D517の北側に接して東西方向に併走し、調査区の中央付近でS D517とは反対に北東側に屈曲し

て調査地区外へとのびている。S D512・S D513・S D517とは重複する部分がなく、新旧の切り合い関係は確認できない。配置からは、いずれの溝とも共伴の可能性がある。最大幅3.35m、検出面からの深さ0.33mを測る。溝内は上層に黄灰色砂粘質土が、下層に褐灰色砂粘質土がみられ、中層は両者の土がブロック状に混在する様相である。溝内からは越中瀬戸（第67図327）以外にも弥生土器・珠洲、銅錢（寛永通宝）、銅版プリントの磁器染付などが混在して出土している。溝の開削は近世に溯るものと考えてよいが、廃絶は近代に入っていることと推定される。

#### 515号溝（S D515、第52図）

S B17の桁行北側柱列に沿って短くのび、これらの柱列を切り込む小溝。両端とも5m前後で浅く消失する。幅0.6m、深さ0.06m。溝内は灰褐色砂粘質土のみの单層である。出土遺物なし。

#### 516号溝（S D516、第16図）

B2地区北側の壁に沿って東西にのびる深い小溝で、中央および東側が浅く途切れている。最大幅0.55m、深さ0.07mを測る。黄灰色砂粘質土や灰白色砂粘質土の堆積がみられる。遺物は施釉陶器の小片が出土している。他の遺構との切り合い関係で最も後出する時期の溝で、近代以降の時期と考えている。後述のS D518とともに、道路遺構の側溝となる可能性が高い。

#### 517号溝（S D517、第52図、図版22）

S D513と514のちょうど中間に位置し、S D513・S D512を切り込むが、S D514とは併走しており両者に切り合い関係はみられない。溝の西端は浅くなるものの調査地外へとのびている。これに対し西端は輪郭がはっきりせず、中途で浅くなつて消失するが、下層のS D513のように「T」字状に東と南に分岐していた可能性が高い。最大幅約2.5m、深さ0.34mを測る。埋土は、上層が暗灰黄色砂粘質土、中層が灰黃褐色砂粘質土、下層が褐灰色砂粘質土となる。遺物は少なく、若干の近代磁器が出土している程度である。このため詳細時期を決め得ないが、開削は近世のなかでも新しい時期とし、廃絶はS D514と同様に近代以降と考えておく。

#### 518号溝（S D518、第52図）

調査地の東壁側から西に向かって短くのびる溝で、中央が消失し、再び東側で約4mほどが検出され、調査地区外へのびている。最大幅0.65m、深さ0.09mを測る。黄橙色砂質土の堆積がみられる。中世土師器の細片が出土するが、混入であろう。北側のS D516とともに、近代道路遺構の側溝を構成するものと考えられる。

### ③C地区

#### 溝

##### 601号溝（S D601、第54図）

調査地の南西角にある落ち込み状の溝。溝の方位はやや斜行した東西方向で、西側に近接する小溝群S D611と同一の方位を有する。南側の肩は調査地区外となる。北側は中央付近でS D611と接合している。現状で幅7m、深さ0.25mを測る。溝内の埋土は黒褐色と黄灰色のシルト質土が混在する。出土遺物には唐津（第73図513）・中世土師器（第74図526）などがある。

##### 604号溝（S D604、第54図）

調査地の北西角付近から東壁南側にかけて大きく弓なりにのびる溝。両端はさらに調査地区外へとのびている。幅約3m、深さ0.3mを測る。埋土は褐灰色・黒褐色・暗灰黄色の砂質土が混在する。出土遺物には、陶磁器類では越中瀬戸・伊万里（第73図496・503）などが、木製品では漆器・加工棒（第89図701・707）が、金属製品では鉛玉（第91図810）がある。

## 611号溝（S D611, 第54図）

S D601の北側に位置する小溝。方位も同一のもの。幅3.15m, 深さ0.21mを測る。東端がS D601と接合・合流している。埋土は黒褐色・黄灰色のシルト質土が混在する。出土遺物なし。

## 612号溝（S D612, 第54図）

北壁中央付近から東に向かってのびる溝で、東端はS D604と重複しこれに切り込まれている。最大幅2m, 深さ0.25mの規模を測る。埋土は黒褐色砂質土が主体となる。出土遺物には漆器（第89図699）、越中瀬戸の小片などがある。

## 614号溝（S D614, 第54・55図）

S D611の東側延長上に位置する溝。南壁中央付近から20数mほどのびた後、西端はS D611の手前で浅くなり消失する。幅1.22m, 深さ0.06m。暗灰黄色砂質土の埋土。出土遺物なし。

## 622号溝（S D622, 第55図）

S D604の中央付近の北側に接して位置しこれと並走するが、長さ約15m程で両端が浅く消失している。最大幅0.46m, 深さ0.15m。黒褐色砂質土の埋土。出土遺物なし。

## 634号溝（S D634, 第55図）

S D604の東端付近で短く検出されている小溝で、S D604・S D635にそれぞれ切り込まれ、これに先行する。幅0.7m, 深さ0.09m。暗灰黄色シルト質土の埋土。出土遺物なし。

## 635号溝（S D635, 第55図）

調査区の東壁に沿って検出された溝で、東側の肩は概ね調査地外となる。S D604に切り込まれこれに先行し、S D634を切り込みこれに後出す。現状で最大幅2m, 深さ0.58mを測る。溝内の埋土は暗灰黄色シルト質土が主体となる。出土遺物には唐津の内野山（第73図498）がある。

## 636号溝（S D636, 第55図）

S D604とS D644を結ぶように南北方向に直線的にのびる小溝。両端はそれぞれS D604・S D644と合流する。幅0.44m, 深さ0.13mの規模を測る。上層は黒褐色砂質土、下層は暗灰黄色砂質土の堆積がみられる。出土遺物には越中瀬戸（第73図493）がある。

## 637号溝（S D637, 第55図）

S D636と同様S D604と南端で合流する溝。S D636の東側に位置する。幅1.6m, 深さ0.23mの規模を測る。黒褐色砂質土の埋土がみられる。出土遺物には珠洲・越中瀬戸・伊万里などがある。

## 640号溝（S D640, 第55図）

調査地の北東角付近で西方向にのびる小溝で、S D636と直交しこれを切り込んでいる。幅0.24m, 深さ0.15mを測る。黒褐色砂質土の埋土。出土遺物なし。

## 641号溝（S D641, 第55図）

S D637の中途から東側に向かってのびる3つの短い小溝群のひとつで、一番北側に位置する。幅0.38m, 深さ0.12mの規模。黒褐色砂質土の埋土。出土遺物には越中瀬戸の小片がある。

## 642号溝（S D642, 第55図）

前述の小溝群のひとつで、中央に位置する。幅0.57m, 深さ0.17mの規模。黒褐色砂質土の埋土。出土遺物なし。

## 643号溝（S D643, 第55図）

前述の小溝群のひとつで、南側に位置する。幅0.34m, 深さ0.08mの規模。黒褐色砂質土の埋土。出土遺物なし。

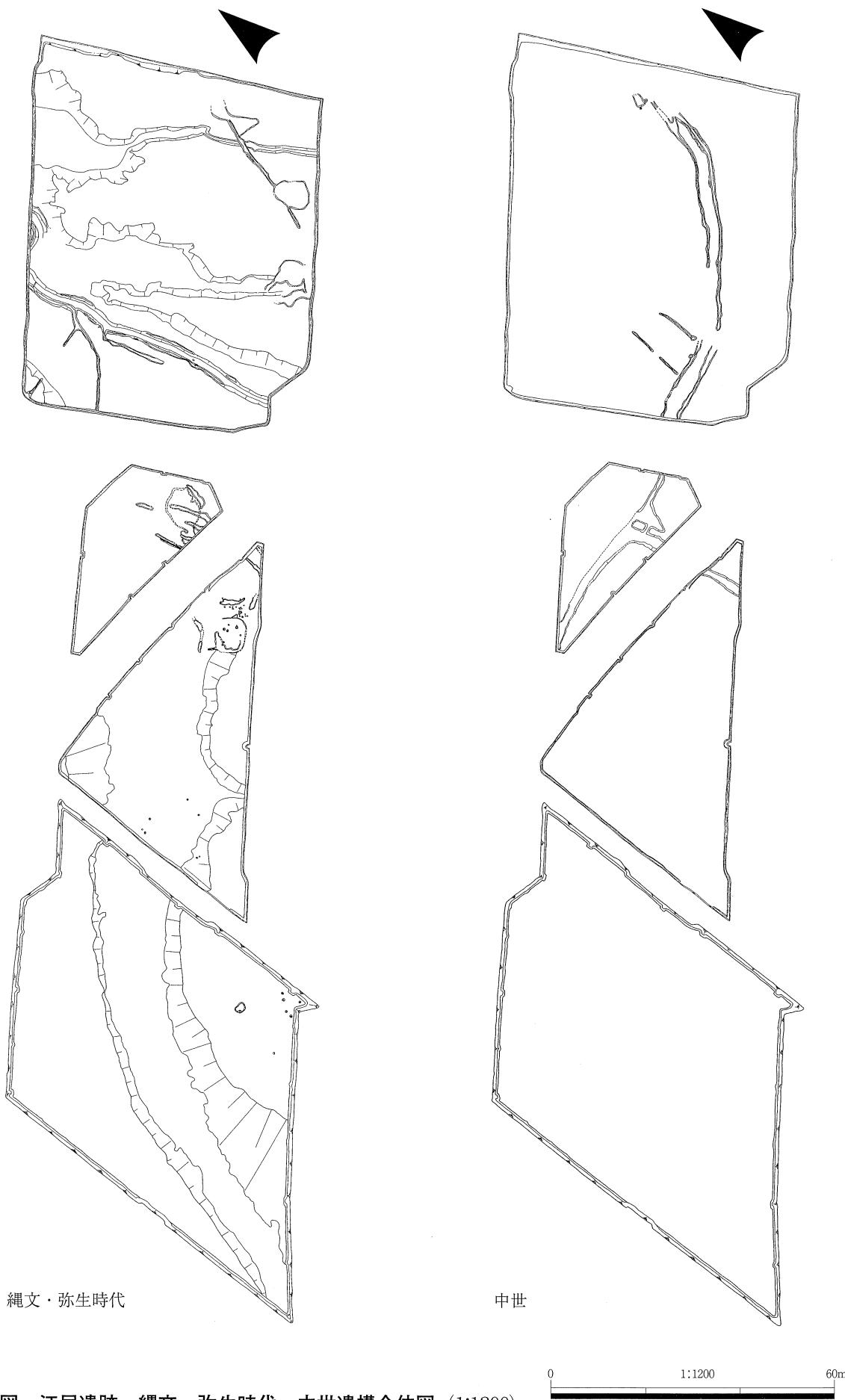
644号溝（S D644, 第55図）

S D640の北側に位置し並走する溝であるが、S D636を切り込むため、これに後出する時期となる。最大幅1.12m、深さ0.09mの規模。黒褐色砂粘質土の埋土。出土遺物なし。

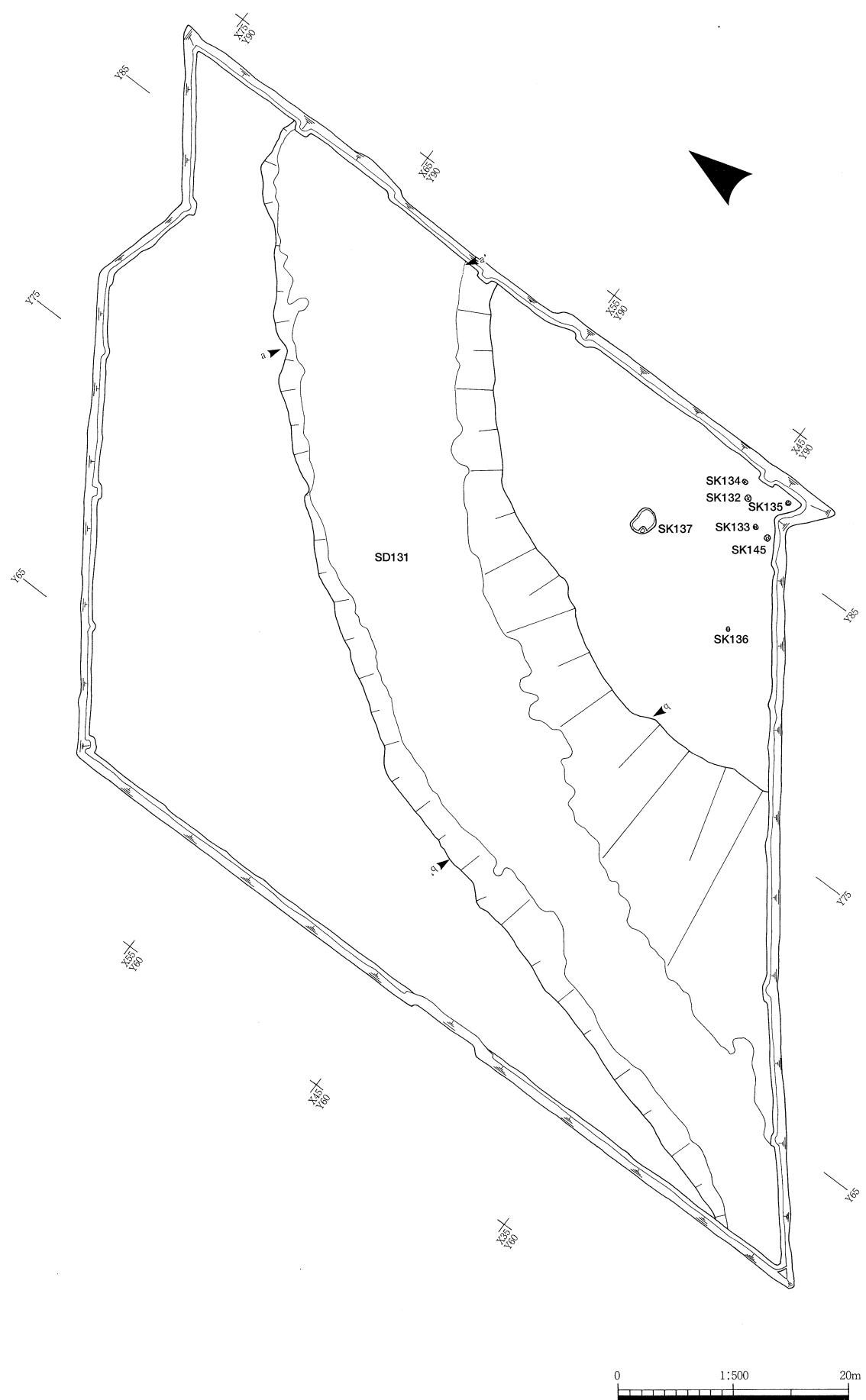
645号溝（S D645, 第55図）

S D644から分岐し北側にのびる溝。幅0.8m、深さ0.06mの規模。黒褐色砂質土を基調とする埋土。出土遺物なし。

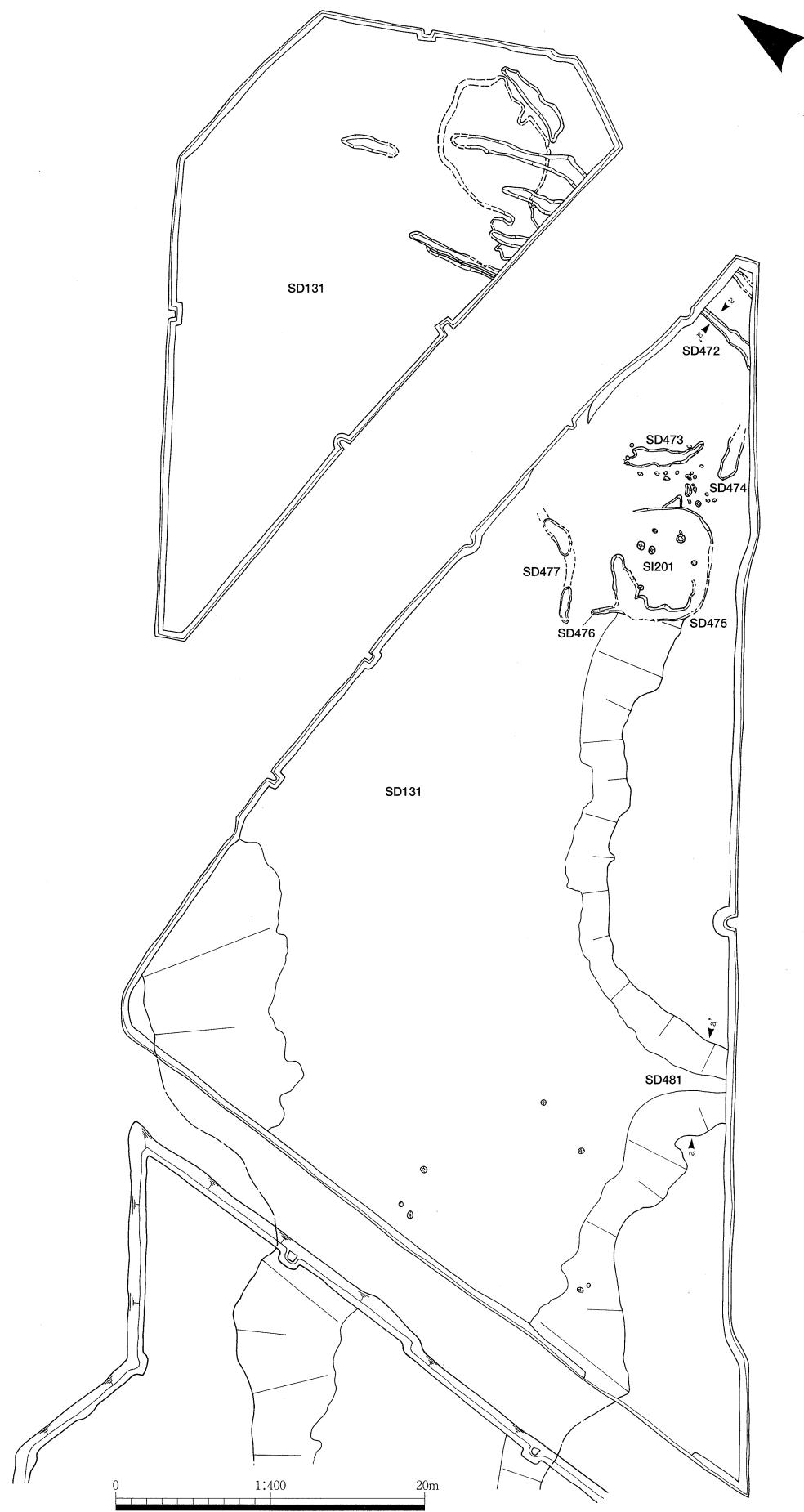
(森 隆)



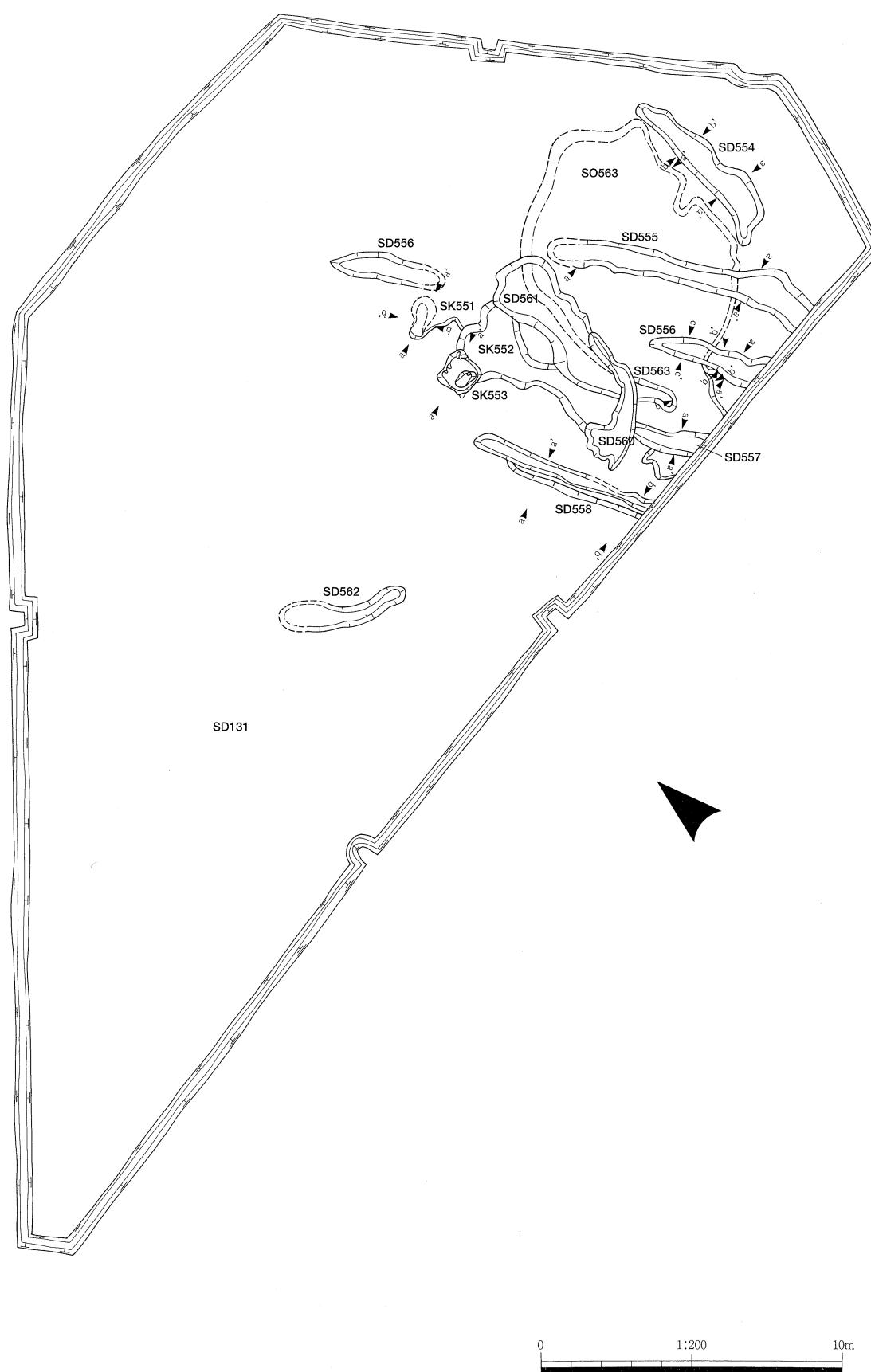
第4図 江尻遺跡 縄文・弥生時代・中世遺構全体図 (1:1200)



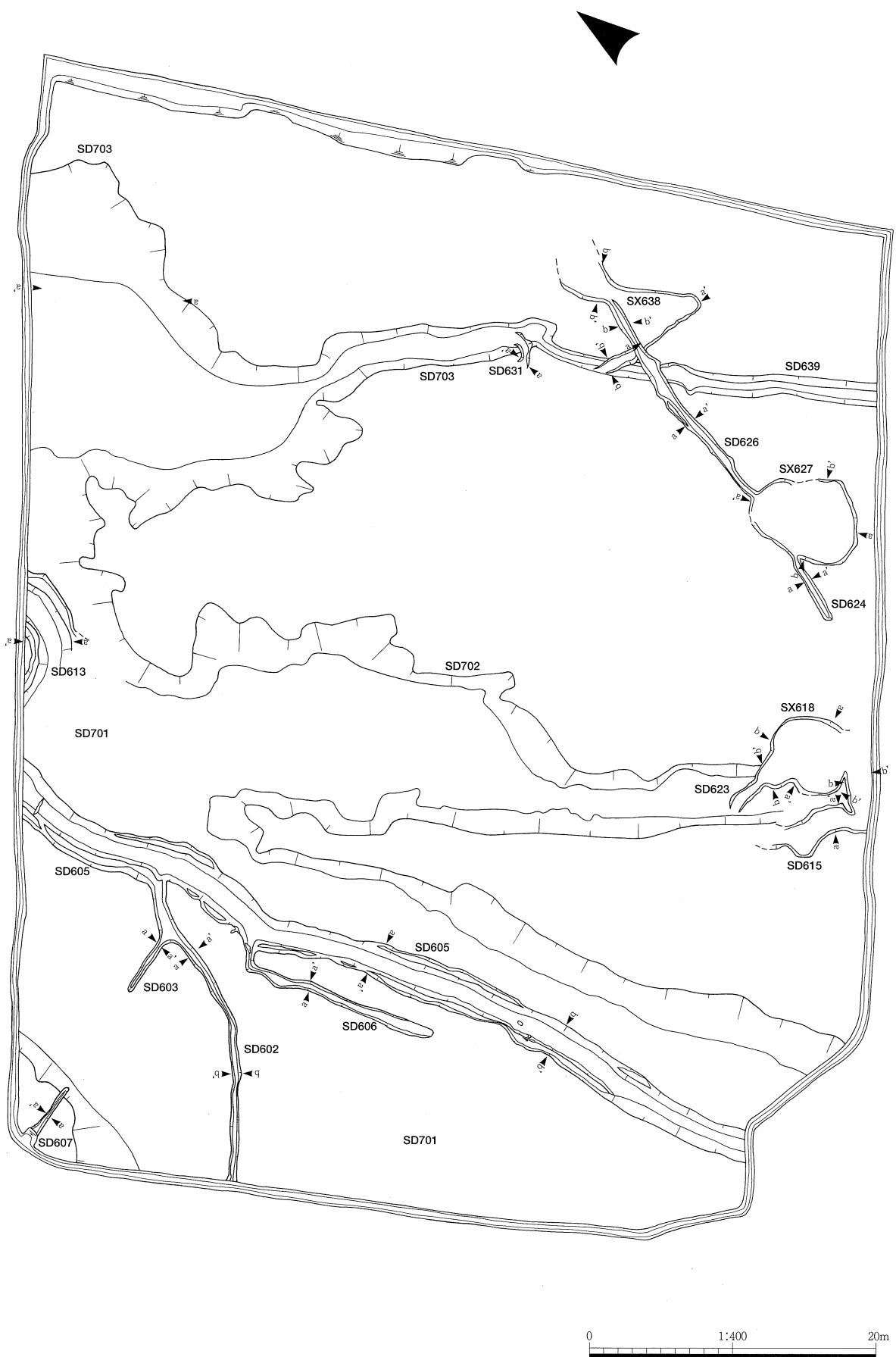
第5図 江戸遺跡 A地区 繩文・弥生時代遺構全体図 (1:500)



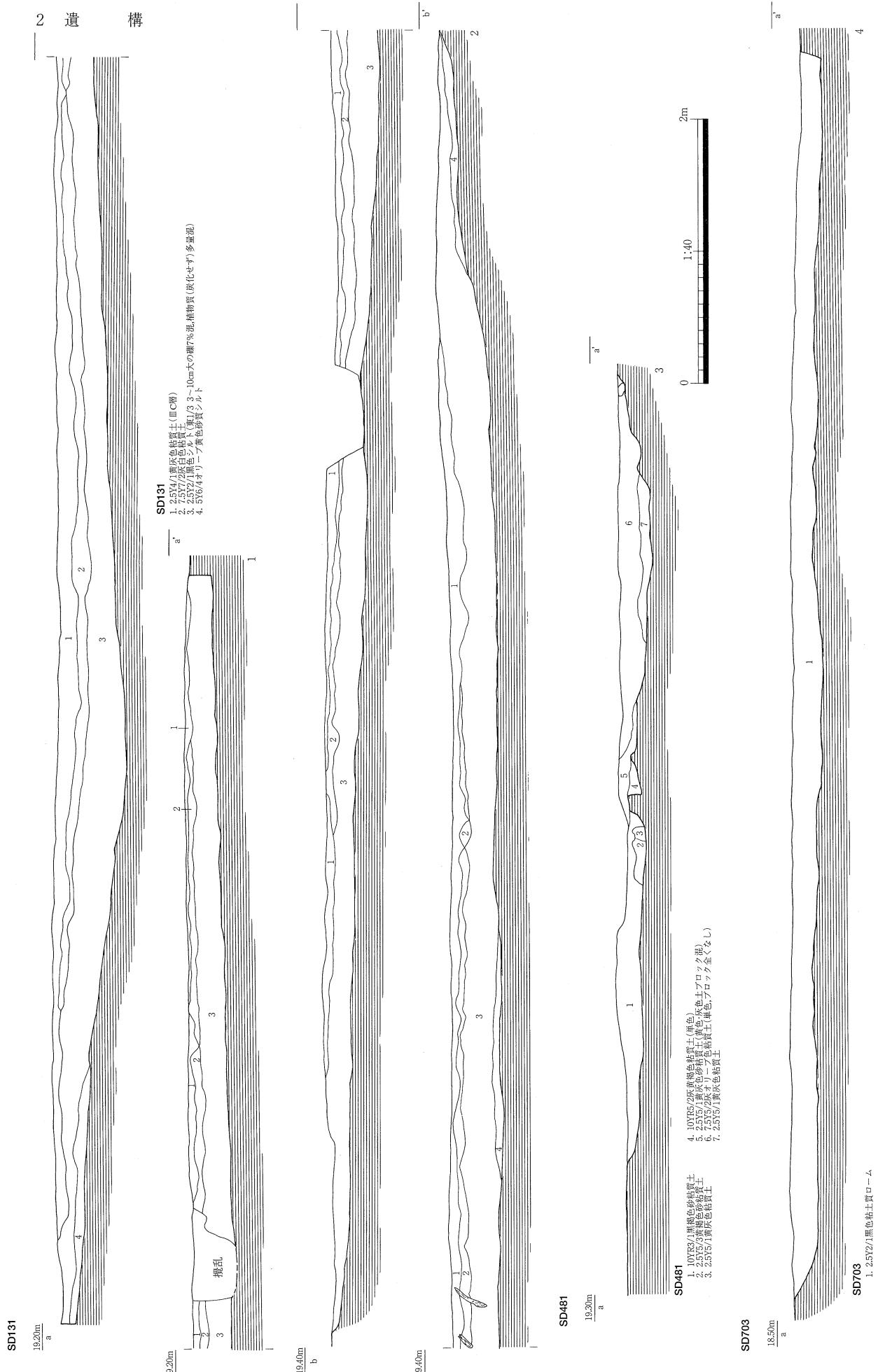
第6図 江尻遺跡 B1地区 繩文・弥生時代遺構全体図 (1:400)



第7図 江尻遺跡 B 2地区 繩文・弥生時代・中世遺構全体図 (1:200)

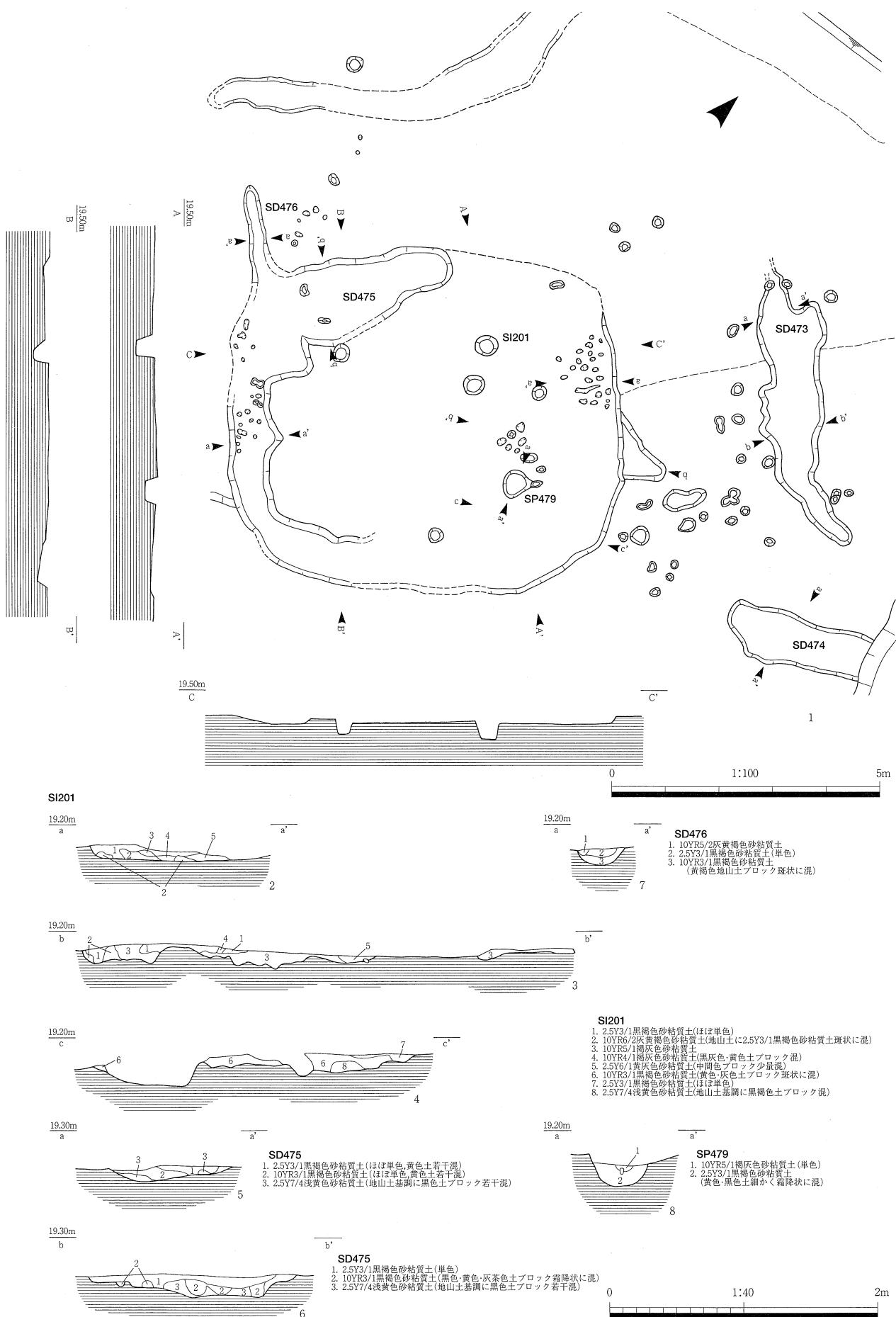


第8図 江尻遺跡 C地区 繩文・弥生時代遺構全体図 (1:400)



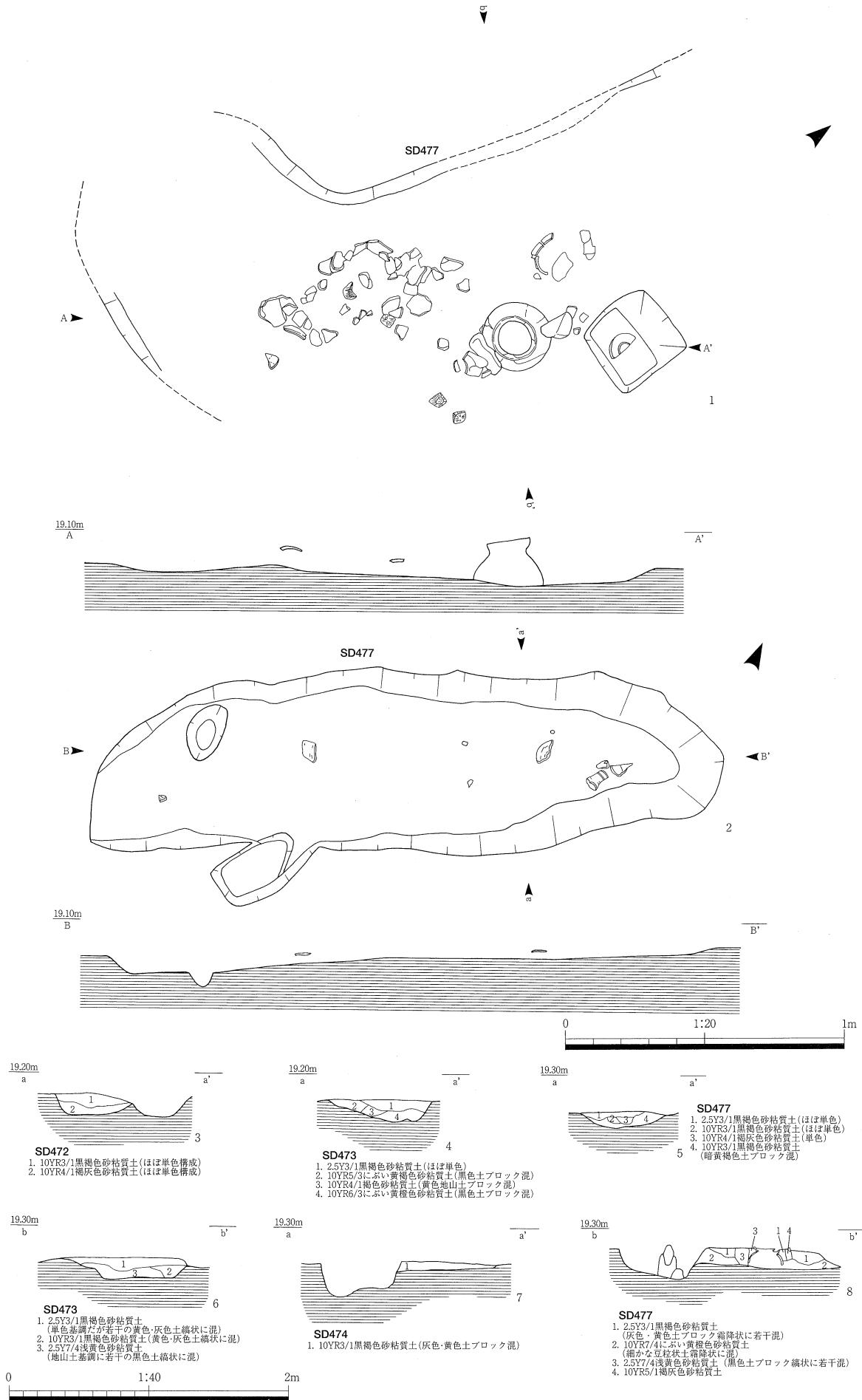
第9図 江尻遺跡 A～C地区 繩文時代遺構実測図 (1:40)

1・2. SD131 3. SD481 4. SD703



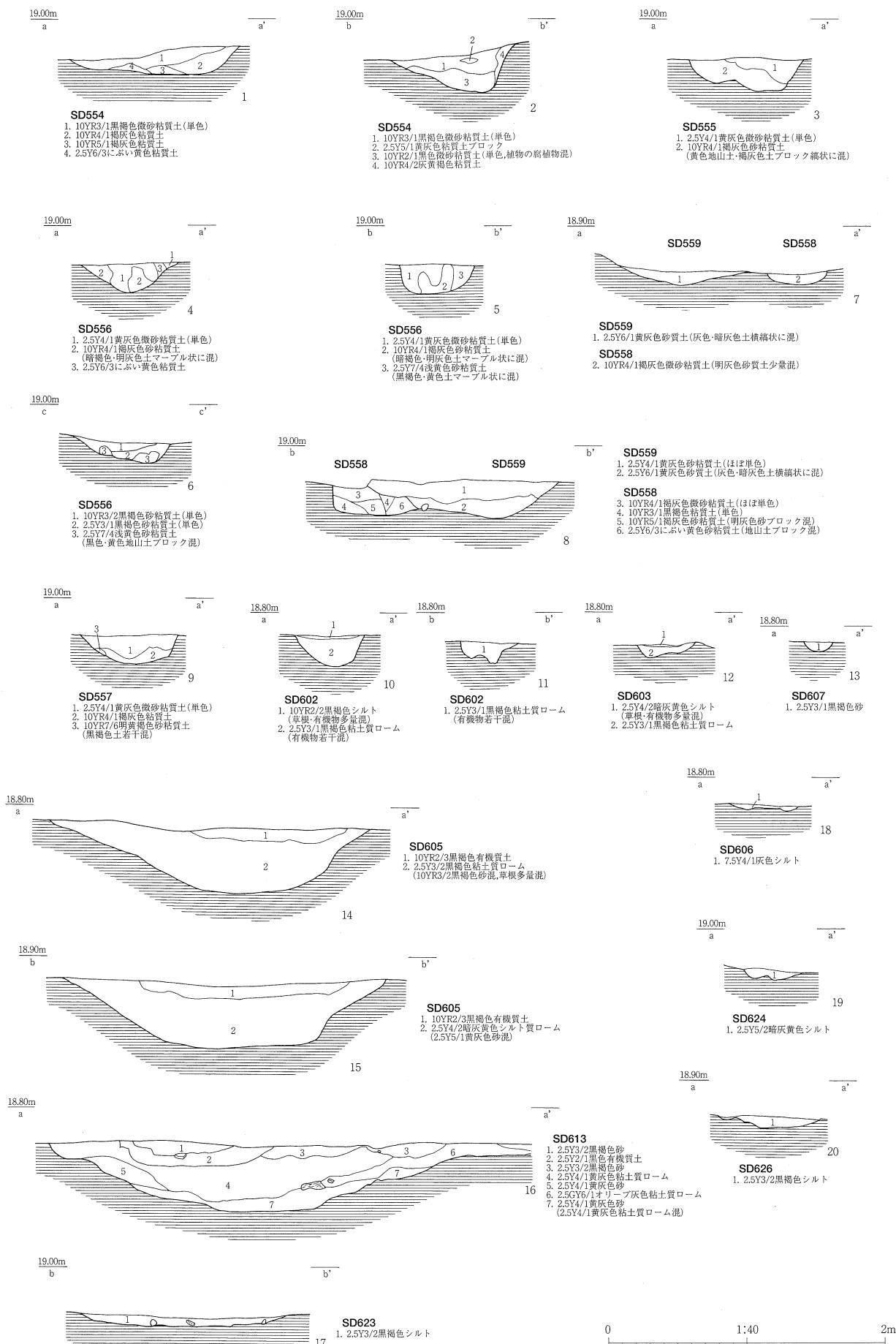
第10図 江尻遺跡 B1地区 弥生時代遺構実測図 (1(1:100), 2~8(1:40))

1~4. SI201 5~6. SD475 7. SD476 8. SP479



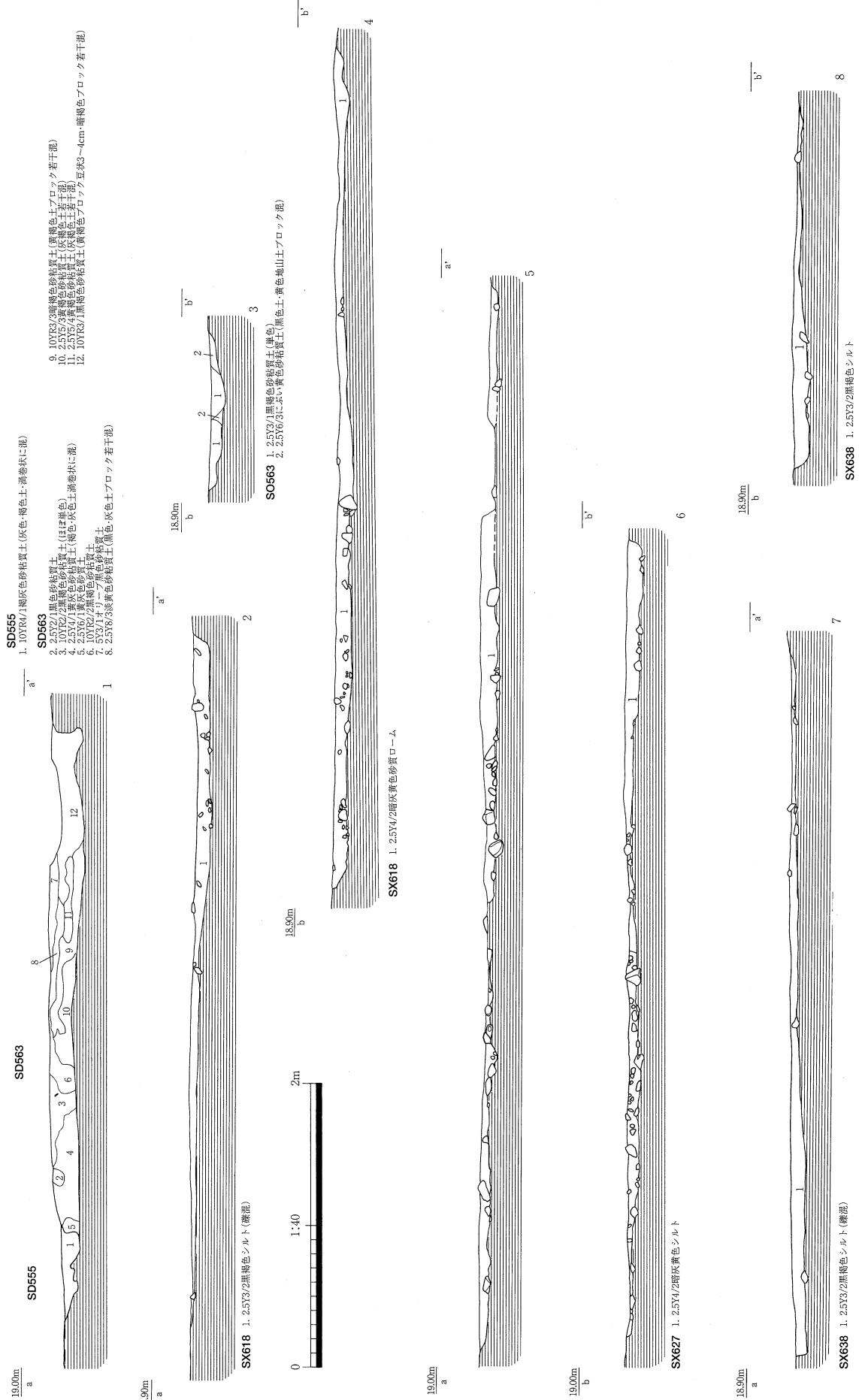
第11図 江尻遺跡 B1地区 弥生時代遺構実測図 (1・2(1:20), 3~8(1:40))

1・2・5・8. SD477 3. SD472 4・6. SD473 7. SD474



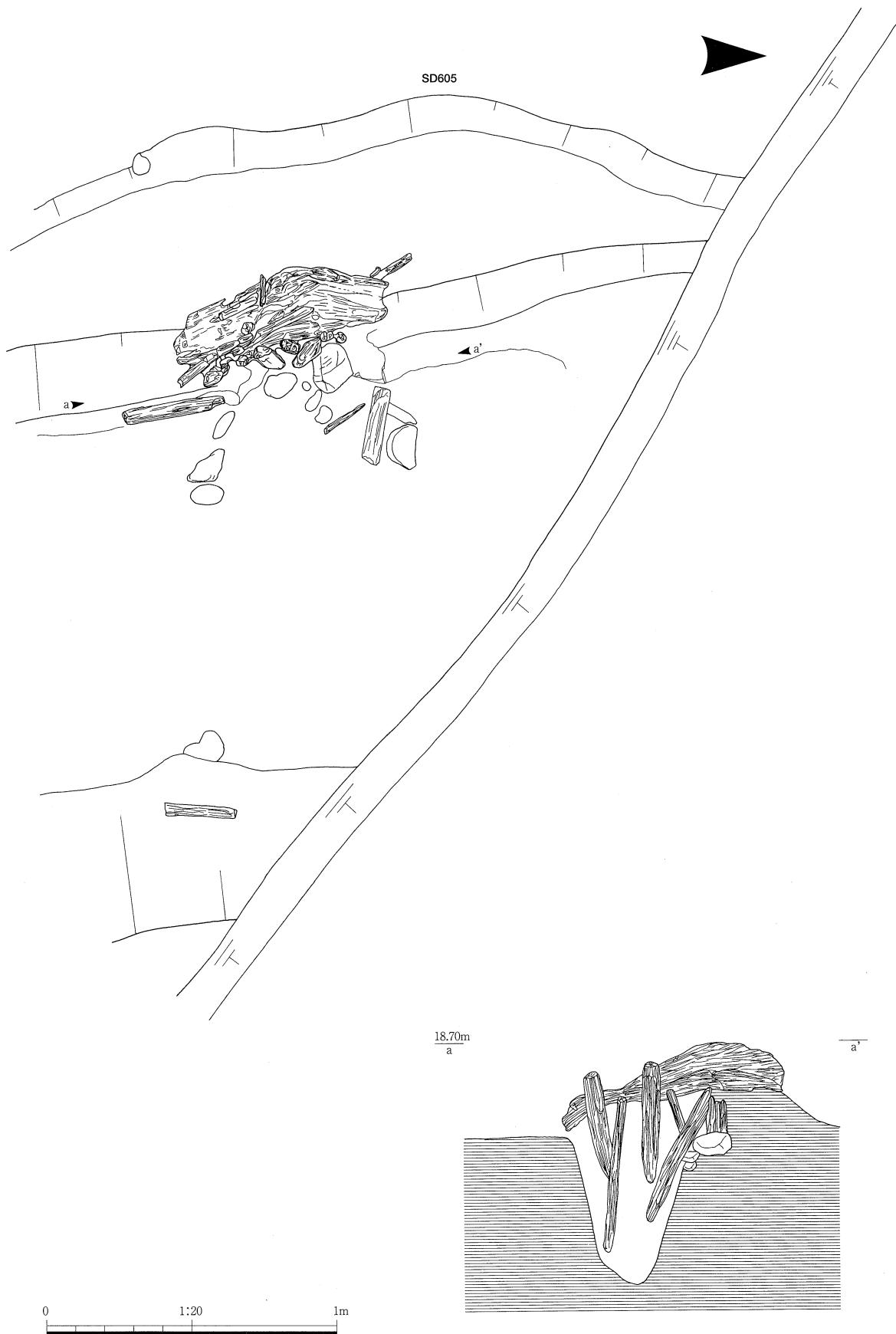
第12図 江戸遺跡 B 2・C 地区 弥生時代遺構実測図 (1:40)

1・2. SD554 3. SD555 4・6. SD556 7・8. SD558・SD559 9. SD557 10・11. SD602 12. SD603  
 13. SD607 14・15. SD605 16. SD613 17. SD623 18. SD606 19. SD624 20. SD626

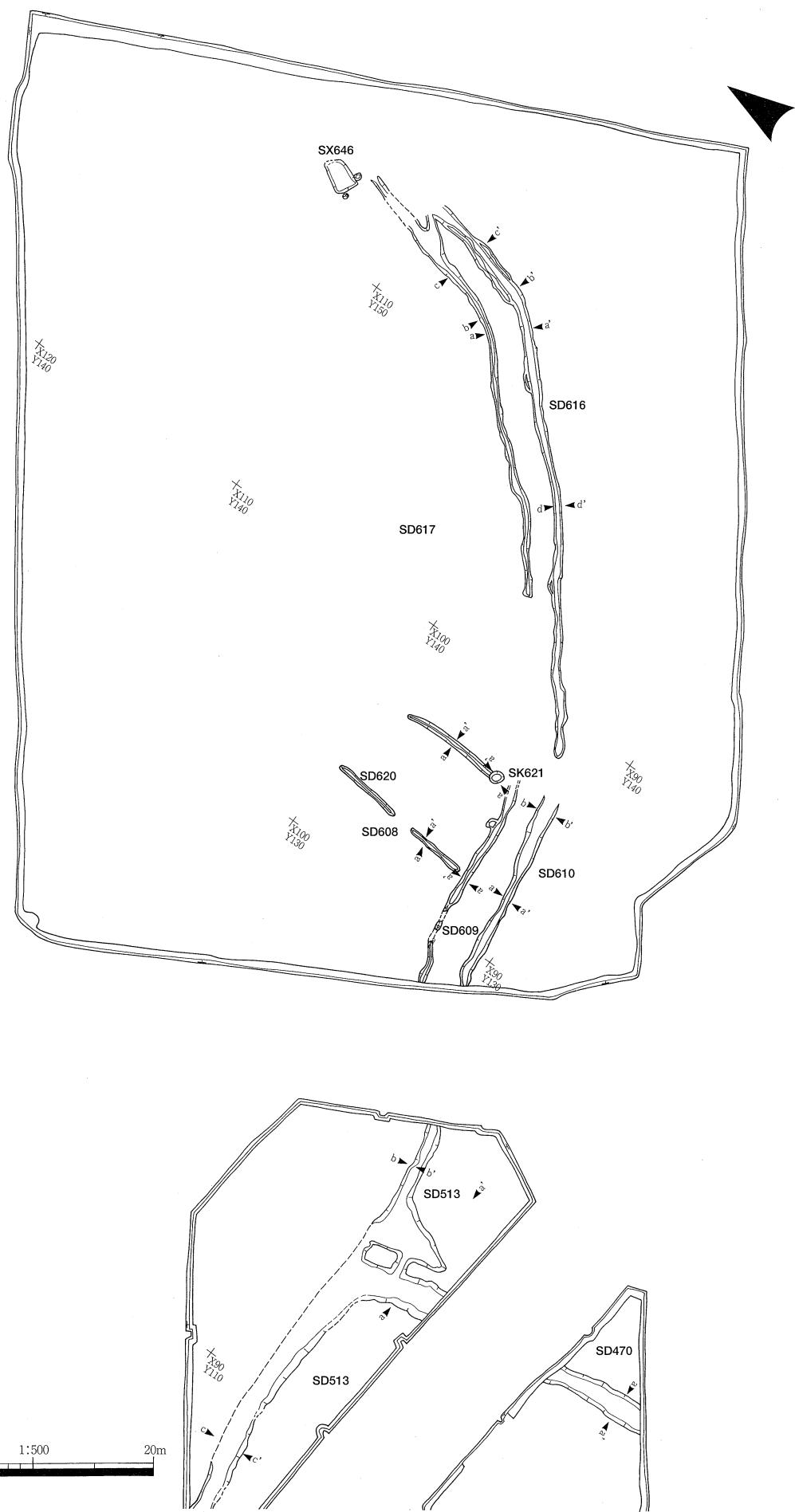


第13図 江尻遺跡 B 2・C 地区 弥生時代遺構実測図 (1:40)

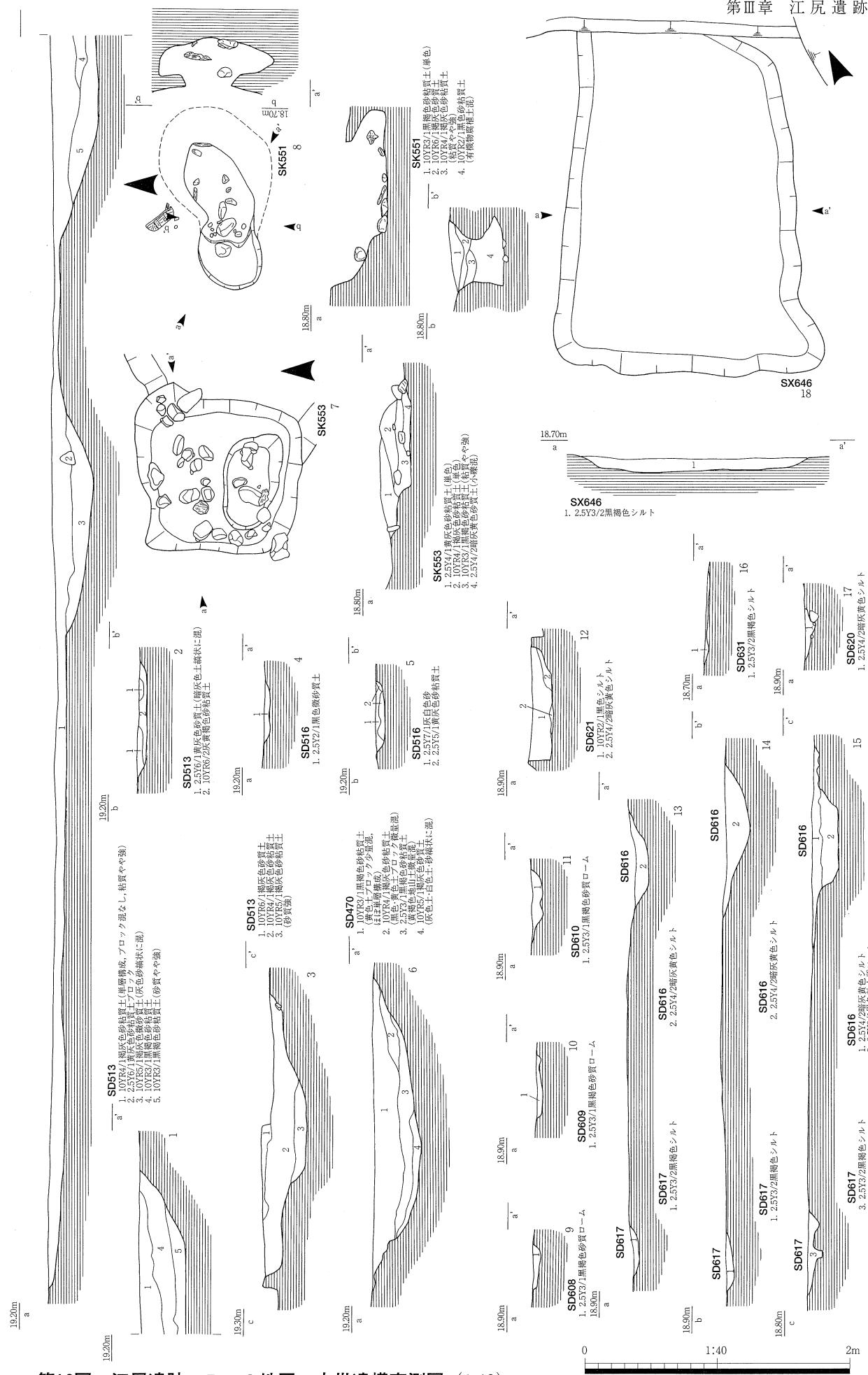
1. SD555・SO563 2・4. SX618 3. SO563 5・6. SX627 7・8. SX638

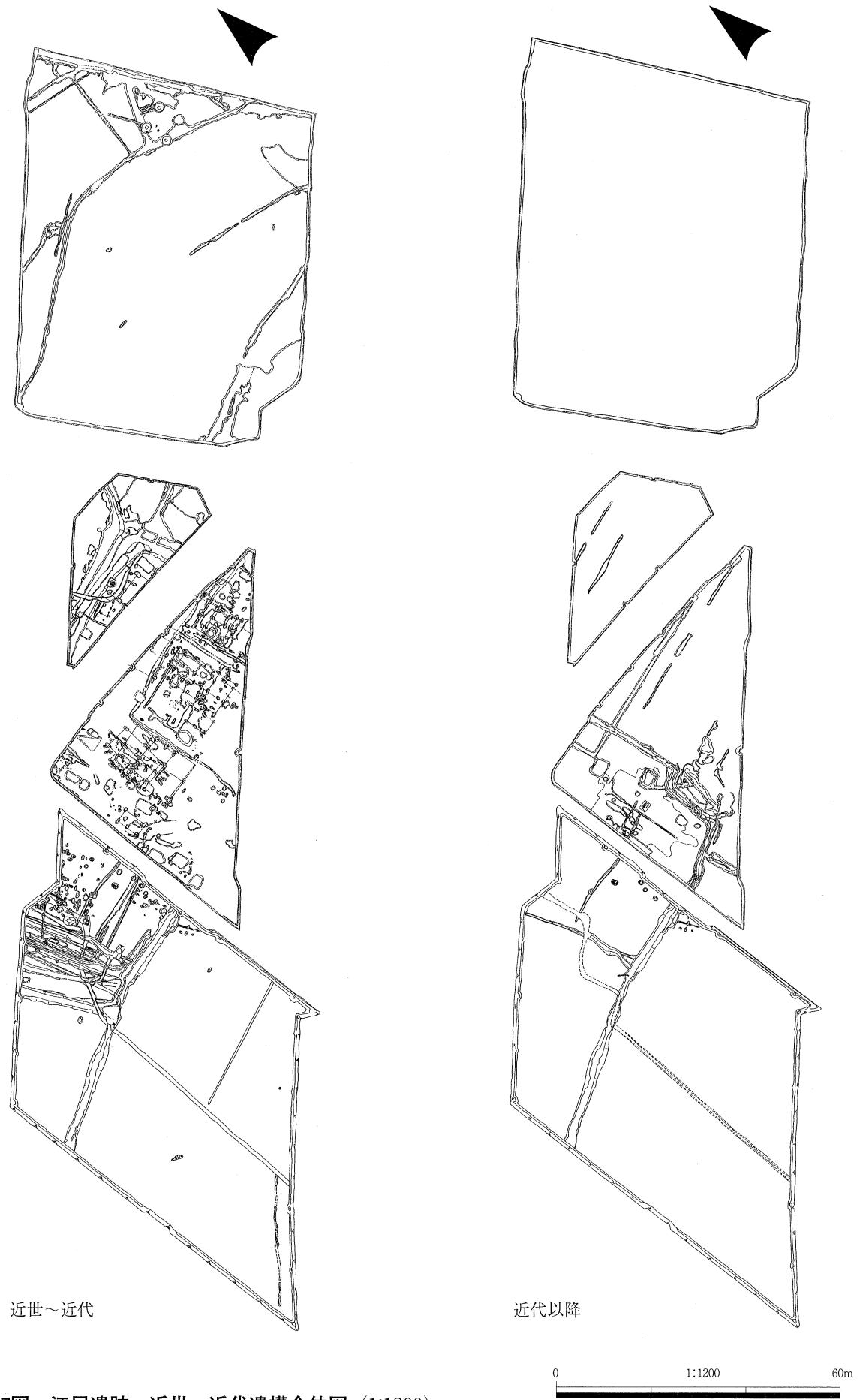


第14図 江尻遺跡 C地区 弥生時代遺構実測図 (1:20)  
SD605

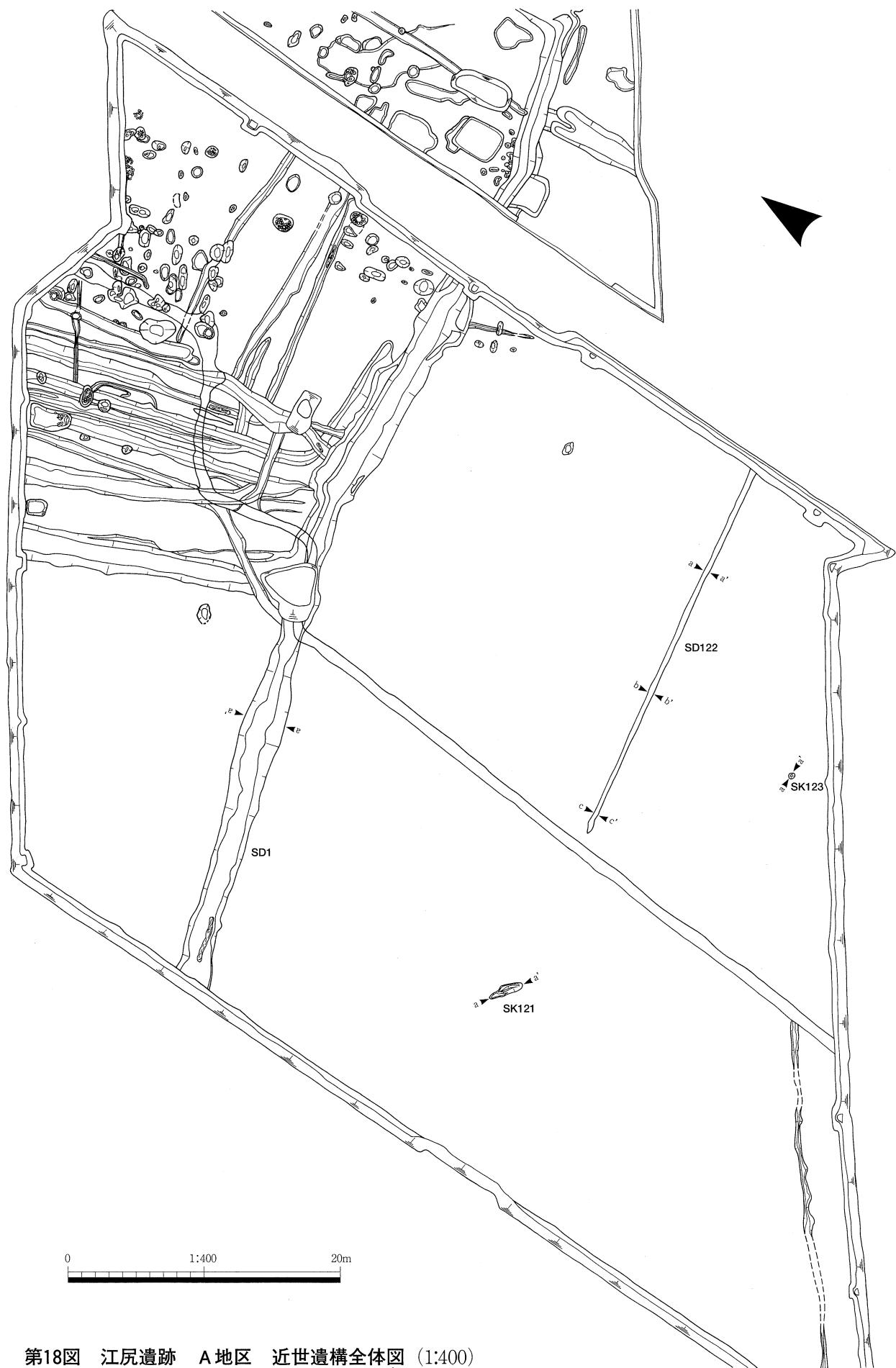


第15図 江尻遺跡 B・C 地区 中世遺構全体図 (1:500)





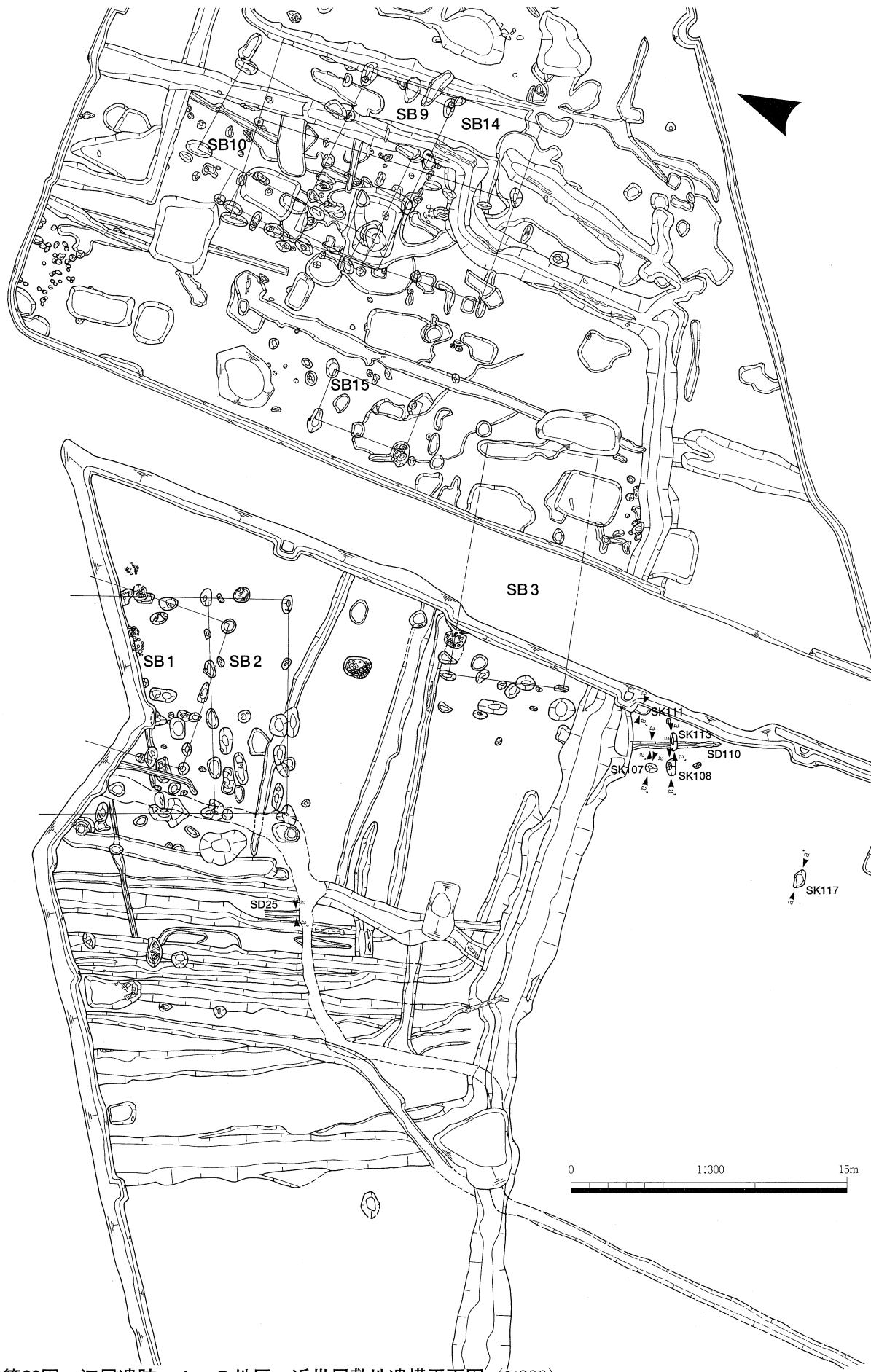
第17図 江尻遺跡 近世・近代遺構全体図 (1:1200)



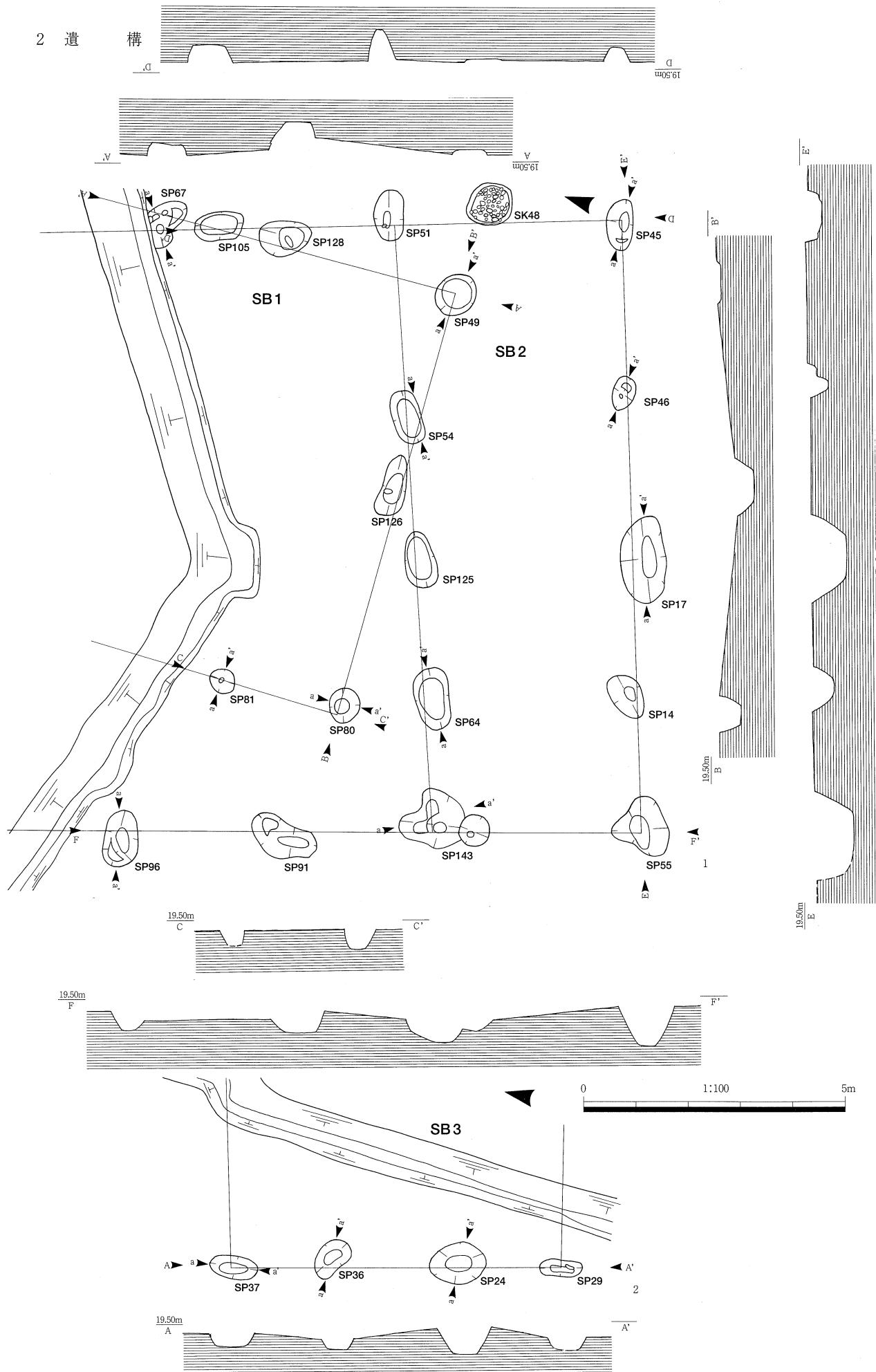
第18図 江尻遺跡 A地区 近世遺構全体図 (1:400)



第19図 江尻遺跡 A地区 近世遺構全体図 (1:200)

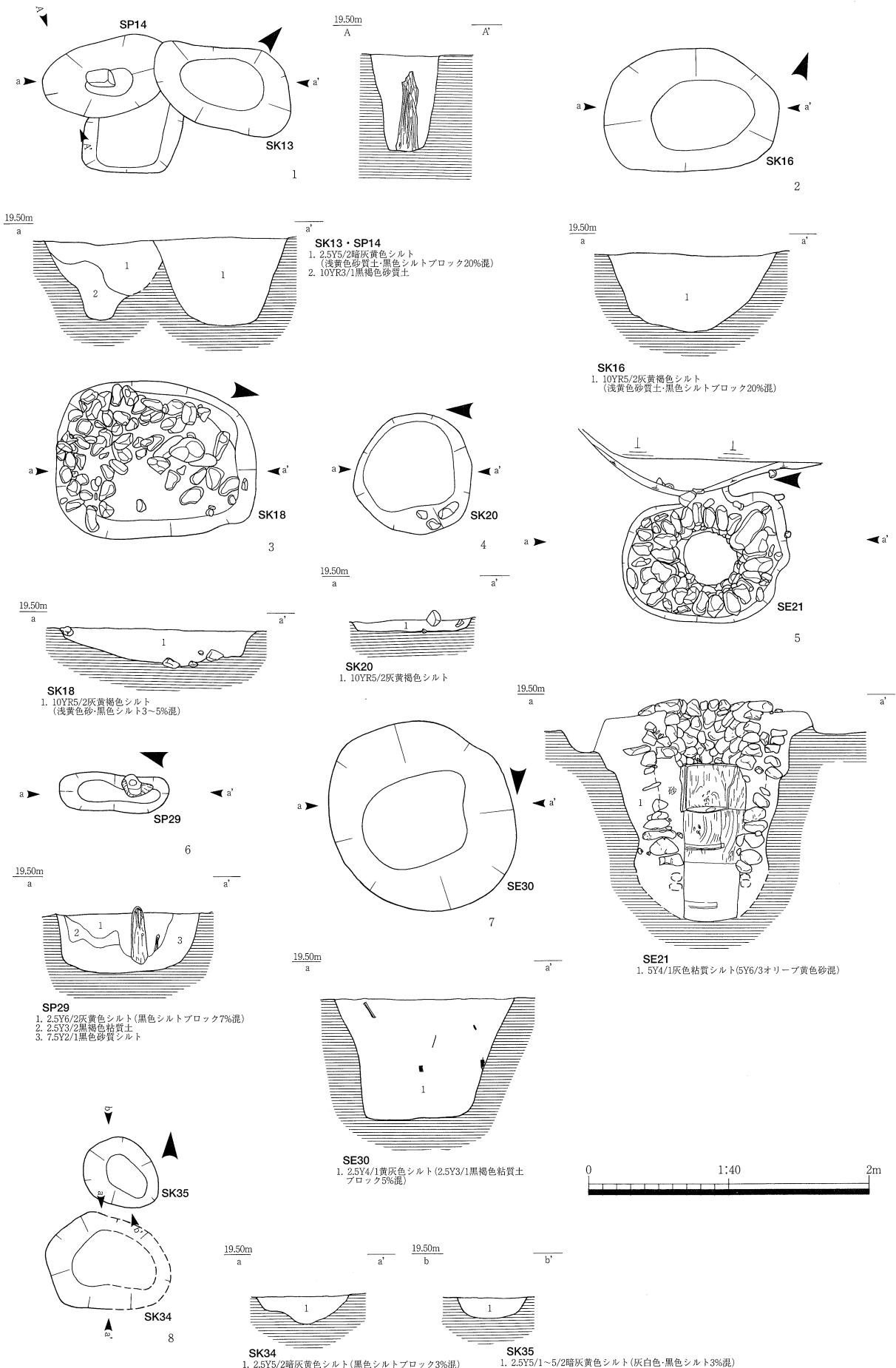


第20図 江尻遺跡 A・B地区 近世屋敷地遺構平面図 (1:300)  
SB1・SB2・SB3・SB9・SB10・SB14・SB15



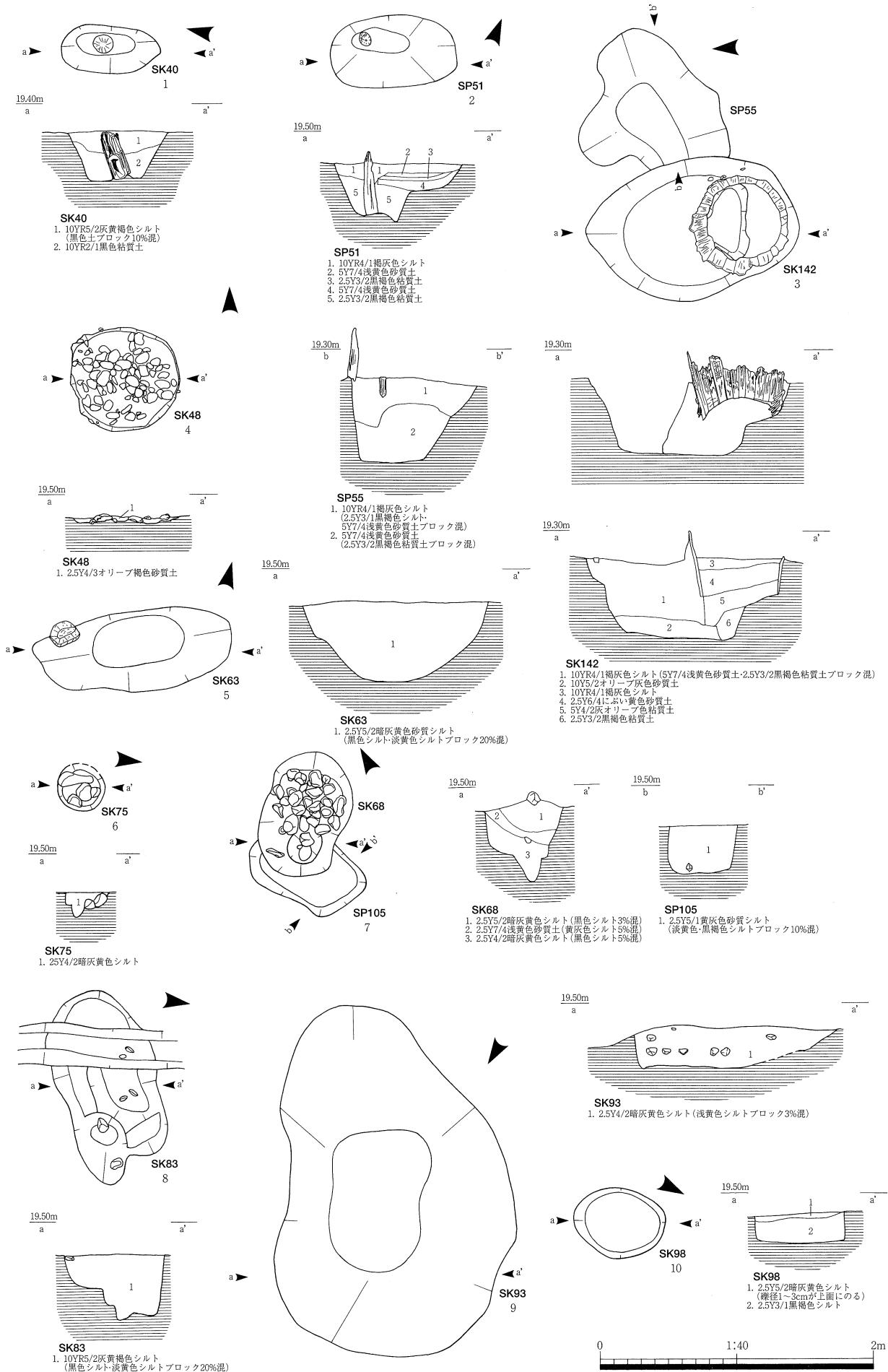
第21図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:100)

1. SB 1・SB 2 2. SB 3



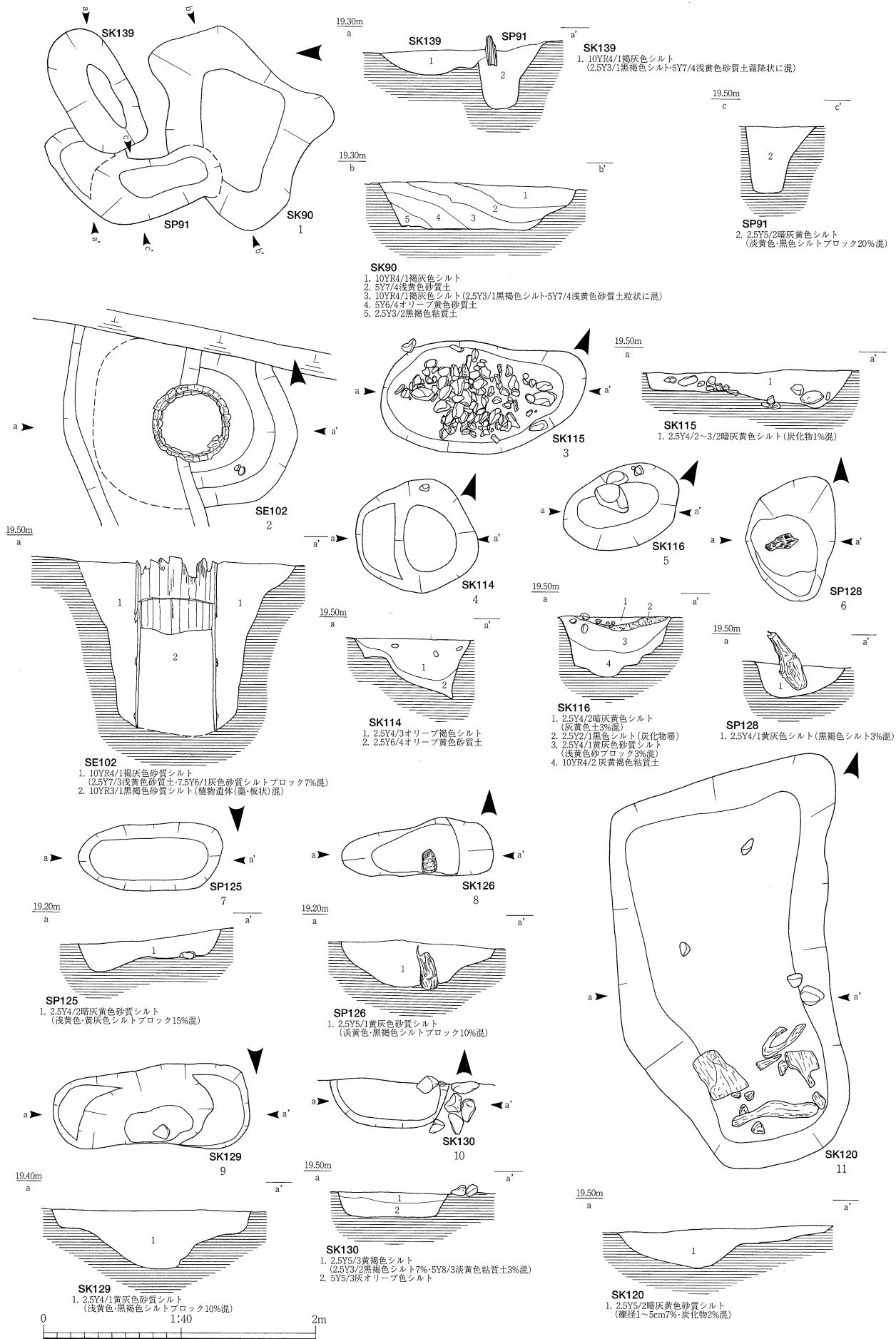
第22図 江尻遺跡 A 地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SK13 · SP14
2. SK16
3. SK18
4. SK20
5. SE21
6. SP29
7. SE30
8. SK34 · SK35



第23図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:40)

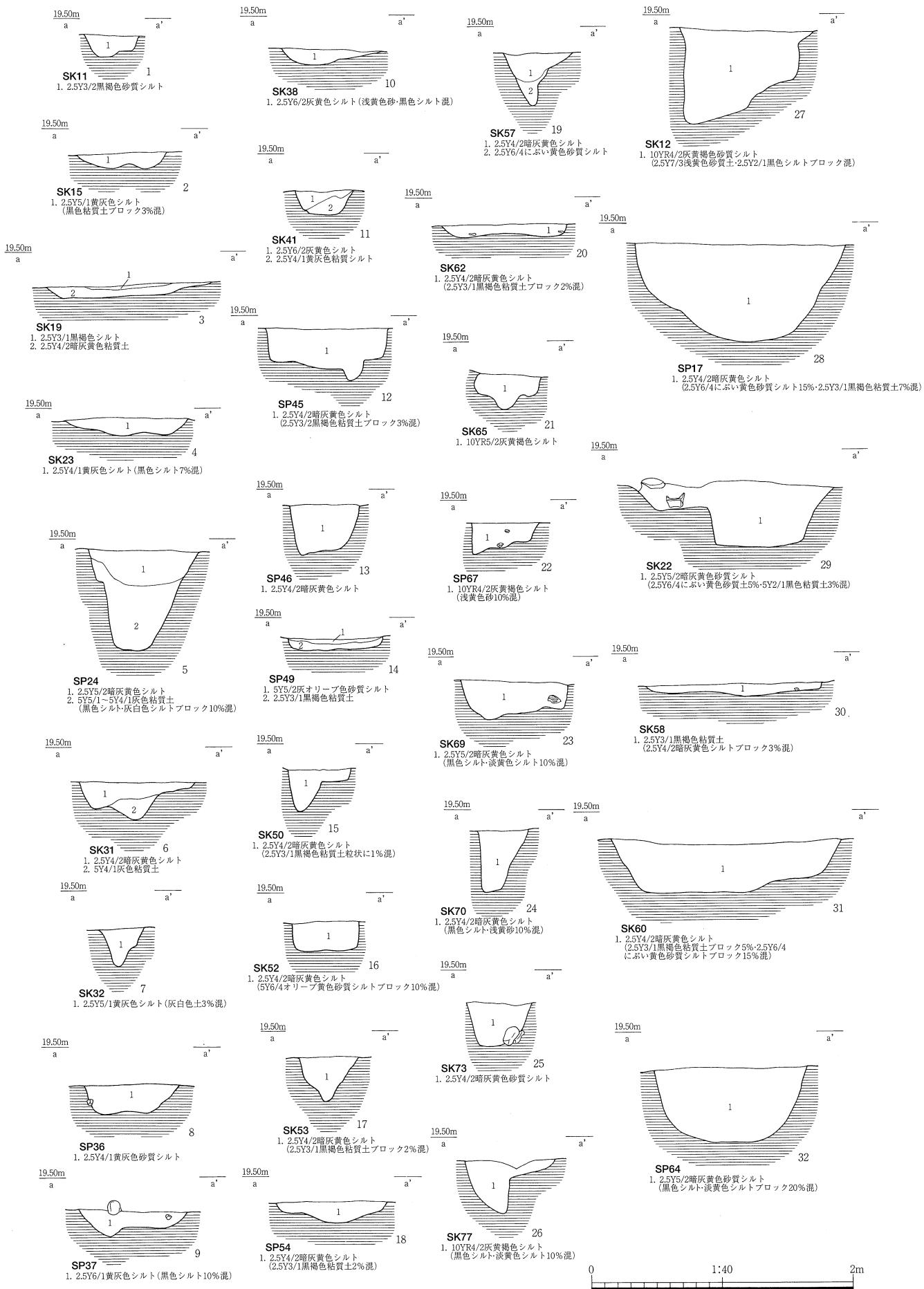
1. SK40
2. SP51
3. SP55 · SK142
4. SK48
5. SK63
6. SK75
7. SK68 · SP105
8. SK83
9. SK93
10. SK98



第24図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:40)

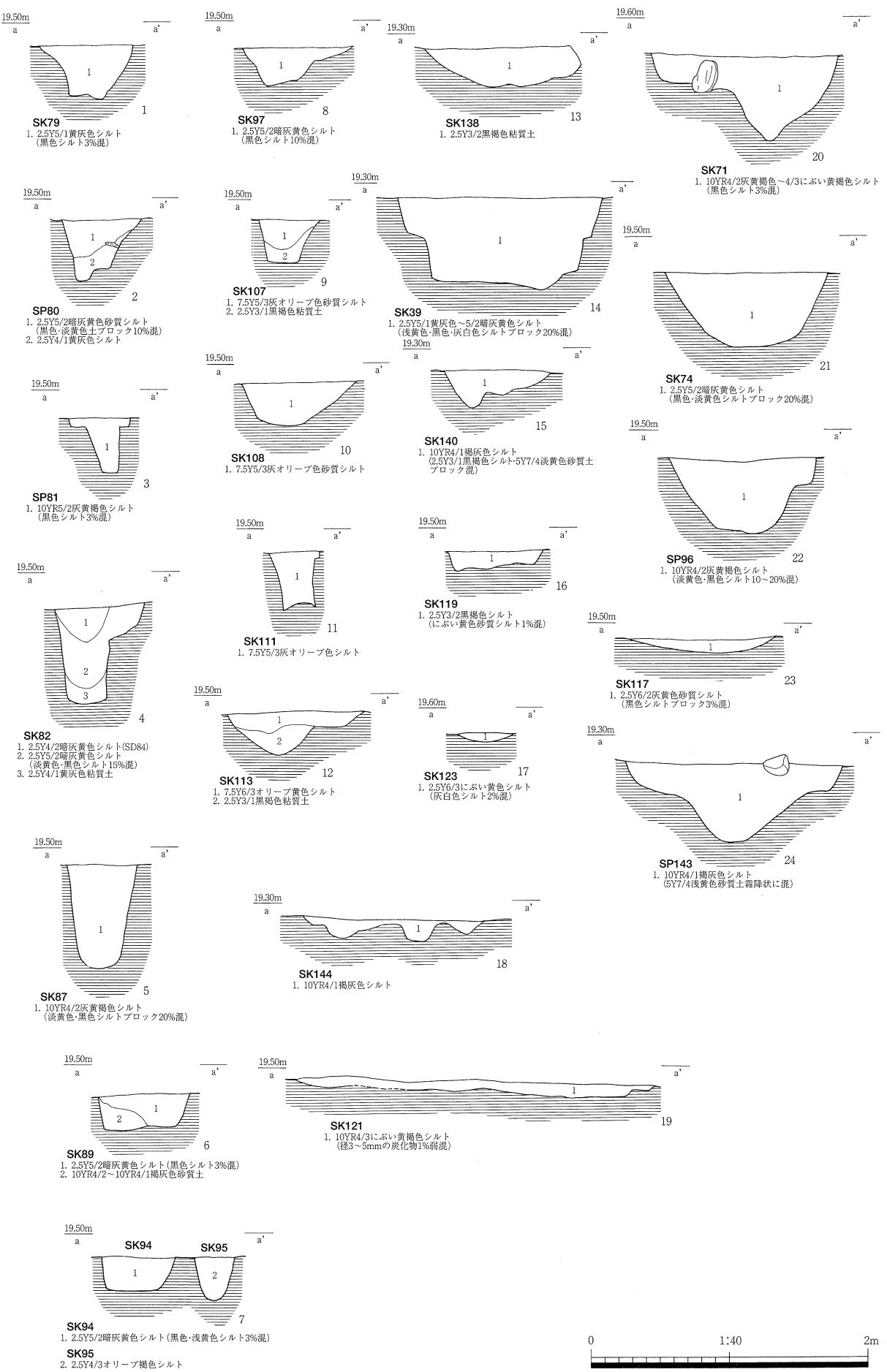
1. SK90 · SP91 · SK139
2. SE102
3. SK115
4. SK114
5. SK116
6. SP128
7. SP125
8. SP126
9. SK129
10. SK130
11. SK120

## 2 遺構



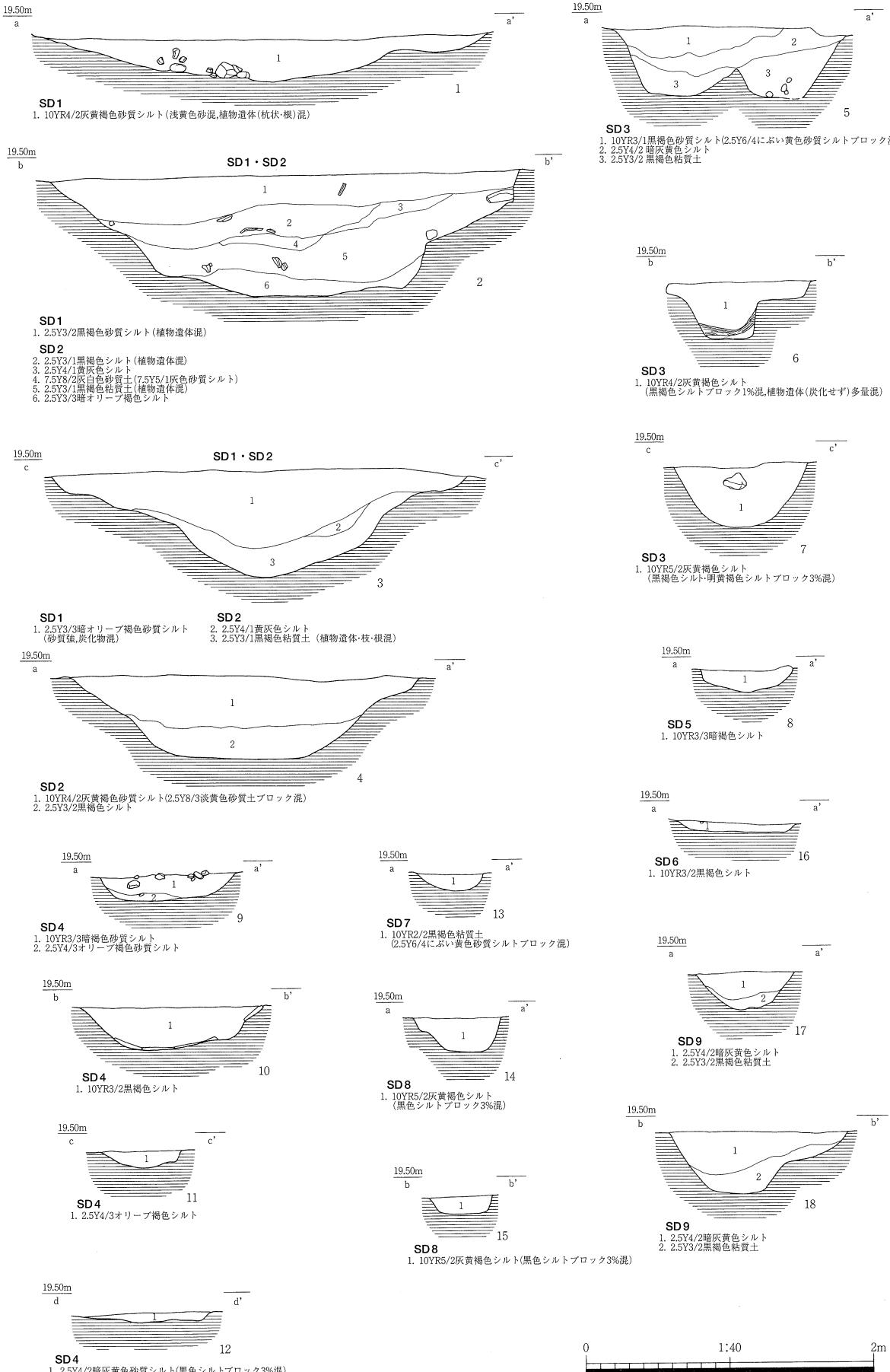
第25図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SK11 2. SK15 3. SK19 4. SP24 5. SK31 6. SK32 7. SK33 8. SP36 9. SP37 10. SK38
11. SK41 12. SP45 13. SP46 14. SP49 15. SK50 16. SK52 17. SK53 18. SP54 19. SK57 20. SK62
21. SK65 22. SP67 23. SK69 24. SK70 25. SK73 26. SK77 27. SK12 28. SP17 29. SK22 30. SK58
31. SK60 32. SP64



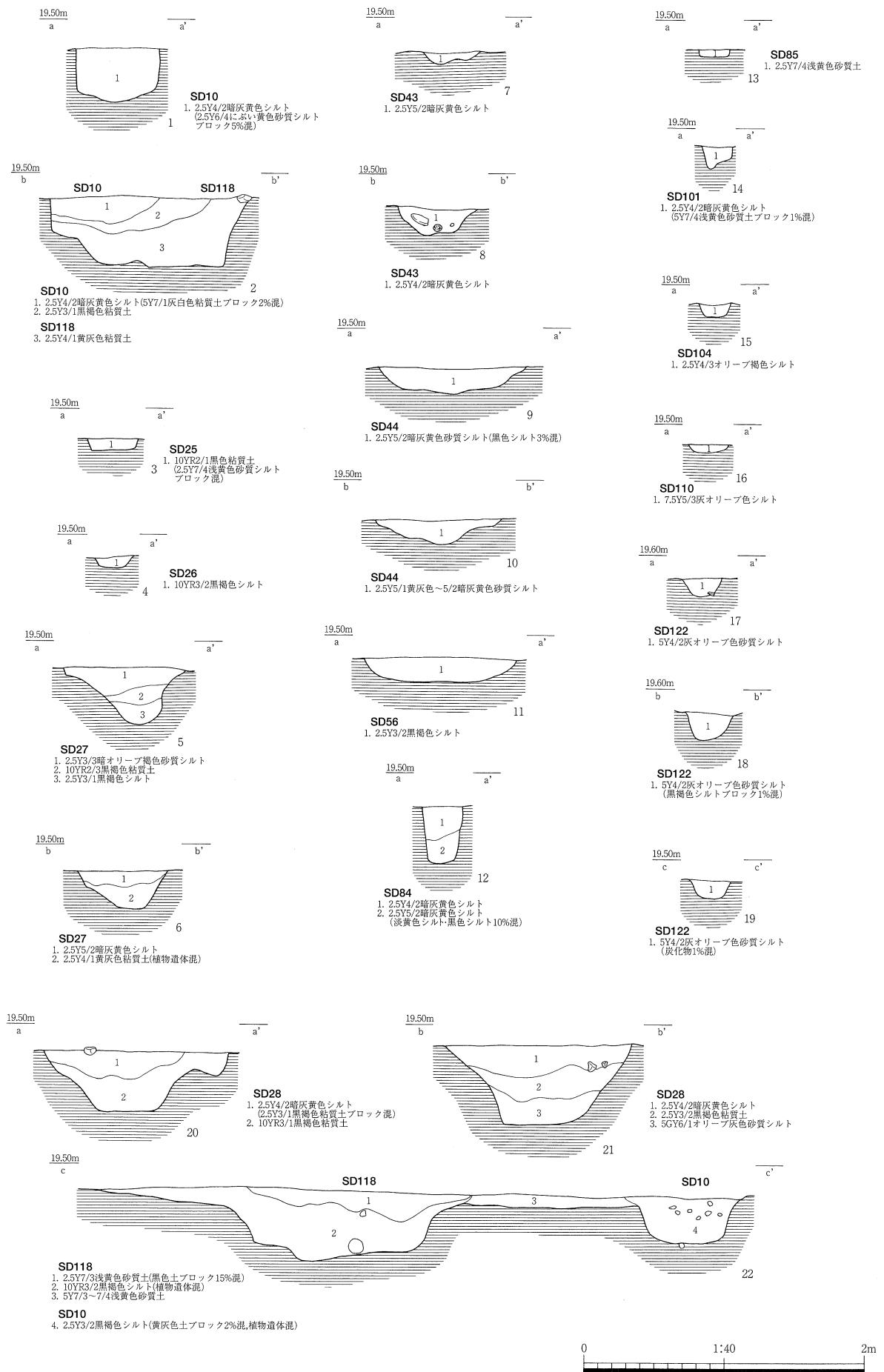
第26図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SK79
2. SP80
3. SP81
4. SK82
5. SK87
6. SK89
7. SK94 · SK95
8. SK97
9. SK107
10. SK108
11. SK111
12. SK113
13. SK138
14. SK39
15. SK140
16. SK119
17. SK123
18. SK144
19. SK121
20. SK71
21. SK74
22. SP96
23. SK117
24. SP143



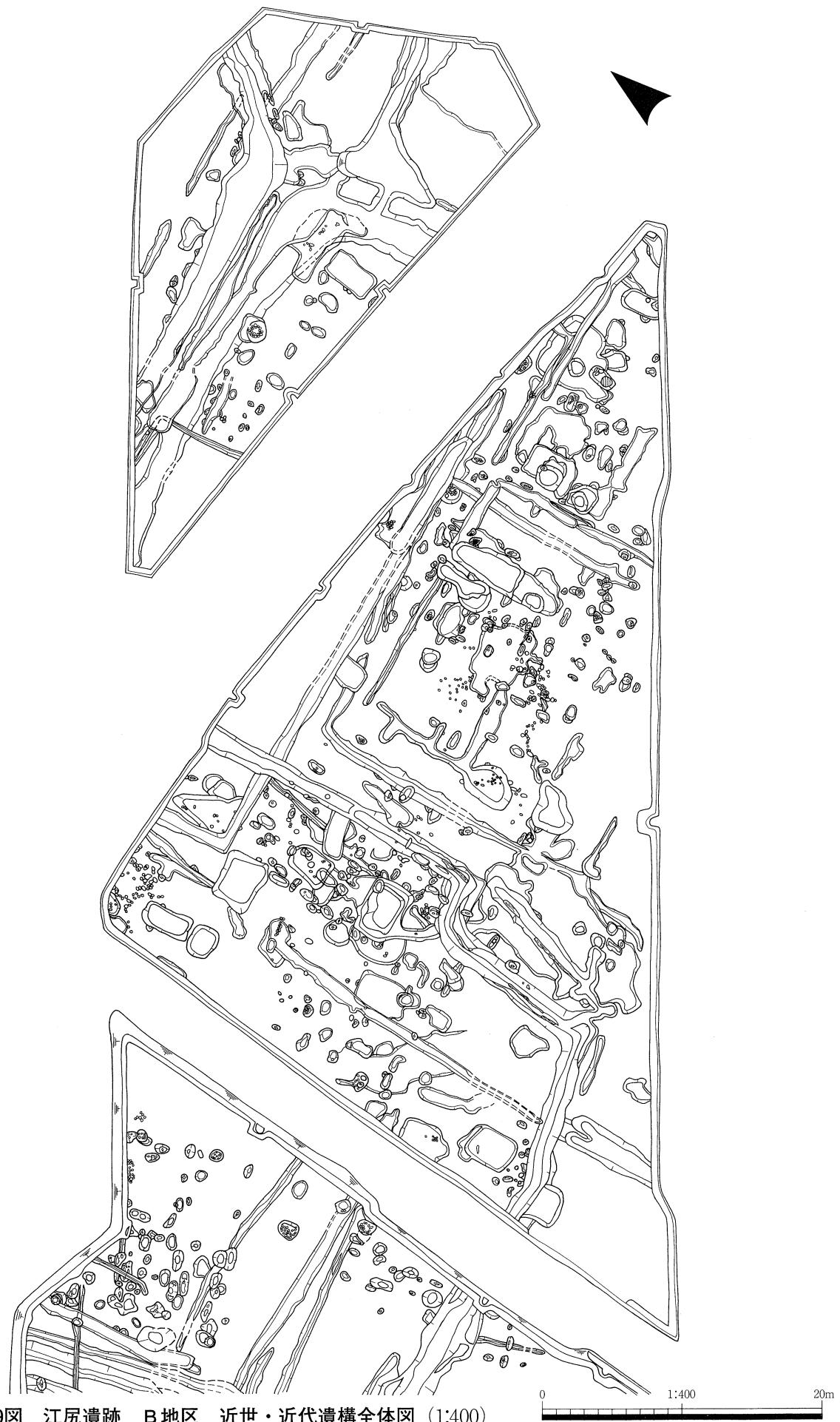
第27図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SD 1
- 2 · 3. SD 1 · SD 2
4. SD 2
- 5~7. SD 3
8. SD 5
- 9~12. SD 4
13. SD 7
- 14 · 15. SD 8
16. SD 6
- 17 · 18. SD 9



第28図 江尻遺跡 A地区 近世遺構実測図 (1:40)

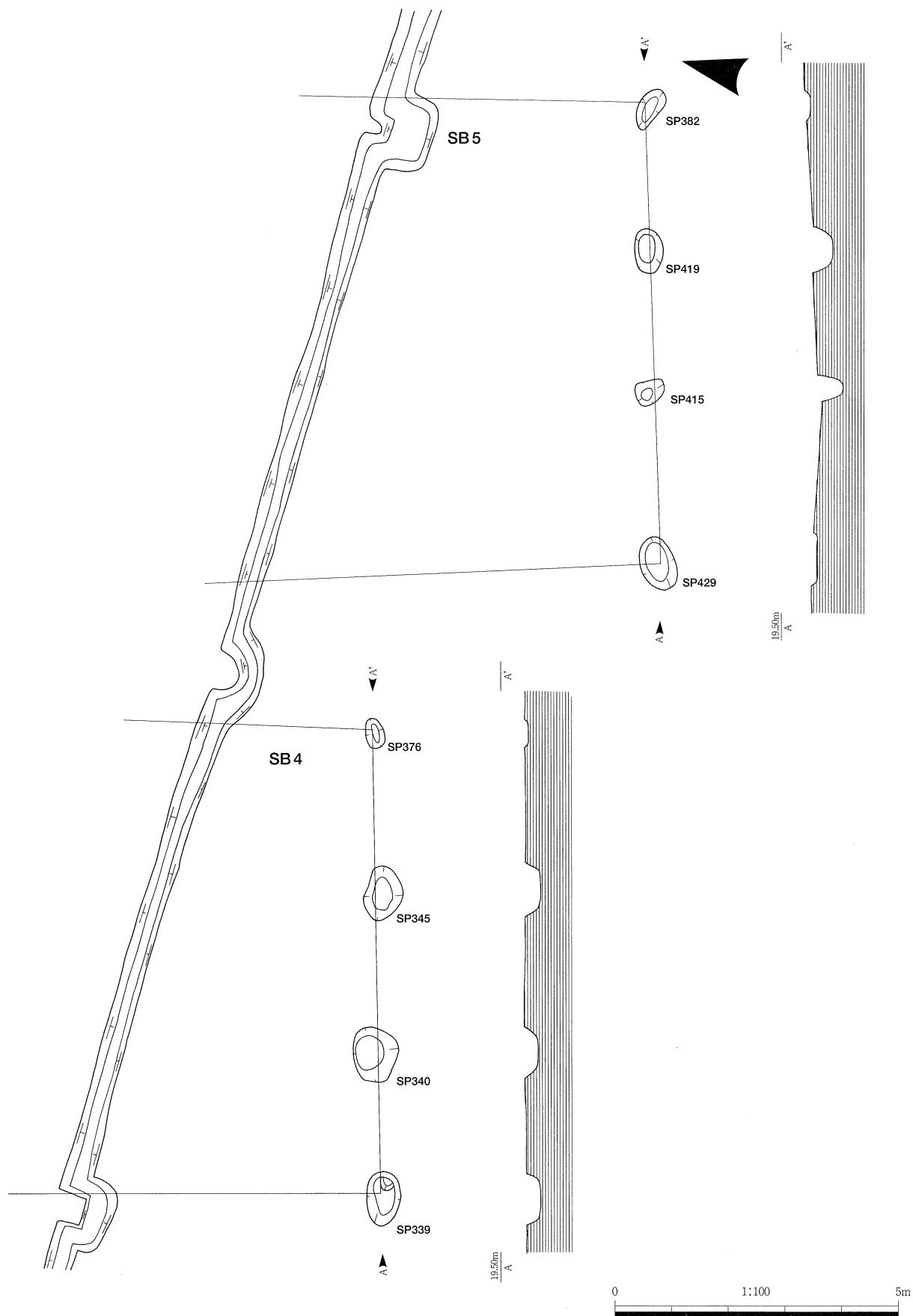
1. SD10 2・22. SD10・SD118 3. SD25 4. SD26 5・6. SD27 7・8. SD43 9・10. SD44 11. SD56
12. SD84 13. SD85 14. SD101 15. SD104 16. SD110 17～19. SD122 20・21. SD28



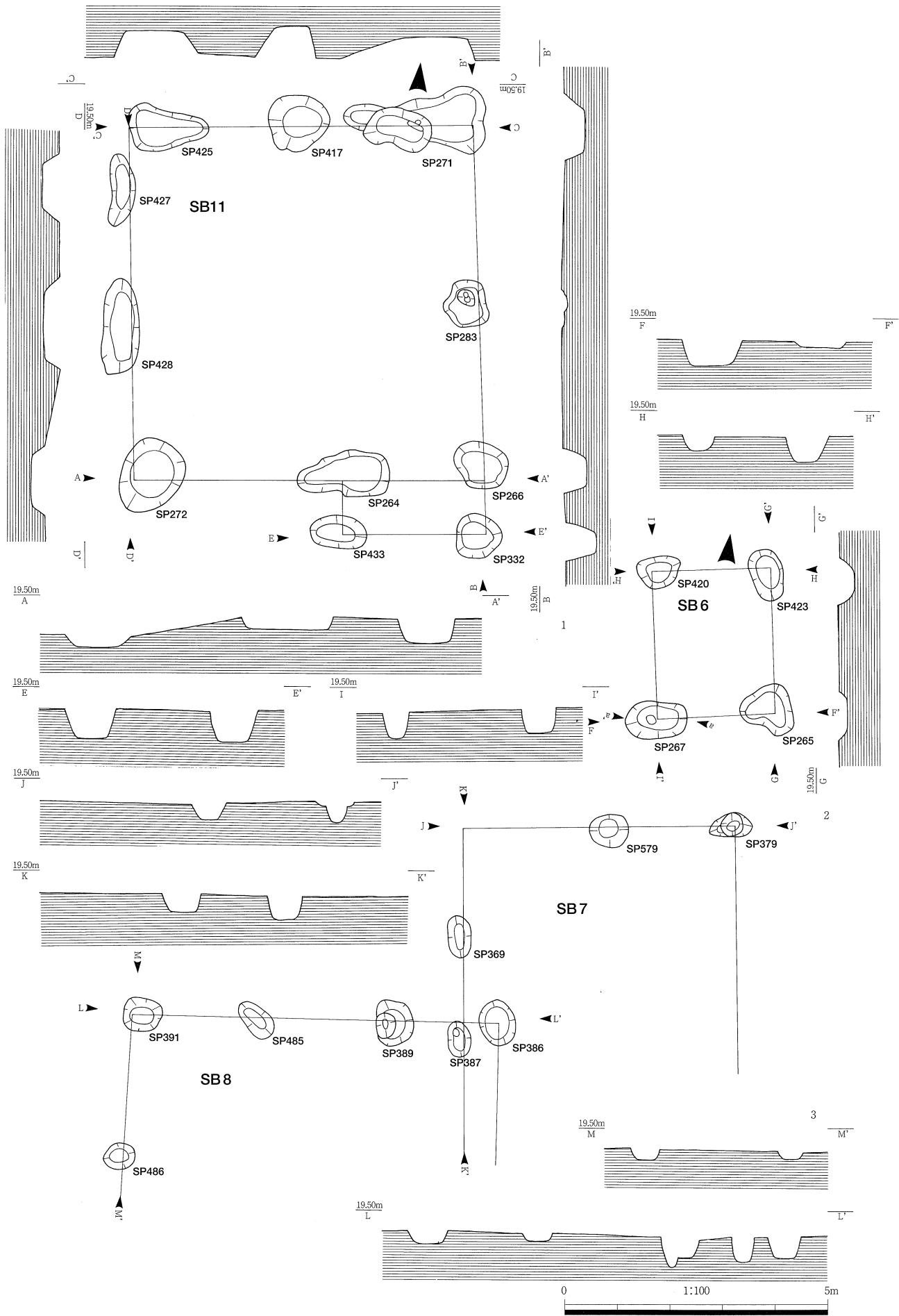
第29図 江戻遺跡 B地区 近世・近代遺構全体図 (1:400)



第30図 江尻遺跡 B1地区 近世屋敷地遺構全体図 (1:300)



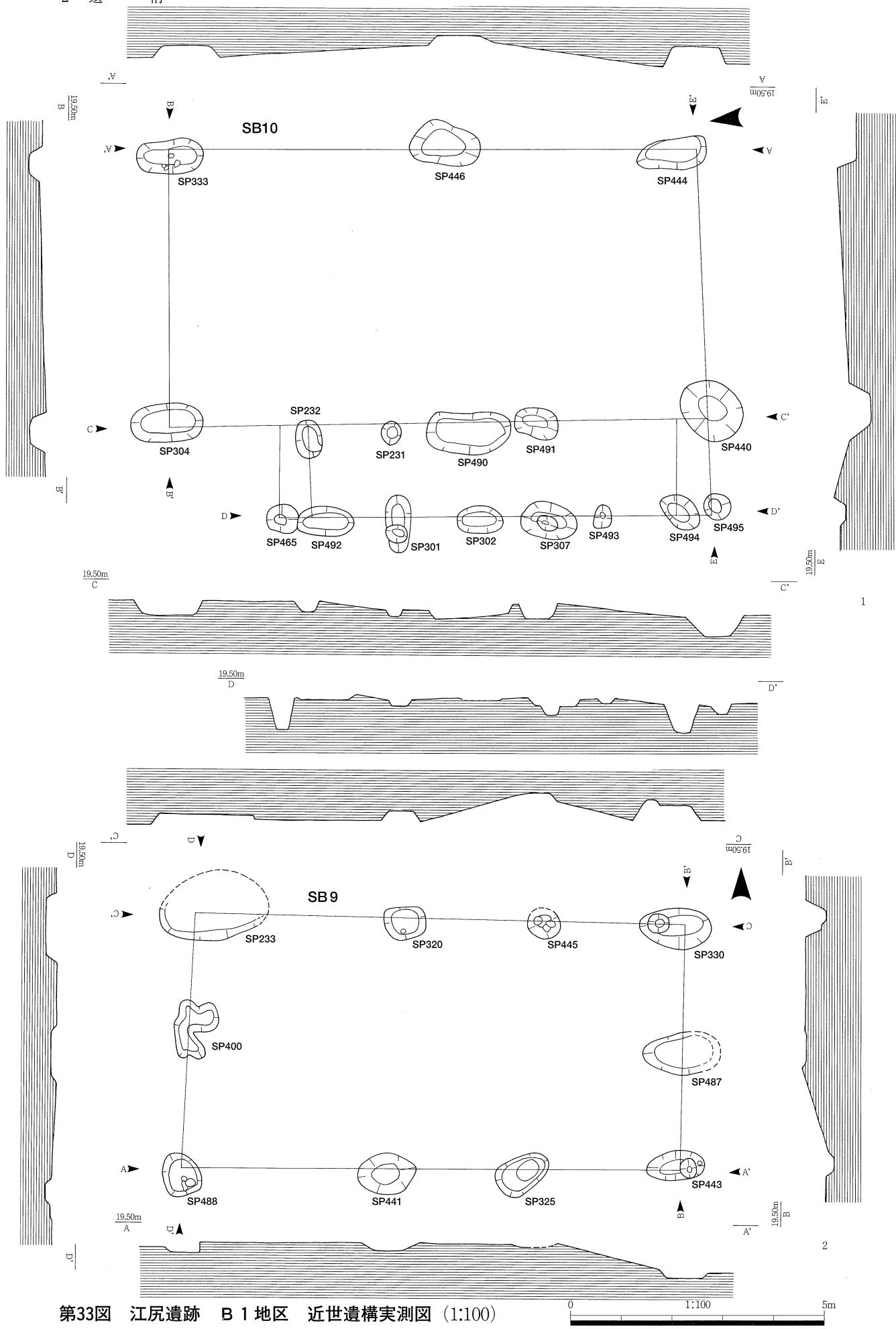
第31図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:100)  
SB4・SB5



第32図 江尻遺跡 B 1 地区 近世遺構実測図 (1:100)

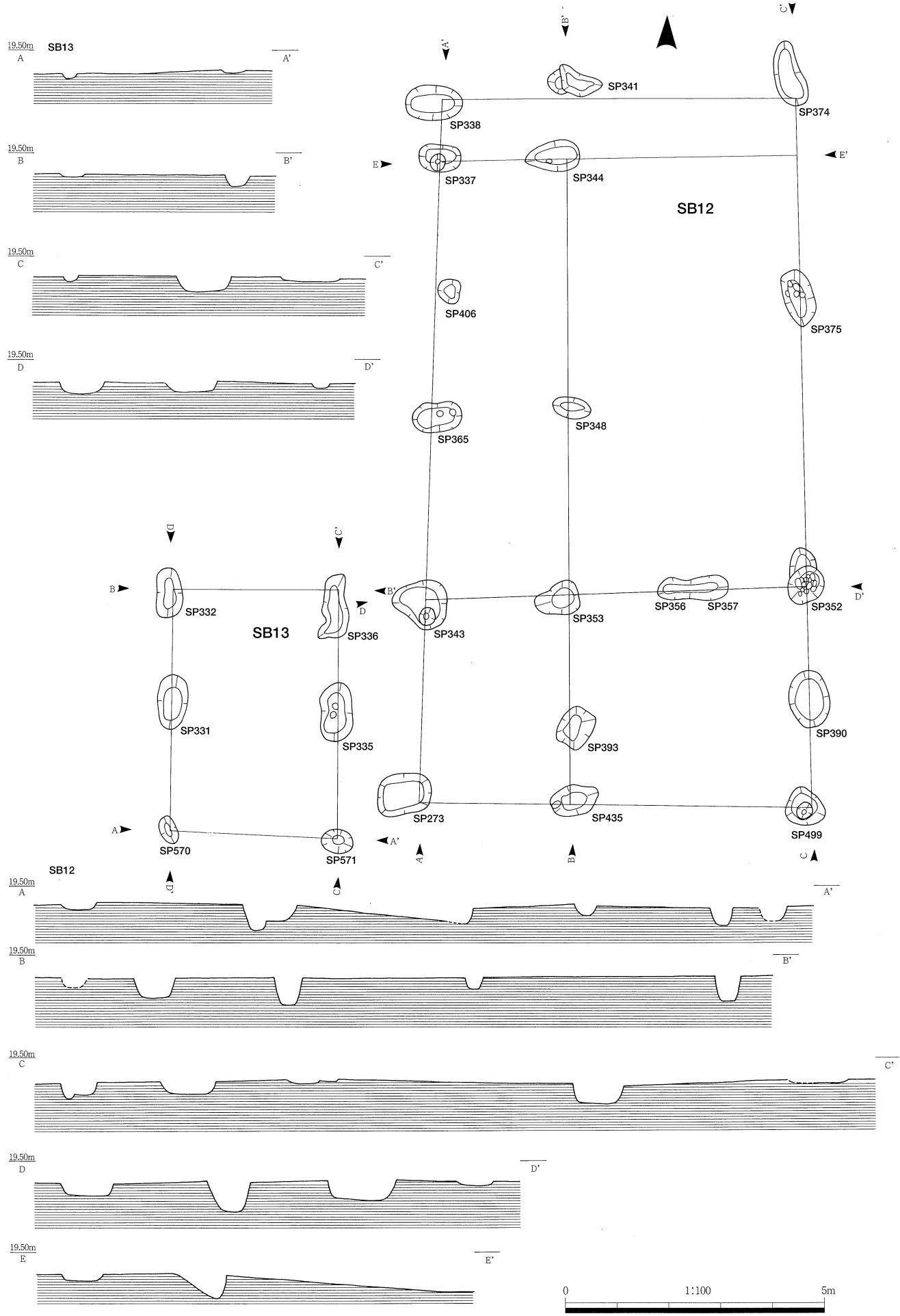
1. SB11 2. SB6 3. SB7・SB8

2 遺構



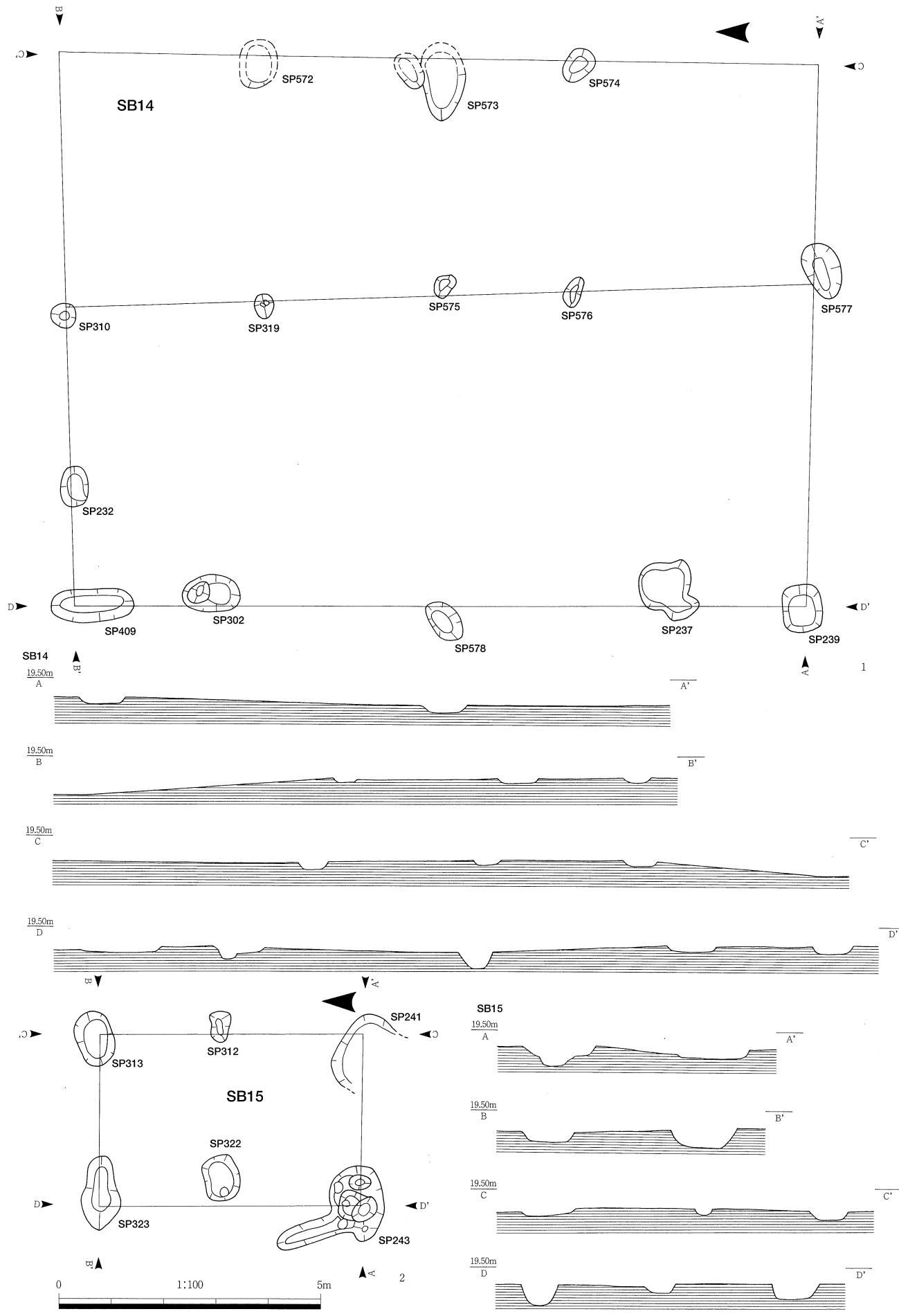
第33図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:100)

1. SB10 2. SB9



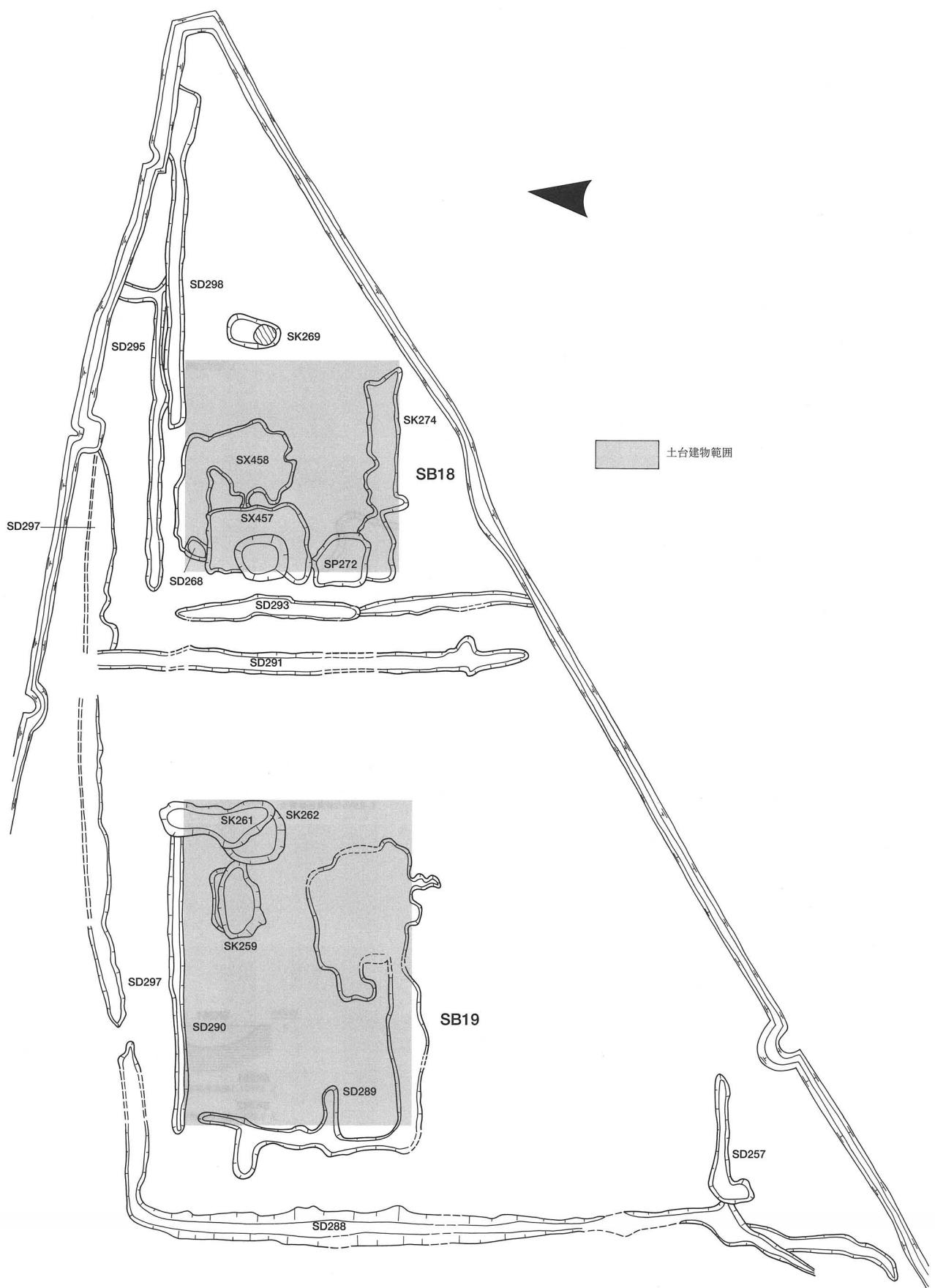
第34図 江尻遺跡 B 1 地区 近世遺構実測図 (1:100)  
SB12・SB13

2 遺構



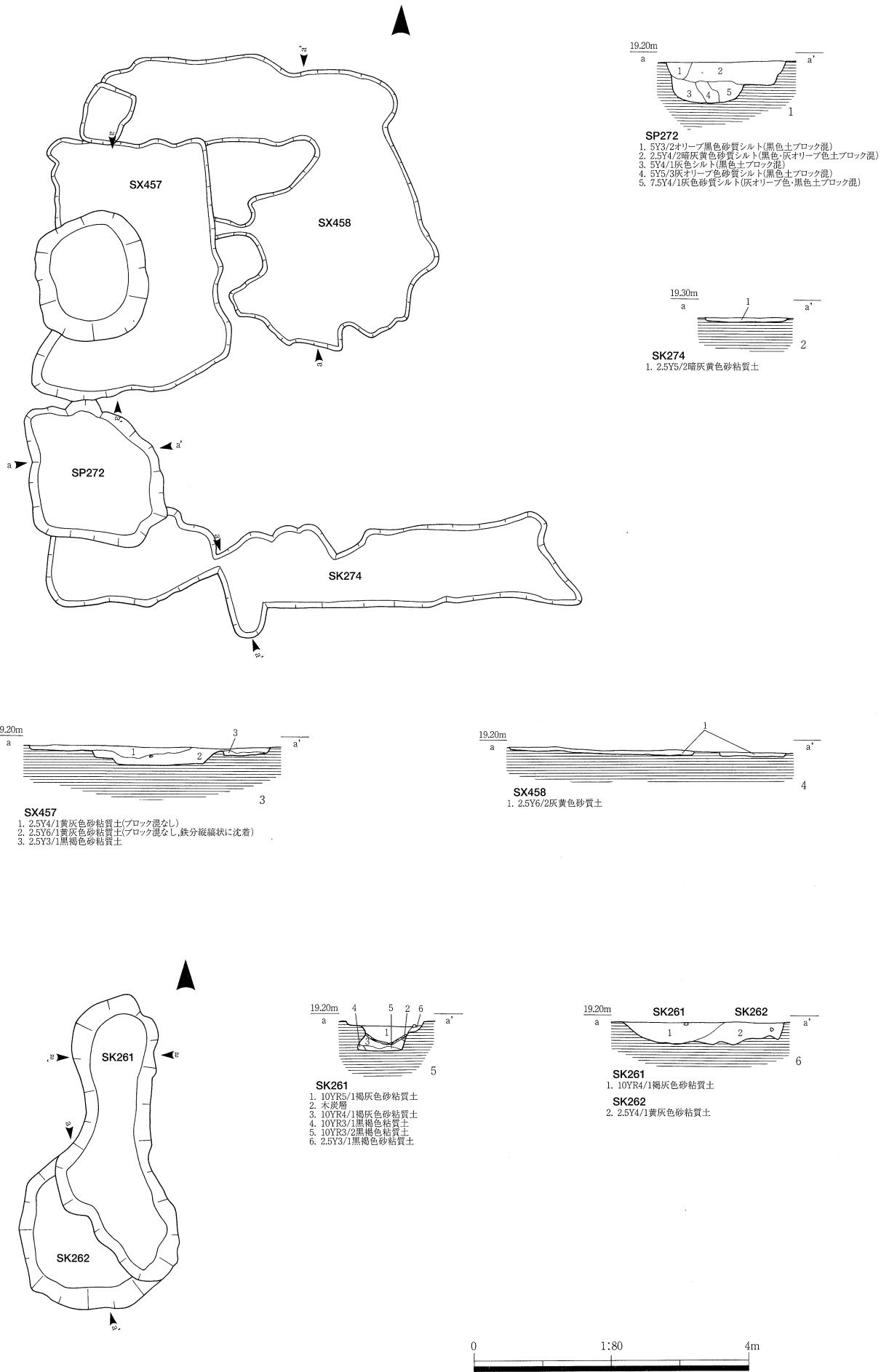
第35図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:100)

1. SB14 2. SB15



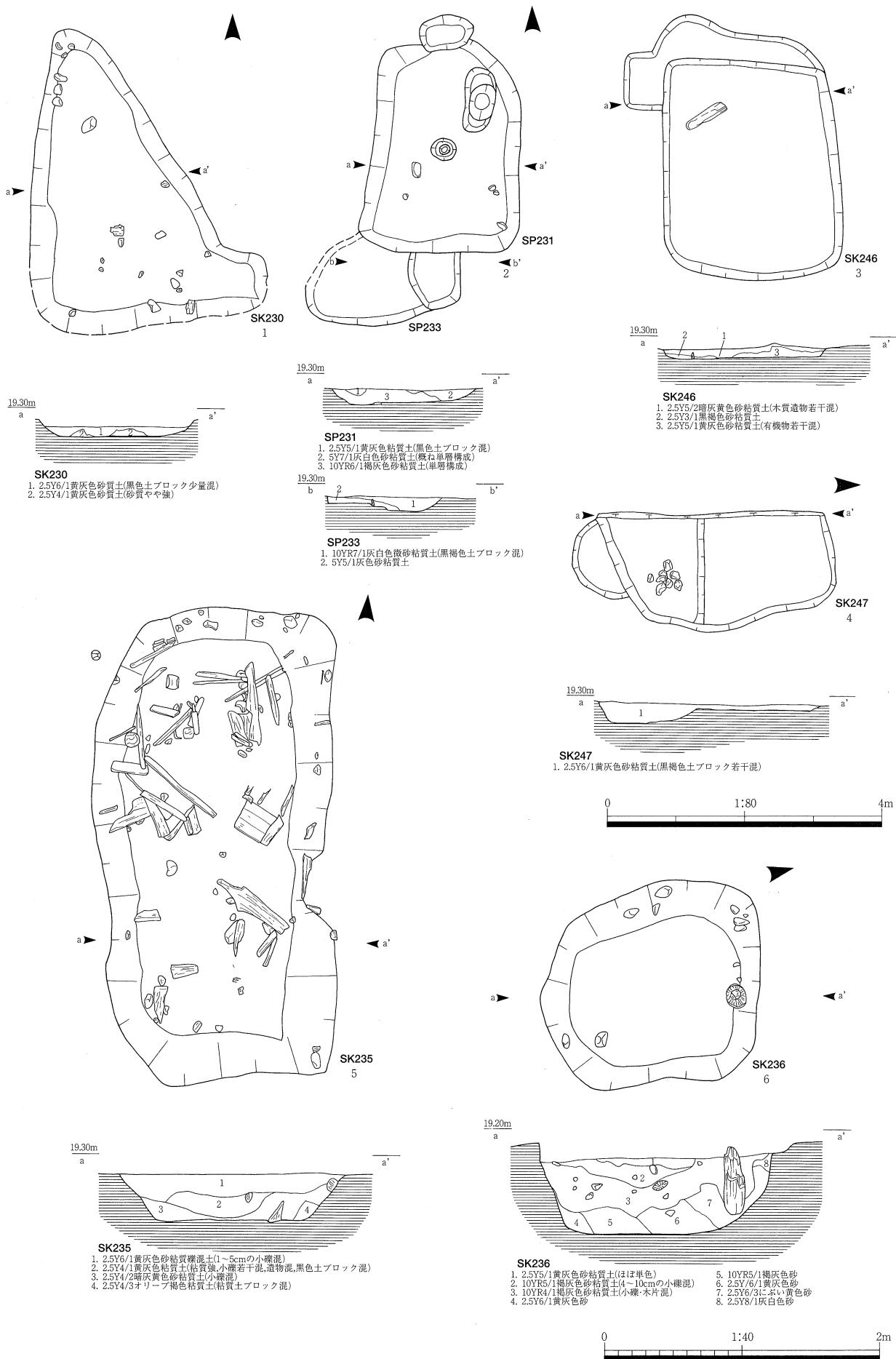
第36図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:200)  
SB18・SB19

0 1:200 10m



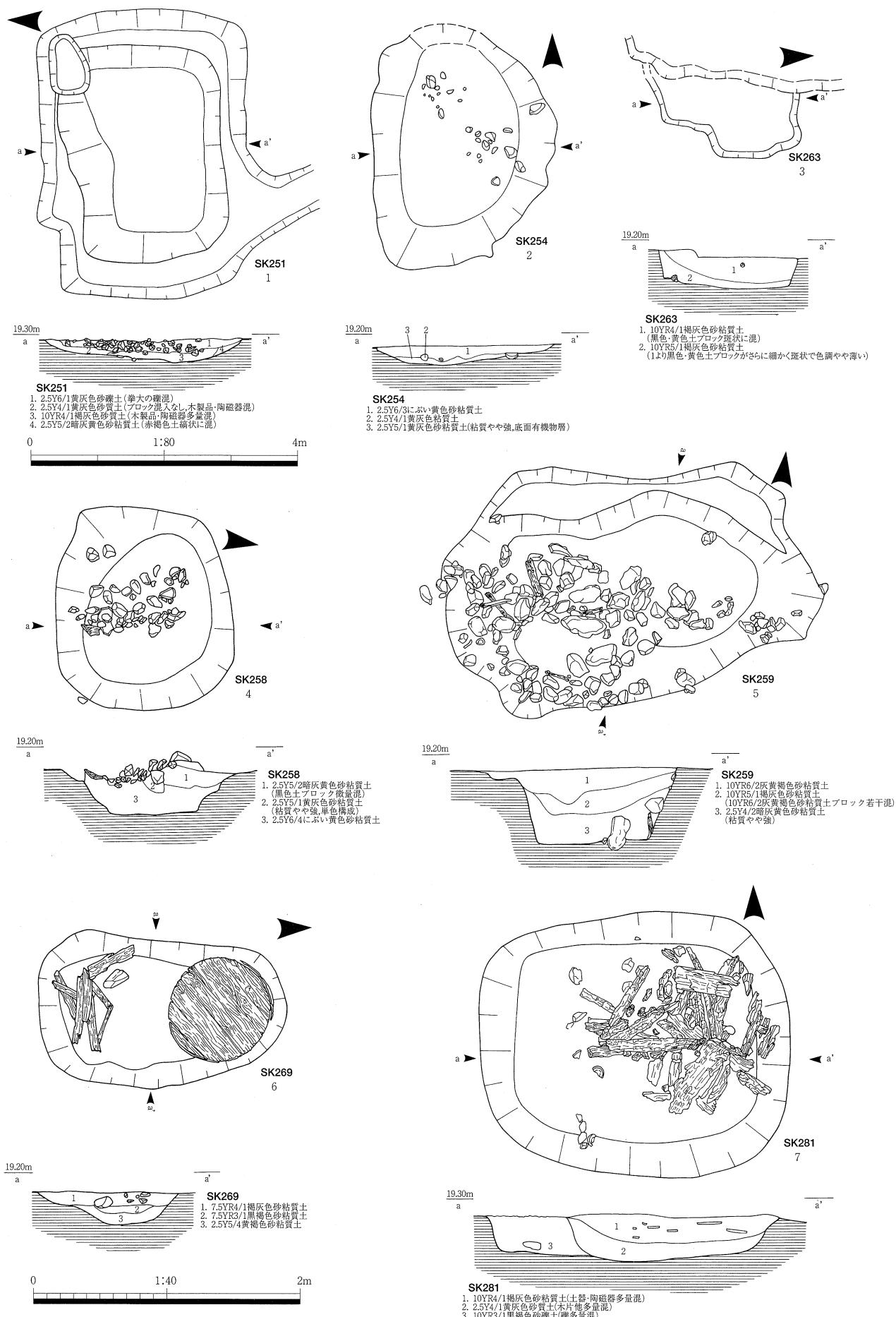
第37図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:80)

1. SP272
2. SK274
3. SX457
4. SX458
5. SK261
6. SK261・SK262



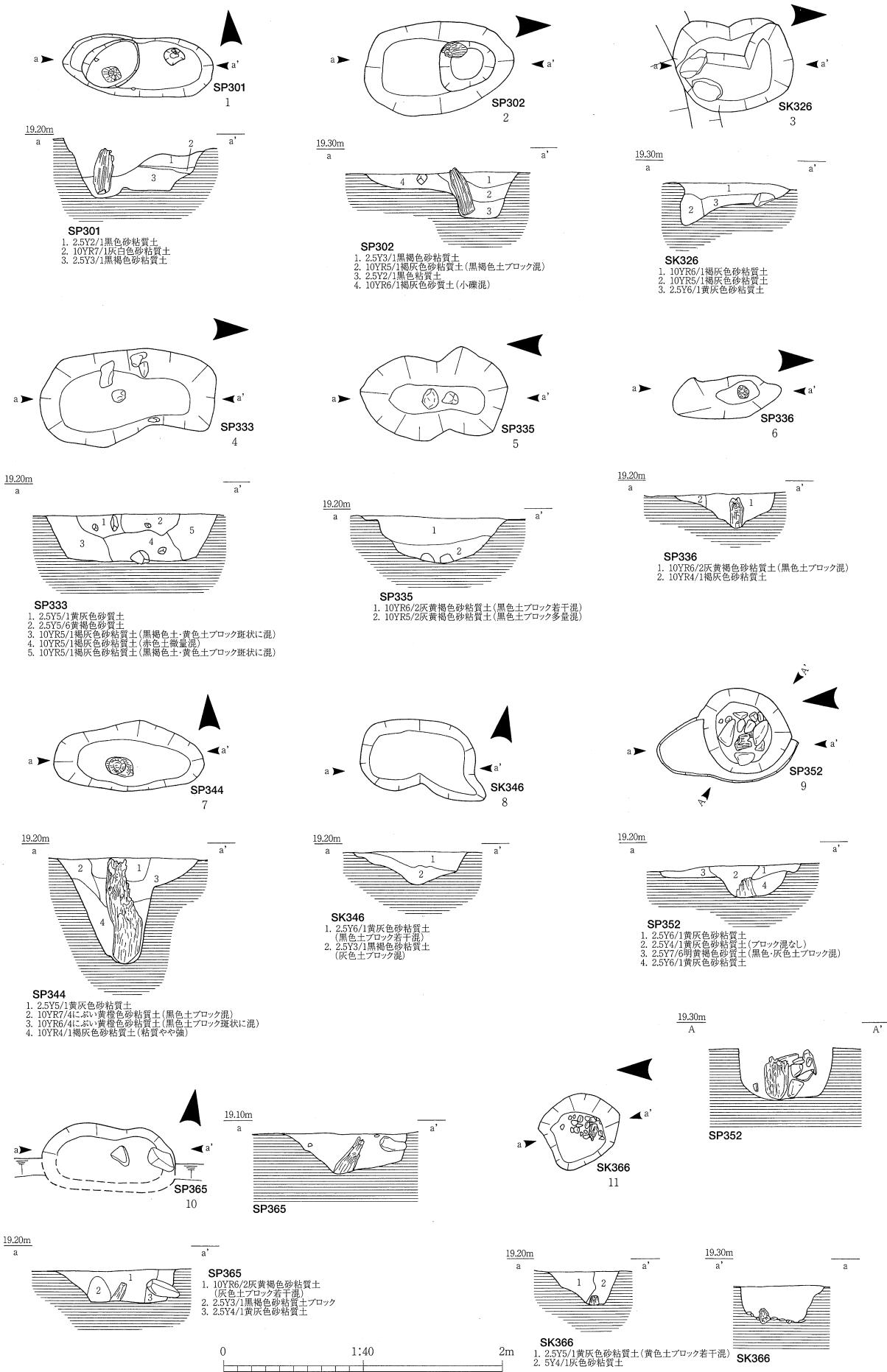
第38図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1~4(1:80), 5·6(1:40))

1. SK230 2. SP231 · SP233 3. SK246 4. SK247 5. SK235 6. SK236



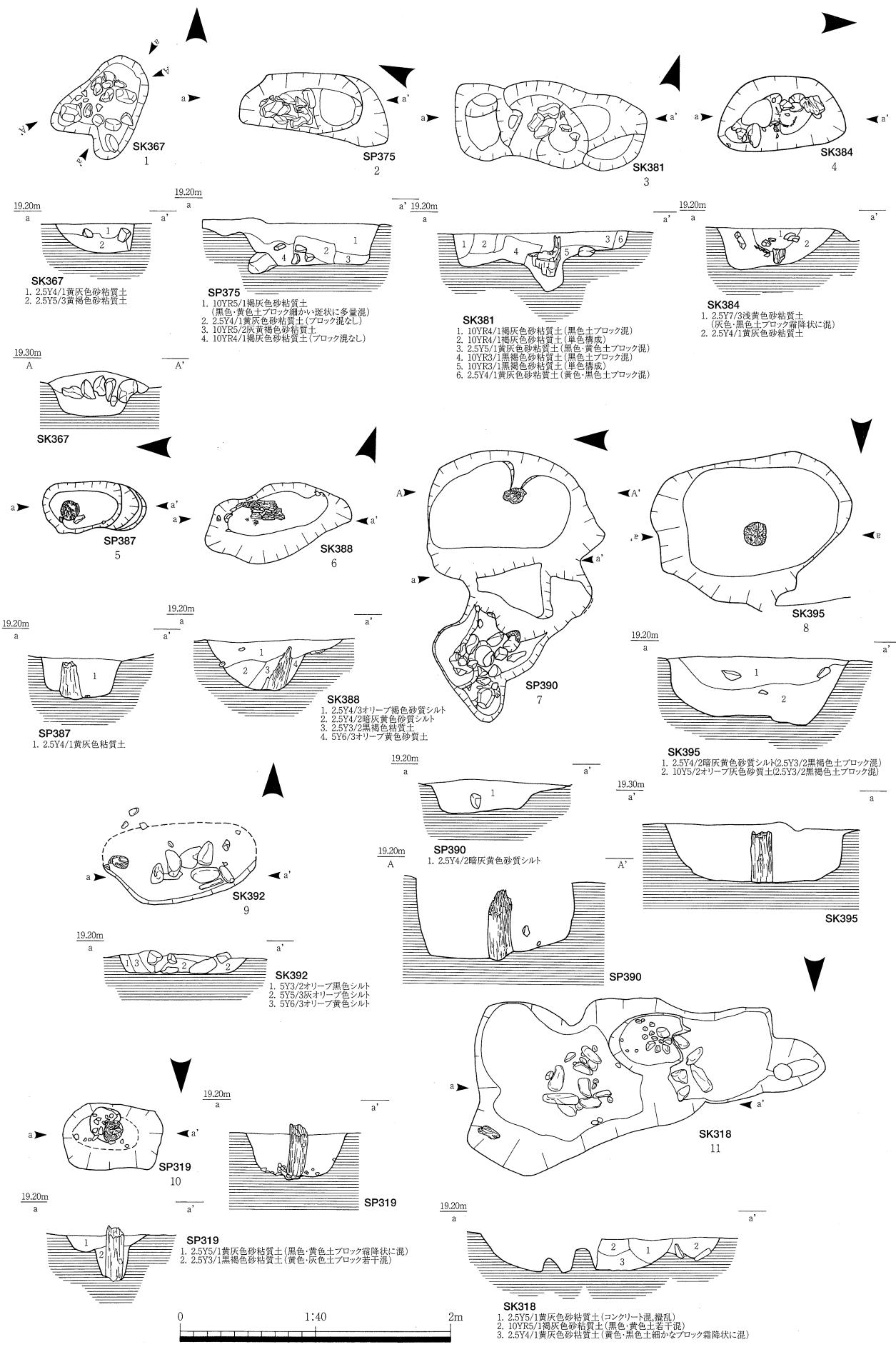
第39図 江戸遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1~5・7(1:80), 6(1:40))

1. SK251
2. SK254
3. SK263
4. SK258
5. SK259
6. SK269
7. SK281



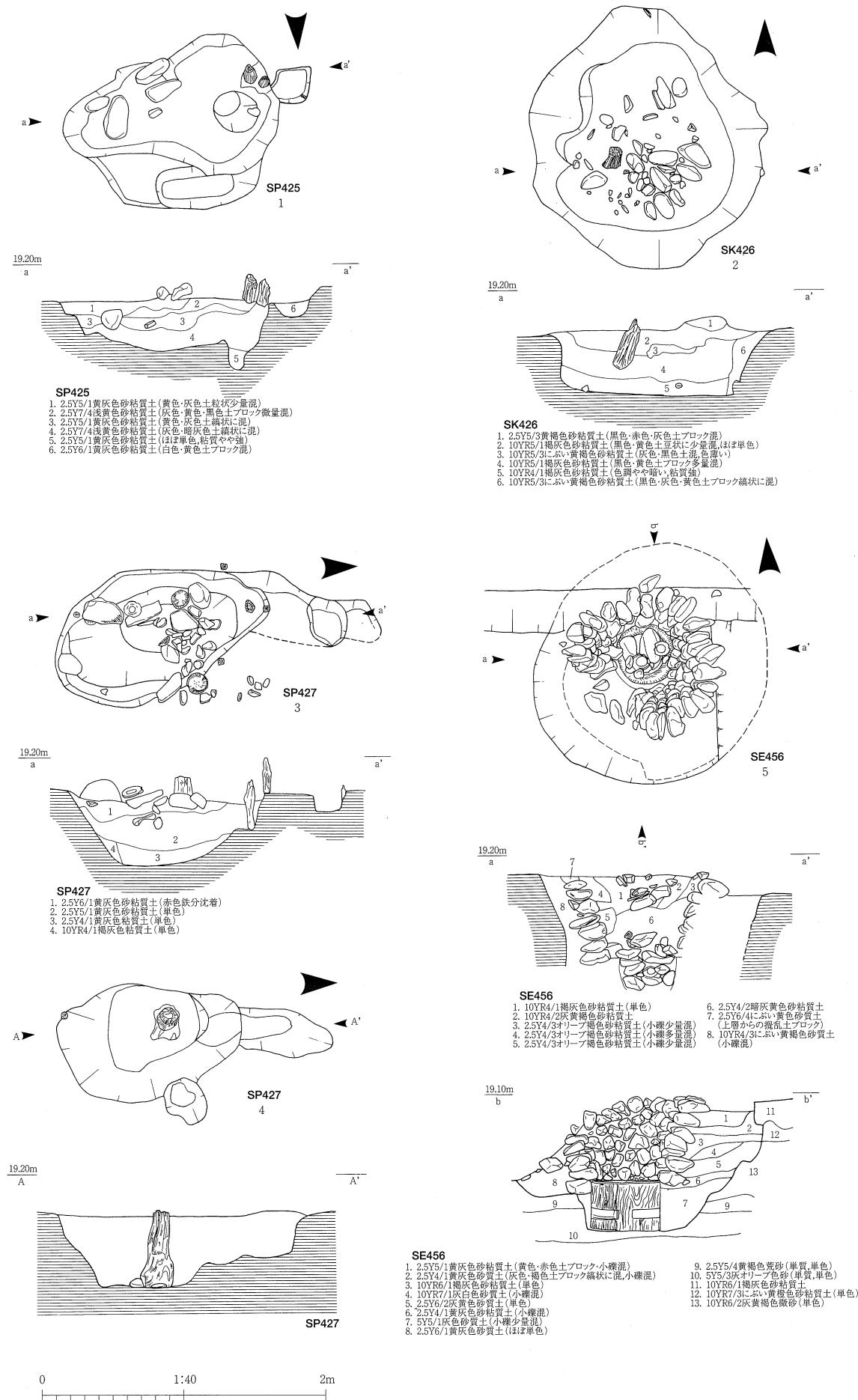
第40図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SP301 2. SP302 3. SK326 4. SP333 5. SP335 6. SP336 7. SP344 8. SK346 9. SP352 10. SP365
11. SK366



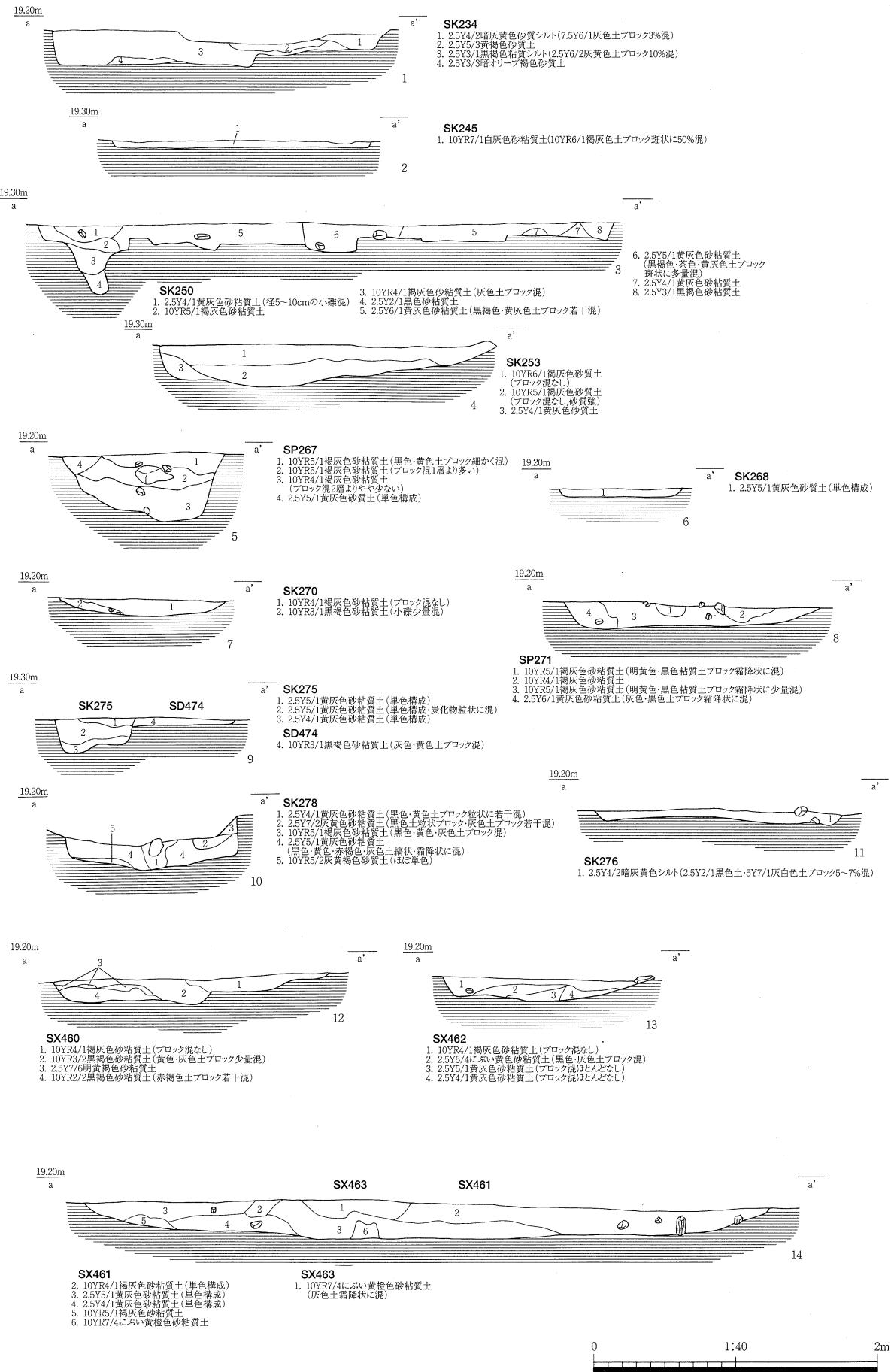
第41図 江尻遺跡 B 1 地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SK367
2. SP375
3. SK381
4. SK384
5. SP387
6. SK388
7. SP390
8. SK395
9. SK392
10. SP319
11. SK318



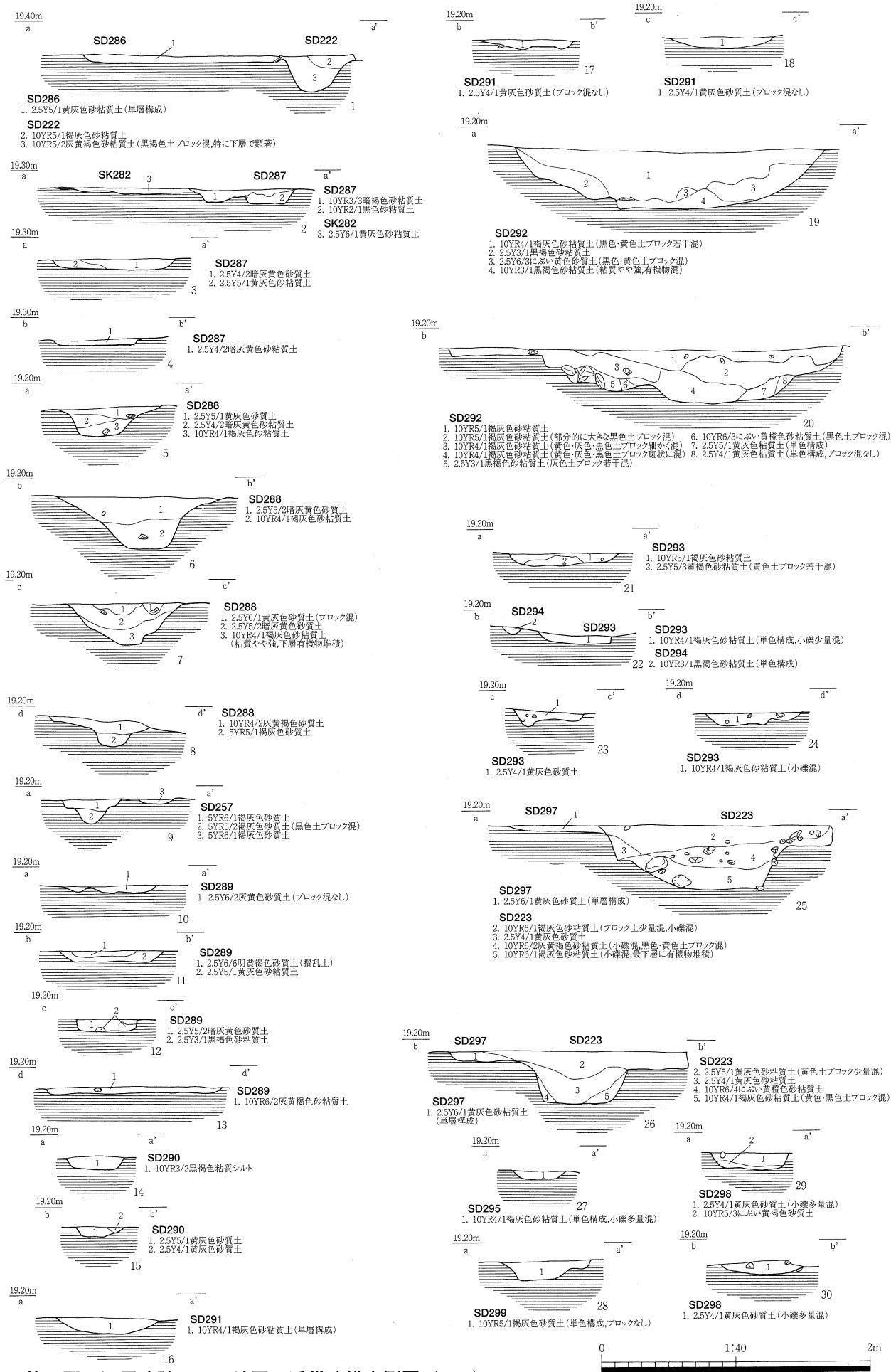
第42図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SP425 2. SK426 3・4. SP427 5. SE456



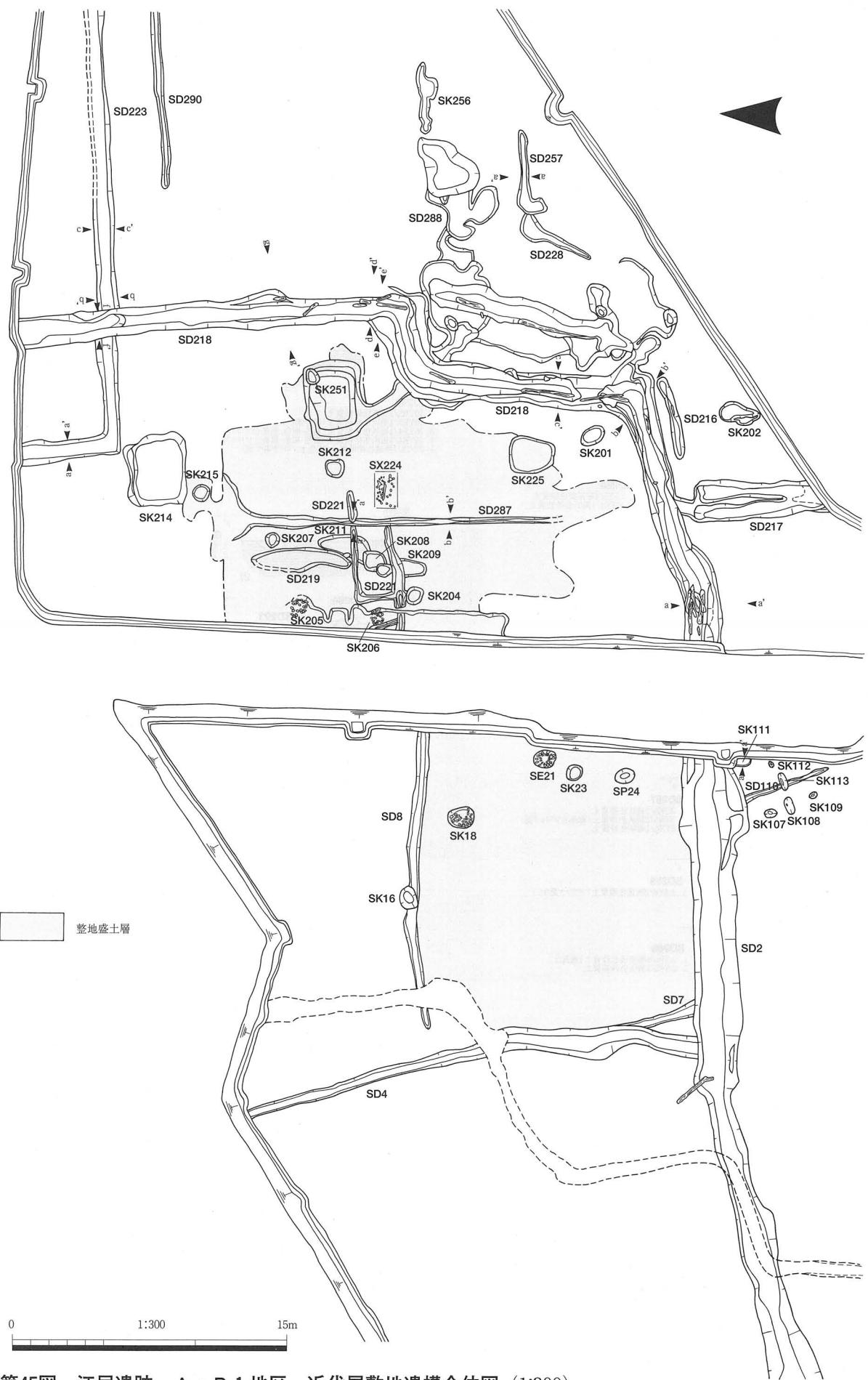
第43図 江尻遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SK234
2. SK245
3. SK250
4. SK253
5. SP267
6. SK268
7. SK270
8. SP271
9. SK275 · SD474
10. SK278
11. SK276
12. SX460
13. SX462
14. SX461 · SX463

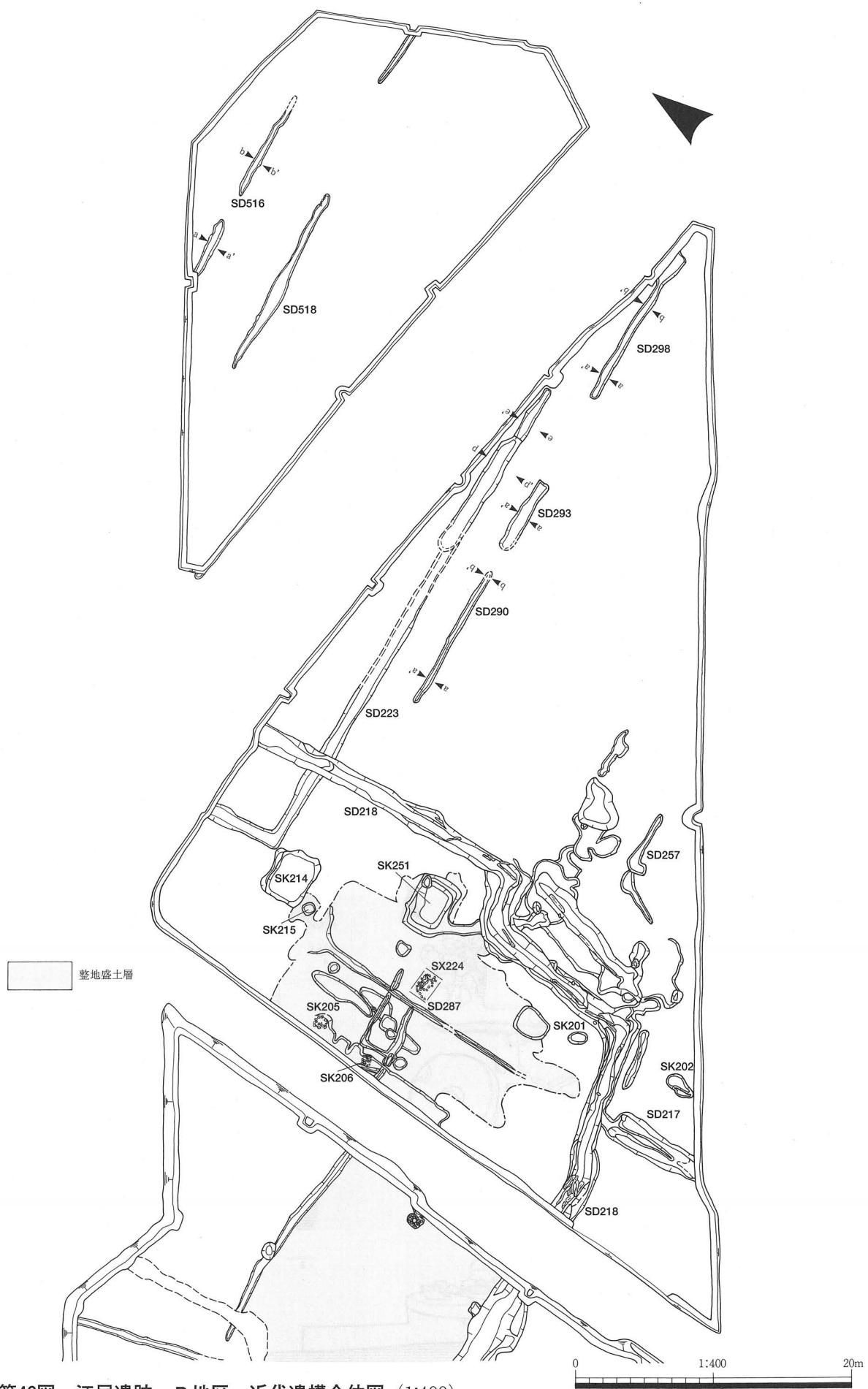


第44図 江戸遺跡 B1地区 近世遺構実測図 (1:40)

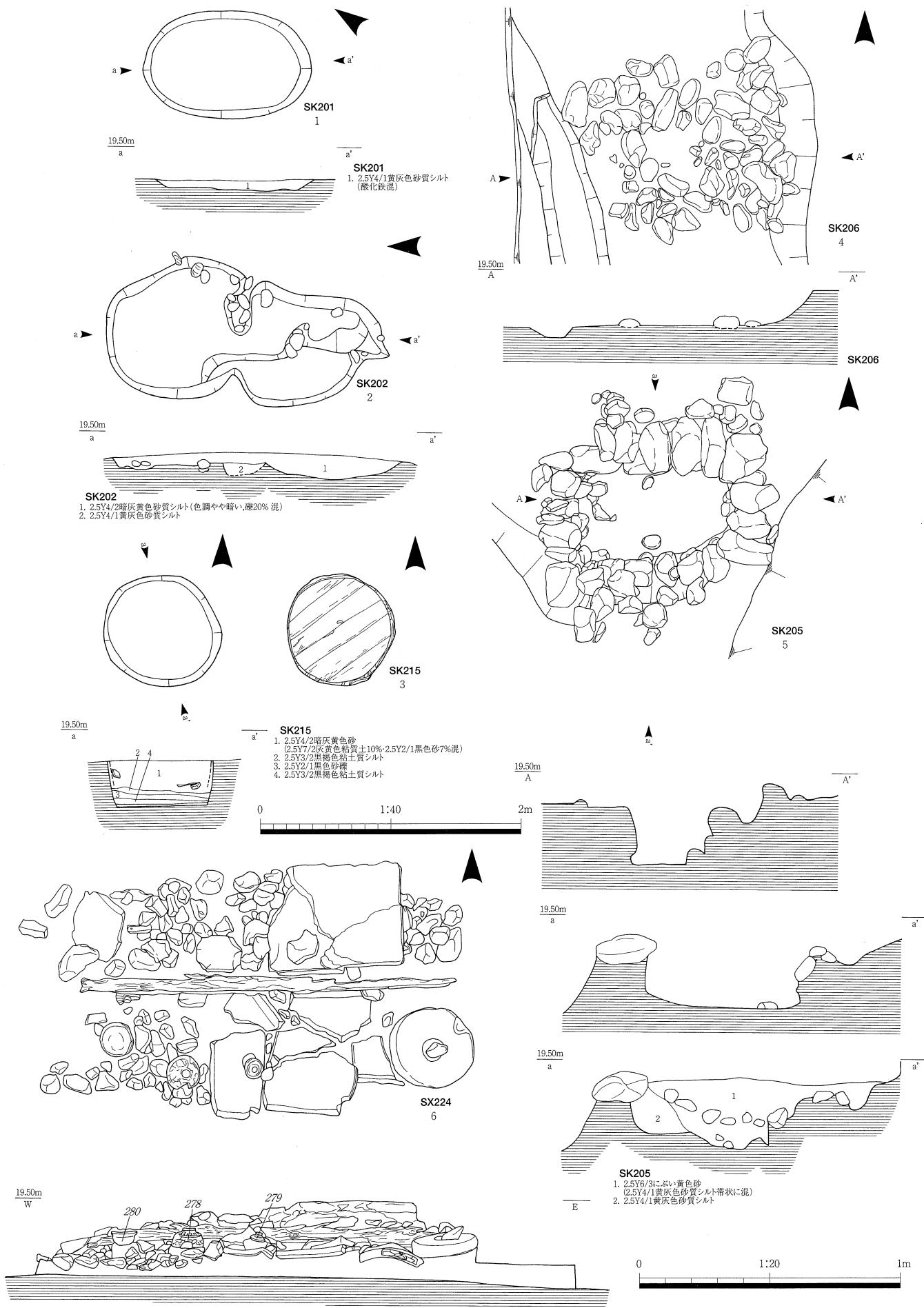
1. SD222 · SD286 2. SK282 · SD287 3 · 4. SD287 5 ~ 8. SD288 9. SD257 10 ~ 13. SD289 14 · 15. SD290  
16 ~ 18. SD291 19 · 20. SD292 21 ~ 24. SD293 · SD294 25 · 26. SD297 27. SD295 28. SD299  
29 · 30. SD298



第45図 江戸遺跡 A・B 1地区 近代屋敷地遺構全体図 (1:300)

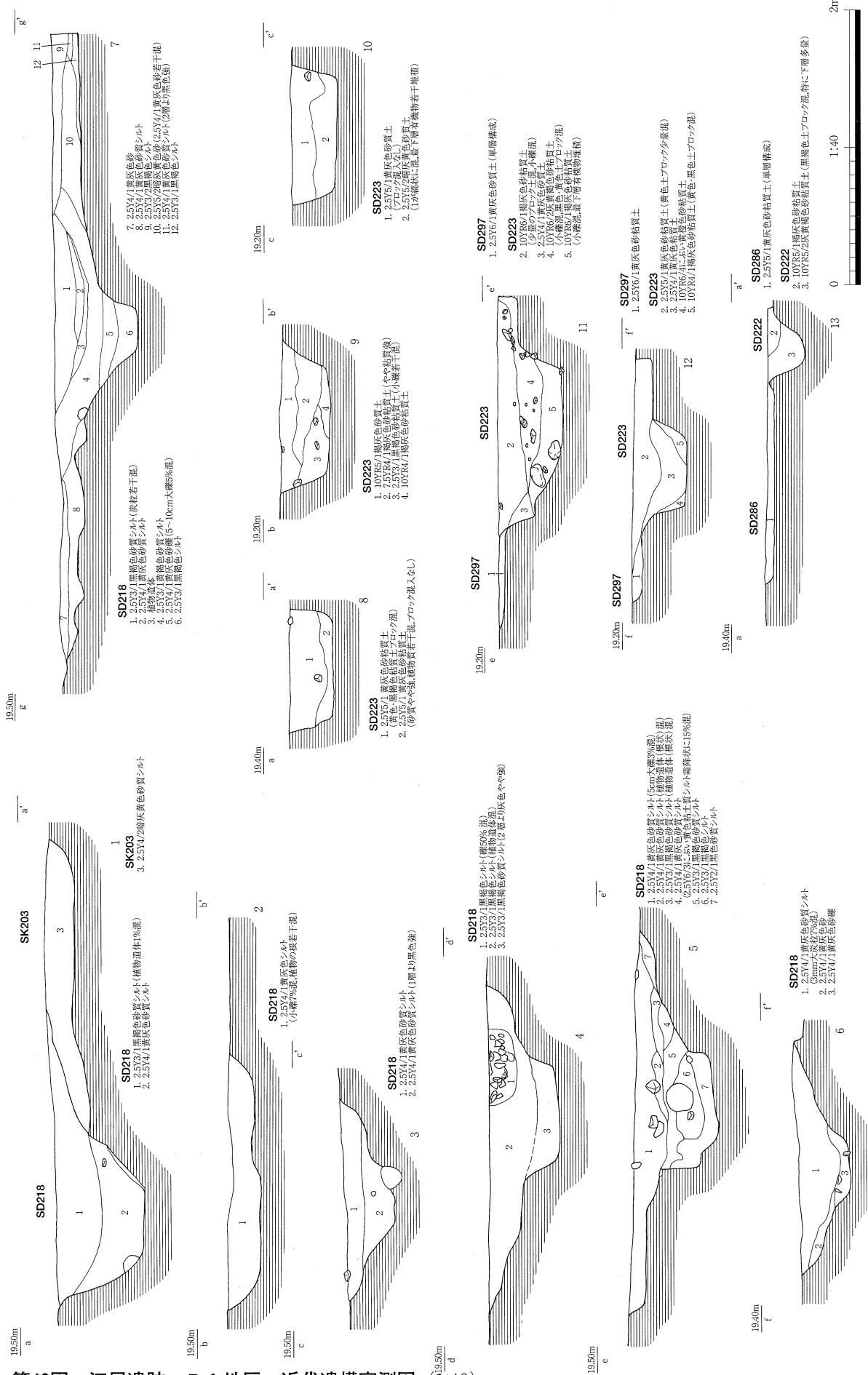


第46図 江尻遺跡 B地区 近代遺構全体図 (1:400)



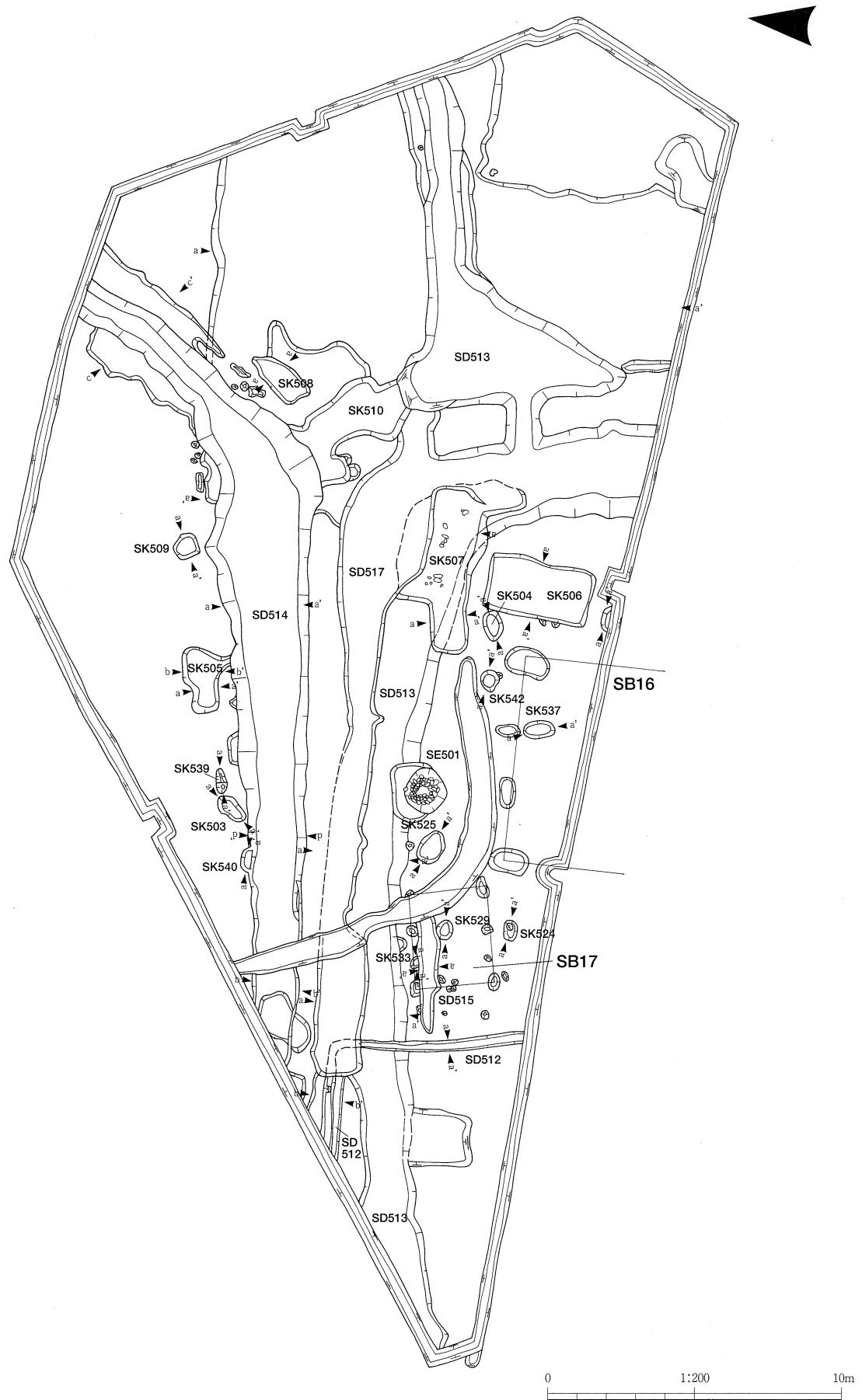
第47図 江尻遺跡 B 1 地区 近代遺構実測図 (1~3(1:40), 4~6(1:20))

1. SK201
2. SK202
3. SK215
4. SK206
5. SK205
6. SX224

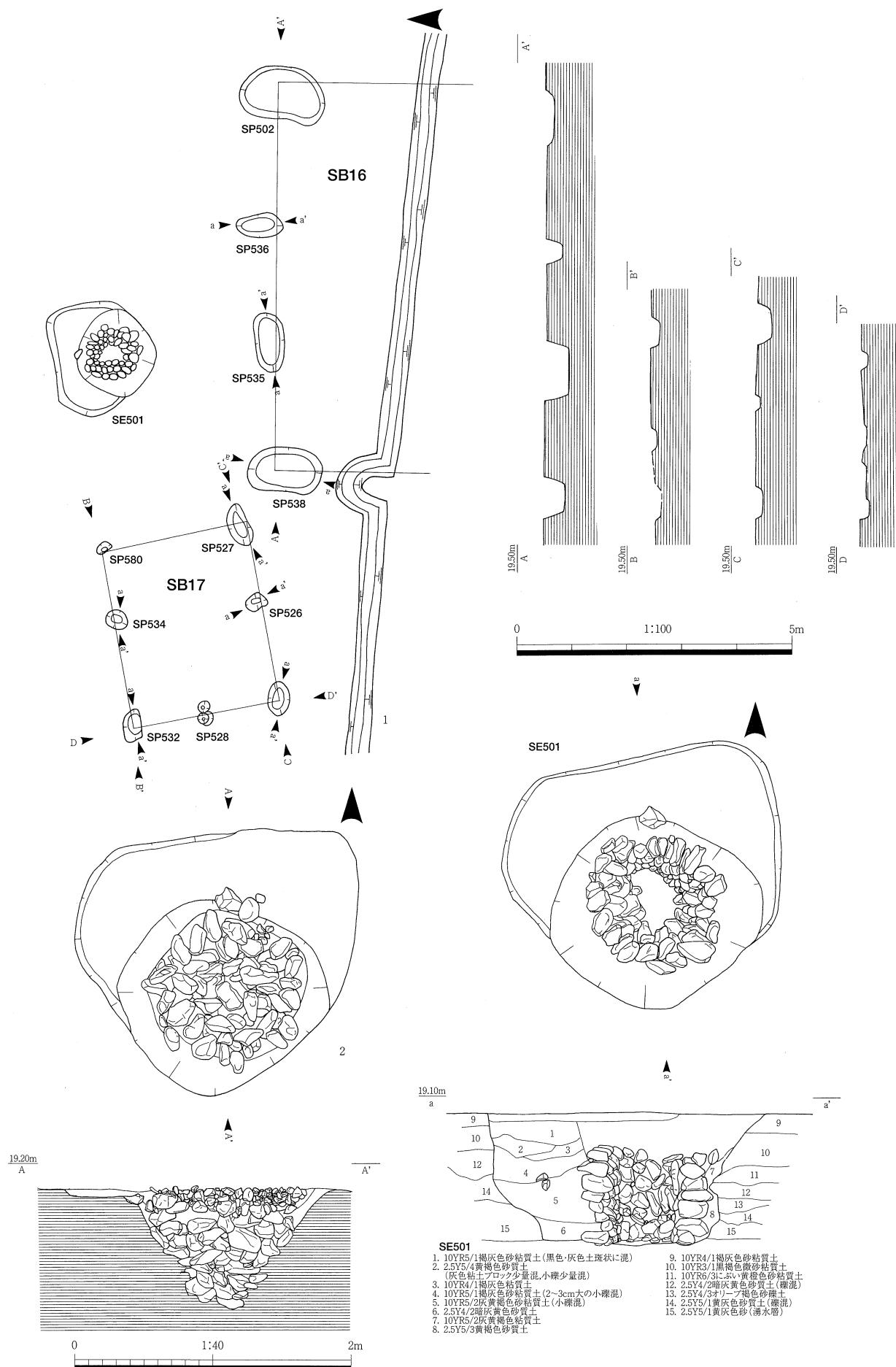


第48図 江尻遺跡 B1地区 近代遺構実測図 (1:40)

1. SD218 · SK203 2~7. SD218 8~12. SD223 13. SD286 · SD222



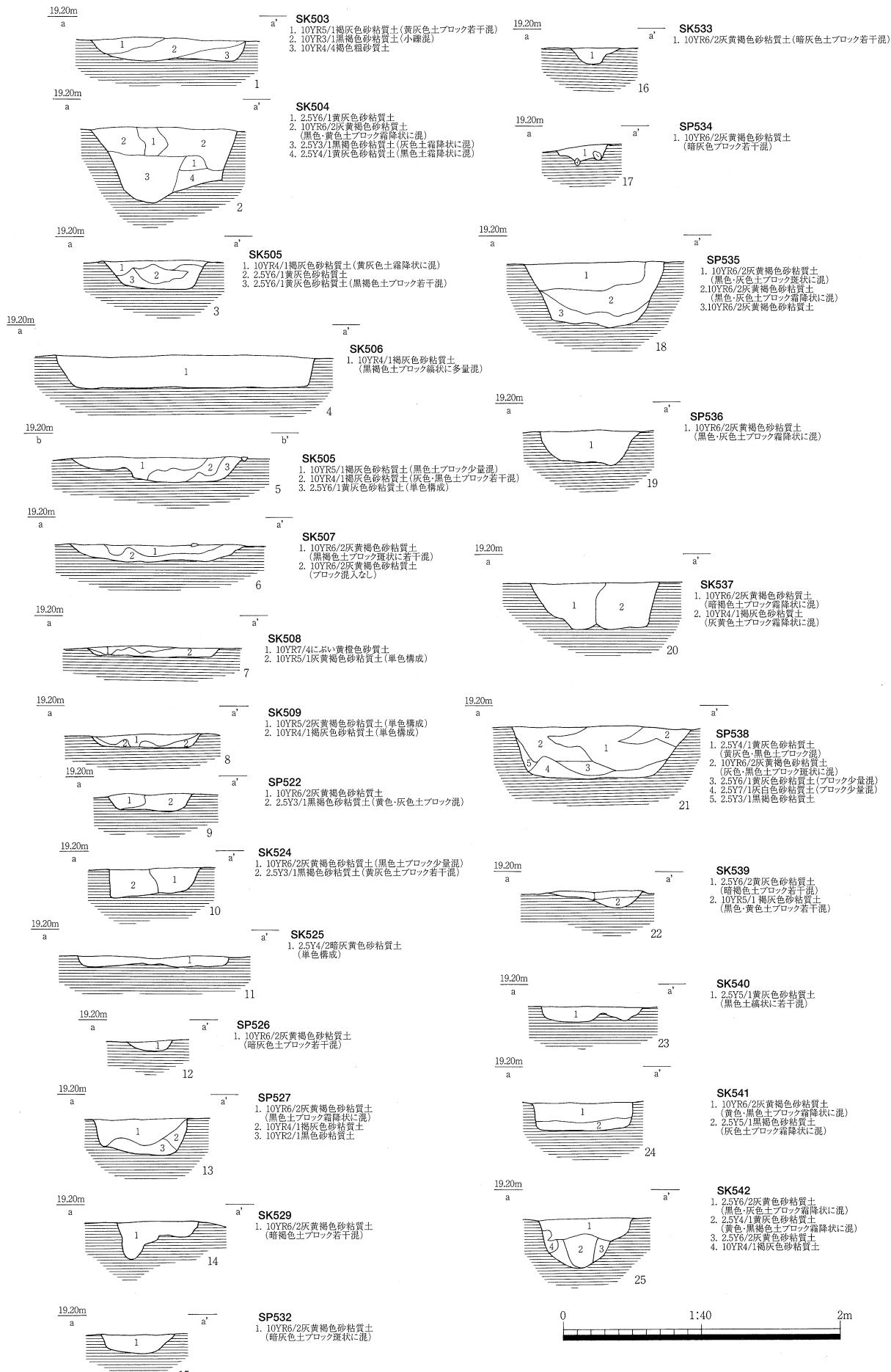
第49図 江戻遺跡 B2地区 近世遺構全体図 (1:200)



第50図 江尻遺跡 B 2 地区 近世遺構実測図 (1(1:100), 2(1:40))

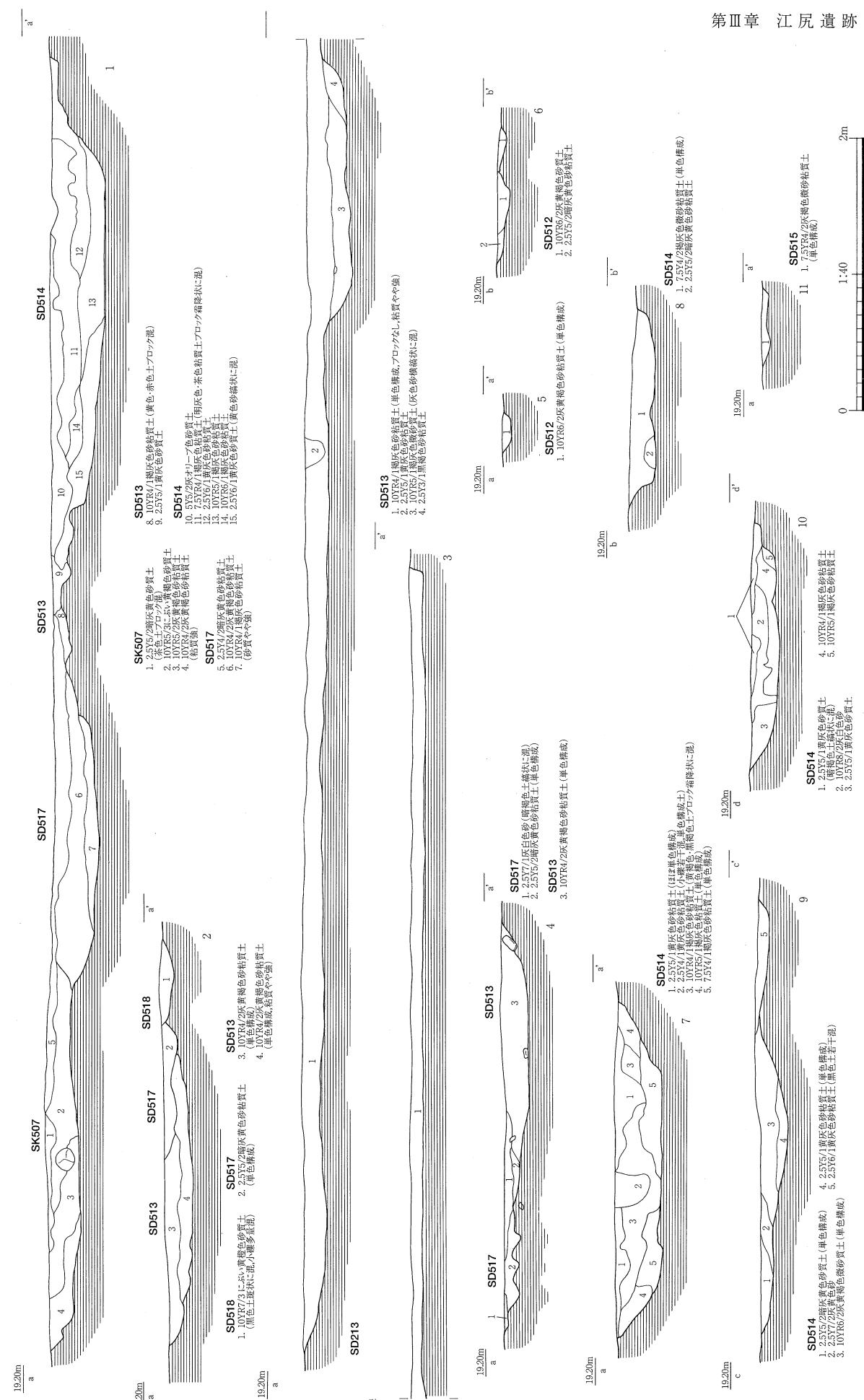
1. SB16・SB17 2. SE501

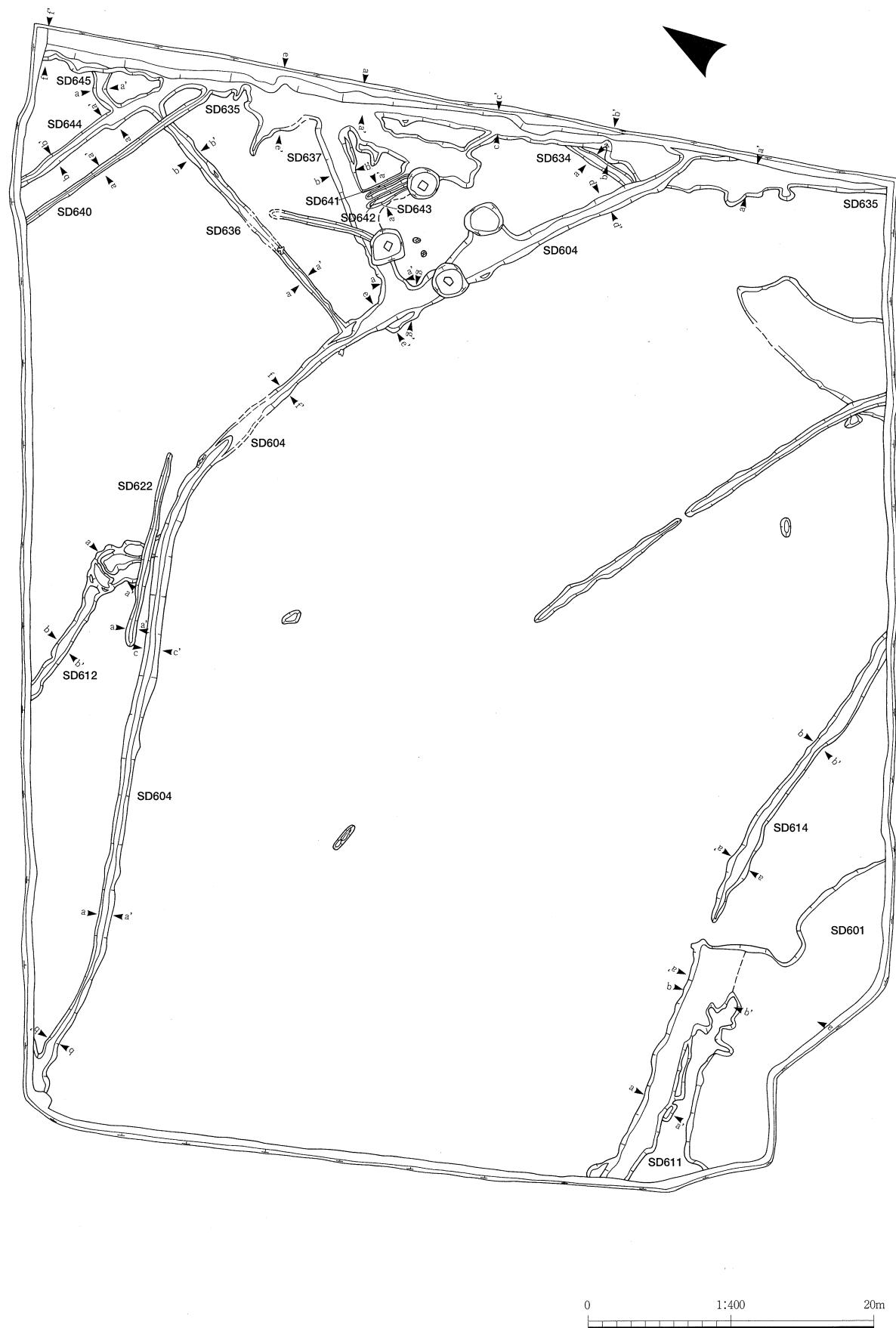
## 2 遺構



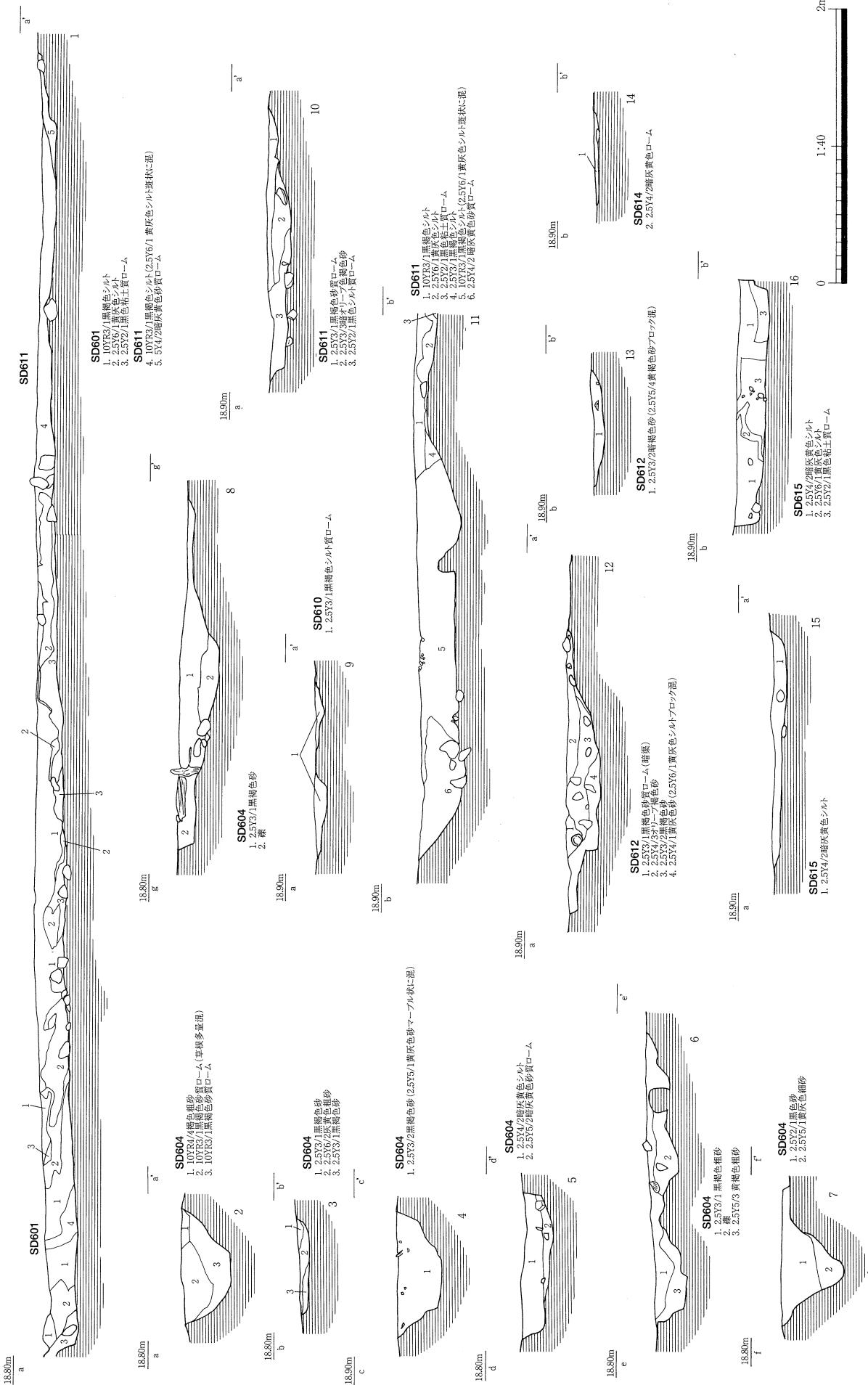
第51図 江尻遺跡 B 2 地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SK503
2. SK504
- 3 · 5. SK505
4. SK506
6. SK507
7. SK508
8. SK509
9. SP522
10. SK524
11. SK525
12. SP526
13. SP527
14. SK529
15. SP532
16. SK533
17. SP534
18. SP535
19. SP536
20. SK537
21. SP538
22. SK539
23. SK540
24. SK541
25. SK542



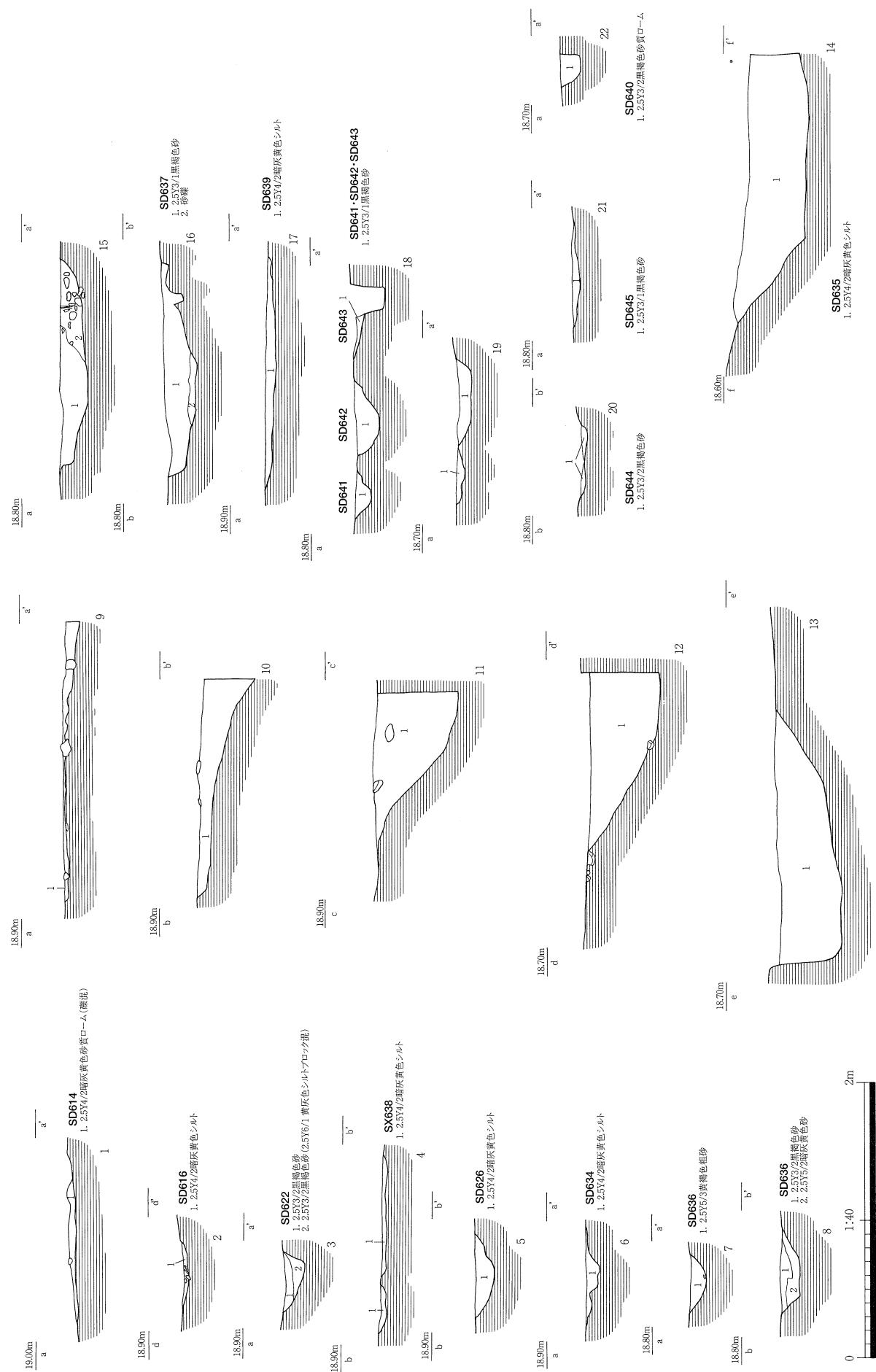


第53図 江尻遺跡 C地区 近世遺構全体図 (1:400)



第54図 江尻遺跡 C地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SD601・SD611 2~8. SD604 9. SD610 10・11. SD611 12・13. SD612 14. SD614 15・16. SD615



第55図 江尻遺跡 C地区 近世遺構実測図 (1:40)

1. SD614 2. SD616 3. SD622 4. SX638 5. SD626 6. SD634 7・8. SD636 9~14. SD635  
15・16. SD637 17. SD639 18. SD642・SD643 19・20. SD644 21. SD645 22. SD640

第4表 江尻遺跡 柱穴一覧(1)

建物番号	遺構番号	平面形	規 模(m)			出土 遺 物	時 期	備 考	挿図番号	図版番号
			長 さ	幅	深 さ					
SB 1	SP49	円	0.76	0.68	0.09		近世		20・21・25	5
	SP67	楕円	0.75	0.70	0.24		近世		20・21・25	5
	SP80	円	0.66	0.60	0.44		近世		20・21・26	5
	SP81	円	0.44	0.43	0.40		近世		20・21・26	5・8
	SP126	楕円	1.13	0.46	0.35	柱	近世		20・21・24	5・8
	SP128	楕円	0.95	0.65	0.25	柱	近世		20・21・24	5・8
SB 2	SP14	楕円	0.80	0.55	0.54	柱	近世		20・21・22	5
	SP17	楕円	1.64	0.76	0.75		近世		20・21・25	5
	SP45	楕円	1.00	0.44	0.39		近世		20・21・25	5
	SP46	楕円	0.60	0.38	0.40		近世		20・21・25	5
	SP51	楕円	0.93	0.53	0.43	柱	近世		20・21・23	5
	SP54	不明	0.90	0.21	0.16		近世		20・21・25	5
	SP55	円	1.03	0.97	0.62	杭	近世		20・21・23	5
	SP64	隅丸	1.15	0.62	0.56		近世		20・21・25	5
	SP91	不整形	1.20	0.80	0.48	柱	近世		20・21・24	5
	SP96	楕円	1.10	0.63	0.52		近世		20・21・26	5
	SP105	楕円	0.85	0.50	0.35		近世		20・21・23	5
	SP125	楕円	1.08	0.51	0.20		近世		20・21・24	5
	SP143	不整形	1.18	1.17	0.60		近世		20・21・26	5
SB 3	SP24	楕円	1.07	0.85	0.77		近世		20・21・25	
	SP29	楕円	0.77	0.28	0.32	柱	近世		20・21・22	8
	SP36	楕円	0.82	0.45	0.22		近世		20・21・25	
	SP37	楕円	0.88	0.42	0.20		近世		20・21・25	
SB 4	SP339	楕円	0.90	0.54	0.23		近世		31	
	SP340	円	0.87	0.83	0.26	唐津	近世		31	
	SP345	楕円	0.93	0.66	0.30		近世		31	
	SP376	円	0.55	0.32	0.26		近世		31	
SB 5	SP382	楕円	0.76	0.36	0.08		近世		31	
	SP415	楕円	0.79	0.65	0.37	柱	近世		31	
	SP419	方	0.68	0.45	0.32	柱	近世		31	18
	SP429	楕円	0.94	0.55	0.04		近世		31	
SB 6	SP265	不整形	0.93	0.89	0.26		近世		32	
	SP267	楕円	1.28	0.57	0.48		近世		32・43	
	SP420	不整形	0.70	0.34	0.24	柱	近世		32	
	SP423	円	0.76	0.58	0.38		近世		32	
SB 7	SP369	楕円	0.70	0.40	0.21	唐津	近世		32	
	SP379	楕円	0.75	0.42	0.30		近世		32	
	SP387	楕円	0.78	0.35	0.31	柱	近世		32・41	
	SP579	楕円	0.74	0.56	0.33		近世		32	
SB 8	SP386	楕円	0.75	0.64	0.40	弥生土器・伊万里	近世		32	
	SP389	不整形	0.99	0.71	0.35		近世		32	
	SP391	円	0.72	0.48	0.22		近世		32	
	SP485	楕円	0.80	0.45	0.20		近世		32	
	SP486	楕円	0.60	0.50	0.40		近世		32	
SB 9	SP233	不整形	2.27	1.29	0.20	唐津	近世		20・33・38	
	SP320	方	0.74	0.58	0.15		近世		20・33	
	SP325	楕円	0.68	0.50	0.10		近世		20・33	
	SP330	楕円	1.34	0.77	0.39		近世		20・33	
	SP400	不整形	1.10	0.30	0.10	越中瀬戸・伊万里	近世		20・33	
	SP441	楕円	1.03	0.67	0.22	柱	近世		20・33	
	SP443	楕円	1.07	0.49	0.14		近世		20・33	
	SP445	円	0.65	0.40	0.19		近世		20・33	
	SP487	不整形	1.00	0.75	0.10		近世		20・33	
SB10	SP488	不整形	0.80	0.65	0.10		近世		20・33	
	SP231	方	3.07	2.17	0.20	瀬戸	近世		20・33・38	
	SP232	方	0.78	0.48	0.16		近世		20・33	
	SP301	楕円	1.07	0.44	0.23	越中丸山・柱	近世		20・33・40	17
	SP302	楕円	1.45	0.62	0.35	柱	近世		20・33・40	
	SP304	楕円	1.29	0.72	0.32		近世		20・33	
	SP307	楕円	1.02	0.61	0.44		近世		20・33	
	SP333	楕円	1.32	0.62	0.34		近世		20・33・40	
	SP440	楕円	1.62	1.15	0.33		近世		20・33	
	SP444	楕円	1.00	0.65	0.32		近世		20・33	
	SP446	円	1.29	0.76	0.22		近世		20・33	
	SP465	楕円	0.53	0.46	0.45	越中瀬戸	近世		20・33	
	SP490	楕円	1.65	0.80	0.20		近世		20・33	
	SP491	楕円	0.85	0.50	0.30		近世		20・33	
	SP492	楕円	1.10	0.55	0.10		近世		20・33	
	SP493	楕円	0.45	0.30	0.10		近世		20・33	
	SP494	楕円	0.90	0.55	0.50		近世		20・33	
	SP495	円	0.55	0.50	0.20		近世		20・33	

第4表 江尻遺跡 柱穴一覧(2)

建物番号	遺構番号	平面形	規 模(m)			出土 遺物	時 期	備 考	挿図番号	図版番号
			長 さ	幅	深 さ					
SB11	SP264	方	1.64	0.80	0.24	弥生土器	近世		32	
	SP266	楕円	1.05	1.02	0.36		近世		32	
	SP271	不整形	0.80	0.38	0.17		近世		32・43	
	SP272	不整形	2.04	1.38	0.57	弥生土器・越中瀬戸	近世		32・37	
	SP283	方	0.77	0.77	0.21	伊万里	近世		32	
	SP332	楕円	0.88	0.45	0.22		近世		32	
	SP417	楕円	1.70	1.00	0.55		近世		32	18
	SP425	楕円	1.50	0.67	0.57	柱	近世		32・42	
	SP427	楕円	2.03	0.93	0.64	越中瀬戸・柱	近世		32・42	18
	SP428	楕円	2.04	0.70	0.34	弥生土器・柱・底板	近世		32	
	SP433	楕円	0.93	0.51	0.16		近世		32	18
SB12	SP273	方	1.30	0.71	0.12	弥生土器・瀬戸	近世		34	14
	SP337	楕円	0.73	0.37	0.11	弥生土器・柱	近世		34	14
	SP338	楕円	1.03	0.31	0.27		近世		34	14
	SP341	不整形	1.02	0.52	0.25	弥生土器	近世		34	14
	SP343	隅丸	1.00	0.82	0.32		近世		34	14
	SP344	楕円	1.03	0.48	0.60	唐津・柱	近世		34・40	14・17
	SP348	楕円	0.70	0.40	0.23	弥生土器	近世		34	14
	SP352	楕円	1.02	0.68	0.23	弥生土器・柱	近世		34・40	14
	SP353	楕円	1.22	0.57	0.53	弥生土器・越中瀬戸・瀬戸	近世		34	14
	SP356	楕円	0.67	0.36	0.29		近世		34	14
	SP357	楕円	0.67	0.40	0.29		近世		34	14
	SP365	楕円	0.93	0.45	0.23		近世		34・40	14
	SP374	不整形	0.75	0.50	0.05	瀬戸	近世		34	14
	SP375	楕円	1.04	0.48	0.30	弥生土器	近世		34・41	14
	SP390	楕円	1.04	0.72	0.25	柱	近世		34・41	14
	SP393	楕円	0.71	0.50	0.33		近世		34	14
	SP406	楕円	0.58	0.42	0.28	弥生土器	近世		34	14
	SP435	不整形	0.98	0.54	0.19	陶器	近世		34	14
	SP499	不整形	0.75	0.65	0.25		近世		34	14
SB13	SP331	楕円	1.03	0.56	0.36		近世		34	14
	SP332	楕円	0.88	0.45	0.22		近世		34	14
	SP335	楕円	1.07	0.55	0.35		近世		34・40	14
	SP336	楕円	1.17	0.47	0.21	弥生土器・柱	近世		34・40	14
	SP570	楕円	0.55	0.30	0.10		近世		34	14
	SP571	楕円	0.60	0.40	0.10		近世		34	14
SB14	SP232	方	0.78	0.48	0.16		近世		20・35	14
	SP237	不整形	0.93	0.79	0.11	伊万里・瀬戸	近世		20・35	14
	SP239	方	0.88	0.70	0.15		近世		20・35	14
	SP302	楕円	1.45	0.62	0.35	柱	近世		20・35・40	14
	SP310	楕円	0.43	0.35	0.09		近世		20・35	14
	SP319	円	0.42	0.31	0.11		近世		20・35・41	14
	SP409	楕円	1.58	0.53	0.07	唐津・越中丸山・陶器	近世		20・35	14
	SP572	楕円	1.05	0.75	0.15		近世		20・35	14
	SP573	楕円	0.80	0.50	0.10		近世		20・35	14
	SP574	楕円	0.65	0.50	0.10		近世		20・35	14
	SP575	楕円	0.50	0.30	0.07		近世		20・35	14
	SP576	楕円	0.65	0.50	0.11		近世		20・35	14
	SP577	楕円	1.10	0.65	0.15		近世		20・35	14
	SP578	楕円	0.90	0.55	0.30		近世		20・35	14
SB15	SP241	方	1.37	0.87	0.11	陶器	近世		20・35	14
	SP243	不整形	1.36	0.92	0.14	越中瀬戸	近世		20・35	14
	SP312	円	0.54	0.36	0.20		近世		20・35	14
	SP313	楕円	0.94	0.72	0.15		近世		20・35	14
	SP322	隅丸	0.85	0.58	0.17		近世		20・35	14
	SP323	楕円	1.37	0.54	0.38	越中瀬戸	近世		20・35	14
SB16	SP502	楕円	1.54	0.97	0.14		近世		50	22・23
	SP535	楕円	1.05	0.53	0.46		近世		50・51	22・23
	SP536	楕円	0.82	0.41	0.24		近世		50・51	22・23
	SP538	楕円	1.34	0.77	0.35	弥生土器・越中瀬戸・伊万里	近世		50・51	22・23
SB17	SP522	円	0.59	0.37	0.12		近世		50・51	22
	SP526	円	0.30	0.28	0.07		近世		50・51	22
	SP527	楕円	0.72	0.36	0.25		近世		50・51	22
	SP528	円	0.40	0.39	0.13		近世		50	22
	SP532	楕円	0.53	0.33	0.14		近世		50・51	22
	SP534	楕円	0.40	0.32	0.10		近世		50・51	22
	SP580	不整形	0.30	0.20	0.15		近世		50	22

第5表 江尻遺跡 井戸一覧

遺構番号	平面形	規 模(m)			出 土 遺 物	時 期	備 考	挿図番号	図版番号
		長 さ	幅	深 さ					
SE21	円	1.20	0.95	1.56	越中瀬戸・木臼・加工棒・竹製品	近世～近代			22 6
SE30	円	1.45	1.32	0.86	石臼	近世～近代			22 6
SE102	円	1.50	1.50	1.30	伊万里・磁器・漆器・下駄・樽・栓・加工板・加工棒・竹製品・石臼	近世～近代	SE102>SD56	24 6	
SE456	円	1.21	1.09	1.01	越中瀬戸・木臼	近世			42 16
SE501	円	1.85	1.94	0.61	越中瀬戸・石臼	近世			50 23

第6表 江尻遺跡 土坑その他一覧(1)

遺構番号	平面形	規 模(m)			出土 遺 物	時 期	備 考	挿図 番号	図版 番号
		長さ	幅	深さ					
SK11	円	0.44	0.40	0.17		近代		25	
SK12	楕円	1.47	0.48	0.74		近代		25	
SK13	楕円	1.07	0.62	0.63		近代	SK13>SP14・SK15・SD8	22	
SK15	円	0.68	0.58	0.14		近世	SK15<SP14・SK13	25	
SK16	楕円	1.25	0.87	0.55	陶器	近世～近代	SK16>SP17・SD8	22	
SK18	隅丸	1.42	1.12	0.25	越中瀬戸・唐津・陶器・土鈴・下駄	近世～近代		22	6
SK19	隅丸	1.30	0.83	0.08		近世～近代		25	
SK20	円	0.86	0.86	0.09	伊万里	近世～近代	SK20>SD44	22	
SK22	楕円	1.04	0.68	0.50		近世～近代	SK22>SD43	25	
SK23	楕円	0.90	0.78	0.12		近世～近代	SK23>SP36	25	
SK31	不整形	0.85	0.70	0.29		近世～近代	SK31<SD2	25	
SK32	楕円	0.37	0.30	0.28		近世～近代		25	
SK34	楕円	0.76	0.68	0.20	箱状石製品	近世～近代	SK34<SP24	22	
SK35	楕円	0.57	0.48	0.15	唐津・越中丸山	近世～近代		22	
SK38	楕円	0.78	0.46	0.13		近世～近代		25	
SK39	楕円	1.50	0.67	0.65		近世～近代	SK39>SK40	26	
SK40	楕円	0.72	0.35	0.35	柱	近世～近代	SK40<SK39	23	7
SK41	楕円	0.45	0.27	0.19		近世		25	
SK48	円	0.83	0.80	0.06		近世		23	7
SK50	楕円	0.50	0.24	0.32		近世～近代		25	
SK52	楕円	0.54	0.26	0.23		近世～近代		25	
SK53	楕円	0.52	0.29	0.35		近世～近代		25	
SK57	円	0.64	0.63	0.40		近世～近代		25	
SK58	不整形	1.45	1.18	0.10		近世～近代	SK58<SD8	25	
SK60	楕円	1.78	0.57	0.40		近世～近代		25	
SK62	楕円	0.95	0.36	0.10		近世～近代		25	
SK63	楕円	1.45	0.58	0.58		近世～近代		23	7
SK65	楕円	0.50	0.25	0.26		近世～近代		25	
SK68	楕円	0.90	0.55	0.53	陶器	近世～近代	SK68>SP105	23	
SK69	楕円	0.90	0.60	0.30		近世～近代		25	7
SK70	円	0.40	0.32	0.46		近世～近代		25	
SK71	楕円	1.32	0.67	0.60		近世～近代		26	
SK73	楕円	0.62	0.50	0.34		近世～近代	SK73<SK74・SK99	25	
SK74	楕円	1.23	0.80	0.54		近世～近代	SK74>SK73	26	
SK75	円	0.36	0.34	0.18	越中瀬戸	近世～近代		23	
SK77	不整形	0.76	0.54	0.40		近世～近代		25	
SK79	楕円	0.70	0.45	0.39		近世～近代		26	
SK82	楕円	1.17	0.69	0.72		近世～近代	SK82<SD84	26	
SK83	不整形	1.40	0.72	0.48	伊万里	近世～近代	SK83<SD85	23	
SK87	楕円	0.70	0.53	0.75		近世～近代	SK87<SD85	26	
SK89	楕円	0.80	0.36	0.25		近世～近代		26	
SK90	不整形	1.35	1.15	0.60		近世～近代	SK90<SP91	24	
SK93	不整形	2.60	1.82	0.30	伊万里・唐津・瀬戸・陶器・磁器	近世～近代	SK93>SD56	23	
SK94	円	0.55	0.26	0.25		近世～近代	SK94<SD56	26	
SK95	円	0.33	0.28	0.31		近世～近代	SK95<SD56	26	
SK97	不整形	0.75	0.53	0.28		近世	SK97<SP96・SE102	26	
SK98	楕円	0.67	0.53	0.22	瓦質土器	近世～近代	SK98>SD56・SD101	23	
SK107	楕円	0.65	0.43	0.31		近世～近代		26	
SK108	楕円	0.88	0.42	0.30		近世～近代		26	
SK111	方?	0.81	0.47	0.44		近世～近代		26	
SK113	楕円	1.00	0.37	0.30		近世～近代	SK113>SD110	26	
SK114	円	0.92	0.85	0.44	磁器	近世～近代	SK114>SD3	24	
SK115	楕円	1.53	0.85	0.28	伊万里・唐津・瀬戸・磁器	近世～近代	SK115>SD3・SD104	24	
SK116	楕円	0.85	0.60	0.45	底板	近世～近代	SK116>SD3	24	
SK117	楕円	1.07	0.64	0.10		近世～近代		26	
SK119	円	0.62	0.53	0.14		近世～近代	SK119>SD28	26	
SK120	不整形	3.62	1.95	0.30	珠洲・伊万里・唐津・瀬戸・磁器	近世～近代	SK120>SD28	24	
SK121	不整形	3.27	1.05	0.14		近代～近代		26	
SK123	円	0.40	0.38	0.06		近世～近代		26	
SK129	楕円	1.45	0.63	0.43		近世～近代		24	
SK130	楕円	0.82	0.20	0.18		近世～近代		24	
SK138	楕円	1.50	0.97	0.28		不明		26	
SK139	楕円	0.97	0.52	0.65		近世～近代	SK139>SP91	24	
SK140	不整形	0.80	0.75	0.26		近世		26	
SK142	楕円	1.55	1.04	0.61	瓦・桶・加工板	近世	SK142>SP55	23	7
SK144	方	1.40	1.20	0.17		不明		26	
SK201	楕円	1.27	0.82	0.09	瓦	近代		47	
SK202	不整形	2.10	0.93	0.19	唐津	近代		47	
SK203	方	2.73	1.81	0.22		近代		48	
SK204	円	0.90	0.82	0.09		近代		20	
SK205	円	1.02	0.92	0.28		近代		47	20
SK206	楕円	0.95	0.75	0.28		近代		47	
SK215	楕円	0.86	0.88	0.34	桶	近代		47	20
SK230	不整形	4.37	2.56	0.15	越中瀬戸	近世		38	14
SK234	方	2.47	1.38	0.26		近世	SK234<SK230	43	
SK235	方	3.43	1.76	0.33	青磁・越中瀬戸・伊万里・唐津・加工板	近世		38	15
SK236	方	1.95	1.48	0.12	唐津・柱	近世		38	
SK245	不整形	2.79	2.03	0.06		近世		43	
SK246	方	3.56	2.54	0.14	唐津	近世		38	
SK247	方	3.80	2.00	0.30		近世		38	

第6表 江尻遺跡 土坑その他一覧(2)

遺構番号	平面形	規 模(m)			出土遺物	時 期	備 考	挿図番号	図版番号
		長さ	幅	深さ					
SK250	楕円	4.08	1.37	0.48		近世	SK250<SB14	43	
SK251	方	4.33	3.06	0.34	白磁・瀬戸美濃・伊万里・唐津・瀬戸	近世		39	
SK253	方	2.43	0.26	0.14		近世		43	
SK254	方	3.75	2.17	0.27	弥生土器・越中瀬戸・瀬戸	近世		39	
SK258	方	1.51	1.26	0.33	土師器・越中瀬戸・伊万里・唐津	近世		39	
SK259	方	2.84	1.78	0.54	珠洲・越中瀬戸・唐津	近世		39	16
SK261	方	4.14	1.36	0.35	弥生土器・瀬戸美濃・唐津	近世	SK261>SK262	37	
SK262	円	2.44	2.28	0.28	弥生土器・越中瀬戸・陶器・瓦	近世	SK262<SK261	37	17
SK263	方	2.11	1.16	0.59	弥生土器・越中瀬戸・唐津	近世		39	
SK268	方	0.85	0.68	0.06		近世		43	
SK269	方	1.86	1.11	0.24	弥生土器・伊万里・桶	近世		39	17
SK270	方	1.92	1.22	0.12		近世		43	
SK274	方	7.30	1.21	0.07	弥生土器・唐津	近世		36・37	
SK275	楕円	1.50	0.57	0.24		近世		43	
SK276	方	2.06	1.97	0.33	弥生土器	近世		43	
SK278	円	1.27	1.06	0.37		近世		43	
SK281	方	2.32	2.00	0.36	越中瀬戸・伊万里・唐津・加工板	近世		39	15
SK282	方	2.70	2.02	0.05		近世		44	
SK315	円	0.55	0.45	0.09	土師器	近世			
SK318	楕円	0.82	0.44	0.22		近世		41	
SK321	楕円	1.05	0.47	0.15	越中瀬戸	近世			
SK326	楕円	0.87	0.63	0.32		近世		40	
SK328	楕円	1.09	0.40	0.09	越中瀬戸	近世			
SK346	楕円	0.82	0.45	0.25	弥生土器・土師器・柱	近世		40	
SK355	楕円	0.84	0.33	0.31	弥生土器・越中瀬戸	近世			
SK366	円	0.67	0.65	0.26	柱	近世		40	
SK367	円	0.62	0.57	0.22		近世		41	18
SK381	楕円	1.43	0.58	0.45	柱	近世		41	
SK384	楕円	0.93	0.54	0.28	柱	近世		41	
SK385	円	0.67	0.62	0.15	越中瀬戸	近世			
SK388	楕円	1.06	0.53	0.38	弥生土器・唐津・土製品・柱	近世		41	
SK392	楕円	0.68	0.25	0.14	柱	近世		41	
SK395	楕円	1.28	0.72	0.50	弥生土器・唐津・柱	近世		41	18
SK413	楕円	0.42	0.25	0.30	柱	近世			
SK426	楕円	1.89	1.67	0.46	弥生土器・唐津・柱	近世		42	18
SK436	楕円	0.64	0.43	0.19	弥生土器・越中瀬戸	近世			
SK448	楕円	0.62		0.45	弥生土器・越中瀬戸・伊万里	近世			
SK454	方	0.30	0.29		越中瀬戸	近世			
SK503	隅丸	1.10	0.60	0.15		近世		51	
SK504	円	1.05	0.58	0.52		近世		51	
SK505	楕円	2.20	1.30	0.18		近世		51	
SK506	隅丸	3.52	1.85	0.22	弥生土器・中国製陶器・珠洲・瀬戸美濃	中世		51	
SK507	土杭	5.73	2.42	0.40		近世	SD513<SK507<SD517	51・52	22
SK508	楕円	2.05	0.93	0.07				51	
SK509	隅丸	0.82	0.73	0.08				51	
SK510	不整形	3.65	1.87	0.12	弥生土器・珠洲・砥石	中世			
SK524	楕円	0.63	0.37	0.20		近世		51	
SK525	円	1.09	0.82	0.07		近世		51	
SK529	楕円	0.66	0.53	0.25		近世		51	
SK533	楕円	0.30	0.32	0.11		近世		51	
SK537	楕円	1.09	0.59	0.32		近世		51	
SK539	楕円	0.81	0.28	0.11		近世		51	
SK540	楕円	0.76	0.30	0.11	弥生土器	近世	SK540<SD514	51	
SK541	楕円	0.79	0.23	0.20		近世		51	
SK542	楕円	0.63	0.59	0.35		近世		51	
SK551	円	1.43	0.50	0.43		中世		16	
SK553	隅丸	1.24	1.14	0.26		中世		16	
SK621	楕円	0.97	0.84	0.15		中世	SK621>SD620	16	
SO563	不整形	3.37		0.22		弥生	SO563<SD554~SD558	13	
SX224	方形	1.70			弥生土器・陶器・磁器・瓦	近代		47	20
SX457	不整形	3.61	2.29	0.24	弥生土器・伊万里	近世		37	
SX458	不整形	4.03	2.62	0.07	弥生土器	近世		37	
SX459	不整形	2.90	1.51	0.18	弥生土器・伊万里	近世			
SX460	不整形	1.82	1.46	0.19		近世		43	
SX461	不整形	3.37	1.82	0.14	伊万里	近世		43	
SX462	不整形	1.43	1.25	0.15	弥生土器	近世	SX462<SX461	43	
SX463	不整形	4.85	3.10	0.27	弥生土器・越中瀬戸・唐津	近世		43	
SX618	不整形	5.95	4.96	0.11		弥生		13	
SX627	不整形	7.62	6.10	0.13	珠洲	弥生		13	
SX629	不整形	12.5	4.85	0.22	中世土師器・近世陶器	中世・弥生			
SX638	不整形		4.00	0.10		弥生		13・55	
SX646	不整形	2.56	1.74	0.11		中世・近世		16	

第7表 江尻遺跡 溝一覧(1)

造構 番号	規 模(m)		出 土 遺 物	時 期	備 考	挿図番号	図版番号
	幅	深 さ					
SD 1	3.80	0.52	越中瀬戸・伊万里・唐津・瀬戸・陶器・磁器・加工板・釘	近代	SD1>SD2	27	8
SD 2	2.40	0.84	珠洲・越中瀬戸・伊万里・唐津・瀬戸・陶器・木箱・桶・加工板	近世	SD2<SD1	27	8
SD 3	1.60	0.50	瓦質土器・越中瀬戸・唐津・陶器・磁器	近世	SD3<SD2・SD4・SD5	27	8
SD 4	1.80	0.28	伊万里・唐津・瀬戸	近世～近代	SD4<SD1	27	8
SD 5	0.60	0.15	陶器・木製品	近世～近代	SD3・SD6・SD28・SD118<SD5<SD4	27	
SD 6	0.80	0.07		近世～近代	SD118<SD6<SD2・SD5	27	
SD 7	0.40	0.11		近世～近代	SD3<SD7<SD2・SD4	27	
SD 8	0.60	0.24		近世～近代	SK58<SD8<SK13・SK16・SP17	27	
SD 9	1.30	0.43	瀬戸	近世～近代	SD9<SD4・SD27・SD101	27	
SD10	1.00	0.50	珠洲・伊万里・唐津・陶器・加工板・砥石	近世～近代	SD10>SD2・SD118	28	
SD25	0.35	0.08		近世～近代	SD25<SD9	28	
SD26	0.40	0.08		近世～近代		28	
SD27	0.93	0.40	漆器	近世～近代	SD9<SD27<SD3・SD4	28	
SD28	1.30	0.57	瀬戸美濃・珠洲・越中瀬戸・伊万里・唐津・陶器・箸・漆器・加工板・硯	近世～近代	SD28<SD5・SD118・SK106・SK119・SK120	28	
SD43	0.60	0.10	唐津・打製石斧・種子	近世～近代	SD43<SD4・SK22	28	
SD44	1.20	0.18		近世～近代	SD44<SD4・SK20	28	
SD56	1.20	0.17	越中瀬戸・伊万里・唐津・磁器・陶器・金属製品	近世～近代	SK94・SK95<SD56<SK93・SK98・SD101・SE102	28	
SD84	0.32	0.40		近世～近代	SD84>SK82	28	
SD85	0.22	0.06		近世～近代	SD85>SK83・SK87・SD100	28	
SD100	0.22	0.13		近世～近代	SD100<SD85		
SD101	0.44	0.15		近世～近代	SD4・SD9・SD56<SD101<SK98	28	
SD104	0.40	0.08		近世～近代	SD3<SD104<SK115	28	
SD110	0.40	0.06		近世～近代	SD110<SD1・SK113	28	
SD118	2.65	0.50	越中瀬戸・伊万里・唐津・陶器	近世～近代	SD28<SD118<SD2・SD5・SD10	28	
SD122	0.47	0.20		近世～近代		28	
SD131	30.60	0.52	縄文土器・弥生土器・打製石斧	縄文～弥生		9	2
SD218	2.50	0.70	弥生土器・珠洲・瀬戸美濃・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里・越中丸山・関西・加工板	近代		48	20
SD222	0.38	0.15		近代	SD222>SD286	44・48	
SD223	1.73	0.46	弥生土器・土師器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里・唐津・陶器	近代	SD223<SD218	48	14
SD257	0.44	0.20	弥生土器	近代		44	
SD286	1.40	0.06	伊万里	近世	SD286<SD222	44・48	
SD287	0.90	0.10	越中瀬戸・伊万里・唐津	近世		44	
SD288	0.80	0.20	弥生土器・越中瀬戸・伊万里・唐津・越中丸山・陶器	近世		44	
SD289	1.80	0.10	弥生土器・土師器・越中瀬戸	近世		44	
SD290	0.38	0.15	弥生土器・陶器	近代		44	
SD291	0.80	0.12	弥生土器・珠洲・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里・唐津・越中丸山・関西	近世	SD291>SE256	44	14・17
SD292	2.90	0.48	弥生土器・中国製陶器・瀬戸美濃・越中瀬戸・伊万里・唐津・越中丸山・関西	近世		44	
SD293	0.75	0.07	弥生土器・越中瀬戸・唐津	近世	SD293>SD294	44	
SD294	0.18	0.07		近世	SD294<SD293	44	14
SD295	0.40	0.06	伊万里	近世	SD295>SB11・SX261・SX263	44	
SD297	0.70	0.06	珠洲・越中瀬戸・唐津	近世		44	
SD298	0.62	0.10	弥生土器・越中瀬戸・伊万里・唐津・砥石・釘	近代	SD298>SD295	44	14
SD299	0.69	0.14	弥生土器	近世		44	
SD470	0.35	0.18	弥生土器	中世		16	
SD471			唐津・瀬戸	近世			
SD472	0.79	0.14	陶器・弥生土器	弥生		11	
SD473	1.30	0.16	弥生土器	弥生		11	
SD474	1.06	0.06	弥生土器	弥生		11・43	
SD475	1.55	0.17		弥生	S I 201壁溝	10	
SD476	0.33	0.12		弥生	S I 201排水溝	10	
SD477	1.30	0.17	弥生土器・伊万里・唐津	弥生		11	4
SD481	6.00	0.24	弥生土器	縄文～弥生		9	
SD512	0.40	0.08		近世	SD513<SD512<SD517	52	
SD513	3.31	0.20	弥生土器・土師器・中国製陶器・珠洲・越中瀬戸	中世～近世	SD513<SD512<SD517	16・52	22
SD514	3.35	0.33	越中瀬戸・弥生土器・珠洲・磁器・銅錢	近世		52	23
SD515	0.60	0.06		近世	SD515>SB17	52	
SD516	0.55	0.07	陶器	近代		16	
SD517	2.50	0.34	近代磁器	近世	SD517>SD512>SD513	52	22
SD518	0.65	0.09	中世土師器	近代		52	
SD554	1.24	0.20		弥生		12	
SD555	0.85	0.28	弥生土器	弥生		12・13	
SD556	0.70	0.27	弥生土器	弥生		12	
SD557	0.72	0.20	弥生土器	弥生		12	

第7表 江尻遺跡 溝一覧(2)

遺構 番号	規 模(m)		出 土 遺 物	時 期	備 考	挿図番号	図版番号
	幅	深さ					
SD558	0.45	0.08	弥生土器	弥生		12	
SD559	0.92	0.12		弥生		12	
SD562	0.70	0.07	珠洲	中世			
SD601	7.00	0.25	弥生土器・中世土師器・近代陶器	近世～近代		54	
SD602	0.40	0.10		弥生		12	
SD603	0.40	0.10		弥生		12	
SD604	2.95	0.30	弥生土器・中世土師器・越中瀬戸・伊万里・漆器・加工棒・鉛玉	近世～近代		54	
SD605	2.95	0.47	弥生土器・鉢・加工棒・木製品	弥生		12・14	4
SD606	0.50	0.05		弥生		12	
SD607	0.26	0.08		弥生		12	
SD608	0.36	0.07		中世		16	
SD609	0.46	0.05		中世		16	
SD610	0.60	0.01		中世		16・54	
SD611	3.15	0.21		近世～近代		54	
SD612	2.00	0.25	越中瀬戸・漆器	近世～近代		54	
SD613	3.20	0.48	弥生土器	弥生		12	
SD614	1.22	0.06	弥生土器	近世～近代		54・55	
SD615	1.75	0.21	弥生土器・越中瀬戸	弥生		54	
SD616	1.70	0.20	珠洲	中世		16・55	
SD617	2.05	0.10	珠洲	中世		16	
SD620	0.49	0.09		中世		16	
SD622	0.46	0.15		近世～近代		55	
SD623	0.98	0.08		弥生		12	
SD624	0.50	0.08		弥生		12	
SD626	1.20	0.17		弥生		12・55	
SD631	0.70	0.03		弥生		16	
SD632	1.35	0.05					
SD633	0.61	0.13					
SD634	0.70	0.09		近世～近代	SD634<SD635<SD604	55	
SD635	2.00	0.58	越中瀬戸・唐津	近世～近代	SD634<SD635<SD604	55	
SD636	0.44	0.13	越中瀬戸	近世～近代	SD636<SD640	55	
SD637	1.60	0.23	弥生土器・珠洲・瓦質土器・越中瀬戸・伊万里	近世～近代		55	
SD639	2.00	0.08		縄文		55	
SD640	0.24	0.15		近世～近代	SD640>SD636	55	
SD641	0.38	0.12	越中瀬戸	近世～近代		55	
SD642	0.57	0.17		近世～近代		55	
SD643	0.34	0.08		近世～近代		55	
SD644	1.12	0.09	越中瀬戸	近世～近代		55	
SD645	0.80	0.06		近世～近代		55	
SD703	9.50	0.22	縄文土器・木製品	縄文		9	

### 3 遺 物

江尻遺跡からは縄文時代、弥生時代、中世、近世、近代の各時期の遺物が出土している。大半が土器・陶磁器類で、遺物収納用コンテナで概算120箱と、木製品・金属製品・石製品がある。このうち木製品には一部弥生時代のものが含まれるが、大半は近世以降の所産である。また石製品には縄文時代の打製石斧が含まれるが、数は多くない。他の木製品・石製品はやはり近世以降のものが主体を占める。以下に時期を追ってこれらの出土遺物について概述していきたい。

#### A 縄文時代（第56図、図版33・38）

第56図1～9は縄文土器、10～14は縄文時代の打製石斧である。縄文土器・石器自体はA～C地区の広い範囲から出土するものの、その数はきわめて少ない。これらの土器・石器は大半が縄文谷の埋土や包含層、他時期の遺構から混入として出土している。1は縄文土器の鉢と考えられる小破片で、表面が摩耗するものの、一部に条痕が残る。2は瘤状突起の周辺に沈線がある小破片である。3は体部の小破片で、外面に条痕が観察される。4・7は平底の底部破片で、4は外面に条痕がみられ、外底面に編物痕が残る。7も底部外面に簾状の圧痕が残る。5は深鉢の口縁部破片で、口径45cm弱を数える。口縁端面に山形の突起がみられ、口縁内端に沈線が施される。内面は平滑であるが、外面には粘土の輪積みの痕が残る。6・8・9は浅鉢で法量がそれぞれ異なるが、いずれも内傾する口縁部に半球状の体部を有する。6は小型の浅鉢で口径は18cm、口縁部外面に2条の沈線を施し、体部外面はヘラミガキする。8は部分欠損するものの、口径20cm、体部最大径22～23cm、器高14～15cmの法量である。口縁外面の沈線は3条、下半はヘラケズリする。9は口径32cmの大型のもので、口縁端面に1条、外面に3条の沈線を施す。これらの縄文土器は小破片が多く時期を特定し難いものの、概ね晩期後半の範囲で捉えられる資料と考えておく。

10～14は縄文時代の打製石斧である。これらの石斧の多くはA・B地区の縄文谷の埋土中より出土している。5点の石斧のうち2点はほぼ完存するが、残りの3点には折損・欠失がみられる。形態は10・11・13が短冊形、12・14が分銅形を呈する。腹面（主要剥離面）側は全面に調整剥離が施されることが多いが、背面側には大きく自然面を残し、両側縁のみが部分的に調整剥離されている。大きさは短冊形のもので長さ13～14cm、幅7～8cm、厚さ1.6cm～3cm。分銅形のものは最大幅10～11cm、厚さ3～3.5cmである。材質は10・11・14が凝灰岩、12・13が砂岩である。

#### B 弥生時代

弥生時代後期から終末頃の遺物はA～Cの全地区で出土している。包含層出土のものが多いが、B1地区の竪穴住居とその周辺や、C地区の溝など遺構に伴うものも若干含まれる。なお第57図から第59図は全て土器類の実測図で、弥生時代の木製品の実測図はレイアウトの都合上後述のC中・近世（2）木製品の項に掲載した。

#### A地区（第57図15～56・第58図57～59・61～68・70、図版25・26・33）

A地区の遺物はいずれも包含層から出土している。このうち15～24は、有段口縁で外面に擬凹線を施す壺・甕の口縁部である。17・22のように段が明確なものは少なく、むしろ段差状に緩く屈曲し、端部が直線的に外傾するか、軽く外反するものが多い。口縁内面の指頭圧痕は観察されない。口径較差からみて15～17は壺、それ以外は甕と考えておく。25・26は口縁が短く「ハ」の字状に開き、端部に面を有する甕。27は同じく端部に面を持つが、口縁部自体は外反する。28は短く内傾する受け口状の口縁を有する小型甕。体部は球形で、底部は平底。最大径は体部中位よりやや上にあり、外面には

縦に短い刻目を配す。体部外面はハケ調整、内面には縦方向のヘラケズリが施される。口径16.4cm、体部最大径16cm、器高17cm。29は口縁部が短く「ハ」の字状に開く甕。口径は17cm、最大径は体部中位にあり、26cmの復元径となる。30は口縁部が軽く外傾しながら直線的に立ち上がるタイプの壺。器表面の摩耗が激しいが、内外面に横方向のヘラミガキが観察される。31～33は口縁部が外反して開く甕。端面を丸くおさめるもの（31・32）と、端部に面をもつもの（33）がある。39は「く」の字状口縁の甕で、体部外面にタタキ状の痕が観察される。34・35は小型の甕。34の口縁部は指押さえで凹凸をつける。36・38は中・小型の鉢。40～43は底部の破片。40～42は甕の底部、43は壺の底部で外底面に「十」字状のヘラ描きがみられる。44～49は蓋で、そのほとんどが赤彩される。丸みのある天井部の中央につまみが付く。内外面はヘラミガキされる。完存する46では口径10cm、器高3cmである。50は小型の壺の体部破片で、内外面をヘラミガキする。51は小型の有段細頸壺の頸部破片で、頸部接合部に3条の沈線が施され、上部は縦方向に緻密にヘラミガキされる。52は頸部の中位に段を有する。内外面は緻密にヘラミガキを施す。53は球形体部に短く外傾する口縁部を有する小型の壺で、内外面にヘラミガキを施す。口径10cm、体部最大径13.8cm、器高12.8cm。54は細頸壺の頸部で残存高8cmを数える。55は体部の破片で、外面を横線によって区画して文様帯を形成し、間を綾杉文で飾る。56はいわゆる器台結合壺と呼ばれるものに該当し、ちょうど体部中位の器台口縁部を表現した部位の破片である。37・57～59は高杯の杯部で、37と59は口縁部が立ち上がる屈曲部に稜を有し、さらに沈線、刻目などで飾る。57・58は脚との接合部から杯部が大きく浅く開くもので、口縁部との明瞭な境界はないものの、体部外面の下位に稜状の段差を有する。61～68・70は脚部である。脚部上端の接合部には円盤充填ないしはその痕跡がみられるものが多い。透かしは67・70が三方、68が四方の円孔透かしとなっている。

#### B 地区（第58図60・69・71～101・第59図102～129、図版25・26・34・37・38・40・41）

B地区の出土遺物はA地区同様包含層や中世以降の遺構内からの混入出土もあるが、一部は竪穴住居などの遺構に伴っている。71～74は有段口縁で外面に擬凹線を施す甕の口縁部で、段が明確なものではなく、かろうじて屈曲面として段が表現されている。79～83は有段口縁で無文のもの。器壁が薄く口縁端部を鋭くおさめる75～79・83と、口縁部自体が直立気味に立ち上がり、器壁が厚く端面を丸くおさめる80～82がある。83は唯一体部中位までの残存例で、口縁部外面には形骸化した擬凹線がわずかな凹凸で表現されている。体部外面は一面に煤が付着するが、ハケ調整の上からナデ仕上げして器表面を平滑にしている。内面は全体が横方向にヘラケズリされている。口径15.4cm、体部最大径24cmの復元値を数える。この甕はB1地区の竪穴住居区画溝S D477から出土している。84～92は口縁部が短く外反し、端部に面を有する甕である。いずれも小破片で形態・手法とも正確に窺い知ることができないが、体部の外面はハケ調整、内面はヘラケズリされたものが多い。93～98は口縁部に段がつく壺で、口縁端部は面を持ち外反気味に開く。93は頸部以下の内外面をハケ調整する。94は屈曲部外面に円形浮文を貼り付ける。97は同じ壺でも器壁が薄く、口縁部がわずかに内傾しながら立ち上がる。内外面を緻密にヘラミガキし、外面は赤彩される。98は台付壺の体部破片で、体部中位屈曲部の外面に大きく2条の凹線を巡らす。99～101は底部の破片で、99が甕、100は壺、101は有孔鉢と考えられる。102～108はつまみを有する蓋で、103のみ完存する。天井部は浅く大きく開き、つまみの端面には刻目が施される。内外面は緻密にヘラミガキされ、赤彩される。104・105・107・108はつまみと天井部の境界がなく、つまみの中央部を凹ませる。109・110は鉢と考えられる小破片である。111は器台で、短く側方に開く台部と中央が穿孔される脚部を有する。器表面全面が緻密にヘラミガキ

される。60・112～117は高杯の杯部である。112はカップ形の形態で、口縁部が直角に屈曲した後、やや内傾気味に直線的に立ち上がる。外面全体を横線と綾杉文の組み合わせで装飾する。117は脚部接合部付近で軽く屈曲したのち、斜外方に開く杯部の形態。内外面とも上下三段にわけてヘラミガキを施す。60も高杯の可能性が高いが、内外面はヘラミガキではなく、荒いハケミガキとでもいうような調整が施される。69・118～128はいずれも脚部の破片である。このうち69・123は四方の円孔透かしを有する。また120は脚部中位の外面に1条の沈線を巡らす。129は口縁部に段を有する大型の鉢である。器壁は薄く、稜線のエッジを鋭く仕上げる精製品である。内外面を隈無く緻密にヘラミガキするが、赤彩は施されない。

#### C地区（第59図130～144、図版25・38）

C地区からの出土遺物は量的には多くないが、溝などの遺構に伴うものが含まれる。130は有段口縁で外面に擬凹線を有するもの、131は擬凹線のないもの。135も後者のタイプの甕と考えられる。球形の体部の外面にはハケが、内面は成形時の分割単位（体部3分割）毎にヘラケズリの切り合いが観察できる。この甕はS D613から出土している。132～134は口縁部が短く外反し、端部に面をもつ甕。136・137は小型の有段口縁甕で、外面は無文である。138～140は底部。138・139は甕の底部で小径のもの。140は内外面がヘラケズリされる。141・142は高杯の脚部である。143は幅広のつまみを有する蓋である。144は長頸壺で、体部下半を欠失する。頸部は外傾気味に斜め上方に立ち上がり、端部は上方に鋭くおさめる。外面全体はヘラミガキを施す。

### C 中・近世

#### (1) 土器・陶磁器

江尻遺跡の出土遺物の主体をなすのが中・近世である。中でも近世の陶磁器が最も多い。これはA・B地区で検出された屋敷地遺構がおよそ17世紀以降に成立し、明治中期頃まで当地で継続的に営まれていたことによる。これに対しC地区では相対的に近世の陶磁器の出土は少ない。また中世の遺構はB・C地区で若干の溝状遺構が検出されたに過ぎず、このため出土遺物もそれほど多くない。出土遺物には土師器の皿類、珠洲の壺・甕・擂鉢類、瀬戸美濃の施釉陶器、中国陶磁などがある。近世およびそれ以降では越中瀬戸、越中丸山、唐津の施釉陶器や擂鉢類、伊万里（肥前系磁器）、関西系磁器、瀬戸系磁器、中国磁器（明末の染付磁器）、近代以降の銅版プリントの磁器、および土製品などがみられる。この中では越中瀬戸と唐津および肥前磁器の染付が多く目に付く。また擂鉢では唐津と越中瀬戸の二者の製品がみられる。なお実測図は、まず遺構出土と包含層出土のものに大きく二分し、次いで各地区毎のレイアウトとした。以下に出土遺物について概述する。

#### ①遺構の出土遺物

##### A地区

##### 井戸

###### 21号井戸（S E21、第60図160～163、図版29・40）

160～162は越中瀬戸の灰釉の皿。163は伊万里の丸形の蓋付碗で、外面と内面見込みに龍をモチーフとした絵柄を描く。薄手の精製品で、18世紀代の所産。なおこの碗と同様の図柄の蓋や碗がB地区で出土する。何客かまとめてセットで入手したのだろう。

##### 土坑

###### 18号土坑（S K18、第62図191、図版39）

素焼きの土鈴。中空洋梨形の基部に紐を通す穴が穿孔され、下端は細長く長方形に切り込みを入れ

る。時期不詳。県内の中・近世の遺跡からの出土例がいくつか報告されている。

### 35号土坑（S K35, 第62図192, 図版39）

越中丸山の焙烙の蓋。内面は鉄釉が施釉される。外面中央のつまみはリング状のもので、この部分は施釉しない。天井部の厚みが極めて薄い点が特徴的である。

### 98号土坑（S K98, 第62図190, 図版39）

瓦質土器の小破片で、外面に連続する亀甲文のスタンプがみられる。器種不明。

### 114号土坑（S K114, 第62図189, 図版39）

端反りの磁器の碗で、外面に鉄釉の文様加飾がみられる。生産地不詳。

### 115号土坑（S K115, 第62図183～185, 図版39）

183は伊万里の白磁皿の破片である。184は伊万里の染付の小皿で、底部は蛇の目削り出しの高台となる。185は唐津の陶胎染付の椀。

### 120号土坑（S K120, 第62図186・187, 図版39）

186は唐津・内野山の銅緑釉の皿。187は伊万里の染付の小皿。内面見込みの中央に手書きの五弁花文、見込みに交叉草文を配す。B地区で類品が出土している。

### 75号土坑（S K75, 第62図188, 図版41）

越中瀬戸の小皿で、灰釉が漬け掛けされる。

## 溝

### 1号溝（S D 1, 第60図145～159, 図版28・29・32）

145・146は伊万里の染付の皿で、内面見込みに沿って釉が蛇の目に剥ぎ取りされている。145は中央に崩れた五弁花文のコンニャク印判がみられる。146は格子文が描かれる。ともに18世紀代の波佐見の製品と考えられる。147は磁器染付の小碗。一応伊万里と考えたいが、呉須の濃（だみ）が盛りあがっており在地産の可能性がある。148は伊万里の水滴で、体部は上面の文様部を含めて型押成形し、さらに呉須で文様の凹凸を強調する。底部は薄く型押成形され、内外面に布目痕が残る。149は伊万里の白磁の紅皿。150は伊万里の花瓶。151は外青磁の染付の鉢で、底部は蛇の目高台となる。18世紀後半から幕末にかけての時期。152・153は唐津の陶胎染付の椀。陶器の胎土に白色土を化粧掛けし、その上から山水文などを呉須で描く。154は伊万里の酒杯。帆船をあしらった京浜図が外面に描かれる。155は越中瀬戸の平高台の皿。底部は回転糸切りされ、内面は鉄釉を施す。156は削り出し輪高台の越中瀬戸の皿。明赤褐色の胎土に薄い灰釉を施す。内面見込みに釉止めの段が巡る。内面見込み部分の使用痕が著しい。157は越中瀬戸の鉄釉の壺。158は唐津の擂鉢の破片。内面に櫛描きで卸目を施し、口縁部の内外面のみ薄く鉄釉を施す。159は越中瀬戸の擂鉢。卸目は内面全体に隈無く施し、さらに鉄釉を全面に施す。

### 2号溝（S D 2, 第61図164～166, 図版32）

164は伊万里の染付の皿で、口縁部は口鑄が施され、さらに体部の内外面をコンニャク印判で加飾する。体部内面は約6分の1を1単位とする帯状の印判によって施文される。この印判の模様は、中央に梅花様の一輪の花を配しその周辺を唐草文で埋めたものである。これを部分的に重なり合わせながら連続的に施文している。体部外面もコンニャク印判で、こちらは梅花様の二輪の花の両脇に唐草文を這わせている。こちらの施文は連続させず、2単位に分れる。また外底面には「大明成化年製」のうちの「製」の文字が部分的に残る。17世紀末から18世紀初頭に位置づけられるもので、このような印判手は珍しいという。165は越中瀬戸で、内面に油溜まりのカエリを有する鉄釉の灯明皿。166は

珠洲の壺で、古い時期の遺物が混入したのであろう。

### 3号溝（S D 3, 第61図167~169, 図版32）

167は唐津の折縁の鉢。体部内面の横線の区画内に梅花様の二輪の花をスタンプで施文する。体部外面は灰釉、口縁部および体部内面は鉄釉を施す。168は越中瀬戸で、鉄釉が内面にも施されており、同じ袋物でも口が大きく開く。茶入れなどの可能性が高い。169は土師質の火鉢で、底部に円形で径2.5cm、高さ0.3cmの低いが安定した支脚が付く。類例からみておそらくは三脚。内外面はヘラミガキされる。内面は底部から3cm程上の部分が輪状に焼けている。

### 9号溝（S D 9, 第61図170, 図版29）

伊万里の染付で、腰張形の碗。外面に銀杏の葉、竹、水仙などを描く。外底面には「大明年製」と記されているが、判読できないほど漢字が崩れている。

### 28号溝（S D 28, 第61図171~177, 図版30・31・33）

171は伊万里の染付の中瓶で、ラッキョウ形徳利の体部。正面には岩座に草花文を大きく配して描く。172は唐津・内野山の銅緑釉の皿で、内面見込みは蛇の目釉剥される。高台は削り出し。173・174は唐津のいわゆる三島手の刷毛目文椀。器形は前者が腰張形の中椀、後者は瓶ないしは壺の破片で、くり底の底部を有する。175は越中瀬戸の鉄釉小皿。176・177は唐津の陶胎染付の椀。177は外面にくずれた四方櫻文と山水文を描く。17世紀末から18世紀の時期。

### 43号溝（S D 43, 第61図178・179, 図版33）

178は伊万里の染付で、腰張形の碗。外面には竹林文が描かれる。外底面には「大明年製」の文字の一部が観察できる。179は越中瀬戸の鉄釉火入れの底部破片。

### 56号溝（S D 56, 第61図180, 図版33）

唐津・内野山の銅緑釉の小皿。内面見込みは蛇の目釉剥される。

### 118号溝（S D 118, 第61図181・182, 図版31・33）

181は伊万里の白磁皿で、内面見込みは蛇の目釉剥される。182は唐津の陶胎染付の椀。外面に崩れた四方櫻文と山水家屋文を描く。

## B 1 地区

### 井戸

#### 456号井戸（S E 456, 第66図276・277, 図版28）

2点とも越中瀬戸で、石組井戸の底部に据えられた転用木臼の上から出土した。276は灰釉陶器の丸形小皿。277は鉄釉の向付。ともに外底面に「十」の字の墨書がある。

### 土坑その他

#### 224号建物関連遺構（S X 224, 第65図278~280）

278は磁器染付の碗で、外面に中国の文人風の人物が描かれる。内面は口縁部が四方櫻文、内底面は省略された松竹梅文がみられる。いずれも銅版プリント。279は型抜き成形の磁器盃で、口縁部の3カ所を部分的に口鋸施釉する。280は磁器碗で、内外面は濃い銅緑色釉で施釉される。これら3点は明治期の建物遺構の基礎から一括して出土している。

#### 208号土坑（S K 208, 第65図283, 図版39）

施釉陶器の植木鉢。底部には幅広で3カ所に切り込みを入れた輪高台が付き、底部の中央に水抜きの円孔を穿つ。体部は筒形で、口縁部は側下方に屈曲させている。施釉は灰釉で、体部外面および口縁部の内外面を施釉する。近代以降の製品。

## 230号土坑（S K230, 第65図281・282, 図版28）

2点とも越中瀬戸の皿で、281は体部中位で軽く「く」の字状に屈曲、282はさらに口縁端部を内側に短く折り曲げている。281は灰釉、282は鉄釉の施釉である。

## 233号柱穴（S P233, 第66図290, 図版39）

唐津の陶胎染付で、外面に山水文を描く。全体に貫入が著しい。18世紀前半頃の製品と考えられる。

## 235号土坑（S K235, 第65図284・285, 図版31・39）

284は中国陶磁で、龍泉窯系青磁の碗。外面にヘラ描きの蓮弁文がみえる。285は越中瀬戸の壺で、平高台の寸胴の体部に短い口縁が付く。口径12cm弱、器高10cm前後。

## 243号柱穴（S P243, 第66図291, 図版39）

越中瀬戸の鉄釉擂鉢の底部。

## 246号土坑（S K246, 第66図292, 図版39）

唐津の陶胎染付で、体部外面に山水文を描く。

## 251号土坑（S K251, 第66図287～289）

287は瀬戸の炻器染付の筒形湯飲み。外面には菊花文を散らし、内面の中央に点描化した五弁花文を描く。288は伊万里の染付で丸形の中皿。内面見込みの中央に筆描きの五弁花文を、外縁に唐草文を配する。口縁部は口鋸が施される。内面見込みにはハリ跡と銘の一部（「明」か？）が残る。289も伊万里の染付の皿。破片のため文様構成が判然としないが、内面見込みの中央には筆描きの五弁花文が、外底面には「渦福」の銘の一部がみえる。

## 254号土坑（S K254, 第66図293, 図版39）

越中瀬戸の灰釉向付の口縁部破片。

## 258号土坑（S K258, 第66図294～296, 図版31・39）

294は唐津のいわゆる三島手の刷毛目椀。外面は刷毛で波状文を描く。内面は幅広の刷毛を圈線状に一筆描きする。18世紀前半頃の製品である。295は越中瀬戸の鉄釉無高台皿。底部は回転糸切りされ、そのまま平高台とする。296は唐津の擂鉢で、平高台に玉縁状に肥厚させた口縁部を有する。胎土は茶褐色のざらついたもので、口縁部の内外面のみ鉄釉で薄く施釉する。御目は櫛描きで幅が細く9条を1単位とする。

## 263号土坑（S K263, 第66図297～301, 図版40）

全て越中瀬戸の皿。丸形の小皿が多く、301のみ口縁部端反りの形態である。施釉は297・298が灰釉、299～301が鉄釉である。301はかなりの高温で二次被熱したらしく、釉が沸騰して一部がガラス状化している。

## 272号柱穴（S P272, 第67図307・308, 図版40）

ともに越中瀬戸で鉄釉の小皿である。

## 281号土坑（S K281, 第66図302～306, 図版29・31・40）

302は伊万里の染付の丸形小皿。内面見込みの中央に手描きの五弁花文を、さらに外縁を交叉草文で飾る。同様のモチーフの皿はA地区でも出土しており（第62図187），セットで入手されたと考えられる。303は伊万里の染付の丸形蓋付碗。内面は口縁部を四方櫛文、見込みに松竹梅文を配す。体部外面は腰部から下半を蓮弁文で、それ以外は精緻な筆運びで唐草文を描く。304も伊万里の染付で、丸形碗の口縁部破片。口縁内面には四方櫛文を、外面には飛鳥文を描く。305は鉄釉秉燭（ひょうそく）の破片。306は灯明皿で、口クロ成形の素焼きの素地に、口縁部と内面のみ透明釉で薄く施釉す

る。口縁部内面には4条の圈線が巡る。口縁端部の1カ所、灯明の芯受け部分に薄く粘土を「ハ」の字状に貼り付け、端面を肥厚させる。

315号土坑（S K315, 第67図317, 図版41）

中世の土師器小皿で、口縁部を横ナデし外反させている。

321号土坑（S K321, 第67図309, 図版41）

越中瀬戸の鉄釉小皿の底部破片。

323号土坑（S K323, 第67図310, 図版41）

越中瀬戸の鉄釉向付。

328号土坑（S K328, 第67図323, 図版41）

唐津の鉄釉擂鉢で、内面全体に櫛描きの卸目が施される。底部外面のみ露胎、他は内面を含めて施釉されている。

353号柱穴（S P353, 第67図311, 図版41）

越中瀬戸の鉄釉小皿で、体部外面は中位で稜線がみられるものの、全体に緩やかに内湾して浅く開く皿部となる。また底部外面には記号状の墨書がみられる。

355号土坑（S K355, 第67図312, 図版28）

越中瀬戸の灰釉小皿で、体部内面の中位に圈線状の凹線が連続して巡る。

388号土坑（S K388, 第67図316, 図版41）

人形の土製品で頭部を欠失するが、天神の座像と考えられる。

395号土坑（S K395, 第67図320, 図版41）

唐津の陶胎染付の椀底部破片。

400号柱穴（S P400, 第67図322, 図版41）

伊万里の青磁染付の中鉢。腰張形の器形で、口縁端部が輪花を表現するために切り込みされる。体部内面は青磁釉が施され、口縁部には梅花をあしらった波濤文を描く。

406号柱穴（S P406, 第67図313, 図版41）

越中瀬戸の鉄釉丸形小皿。

409号柱穴（S P409, 第67図315, 図版31）

越中丸山の施釉陶器碗で、下膨れの体部に短く内湾する口縁部が付く。体部は口クロ成形されたあと型当てされている。下方からみると体部の形状は円形ではなく、膨れた四角形で、辺の四隅に輪花状の凹みを縦方向に入れている。施釉は白色の長石釉で、口縁部外面のみ鉄釉で丸文を点描する。外底面に墨書がみられるが、意味は判然としない。

427号柱穴（S P427, 第67図314, 図版29）

越中瀬戸の灰釉小皿で、口縁部を鋭くおさめる。外底面の中央に「十」の墨書がある。

434号土坑（S K434, 第67図321, 図版41）

伊万里の染付の大皿破片で、釉は生掛けされる。いわゆる初期伊万里に該当する製品で、17世紀前葉に位置づけられる。

448号土坑（S K448, 第67図318, 図版41）

越中瀬戸の鉄釉小皿の破片。

454号土坑（S K454, 第67図319, 図版28）

越中瀬戸の鉄釉向付で、口縁部が短く直立する。

## 溝

131号溝（S D131, 第67図324）

中世の土師器小皿で、底端部から口縁が屈曲外反する。

218号溝（S D218, 第62図193～204・第63図205～228・第70図405, 図版30・31・33～35・45）

単独遺構からの出土遺物量としては、このS D218がもっとも多い。出土遺物の内容も多彩であるが、一部に近代のものも含まれる。193は伊万里のそば猪口で、外面に草文を配す。呉須の発色が悪く濃緑灰色を呈する。194は瀬戸の磁器染付の蓋付碗。明治以降の製品で、絵柄は銅版プリントされ、染付は人工コバルトと考えられる。195も瀬戸の磁器染付で、高台が高く体部が直線的に開く広東碗の型式である。幕末頃の製品と考えられる。196は端反り形の磁器染付の小碗。やはり瀬戸の製品。絵柄は手描きだが、染付は人工コバルトである。明治以降のもの。197はA地区 S D 1 出土の147と同種の小碗である。198は筒丸形の磁器染付の小碗で伊万里と考えられるが、呉須の発色が悪く薄くぼけている。199は型抜き成形の磁器染付の小皿。口縁部が大きく側方に端反るもの。内面に擬人化した獅子を銅版スタンプする。明治以降の製品。200・201は施釉陶器の鉢で、波状の口縁を有す。200は鉄釉、灰釉、長石釉などを厚めに重ね掛けする。201は鉄釉のみの厚掛けで、胎土は越中丸山に類似する。いずれも近代以降の製品である。202～204は擂鉢。全て有高台で、鉄釉を部分施釉する。内面の卸目は全面に施される。赤茶褐色の胎土が特徴的。いずれも唐津で、19世紀以降の製品と考えられる。205～221は磁器染付で、211・221以外は伊万里の製品と考えられる。205は口縁部を玉縁にする小皿。内面には簡素な松葉折れ文ないしは草文が描かれる。18世紀末から幕末の製品。206は端反り口縁の小皿で、内面全体に仙芝祝寿文を描く。207・208は磁器染付の蓋と碗で、つくりや絵柄、釉調が同じでセットと考えられる。同様の蓋付碗はA地区 S E 102（第60図163）でも出土している。209は端反りの蓋付碗で、外面に山水文が描かれる。18世紀末から幕末頃の製品。210は初期伊万里の碗で、外面には網目文と丸窓文を描く。1630～1640年代に比定できる。211は磁器染付の碗で、釉調や文様は第60図147や第62図197と共通する。瀬戸ないしは在地産と考えられる。212は伊万里で半球形の丸形湯飲みである。内面見込みの中央に崩した五弁花文を描く。213～219は伊万里の染付の皿類。213は丸形の小皿で、体部内面に二段の雷文を描く。214・215も丸形の皿で、やや器高を増し全体に厚手である。波佐見の製品であろう。216は型打ち輪花の鉢で、内面に花唐草文を描く。やや上手の製品で肥前有田の製品か。217は丸形の中皿で、体部内面は薄青色を背景色に、これに濃紺の蛸唐草文を墨彈きで描く。218も丸形の中皿で、内面見込みには山水家屋図を、体部内面には花唐草文を配す。外底面には「大明成化年製」銘の「化」の部分が残る。219は丸形の大皿で、内面は見込みの二重圈線を跨いで大きな円窓文を描き、その内部を花唐草文で飾る。220は伊万里の染付のそば猪口。桶形で底端部の低い高台が巡る腰輪高台のもの。口縁部内面には四方櫻文、外面には水仙文を描く。221は壺蓋で、受け部のみ露胎となる。外面の天井部は雷文と蓮弁文で飾る。19世紀初頭から幕末に位置づけられる。伊万里か、関西系の可能性もある製品。222は伊万里の染付の小瓶か徳利の類の口縁部破片であろう。223は伊万里の青磁香炉。底部の三足鼎は装飾で、底部中央の凹高台で器を保持する。釉調は淡緑青色を呈する。224も伊万里の青磁香炉で、こちらはやや大型のもの。底部は蛇の目高台で接地面が露胎となる。内面も残存部は露胎で内底面は焼成時に開口していたせいか、他製品の残欠や砂粒が崩落してこの部分に融着している。225・226は唐津・内野山の銅緑釉の皿。227は唐津の椀で、鉄釉が施釉される。228は瓦質土器の破片である。器種は判然としないが、外面に綾杉様のスタンプがみられる。硬質の焼成で黒銀色を呈している。405は鉄釉擂鉢で、口縁部を欠失

する。輪高台を有する底部の外面を含めた全面に、茶褐色の鉄釉を施釉する。体部外面には成形時の叩目が残る。内面は櫛描きの卸目を全面に施すが、やや角度を変えて何回も櫛描きし、卸目の機能的効果を高めている。

223号溝 (S D223, 第64図229~250, 図版28・35・36)

229~244は越中瀬戸。229~237は体部が浅く開く小皿で、体部が直線的なもの (229~231・236) と、中位で軽く屈曲するもの (232~235), 屈曲したのち口縁部が端反りするもの (237) がある。高台はいずれも削り出しの輪高台。施釉は漬け掛けで、内面見込みは釉拭いされ、施釉されない。230・231・236が灰釉、残りは鉄釉。229・230は内面見込みの中心部に菊花のスタンプを押す。また229は外面の2カ所に墨書きが、236は外底面に「十」の字の墨書きを施す。238~241は向付の器形で、体部中位が強く屈曲し、口縁部はほぼ直立して立ち上がる。底部の高台は削り出しされるが、断面が三角形の低いものとなる。施釉は238と239が灰釉、240・241が鉄釉。灰釉の2点については釉止めの段が巡る。242は越中瀬戸の火入れ。削り出し輪高台の底部に筒形の体部を有する。施釉は鉄釉だが、底部の内外面は施釉されず露胎となる。底部外面には煤が付着している。243・244は越中瀬戸の底部で、小皿と考えられる。いずれも鉄釉が施される。245は内面に灰釉を施釉する小皿。内面に焼成時に融着を防ぐためのハリ跡が2カ所残る。246は中世の土師器小皿で、混入であろう。247は伊万里の磁器染付の蓋物蓋で、口縁内端に短いカエリと天井部に小さなつまみを有する。17世紀代の製品と考えられる。248・249は伊万里の青磁香炉の破片である。248は底部の蛇の目高台の一部。249は口縁部の破片で、端部は平坦で内側に肥厚する。250は関西系の鉄釉擂鉢。玉縁状の口縁を有し、内面は口縁直下3cm程のところを圈線で区画し、以下の部分に櫛描きの卸目を入れる。施釉はこの圈線より上の口縁部および外面全体に施す。

263号溝 (S D263, 第64図251, 図版36)

越中瀬戸のひだ皿で、鉄釉が施される。

287号溝 (S D287, 第64図252~256, 図版36)

252は伊万里の染付の猪口で、筒状の体部に幅広の安定した輪高台の底部が付く。253は越中瀬戸の火入れで、筒形の体部に輪高台の底部が付く。施釉は体部外面のみで、内面残存部および底部の内外面は露胎。施釉は灰釉である。254・255は越中瀬戸の小皿で、前者は灰釉、後者は鉄釉が施釉される。254は内面見込みの中央に菊花のスタンプを押す。256は唐津の擂鉢。体部内面は全面に櫛描きの卸目がつき、内外面を薄く鉄釉で施釉する。

288号溝 (S D288, 第64図257・258, 図版36)

257は越中瀬戸の火入れで、筒形体部に輪高台の底部がつく。施釉は灰釉。258も越中瀬戸で、鉄釉の皿。内面見込みの中央には菊花のスタンプが押される。

289号溝 (S D289, 第64図259・260, 図版36)

ともに越中瀬戸で、259は鉄釉の茶入れ。底部平高台で回転糸切り痕がそのまま残る。260は鉄釉の皿で、体部中位で屈曲し口縁部が軽く外反する。

291号溝 (S D291, 第65図261~263, 図版30・37)

261は越中瀬戸の鉄釉の小皿で、口縁部は連続した圈線を巡らす。262は越中丸山の丸茶碗で、底部の厚みが極めて薄いことが特徴的。内面全体および口縁端部の内外面は、化粧掛けされたのち透明釉を施す。外面はほぼ露胎のままであるが、部分的に鉄釉を襷掛けしている。露胎部は口縁部は横ナデ、体部下半は回転ヘラ削りする。素地は薄茶色を呈する。263は関西系の施釉陶器の丸茶碗である。

薄い緑茶色の灰釉の上から、白色の長石釉で細い螺旋を描く。底部には細身の輪高台が付く。外底面のみ露胎となる。

#### 292号溝 (S D292, 第65図264~267, 図版37)

すべて越中瀬戸の小皿である。口縁部を丸くおさめるもの (264・266) と、口縁端部を鋭く端反りにするもの (265・267) がある。施釉は264・267が鉄釉、265・266が灰釉である。また265の底部外面には「十」の文字が、267では記号状の墨書きがみられる他、266では内面見込みの中央に菊花文をスタンプしている。

#### 293号溝 (S D293, 第65図268~270, 図版37)

268・269は越中瀬戸の向付で、低い三角高台と、体部中位から屈曲して立ち上がる口縁部を有する。いずれも釉止めの段がみられる。施釉は268が灰釉、269が鉄釉。270は唐津の陶胎染付の碗である。外面には山水文を描いている。底部には小さめの輪高台が付く。

#### 295号溝 (S D295, 第65図271, 図版37)

伊万里の染付の小瓶と考えられる。輪高台を有する底部から体部が球形に膨らんでいる。とくに折損箇所となる体部中位付近は極めて薄く、器壁は数ミリ程度しかない。外面の染付文様は窺い知れないが、呉須の濃（だみ）が1カ所認められる。

#### 298号溝 (S D298, 第65図272~275, 図版30・37)

4点とも伊万里の染付。272は五寸皿に相当する丸形皿。内面見込みに沿って幅1cmほどの圏区を描き、その上から濃い紫色の呉須で雪の輪文を配す。273は丸形の湯飲みで、外面には矢羽根文、内面見込みには崩した「寿」の字を描く。素地があまりよくなく、呉須の発色は濃緑色を呈す。18世紀後半から19世紀前半頃の製品。274は筒形湯飲みで、体部外面は大型の菊花文を散らし、口縁内面には四方櫛文を施すが、呉須が全体ににじんでいる。275は染付の中鉢。底部は蛇の目凹高台、体部は丸く口縁部が屈曲した後内湾して開く。口縁の内面は薄い呉須で帯状の圏区とし、その上から省略した唐草文を墨書きで描く。内面見込みには大きく山水文を描く。

#### 467号溝 (S D467, 第66図286, 図版37)

伊万里の染付の小瓶である。器形は端反りのラッキョウ形で、体部外面に笹の葉文を描く。

### B 2 地区

#### 井戸

##### 501号井戸 (S E501, 第67図328・329, 図版40)

ともに越中瀬戸の鉄釉擂鉢で底部を欠失するが、残存部位は茶褐色の鉄釉で薄く施釉する。内面の御目は櫛描きで、10条1単位で間隔を空けて施す。

#### 土坑

##### 510号土坑 (S K510, 第67図330, 図版40)

珠洲の壺の口縁部破片である。

##### 513号溝 (S D513, 第67図325・326, 図版38)

ともに越中瀬戸の底部で、325は外底面のみ露胎で他は黒色の鉄釉が、326は内外面とも体部の上半部のみが茶褐色の鉄釉で施釉される。

##### 514号溝 (S D514, 第67図327, 図版38)

越中瀬戸の底部破片で、内面は茶褐色の鉄釉に黒色の鉄釉を掛け回し、二彩表現とする。外底面は露胎である。

562号溝（S D 562, 第67図331, 図版38）

珠洲の捏鉢の口縁部破片である。

### C地区

#### 溝

601号溝（S D 601, 第73図513・第74図526, 図版38）

513は唐津の底部破片で、体部があまり深くないやや小振りの椀と考えられる。施釉はいわゆる藁灰釉で、内底面に砂目積みの痕を残す。526は非口クロの京都系土師器の小皿で、口縁部を短く外反させる。

604号溝（S D 604, 第73図496, 図版38）

越中瀬戸の鉄釉丸椀。釉調は漆黒色、素地は明灰褐色を呈する。

635号溝（S D 635, 第73図498, 図版38）

唐津・内野山の小皿で、内面は銅緑釉を施し、蛇の目釉剥する。

636号溝（S D 636, 第73図493, 図版38）

越中瀬戸の底部破片で、小皿か向付か判別できない。施釉は灰釉で、内面中央から放射線状に微細な磨きがみられる。同様の事例がB地区包含層出土品にも存在する。

#### その他の遺構

629号土坑（S X 629, 第74図541, 図版40）

中世の土師器の皿で、非口クロの京都系の土師器皿。口縁部は軽く内湾するものの、斜外方に開く形態である。

#### ②包含層の出土遺物

包含層では各地区毎に概ね焼物の種別に応じた記述とする。

### A地区

越中瀬戸（第68図332～338, 図版28・43）

有高台の小皿である。底部に削り出し輪高台を有し、体部は浅く直線的に開くものが多い。内面の釉止めの段は全くないものが多い。333は、口縁端部内面から見込みの外縁までを段々状に凹線を巡らす。336は内面見込みの中央にかなり形骸化した菊花のスタンプがみられる。施釉については332・333が鉄釉、残りが灰釉となる。340～343は無高台の小皿で、底部はいずれも回転糸切りされた後、そのままの切り高台（平高台）となる。343のみ口縁端部まで残存する。施釉はいずれも鉄釉である。344は越中瀬戸の鉄釉丸椀で、体部は半球形で底部には削り出しの撥高台が付く。底部外面のみ露胎とし、他は全面施釉する。釉はやや明るい茶褐色を呈する。345・346は筒状の体部を有する底部。345は壺や建水の、346は匣鉢の底部と考えられる。底部は回転糸切りされたままの切り高台となる。ともに鉄釉で、345は体部内面のみが、346は内外面とも施釉される。第69図399も在地産の鉄釉鉢で、口縁直下の1カ所に円孔がみられる。

土師質土器（第68図339, 図版44）

たんころ形の秉燭（ひょうそく）。底部は平底、体部は丸形で芯立には縦方向の溝状の切り込みを入れる。土師質の焼成。芯立の端部外面がわずかに煤けている。

伊万里（第68図347～351・353～358・第69図362, 図版30・41・42・44）

358のみ青磁、他は全て染付である。347～349は丸形の小皿で、内面見込みは蛇の目釉剥される。347・348は内面に格子文が描かれる。以上3点は波佐見の製品であろう。350・351は丸形小皿。350

は内面に波頭文を、351には扇子文がみられる。後者はさらに内面見込みの中央に五弁花文を施し、外底面の中央には渦福文の一部が残る。やはり波佐見の製品であろう。353は筒形湯飲みの体部破片で、体部外面は青磁釉で施釉されるいわゆる外青磁である。口縁端部内面には四方櫛文を配する。354はそば猪口の器形で、底部は蛇の目凹高台。内底面に松竹梅文、外底面には「富貴長春」の銘に入る。355は腰張形の碗で、外底面に「大明年製」の字の一部がみえる。本来は蓋がつく器形であろう。356は丸形碗で、内面見込みの中央に五弁花文が、体部外面には水仙が描かれる。357は薄手の酒杯と考えられる破片。体部外面に簾雲文、内面見込みの中央に太陽文を描く。358は青磁香炉の口縁部破片で、平坦な端面の内側が側方に突出する。第69図362は白磁紅皿の破片で、体部は型抜き成形、外面は口縁端部以外は露胎となる。

#### 瀬戸（第68図352・359・第69図360・361・400、図版29・42・44）

磁器染付と炻器染付がある。352は水滴の破片。359は磁器染付の徳利で、筒口形のいわゆる爛徳利である。型抜き成形で薄手に仕上げられている。体部外面の中央にやや崩した菊文が大きく描かれる。口頸部は文様化した捻花文で飾る。360は磁器染付の丸形碗。第60図147、第63図211と同じ製品で、一応瀬戸と考えたが在地産の可能性もある。361は瀬戸の炻器染付の筒形湯飲みで、内面見込みの中央に五弁花文を省略化した点描文が、体部外面には菊花散らし文が描かれる。400は灰釉が施された口縁部の破片である。

#### 唐津（第69図363・364～369、図版44・45）

364・365は陶胎染付の椀で、厚手の器壁を有する腰張形の椀。体部外面には崩した唐草文が描かれる。363・366は体部内面に波状の刷毛目文を施す、いわゆる三島手のもので、363が椀、366が鉢の器形である。367・368は内面見込みを蛇の目釉剥し、銅緑釉を施す唐津・内野山の小皿。369も内外面に銅緑釉を施す鉢で、唐津・内野山の製品と考えられる。

#### 土師器皿（第69図371～396）

非口クロで、手捏ね成形の中世の土師器皿。小皿と大（中）皿がある。371～388は平坦ないしはやや丸みを帯びた底部から、口縁部を強く屈曲させ鋭く端反りに仕上げる形態。389～392は底部と口縁部の境界がなく、軽く内湾しながら開く形態のもの。393・394の大皿もこの形態であるが、395・396は口縁端部のみを短く上方に屈曲させたものとなっている。

#### 瓦質土器（第69図398・第70図411～415）

398はスタンプ文が貼り付けられるが、小破片であり器種が判然としない。411は香炉の破片で、口縁部の直下に径2cm弱の円孔を等間隔に開ける。体部外面のみ瓦質化する。ヘラミガキも同様で、幅の広い荒いミガキが横方向になされる。412は鉢の類で、口縁部は受け口状になっている。413～415はいずれも小破片であるが、火鉢の類であろう。

#### 中国陶磁（第69図370・401～404、図版26）

370は磁器染付のいわゆる青花の碗の小破片である。401～404は龍泉窯系青磁で、401～403が碗、404が鉢の口縁部破片である。402・403の外面にはヘラ彫りの蓮弁文がみられる。また404の体部内面には櫛描き文がみえる。

#### 珠洲（第70図406～410・417～422、図版27・29）

壺・甕・擂鉢がある。擂鉢の口縁形態には端部を端反り気味にして丸くおさめるもの（406・417）と、端部に広い面を有するもの（409・418～421）がある。417・418・420の3点の口縁端面には波状文が櫛描きされる。408は甕の口縁部破片。410は小型の壺で、球形の体部に平底の底部を有する。底

部は静止糸切り痕が残る。422は壺で底部を欠失する。口縁部は直立気味に外傾して開き、端部は玉縁状に肥厚させている。体部は幅の割に高さがあり、最大径が体部の中位よりやや上方にある。体部の外面全面に、綾杉状の叩目が残るが、内面の当具痕は明瞭でない。焼成はやや甘く、色調は明灰褐色を呈する。

#### 施釉陶器（第70図416、図版39）

植木鉢の器形である。口縁部は側方に突出しており、体部は筒状を呈する。体部外面および口縁部の内外面を灰釉陶器で施釉する。越中丸山など在地産の製品であろう。

#### 瀬戸美濃（第70図423）

中世の瀬戸美濃の施釉陶器である。同一個体の破片が数点みられるだけだが、三筋壺と考えられる。底部は平底で、体部外面には淡黄緑色の灰釉が施釉されている。

#### B 地区

##### 越中瀬戸（第71図424～442・第72図485、図版31・43・45）

424～427は削り出し輪高台を有する小皿で、体部が浅い角度で直線的に開く形態。424のみ鉄釉、他は灰釉。施釉は体部の内外面に漬け掛けされ、内面見込みは重ね焼き時の融着を防ぐため、釉拭いされる。外面は体部中位以下が露胎となる。424の内面見込みの中央には菊花のスタンプ文が、427の外底面には墨書がみられる。428・429は口縁部に短く内傾する立ち上がりを有する皿。いわゆる灯明皿の器形。底部は平高台で、回転糸切り痕が残る。施釉は鉄釉で、体部外面の下半以下は露胎となる。430～437は向付の器形。低い三角高台の底部と、強く屈曲・直立し、口縁端部が軽く外反する体部を有する。灰釉（434・435・437）と、鉄釉（430～433・436）とがある。小皿と同様に内面見込みは釉拭いされ、外面は体部中位以下が露胎となる。432と435は、内外面を微細な沈線で中心から放射状に刻む。438は鉄釉の建水、439は無釉の壺の口縁部破片である。440は削り出し輪高台を有する鉄釉の碗で、天目茶碗の可能性が高い。体部外面下半および底部外面は露胎となる。441は秉燭（ひょうそく）で、完存する。形態はいわゆる台付たんころ形で、切り離し平高台の中心に軸孔を有する。扁平な球形体部で口縁部が内側に強く内湾する。芯立は直立した円筒状の一面が縦に溝状に切りこまれている。施釉は鉄釉で、外面の脚部以下底部は露胎とする。442はミニチュアの鉢。底部は回転糸切りの平高台。内面及び体部外面は鉄釉が施釉されている。485は鉄釉擂鉢の破片で、高台を含め全面施釉する。

##### 伊万里（第71図443～456、図版41・42）

443～446は染付の皿。443は格子文を有する丸形の小皿で、内面見込みは蛇の目釉剥される。18世紀後半頃と考えられる。444は輪高台を有する皿。内面見込みの中央にコンニヤク印判で五弁花文を施す。18世紀前半から中頃のもの。445は丸形の小皿で、内面見込みは蛇の目釉剥され、体部外面中位以下も露胎となる。内面に一部文様がみられる。17世紀後半から18世紀前半頃。446も内面見込みに蛇の目釉剥がみられる小皿の底部。以上4点は、いずれも波佐見の製品と考えられる。447は蓋付碗の蓋で、天井部外面に文様化した「渦福」の銘がみられる。448・449は合子の身である。448はやや大振りで全面施釉。外面に呉須で縞の文様を描く。449は平底で白磁釉が施されるが、合せ口となる口縁部と外底面は露胎とする。また底部外面は墨書されるが、意味は判然としない。450～452は染付の碗。体部は半球形で、口縁部がわずかに内傾する。外面の文様は450が菖蒲様、451が花牡丹あたりか。451の方が古く、17世紀後半代にまで溯る。452は口縁部内面に四方禪文、見込み中央に筆書きのやや崩れた五弁花文を描く。外面は高台の外周に沿って蓮弁文を配し、その上に岩座と雪持ちの草

を描く。18世紀後半から19世紀初頭頃の製品と考えられる。453・454は磁器染付の筒形湯飲み。453は外面に輪宝繫文を描く。454は内面見込みの中央に筆書きの五弁花文を、外面は高台外縁に沿つて省略した蓮弁文を、体部には梵字文を描く。455は青磁の香炉の口縁部破片である。456は口縁部が短く折れ縁になる大鉢の破片。体部外面には唐草文、内面には松竹梅文と蛸唐草文が交互に描かれる。18世紀中葉から末頃の製品と考えられる。

#### 瀬戸（第71図457、図版44）

瀬戸の炻器染付である。広東椀の形で、内面見込み中央には星状に崩れた五弁花文がみられる。458・459は磁器染付の碗。458は銅版プリントの文様を持つもので、明治以降の製品。459は赤・青・緑の三色で波と魚を描いた色絵の碗。瀬戸以外の産地の可能性もある。

#### 関西（第71図460、図版44）

肥前や瀬戸ではなく、関西系と考えられる磁器染付。瓶のようだが内面も施釉されており、花生けの類か。外面には大きく全面に草花文が描かれる。

#### 土師質土器（第71図461、図版44）

口縁部のみの残存で、秉燭（ひょうそく）と考えられる。

#### 唐津（第72図462～471・483・484、図版44・45）

462・463は、内面見込みを蛇の目釉剥し銅緑釉を施した、いわゆる唐津・内野山の皿である。464も削り出し輪高台を有する小皿で、やはり内面に蛇の目釉剥がみられる。黄茶褐色の素地に白色の化粧土を荒く掛け回し、そのうえから灰釉を漬け掛けする。18世紀前半から中葉に位置づけられる。465は唐津のいわゆる三島手の刷毛目椀。466は丸形椀で、淡灰茶褐色の素地に化粧土を白掛けして、そのうえから施釉する。17世紀前半に溯る古手のものである。467～470は陶胎染付の椀である。471の椀はいわゆる呉碗手と呼ばれるもの。素地は淡黄褐色でこれに透明釉をかけて黄緑色に発色させる。銅緑色釉とあわせて二彩とする。483・484は唐津の擂鉢。口縁部は短く外反し、体部内面は櫛描きの卸目を施す。内外面とも鉄釉の施釉。

#### 土製品（第72図472～475・488）

472～475は素焼きの土製品で、全て型抜き成形である。472は箱庭道具の灯籠の破片で、前後二分割で型合せする。柱状の底部は六角ナット状で、上下の中心軸に穿孔がある。473は人形で頭部を欠失するが、衣服の意匠からみて福嫁子か。472と同様に前後形合せの成形である。底部は裾広がり仕上げ、さらに人物の中軸線上に穿孔する。474・475は形合せの裏面がなく平坦に仕上げられており、泥面の芥子面に該当する。474は天神像、475は頭部を欠失しておりモチーフが判然としない。いずれも合せ型の正面側を使って型抜き成形する。488は土製の人面でほぼ原寸大であるが、やはり型抜き成形される。基本的に素焼き焼成であるが、正面側は肌色、黒色、茶褐色など彩色されている。裏面は一面に成形時の指頭圧痕が残る。

#### 土師器皿（第72図476～479）

いずれも非口クロ成形。口縁部は一段ナデ手法で、口縁端部は端反り気味に外反している。

#### 中国陶磁（第72図480、図版26）

龍泉窯系青磁の碗の破片。釉調は淡緑色を呈し、高台内面のみ露胎となる。

#### 瀬戸美濃（第72図481、図版44）

器形的にみて鉄釉の天目茶椀と考えられるが、釉調は淡緑色を呈する。二次被熱のための変化と考えられ、釉の表面が沸騰したようになり、多数の細かな空気穴があいている。

珠洲（第72図486・487、図版27）

珠洲の底部破片。486は壺、487は擂鉢の破片と考えられる。

### C地区

越中瀬戸（第73図489～492・494～497、図版38・43）

小皿（489～492・494）、向付（495）、匣鉢の底部（497）がある。小皿は492のみ鉄釉、他は灰釉の施釉である。489は内面見込みに菊花文をスタンプするが、花弁の先端が型くずれして消失する。491はさらにくずれて、スタンプは単に放射状文となっている。490・494の底部外面には墨書があるが、破片であり判読できない。497は匣鉢で、回転糸切りをそのまま残す平高台に、筒形に直立する体部を有する。体部の内外面はロクロ目が顯著で、胎土は砂粒が混じる荒いものとなっている。釉が拭われている外底面を除き全面に鉄釉が施釉される。

唐津（第73図500・501・514、図版44・45）

500は唐津・内野山の小皿で、銅緑釉の施釉に内面見込みは蛇の目釉剥となる。外底面に墨書がみられるが、意味不明。501はいわゆる藁灰釉が施釉されており、皿の形態である。内面の見込みには砂目積みの痕が4カ所残る。514は大振りの鉢と考えられる器形。削り出しで幅のある断面逆台形の輪高台が底部に付く。内面は見込みの外縁を圈線で区画し、その外側の体部は直線と波線を組み合せた象嵌文様を施す。内面見込みに砂目積みの痕が残る。

伊万里（第73図499・502～504、図版30・41・42・44）

499は青磁の皿で、内面見込みは蛇の目釉剥となる。502は型抜き成形の白磁の紅皿。外面には細かな貝殻状文が入るが、口縁直下から下半は露胎となる。503・504は染付の丸形小皿で、ともに内面見込みは蛇の目釉剥される。見込みの外縁に沿って二重の圈線を引き、その外側に交叉草文を描く。雑器主体の18世紀代の波佐見の製品と考えられる。

中国陶磁（第73図505～512、図版26）

すべて青磁で、いわゆる広義の龍泉窯系青磁であるが、製品の焼造年代には幅がみられる。505は底部の破片で摩滅のため釉が光沢を失っている。506は小杯の破片で、内外面に櫛書き文がみられる。507～509は体部外面にヘラ描きの蓮弁を施す。510は内外面とも無文で、口縁端部を玉縁状に肥厚させ短く外反させる。破口には漆継ぎの痕がみえる。511は内面にヘラ描きの草文がみられるもので、古手の龍泉窯系青磁碗である。512は内湾しながら立ち上がる体部を有し、外面の口縁直下に1条の沈線を巡らす。

瀬戸美濃（第73図515～517・第74図547、図版44）

515は削り出し平高台を有する天目茶椀の破片で、内面には濃い茶褐色の鉄釉を施釉す。体部外面および高台外面は露胎。以前一度破損しており、漆継ぎの痕が観察される。516は口縁部が大きく端反りとなる小皿。517は口縁部が折れ縁となりさらに口縁端部を玉縁風に肥厚させた鉢である。この2点についてはいずれも灰釉が施される。547は薄く淡い灰釉が施釉される皿で、細かな貫入が著しい。内面見込みに圈線が1条巡る。

土師器皿（第74図518～525・527～540・542～546）

非ロクロ成形の土師器皿である。まず小皿だが、518は口縁部の横ナデが弱く、体部との境界が明確でない形態である。これに対し521～525・528～531は、底部が平坦で器壁が厚く、口縁部を短く屈曲させ端反りに仕上げる形態である。また519・520・527・532～541のように、底部から口縁部が屈曲するものの、端反りが顯著でなく外傾し端部を丸くおさめる皿も比較的多く認められる。542は口

径は小皿相当だが、体部は杯のように深いものとなる。大皿では体部から口縁部が浅く開き、口縁端部のみ軽く外反させるもの（543・546）と、口縁部が直線的で端部を丸くおさめるもの（544・545）がある。

#### 瓦質土器（第74図548・549）

瓦質土器の擂鉢である。548は口縁部の破片で、直線的に外傾し口縁端部は単に丸くおさめている。549は無高台の平底の底部と考えられる。2点とも内面に櫛描きの卸目を施す。カーボンのかかりは浅く、軟質焼成となっている。

#### 珠洲（第74図550～555、図版27）

550は擂鉢の底部破片。551は口縁部を直角に屈曲させ「L」字状口縁としたもの。552～554は擂鉢の口縁部破片である。端部を端反りにし、内傾する端面に波状文を配し、卸目も櫛描きが著しいもの（552・553）と、口縁部を玉縁状に肥厚させ、卸目の櫛描きに間隔のあるもの（554）がある。555は壺の口縁部破片で、頸部は短く立ち上がり、口縁部は側方に短く屈曲して端部は丸くおさめる。体部の外面に格子状の叩目が残る。

#### 越前（第74図556）

越前の甕の口縁部破片で、外傾気味に立ち上がり端部は平坦に仕上げる。

### （2）木製品

出土した木製品には、漆器、箸、しゃもじなどの食具・食器類、曲物、折敷、桶などの容器類、下駄などの服飾具類、加工木、柱、杭など各種の建築用部材、井戸枠に転用された木臼、農具である鋤先、「戸長役場」と墨書きされた明治初期の木札などがある。以下に各地区毎に概述する。

#### A 地区

##### 下駄（第75図601～605、図版46）

601は台と歯を別個に作り両者を接合した差歎下駄で、いわゆる「露卯下駄（ろぼうげた）」と呼ばれるものに該当する。台裏に溝を切り、その溝中に台表に貫通する枘孔を穿ち、そこに差歎の枘を差し込み固定したもの。枘孔は一般に多い4孔でなく、2孔である。台の平面形は長方形だが縦断面・横断面の形状は台形で、舟底状を呈する。差歎の形状も裾広がりの台形で、前歎のみが残存する。横緒穴は後歎の後方にあり、前壺を含めて3穴とも傾斜して台に穿孔している。前壺の両側に足指による使用痕が観察される。台の幅は7.8cm、長さ22.3cm、厚さ4.3cm。前歎は接地面となる歎裏の幅が15.7cm、高さ12.5cm、厚さ1.6cm。台の木取りは原木二分割と考えられる。台、歎ともに樹種はホオノキである。602は台と歎を別々に製作せず原材から直接切（削）りだす、いわゆる連歎下駄に相当する。台の形状は平面が小判形、断面は厚みがない台形である。幅9cm、長さ24cm、厚さ1.9cm。前壺は前歎の前方に、横緒穴は後歎の後方に垂直に穿孔する。歎は前後とも残存しており、概ね4～5cmの高さ。歎裏の幅は12～13cm、厚さ3～4cmである。台の木取りは原木二分割と考えられる。樹種はホオノキとされる。603は小型の連歎下駄で、歎は両方とも残存するが、台の前後を欠失している。台の幅4.2cm、残存長8.5cm。前壺は残存するが、横緒穴は欠失する。歎は台形で、歎裏の幅6cm前後、高さ4cm、厚さ2.1cmとなる。大きさから見てもあまり実用的とは思えない。604・605は一応差歎式の下駄の歎と考えておく。

##### 加工棒（第75図606・607）

606は中央に筋が残るようにして竹を縦に裁断し、両端を尖らせたもの。幅0.8cm、長さ31.7cm、厚さ0.4cmである。607は断面が長方形を呈する角材の残欠。7～8cm間隔で3カ所表裏に貫通する穿孔

を施している。

#### 栓（第75図608）

桶などの栓である。円筒状の素材の下端側がすぼまるように削っている。上端径2.9cm、下端径1.9cm、長さ6cm。

#### 底板（第75図609・第77図618）

609は結桶の底板の部分で、側板に固定するための穿孔がみられる。618は一枚板の底板で、曲物桶の底板と考えられる。復元径16cm前後、厚さ0.7cm。

#### 蓋（第76図616・617・第77図619、図版47）

桶・樽などの蓋である。616は一枚板のもので、中心より縁側に偏って注口が穿たれ、そこに栓がついたまま出土している。蓋の径は14.7cm、厚さ1.2cm。栓は上端径2.6cm、下端径2cm、長さ5.4cmで、形状は第75図608とほぼ同じである。注口の存在より樽の蓋とわかる。樹種は蓋、栓とともにスギである。617は616に比べやや径が大きく、三枚板を組み合わせて一枚物とする。桶の蓋であり、栓や注口は見られない。「大」の字の焼き印が押される。復元径18cm、厚さ1.3cm。樹種はスギである。619は桶蓋の取手部分。蓋の板材に角材を5本の木釘で留めている。板材の方も5カ所に釘穴を穿孔するが、取手の角材までは貫通しておらず、木釘も残存しない。角材は幅1.8cm、厚さ1.5cm、長さ34.5cmで、中央付近で横方向に「コ」の字形の抉り孔を入れる。

#### 桶（第76図615・第77図620・623・第78図624、図版46・47）

結桶ないしはそれを構成する部材である。615はSE102の井筒に転用された結桶で、底板を欠失する。側板は22枚で構成され、これを上中下三段のタガで結束する。桶本体の径67cm、高さ92.4cm、側板の厚さ1cm。620も615と同一遺構の出土だが、こちらは下半のみが残存する。側板は20枚で構成される。径63.2cm、残存高42.4cm、側板の厚さは2.2cm。ヒノキ科に属する樹種である。624はSK142に転用された結桶で、上半部と底板部分を欠失する。側板は大小とりあわせて25枚で構成される。桶本体の径65.2cm、残存高50cm弱、側板の厚さ1.5cm前後。623は結桶の側板のみの出土。上辺の幅5.6cmに対し、下辺3.5cmと、やや裾すぼまりとなる。長さ31.7cm、厚さ0.7cm。中央上辺寄りの位置に長方形の差込孔があけられる。

#### 漆塗り製品（第76図610～614、図版46・47）

610は脚の一部にみえるが、本体構造は判然としない。頂部と側面に、組み付けるための柄穴がみられる。ヒノキ科に属する樹種。612も脚部の残欠と考えられる。この2点は全面黒色漆。611は赤色漆の箸の残欠である。613・614は漆器の椀。613は球形の体部に低い輪高台がつく。外面は黒色漆、内面は赤色漆、文様は描かれていない。樹種はトチノキである。614は613よりやや薄手で腰が張る体部を有し、底部には輪高台がつく。内外面とも黒色漆が塗られるが、文様は描かれていない。内面見込みに付着物がみられる。樹種は613と同様トチノキである。

#### 木箱（第77図621・622）

組み合せ式の木箱の側板。ともに幅6～7cm、長さ24cm、厚さ0.8cmで、板の三方に固定用の大小の柄穴を穿孔する。出土遺構も同じで、同一個体と考えられる。

#### 柱・杭（第78図625・626・第79図627～631、図版49）

建築材と考えられる柱・杭である。これらの殆どは柱穴と考えられる穴の中に残存する形で出土している。625は一方の端部付近に方形の柄穴があることから、掘立式の柱根などではなく、建築用の構造材の一種と考えられる。原木四分割の木取りで、芯持ち材ではない。626は杭で、下端を手斧で

面取りしながら先細折りに削る。芯持ち材で、残存部の長さ29.1cm、直径6cm前後を測る。627～631は柱で、下端を一部手斧で加工したもの（628・629）と、切断されたそのままのもの（627・630・631）がある。いずれも芯持ち材で、上端は腐食して先細りとなっている。樹種は625・628・629・631がクリ、627がコナラ節、630がシオジとされる。

#### 木臼（第80図632～634、図版48）

井戸に転用された木臼で、3点とも同一遺構の出土。糀摺り用の木摺臼である。木摺臼は石臼とよく似た構造の回転式のもので、上臼と下臼を組み合わせて使う。ともに円筒形で、芯持ち材を輪切りにして細部を刳りだし成形する。下臼は独楽を逆さにしたような形状で、中心に上臼を受ける芯棒を通す。上臼は内部を漏斗を逆さにしたように刳り抜き、天井部の中心に下臼の芯棒を受ける軸受板がつく。632は下臼と考えられるが、転用の過程で受け部がきれいに刳り抜かれ円筒状となっている。このため天地は確認できない。633・634は上臼で、井戸に転用される過程で、やはり底抜け（天井抜け）にしている。臼の側面には繩掛け用の横に長い窓が対向して二面作り出される。この手の木摺臼の場合、摺る行為は回転運動ではなく、半回転ずつ交互に逆回転させて使うといい、この窓の部分に繩を引っかけて回転させたものと考えられる。摺目は633の場合、時計回りの放射状となっている。樹種は632・633・634とともにブナである。なお実測図は井戸内での正立状態のもので、本来の臼としての使用状態はこの図の上下逆となる。

#### B 地区

##### 漆塗り製品（第81図635～641・647、図版50）

635～639は漆器の椀。639がやや小振りで浅い形態、他は半球形の体部である。底部は低い輪高台（636・637）と高脚のもの（638）がある。635・638は内外面とも黒色漆で、635は外面に赤色漆による文様を描く。638も内面見込みにわずかに赤色漆の文様の痕が残る。636・637・639は外面が黒色漆、内面が赤色漆となる。636は体部外面に赤色漆で家紋状の文様を描く。640・641は椀の蓋で、天井部に低いリング紐を有する。640の天井部が丸みを帯びるのに対し、641は天井部が平坦で、口縁部が屈曲する。640は外面が黒色漆、内面が赤色漆で、さらに口縁部外面3カ所および天井部中央に三つ葉文を金色漆で描く。641は無文で内外面とも黒色漆。647は板状の漆製品で、二側面に柄穴が残る。組み合せ式の箱のような製品と考えられる。外面は赤色漆、内面は黒色漆。樹種は636・637・640がブナ、641がケヤキである。

##### 筒状容器（第81図642、図版51）

直径10cm、高さ10.8cmの筒状容器。刳りだし成形で、底部は中央がやや上げ底となる。内底面から外面に抜ける円孔が1カ所みられる。樹種はエゴノキである。

##### 栓（第81図643・644）

樽などの栓である。裾すぼまりの円筒形で、側面の面取り整形は643が荒く、644は丁寧である。

##### 木札（第81図645、図版51）

墨書がみられる木札。形状は長方形で、幅1.9cm、長さ16.3cm、厚さ0.9cm。表側では、まず上段に「戸長」と墨書し、さらに中段に「小矢部村」と「小神村」の二つの村名を並記し、下段に「役場」と続けて墨書する。裏面は上段に「役場」と墨書、次いで漢字が一文字朱書きされるが、この部分はよく判読出来ない。この木札にみられる「戸長役場」とは明治の廃藩置県により設置され、以後明治22年の市制・町村制がしかれるまで地方に置かれた役所のことである。従ってこの木札も明治前期の所産とみなすことができる。樹種はスギである。

## ヘラ状用具（第81図646）

頭を幅広にした「T」字状の木製品である。形状はヘラに似るが、頭の先端は薄く仕上げておらず、柄と同じ厚みのままである。用途などは不明である。

## 匙（第81図648、図版49）

長く薄い長方形の取手の先端に小さな身がつくもので、この部分が僅かではあるが内湾して受け皿状になっているため匙とした。長さ32.3cm、柄は幅2.2cm、厚さ1cm。受け皿は一端を欠損するが幅6.5cm、長さ6.5cmの隅丸方形形状を呈する。樹種はブナである。

## 曲物桶（第81図649）

曲物の側板の残欠である。

## 底板（第81図650～652・第84図674～679、図版49・50）

曲物桶や結桶の底板。全て薄い円盤状を呈す。650～652は径7～10cmの底板で、半裁残存のものも含めて1枚板つくりである。651には下端に綴じ付け用の溝孔がみられる。674～676は直径15～20cmの底板で、半裁残存する674には、中央の裁断面に2カ所の枘穴がみられ、半円の板2枚を組み合わせて1枚の底板にしたことがわかる。675・676についても674と同様と推定される。678・679は底板のなかでも大型のもの。678は直径80cm弱、厚さ2.7cm。8枚の板を木釘と枘で組み継いで1枚の底板とする。679もほぼ678と同様のつくりで、直径75cm、厚さ3cm。6枚の板をやはり木釘で組み継いで1枚の底板とする。木釘は接合面1枚につき2カ所、さらに1カ所につき2本を並列して打ち込み、打ち込み場所が上から見るとちょうど直径20cm強の円を描いている。677は折敷の底板で、3分の1程欠失している。長さ19.5cm、厚さ0.5cm。底板の縁に沿って連続して側板との接合用の穿孔が並ぶ。樹種はヒノキである。

## 下駄（第81図653～655、図版49・52）

差歛下駄と連歛下駄がある。653・654は差歛下駄の台で、いずれも歯は残存しない。653は台の前後を欠失している。台は逆台形の舟底形。枘孔は2孔と考えられるが、明確ではない。654は部分欠失するものの、台はほぼ完存する。平面の形状は小判形。台の幅7.5cm、長さ22cm、厚さ2cm。前壺は前歯の前方、横緒穴は後歯の後方に2穴、いずれもやや傾斜して斜めに穿孔される。樹種はホオノキである。655は台と歯を1枚から切（割）りだす連歛下駄。台の形状は平面が小判形、断面は厚みがなくほぼ平坦形である。中央から左半分を欠失する。長さ23.8cm、厚さ1.9cm。前壺は前歯の前方に、横緒穴は後歯の後方に垂直に穿孔する。歯は低いが前後とも残存している。2cm弱の高さで、厚さは2～3cm。樹種はスギである。

## 木臼（第84図680、図版51）

井戸に転用された木臼。A地区出土の木臼と同じ糀摺り用の木摺臼で、本例は上臼に該当する。やはり井戸に転用される過程で、軸受板や受部を除去し底抜け（天井抜け）にしている。臼の側面には縄掛け用の横に長い窓が対向して二面作り出される。摺目は逆時計回りの放射状で二段分が残存する。樹種はA地区出土品と同じブナである。なお実測図は倒立状態。

## 部材（第82図656～665、図版50）

建築材や家具、道具などの材の一部、ないしは構成部品と考えられるが、目的製品が判別できず、かつ柱、杭を除く扁平な板状のものを部材として一括した。殆どが長方形の板材であるが、正方形や台形の形状のものもある。このうち表面に結束痕が残る656・664・665は結桶の側板の可能性が高い。657～662・657～659は概ね長方形ないしは矩形の板で、657～659を除く他は、いずれも組み合わせた

り打ち付けた跡をしめす釘穴などが隨所に残る。663は表面に手斧痕を残すもので、平面は長方形で、断面は下端が先細る形状。用途は不明。

柱・杭（第83図670～673・第85図681～684・第86図685～689・第87図690～694・第88図695～698、図版48・51）

建築部材等の用途が想定され、かつ円筒状の形状をしたものと、柱・杭とした。大半が柱で、下端が削り出されて杭と考えられるのは672・673のみである。673は組継ぐための長方形の柄穴が1カ所ある。残りの柱類のうち682・691にも柄穴がみられる。698は下端に抉りが2カ所ある。材は殆どが芯持ち材であるが、682のみ原木半裁ないしは3分割と考えられる。樹種は682・684・694～696がケリ、670がスギ、681がヤマウルシ、671がモクセイ科に属する樹木、693がコナラ節に属する樹種、687が広葉樹の一種とされる。

### C地区

漆塗り製品（第89図699～703、図版52）

699～702は漆器の椀。699は半球形の体部に背の高い輪高台が付く。内外面とも赤色漆で、高台の内側のみ黒色漆で、その上から赤色漆で一文字書き込む。700は高台を欠失する。内外面とも黒色漆で、内面はさらに赤色漆で連続するV字文を点描風に描く。701は高台裏面全体が剥脱している。内外面とも黒色漆。702は足高高台の椀の底部で、外面は黒色漆、内面は赤色漆。これらの漆器椀の樹種は、いずれもブナである。703は漆塗りのしゃもじで、細長い長方形の柄に楕円形の身がつく。先端は欠失する。身の横断面は中央がやや窪む形状。身の内面は赤色漆。他は黒色漆だが、剥脱が著しい。柄は長さ11.6cm、幅1.7cm、厚さ1cm、身の幅約7cm、厚さ1cm。柄の根本に焦げ跡がみえる。樹種はホオノキである。

底板（第89図704・第90図711）

曲物などの底板である。704は円盤状の底板の側縁である。折損したようにみえるが、断面から窺える木取りはこれだけで完結しているようにみえる。ただ厚さが1.9cmあり、桶の底板としては疑問も残る。711は小型の円盤状底板で、木取りは一枚板である。

下駄（第89図705・706）

2点とも連歯下駄である。705はいくつかの破片から復元した。歯は比較的残りが良いが、台はかなりの部分が欠損する。歯裏はかなり磨り減っているが、前後とも2～3cmの高さが残存する。706はちょうど下駄の中軸線に沿って半裁したように割れている。台の形状は小判形で、長さ20.8cm、厚さ1.3cmの数値を測る。前壺は前歯の前方、横緒穴も後歯の前方に穿たれている。穿孔はほぼ垂直になされている。歯は低く現状でほとんど高さがない。樹種はスギとされる。

加工棒（第89図707・709、図版52）

707は長さ17.6cm、直径1.3cm。一端に円孔が穿たれている。709は長さ101cm、直径1.1cmの細長い形状で、下端を尖らせさらに円孔を穿つ。樹種はスギである。この加工棒は弥生時代の溝から出土している。

部材（第89図708・第90図712、図版52）

B地区と同様の定義のもの。708は形状は板で厚みがある。幅7.4cm、長さ47.8cm、厚さ2.4cm。712は長方形で、幅8.3cm、長さ16.4cm、厚さ4.1cm。中央に方形の柄穴が穿孔されている。樹種はスギである。

### 紡錘車状木製品（第90図710）

紡錘車状の小型円盤で、中央に小孔が穿孔されている。直径4.6cm、厚さ1.6cm。樹種は当遺跡ではめずらしいヒノキである。

### 栓状木製品（第90図713）

一見「T」字形のボルトのような形状。中心軸に沿って半裁折損した可能性もある。長さ8.4cm、頭部の幅2.5cm、柄の幅1.5cm、厚さ1cm。樹種はスギである。

### 鍬（第90図714、図版52）

弥生時代の曲柄鍬で、柄を装着する軸部側の半分が残存する。軸部には北陸地方で特徴的な長方形の柄孔を有するが、ナスピ形を呈する笠部が破損しているため、形状が突起をなすかどうか判然としない。刃部は大半が破損しているため、平鍬となるか又鍬となるか判断できない。が、刃部の両端が平行して長くのびるようみうけられ、平鍬の可能性の方が高く思える。いずれにせよ今回の調査で弥生時代の木製農具の明確な出土は本例だけである。なおこの鍬はコナラ節に属する樹種で、具体的にはカシワ、ミズナラ、コナラなどの原木が考えられる。

### 杭（第90図715～717）

下端が先細りに手斧等で削り出されているため、杭とした。いずれも芯持ち材が使われている。  
715・717については節目が顕著にみられる。

#### (3) 金属製品

金属製品で最も多いのが釘・鎌の類で、他にキセルの煙管、箸、蹄鉄、鉛玉、鉄滓などの出土がみられる。以下に簡単に概述しておく。

### 釘（第91図801・802・805～807）

801・802が丸釘、805～807が角釘である。丸釘のうち801は断面が角釘と同じ方形を呈し、頭のみが丸頭となる。頭にさらに飾金具等が付けられたのであろう。805～807は頭が「L」字に折り曲げられて作られた角釘、いわゆる和釘である。このうち806は釘を打ち付けた対象の木質部が残存する。また807は先端が内側に折れ曲がっている。

### 鎌（第91図803・804・808）

803・804は両端を「コ」の字状に折り曲げた鎌である。鎌は鉄製木工具の一つで、木材と木材を緊着させるためのもの。803・804はその形状が鎌に一致するが、808は一端が他端に対して90度横方向に捻れており、鎌としては特殊な形状である。

### 箸（第91図809）

鉄製の箸である。金属製の箸は調理用の真魚箸などに使われるが、本例の場合は最近あまり見かけなくなったが火箸の類であろう。

### 鉛玉（第91図810）

球形の鉛の玉で、火縄銃用のものと考えられる。

### 煙管（第91図811）

キセルの首部である。板を折り曲げて径1cmの円筒をつくり、先端を90度上向きに屈曲させる。しかし火皿の部分は残存しない。

### 蹄鉄（第91図812）

馬のひづめを保護するための蹄鉄である。本来は馬蹄形を呈するが、鉄頭と鉄側の片方側を欠失する。平面の形状が円形に近いことから前肢用と推定される。蹄鉄を装着するための釘穴が5個穿たれ

ている。日本の伝統的な装蹄は馬沓が主流で、本格的な洋式蹄鉄の普及は明治以降の陸軍においてのことである。本例についても近代以降の蹄鉄と考えることができる。

#### 環状鉄製品（第91図813）

「C」字状に折り曲げられた、扁平な環状の鉄製品。把手の類とも考えられる。断面の形状は長方形を呈する。

#### 鉄滓（第91図814）

製鉄に伴うスラグが出土している。814は大型のいわゆる椀形滓。但し本遺跡においては製鉄関連の遺構は検出されておらず、この椀形滓の帰属時期もはっきりとしない。

#### (4) 石製品

本遺跡出土の石製品としては硯・砥石・石臼・石鉢・加工痕のある石材などがある。

##### 硯（第91図901～905）

いずれも長方硯の形態である。完存するものではなく、すべて損壊・破棄されたものである。形状をある程度窺える903～905は、いずれも裏面は平坦で削り出しを施さず、側面は垂直に立ち上がる。このうち硯頭側が残る904では、やや幅のある硯頭部の縁帯から海を直角に削り出している。硯尻側が残存する903・905については、陸の中央部分が橢円形に窪み、使用痕を残す。材質は901・903が凝灰質泥岩、902が凝灰岩、904・905が粘板岩である。

##### 砥石（第91図906～910・第92図915、図版53）

幅3～4cm、長さ10cm内外まで、厚さ1～3cmの中・小型のものが多い。形状は台形ないしは長方形基調である。石材は909が凝灰質砂岩、他は凝灰岩である。用途は不明だが、凝灰岩が多く仕上げ砥石の類が多いものと考えられる。

##### 石臼（第92図911～914、図版53）

主として粉挽きに用いるいわゆる粉挽き臼である。完存するのはSE30から出土した911のみで、これは上臼（雌臼）である。直径32cmの車輪形を呈す。最大厚12cm、最小厚7cmを測り、度重なる使用により明らかに片減りしている。それでも摺り合わせ部の溝が明確に残存することから、目立てしながら大事に使用されたと考えられる。上臼の上面は一段窪んでおり、中軸よりややはずれた位置に「ものいれ」と呼ばれる円孔（供給口）が穿たれる。側面には挽き木を打ち込むための長方形の孔が穿たれており、いわゆる横打ち込み式の石臼と知れる。この手の石臼は近畿圏に多いというが、その他の地域にも広く分布する。本例には2孔の打ち込み孔がみられる。手まわしの場合本来孔は1ヵ所でいいはずである。2孔のうちの1孔は片減りして薄くなつた側に窪みとして残されているだけで、明らかに使用することができない。従って当初1孔であったのが使用不能になって、新たに反対側に1孔あけた結果、2孔となったものと解釈できる。摺り合わせ側の中心軸の芯棒受けは、直径3.5cm、深さ2cmが残存する。臼目のパターンはやや均等に欠くものの、基本的に主溝8本の八分画で標準型、副溝は5～7本で、目の切り合いから逆まわし臼と考えられる。摺り合わせ面には普通貫通した「ものいれ」から続く「ものくばり」が回転方向とは逆方向にみられるが、本例の場合は磨り減って円弧を描くかすれた跡となっている。材質は凝灰岩。912～914も石臼の破片である。912は厚さ4cmと薄手だが、中央に芯棒孔が貫通しており、下臼（雄臼）と考えられる。残存する目は、かなりすれている。913は全体が著しく摩滅している。両例とも破棄時に魂ぬきしたためか、中央から半裁したような割れ方をしている。材質は912が不明、913は凝灰角礫岩。914は小破片だが、上臼の口縁部と考えられる。石材は凝灰岩。

## その他の石製品（第92図916～922、図版53）

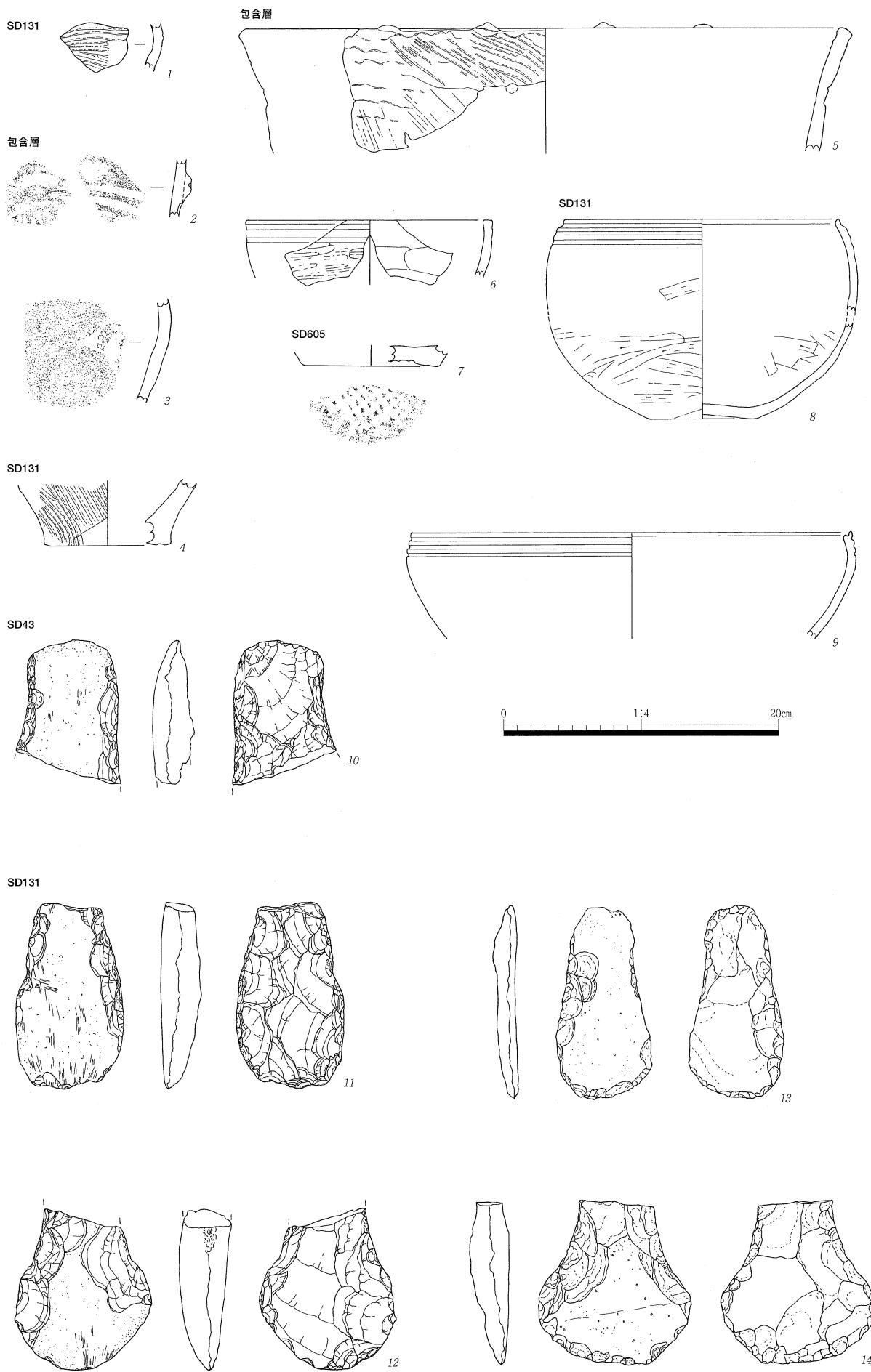
916は箱状を呈するもので、底部の四辺（残存しているのは二辺分）に低い脚部が削り出されている。側面は逆台形状で、上辺が13.5cm、脚の付く下辺が12cm、高さ6.2cm、厚さ1.8cm。石材は濃飛流紋岩である。917は石鉢の底部破片。円形鍋底状の形態で、おそらく口縁部に片口が付く。石材は千枚岩。918～922は加工痕のある石材で、いずれも破片のため用途を推定し得ない。石材は920が凝灰質砂岩、他は凝灰岩である。

(森 隆)

## 参考文献

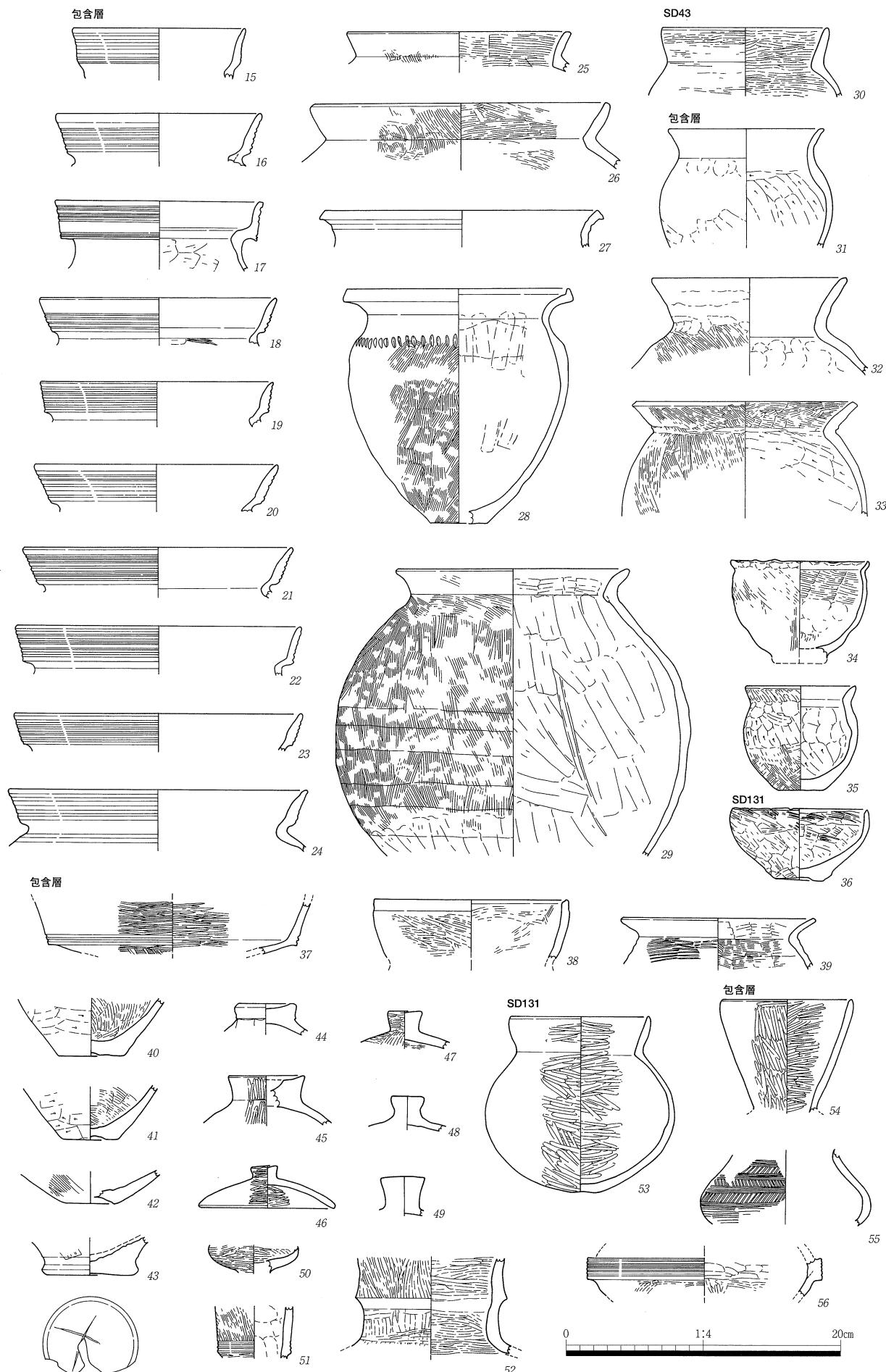
- 市川秀之 1987 「西ノ辻遺跡出土の中世木器」『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・IV』 大阪府教育委員会
- 一色八郎 1990 『箸の文化史』 お茶の水書房
- 井上喜久男 1992 『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 岩田隆 1985 「中世遺跡出土の下駄」『朝倉氏遺跡資料館紀要』
- 大橋康二・西田宏子監修 1988 『別冊太陽 古伊万里』63 平凡社
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社
- 小川啓司 1974 『そば猪口絵柄事典』 光芸出版
- 北九州市教育委員会 1993 『京町遺跡 北九州市文化財調査報告書』第59集
- 九州近世陶磁学会編 2000 『九州陶磁の編年』
- 財団法人富山県文化振興財団 1996 『梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
- 潮田鉄雄 1973 『ものと人間の文化史 はきもの』8 法政大学出版会
- 鈴木康之 2002 「日本中世における桶・樽の展開—結物の出現と拡散を中心に—」『考古学研究』第48巻第4号
- 高橋幹夫 1994 『江戸の暮らし図鑑』 芙蓉書房出版
- 多治見市教育委員会 1993 『美濃窯の焼物』『多治見の古窯』第3号
- 東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会 1992 『東京都新宿区・内藤町遺跡（第Ⅱ分冊遺物編）』
- 奈良国立文化財研究所 1985 『木器集成図録—近畿・古代篇—』
- 水野和雄 1985 「日本硯考—出土品を中心として—」『考古学雑誌』第70巻第4号
- 宮田進一 1998 「越中瀬戸の成立と展開」『情報と物流の日本史』 地方史研究協議会編 雄山閣
- 三輪茂雄 1978 『ものと人間の文化史 白』25 法政大学出版会
- 向井由紀子・橋本慶子 2001 『ものと人間の文化史 箸』102 法政大学出版会
- 深堀茜 1999 「北陸の木製農耕具集成(1)」『富山考古学研究』紀要第2号 財団法人富山県文化振興財団
- 古泉弘 1979 「江戸の出土下駄」『物質文化』32
- 北陸中世土器研究会編 1997 『考古学が語る社会史—中・近世の北陸—』 桂書房
- 吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

3 遺 物



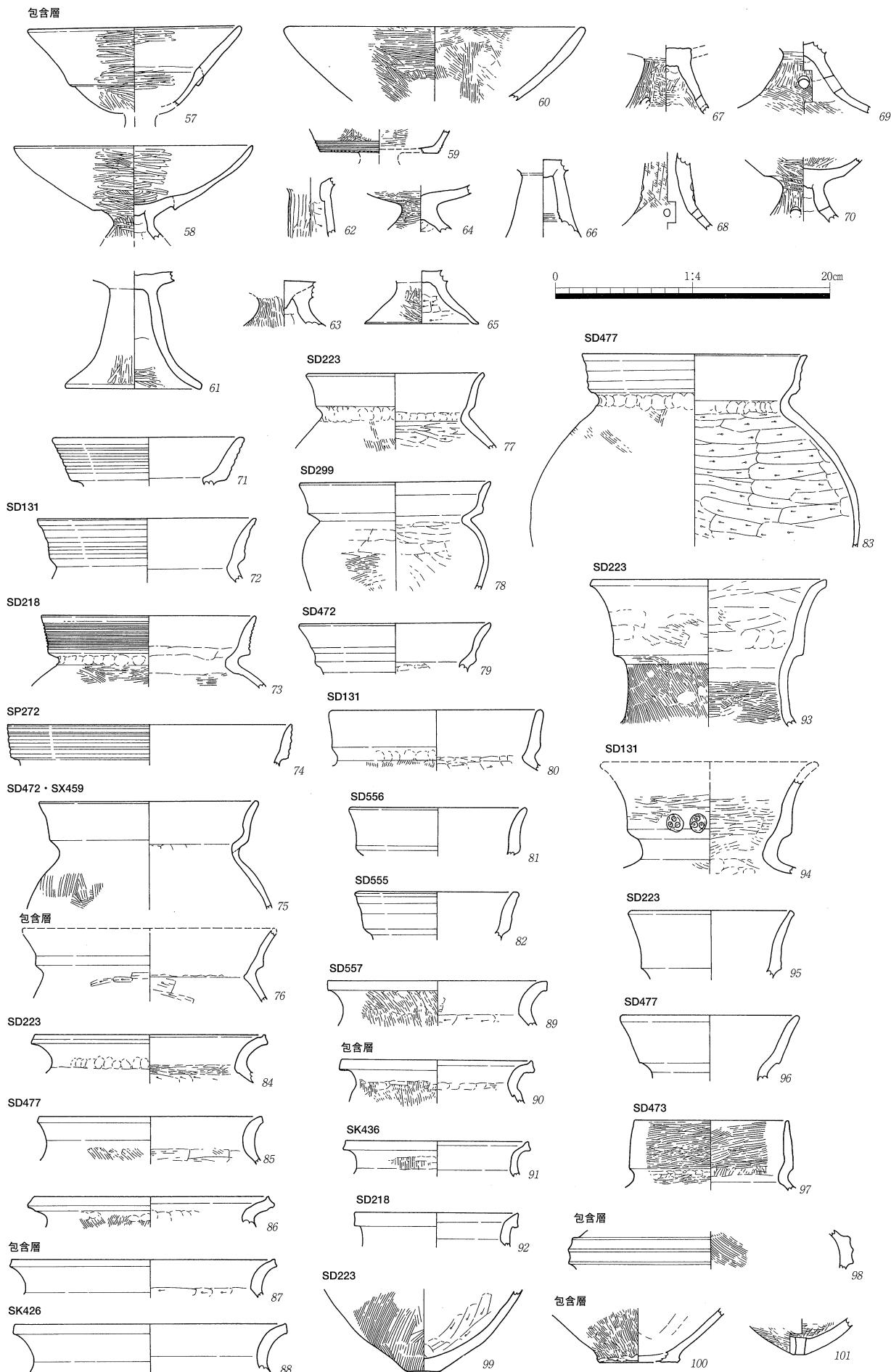
第56図 江尻遺跡 A~C 地区 遺物実測図 (1/4)

SD43(10) SD131(1・4・8・9・11~14) SD605(7) 包含層(2・3・5・6)



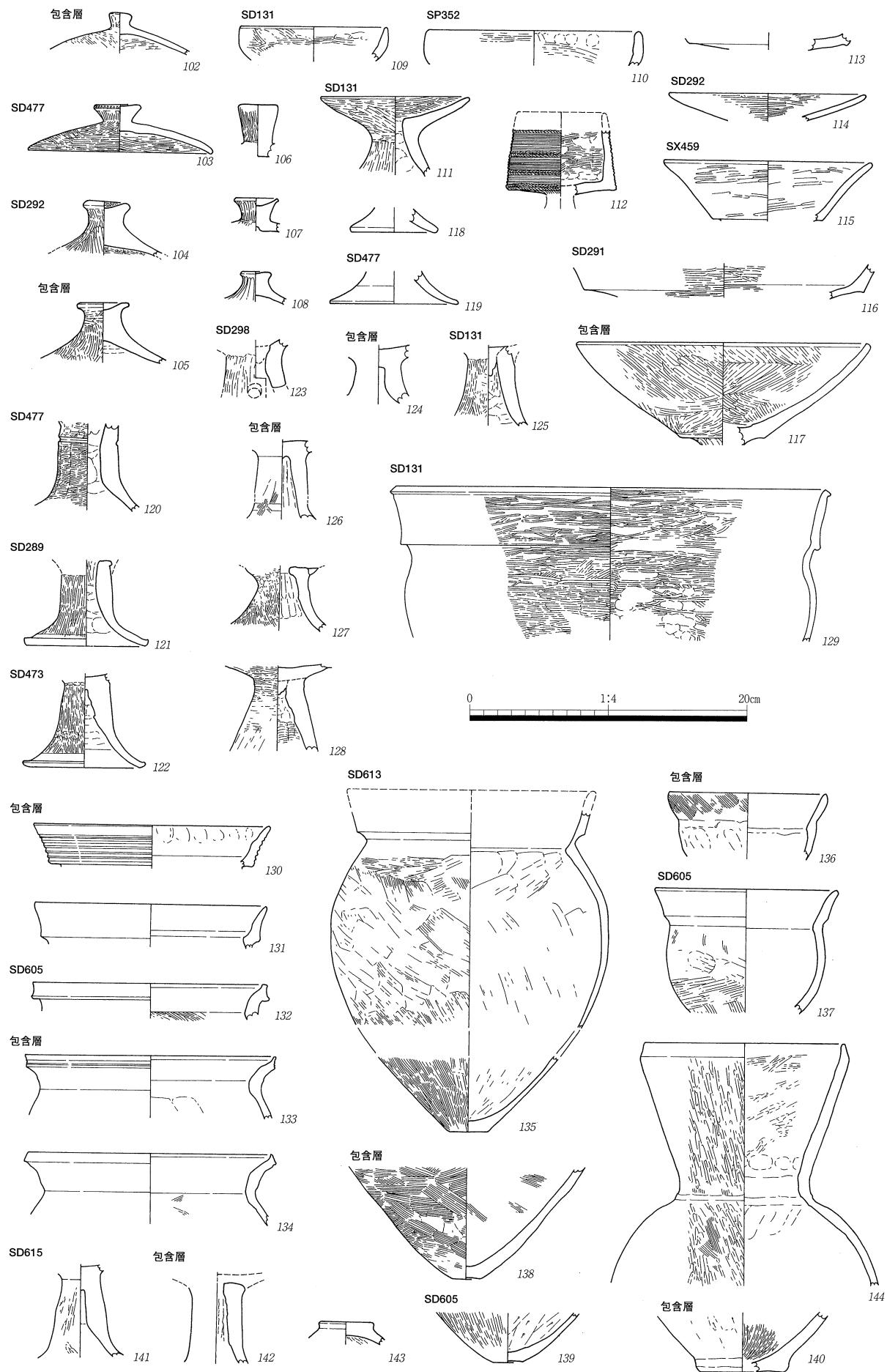
第57図 江尻遺跡 A 地区 遺物実測図 (1/4)

SD43(30) SD131(36・53) 包含層(15~29・31~35・37~52・54~56)



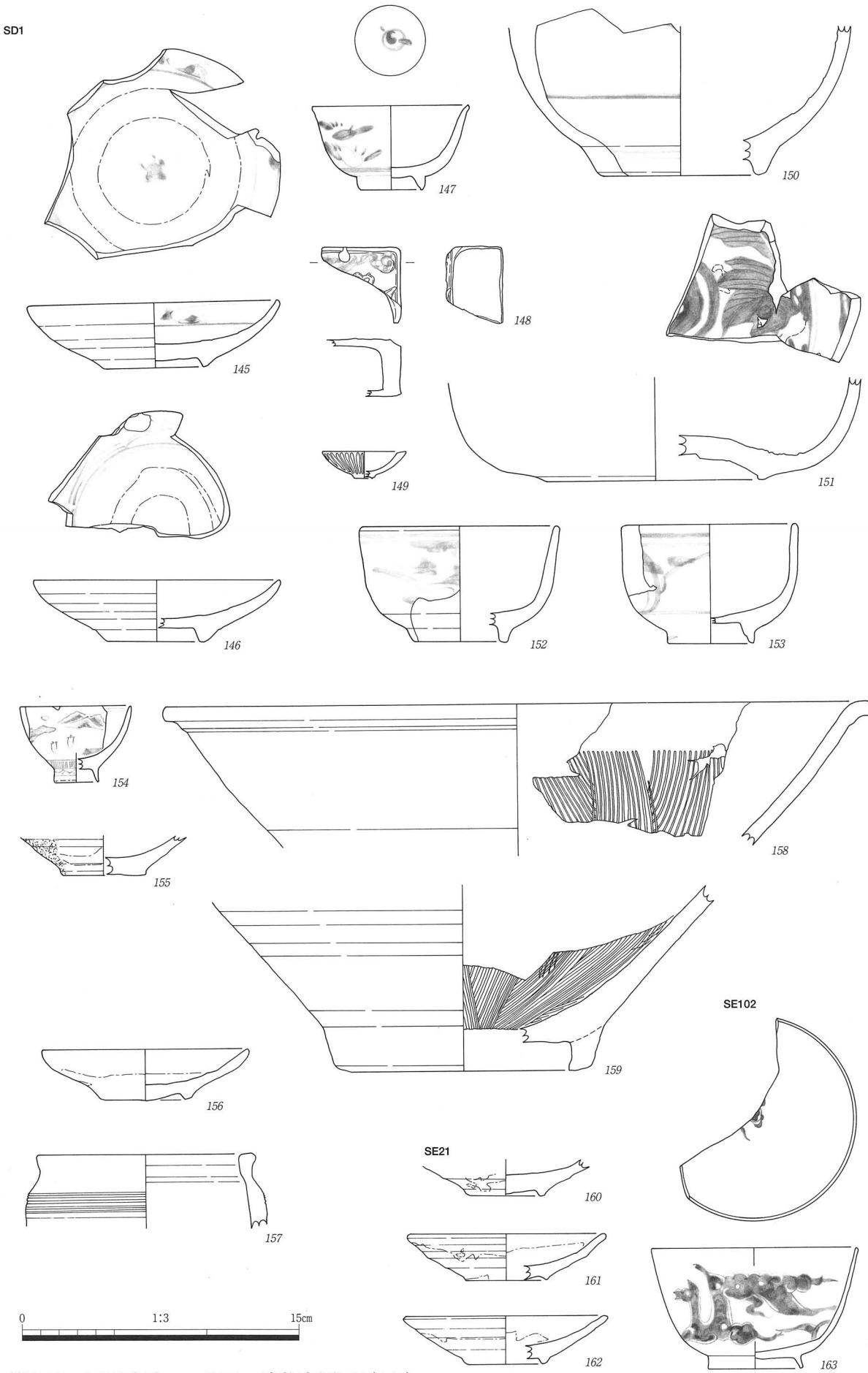
第58図 江尻遺跡 A・B地区 遺物実測図 (1/4)

SP272(74) SK426(88) SK436(91) SD131(72 · 80 · 94) SD218(73 · 92) SD223(77 · 84 · 93 · 95 · 99) SD299(78)  
SD472(79) SD472 · SX459(75) SD473(97) SD477(83 · 85 · 86 · 96) SD555(82) SD556(81) SD557(89) 包含層  
(57 ~ 71 · 76 · 87 · 90 · 98 · 100 · 101)



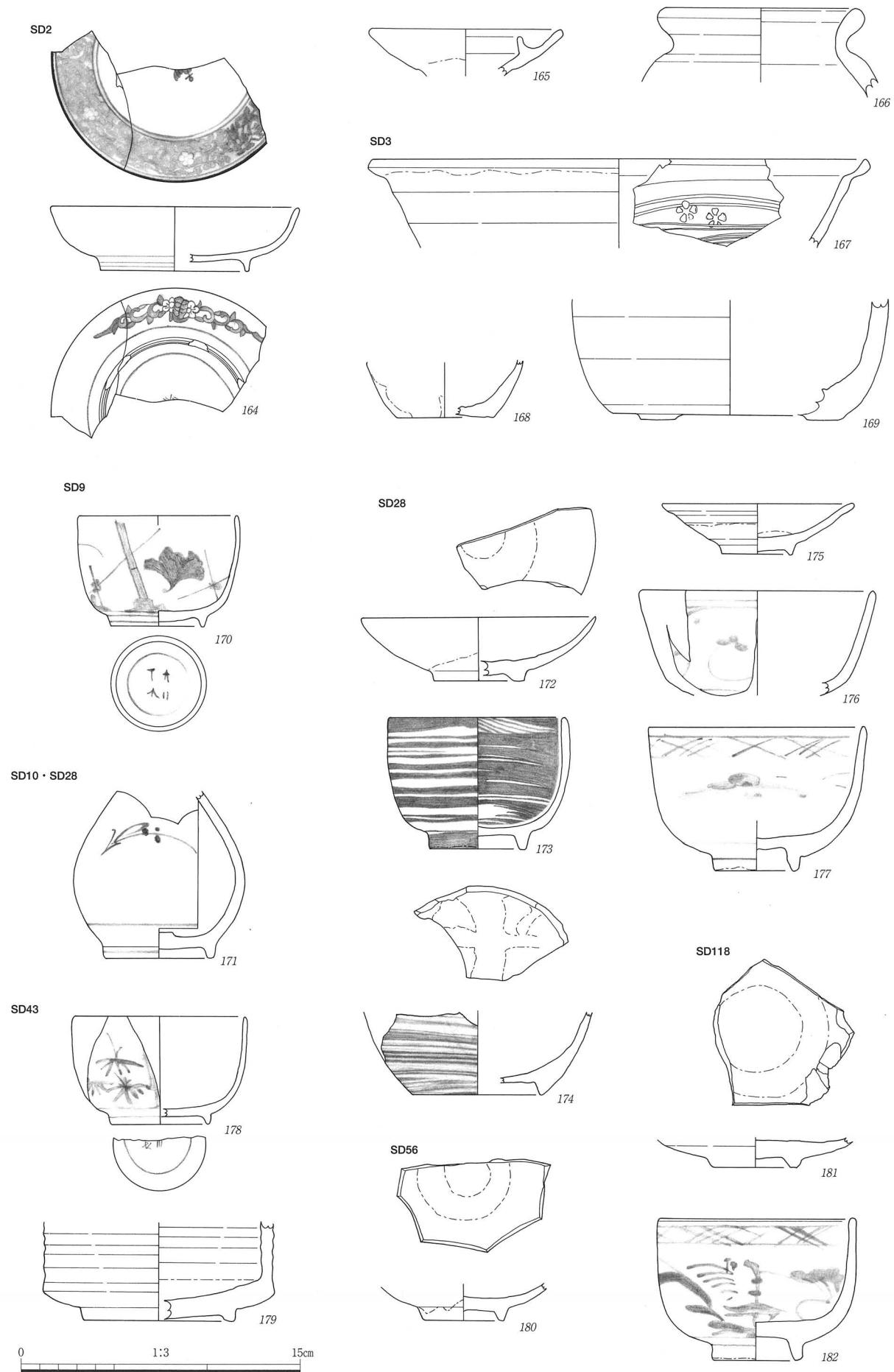
第59図 江尻遺跡 B・C 地区 遺物実測図 (1/4)

SP352(110) SD131(109·111~113·125·129) SD289(121) SD291(116) SD292(104·114) SD298(123)  
SD473(122) SD477(103·119·120) SD605(132·137·139) SD613(135) SD615(141) SX459(115)  
包含層(102·105~108·117·118·124·126~128·130·131·133·134·136·138·140·142~144)



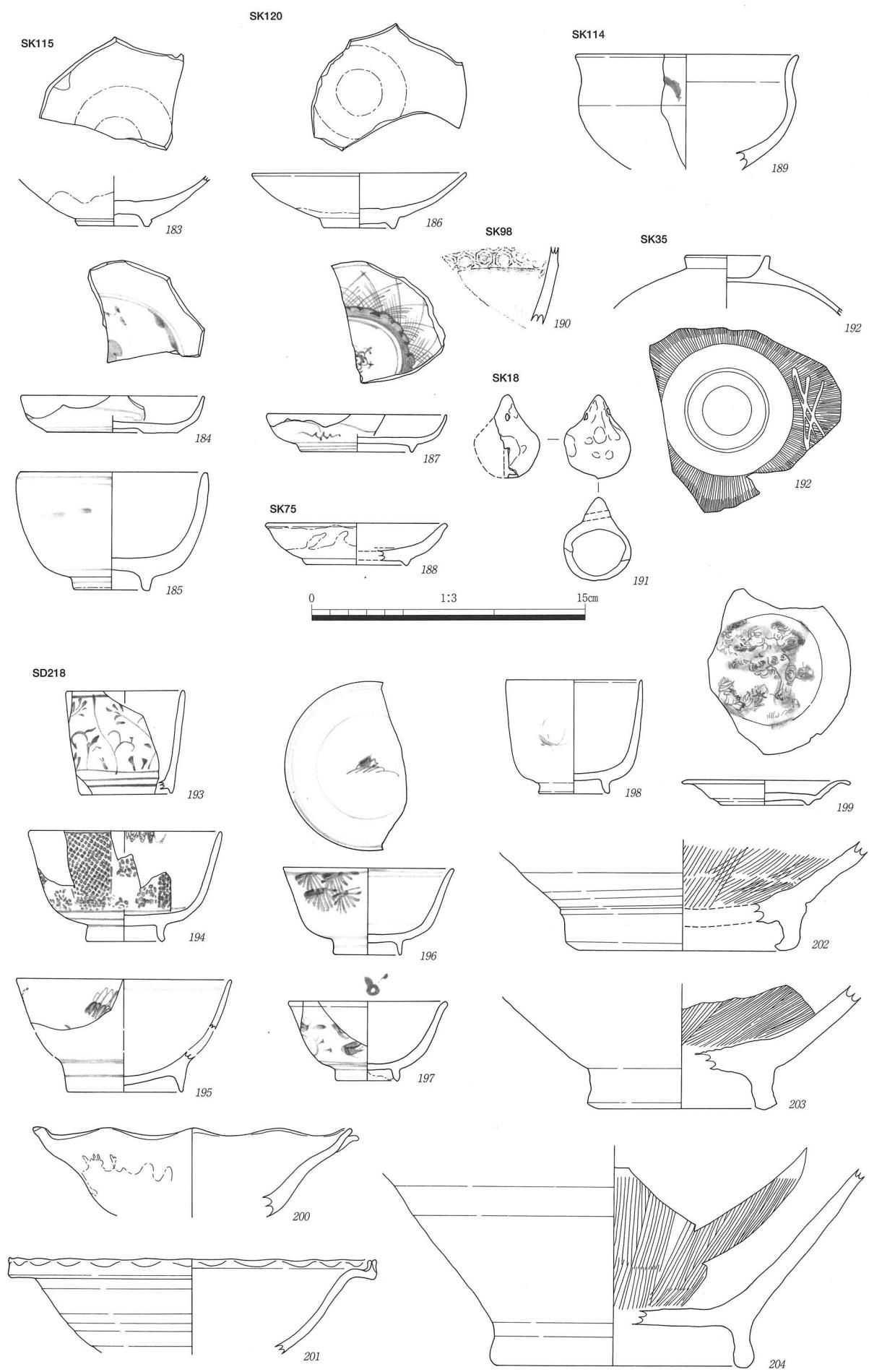
第60図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 (1/3)

SE21(160~162) SE102(163) SD1(145~159)



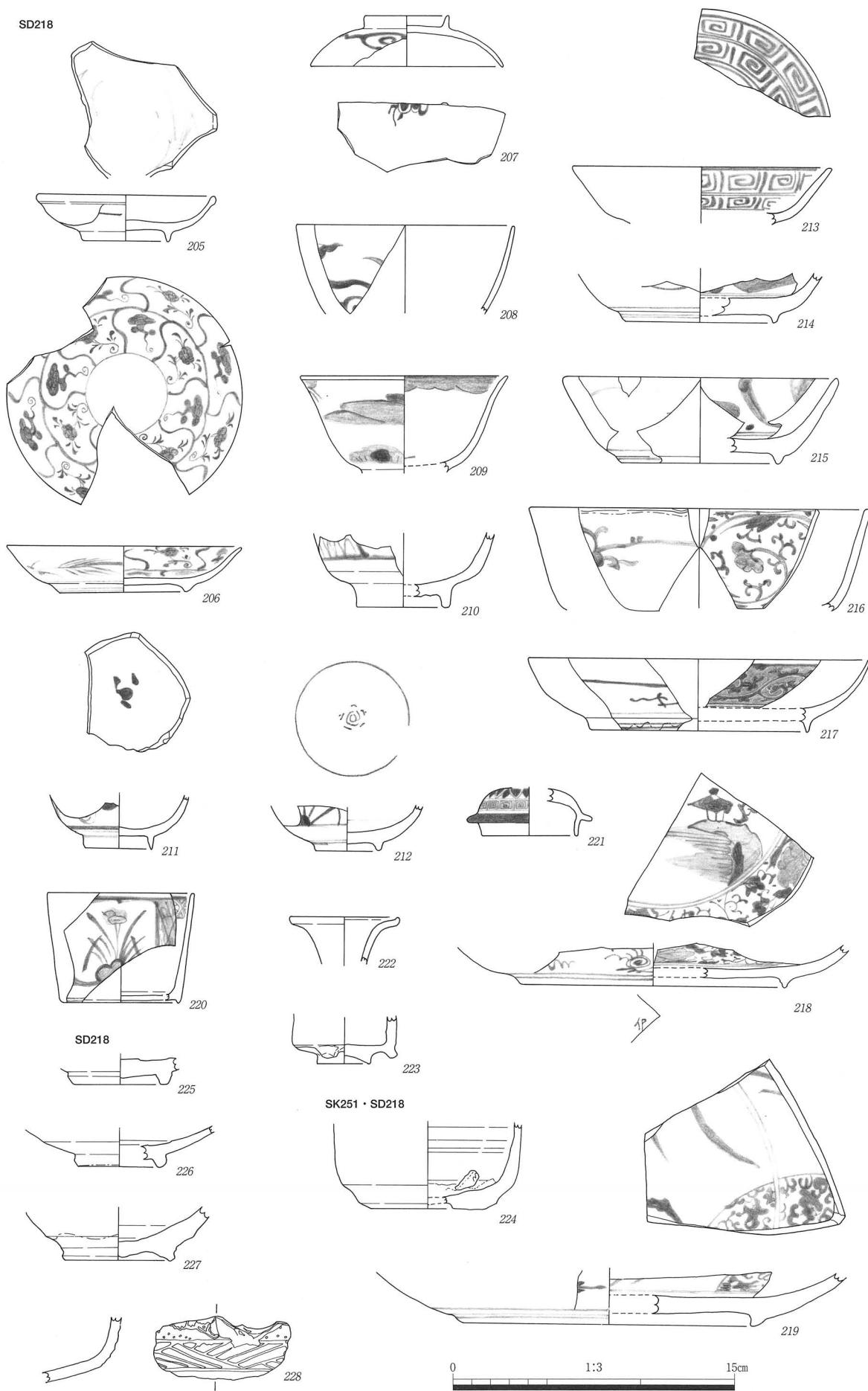
第61図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 (1/3)

SD2(164~166) SD3(167~169) SD9(170) SD10・SD28(171) SD28(172~177) SD43(178・179) SD56(180)  
SD118(181・182)

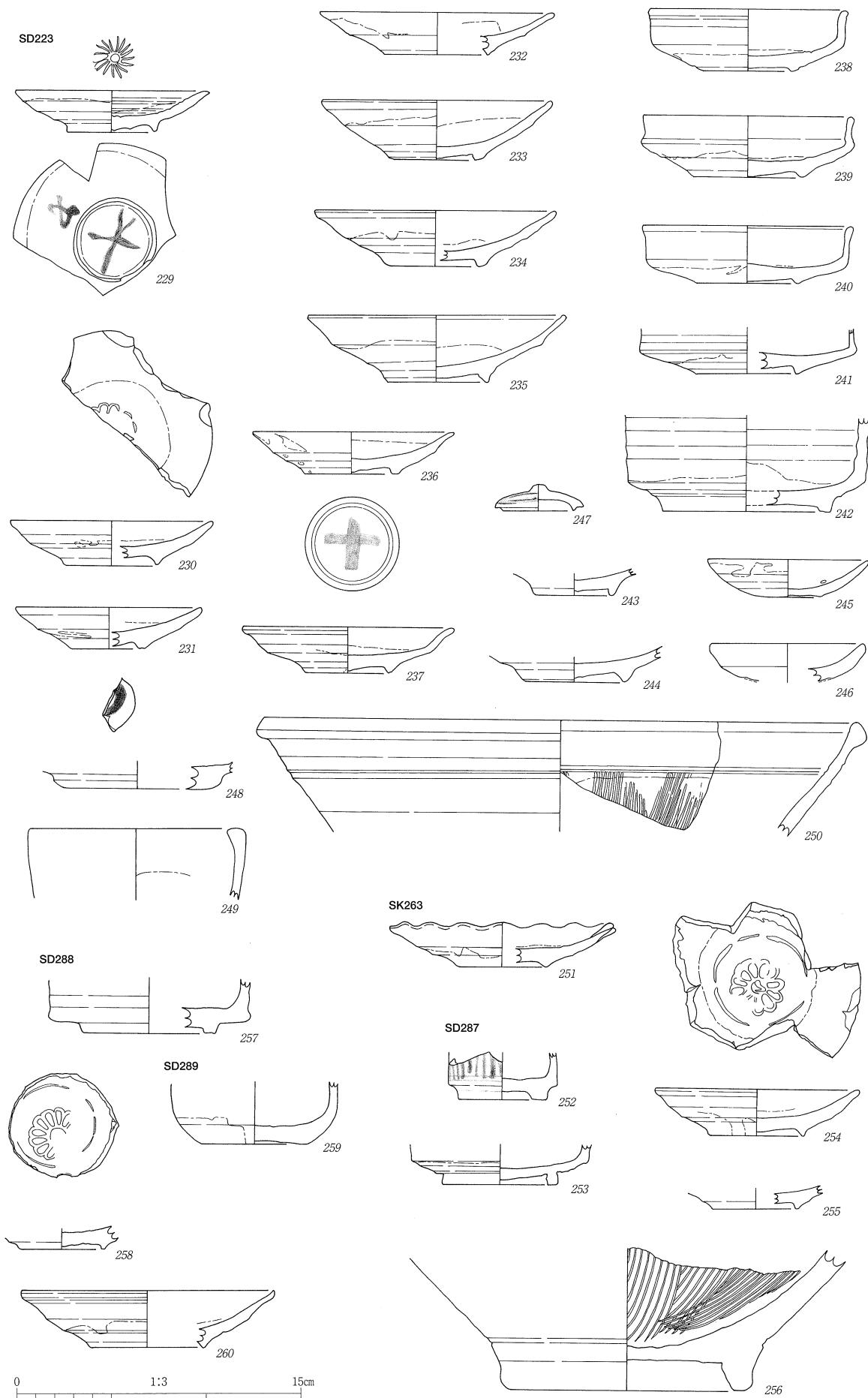


第62図 江尻遺跡 A・B1地区 遺物実測図 (1/3)

SK18(191) SK35(192) SK75(188) SK98(190) SK114(189) SK115(183~185)  
SK120(186·187) SD218(193~204)

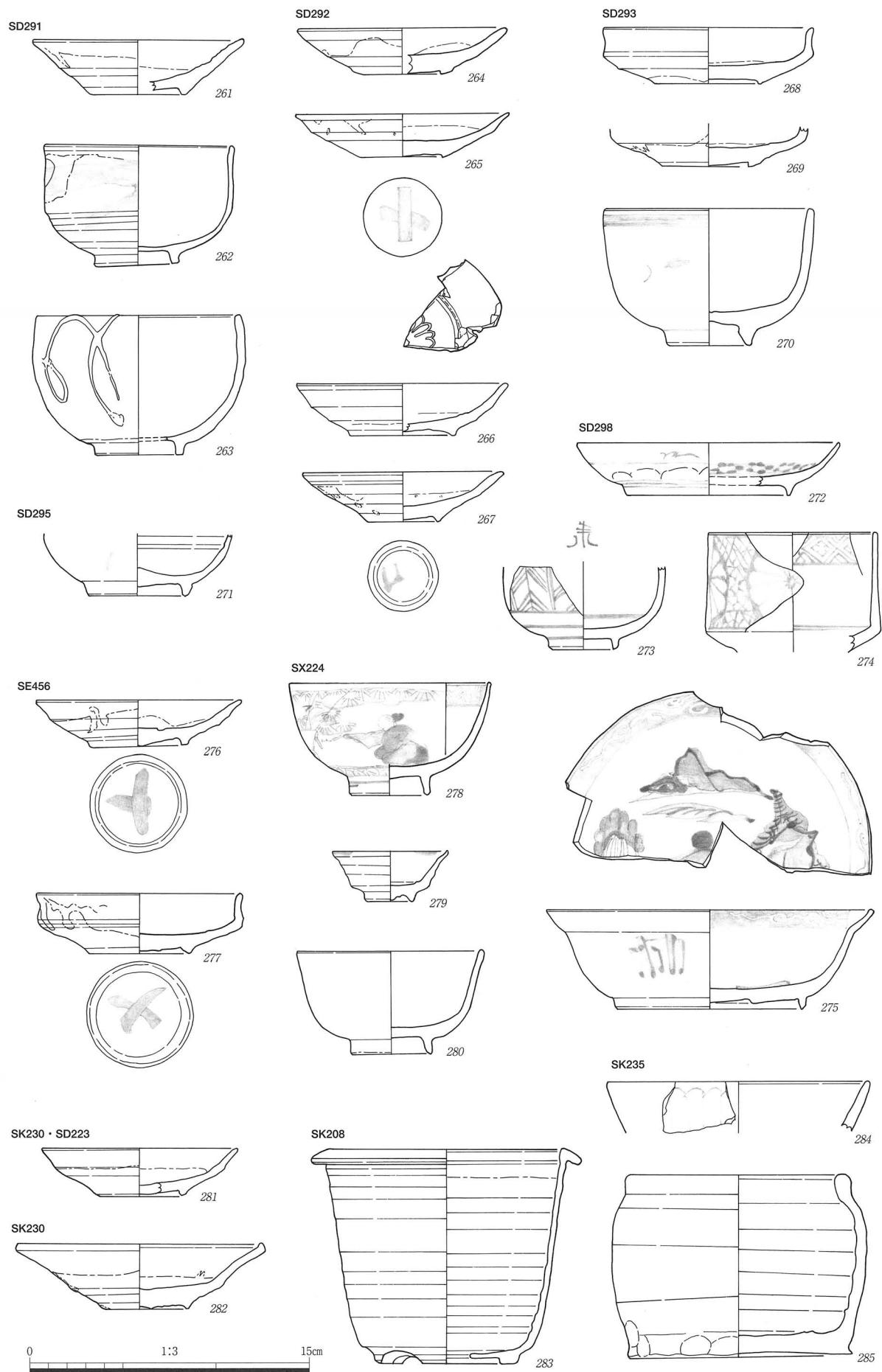


第63図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 (1/3)  
SK251 · SD218(224) SD218(205~223 · 225~228)



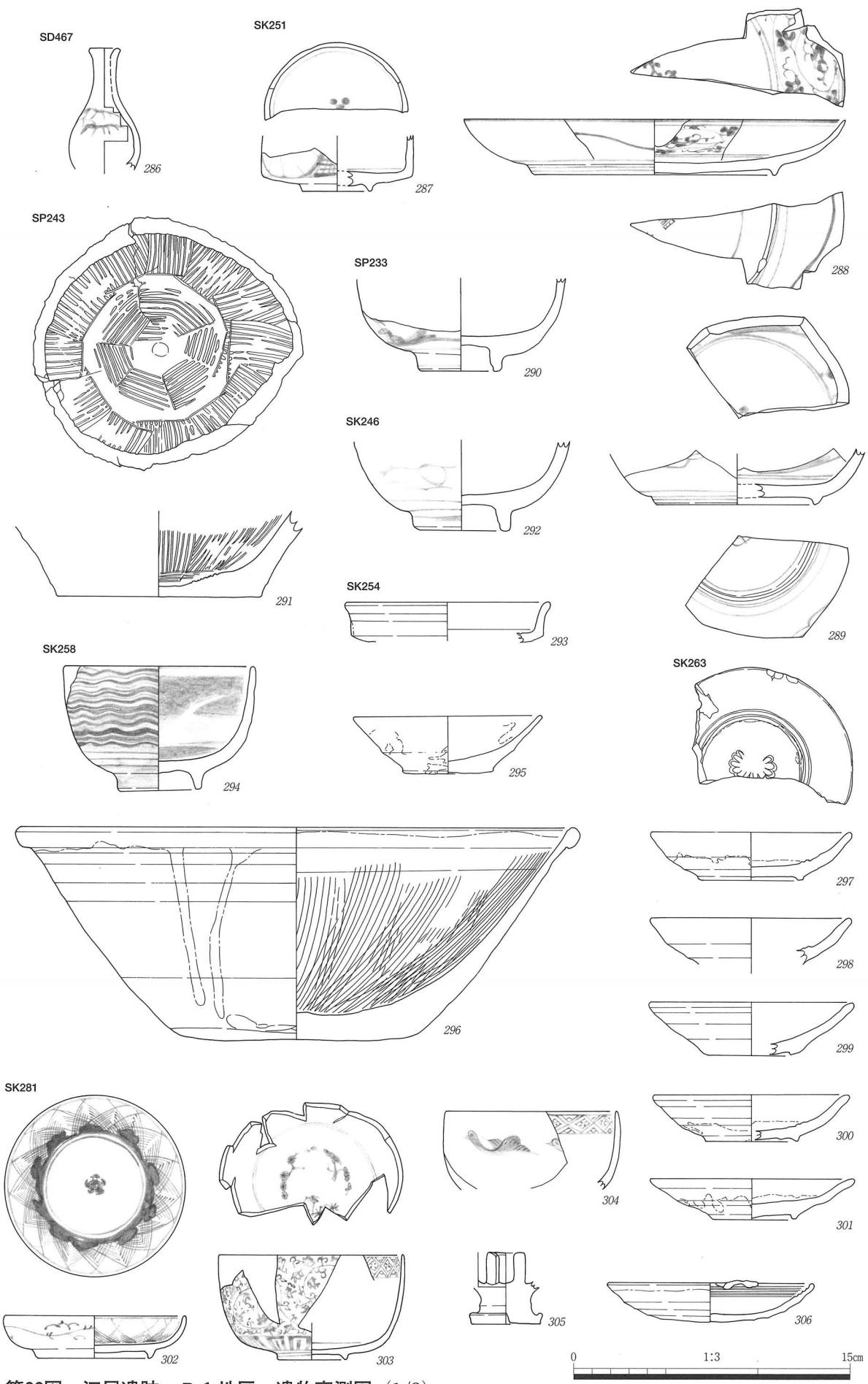
第64図 江尻遺跡 B 1 地区 遺物実測図 (1/3)

SK263(251) SD223(229~250) SD287(252~256) SD288(257~258) SD289(259·260)



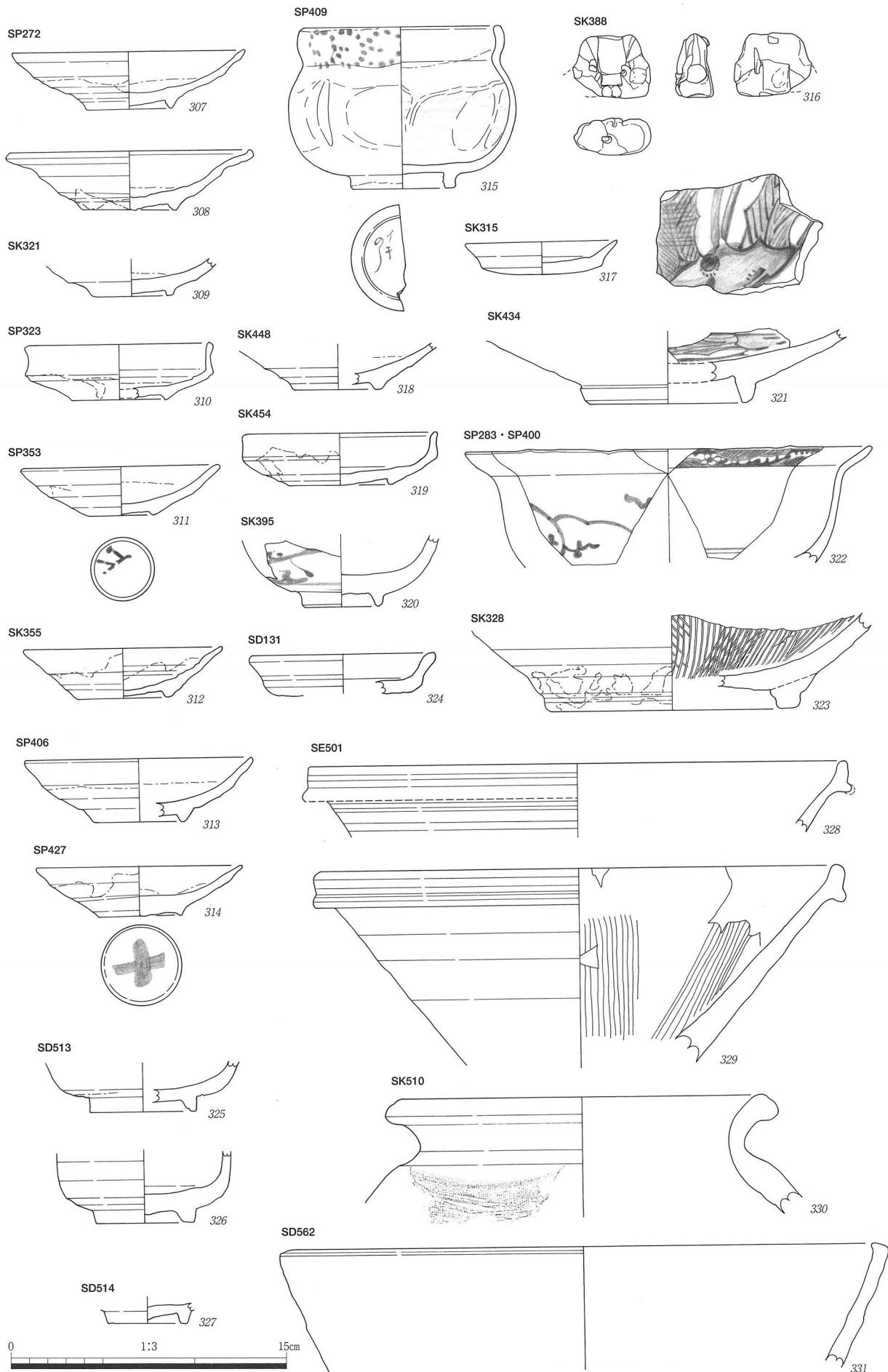
第65図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 (1/3)

SE456(276・277) SK208(283) SK230・SD223(281) SK230(282) SK235(284・285) SD291(261～263)  
SD292(264～267) SD293(268～270) SD295(271) SD298(272～275) SX224(278～280)



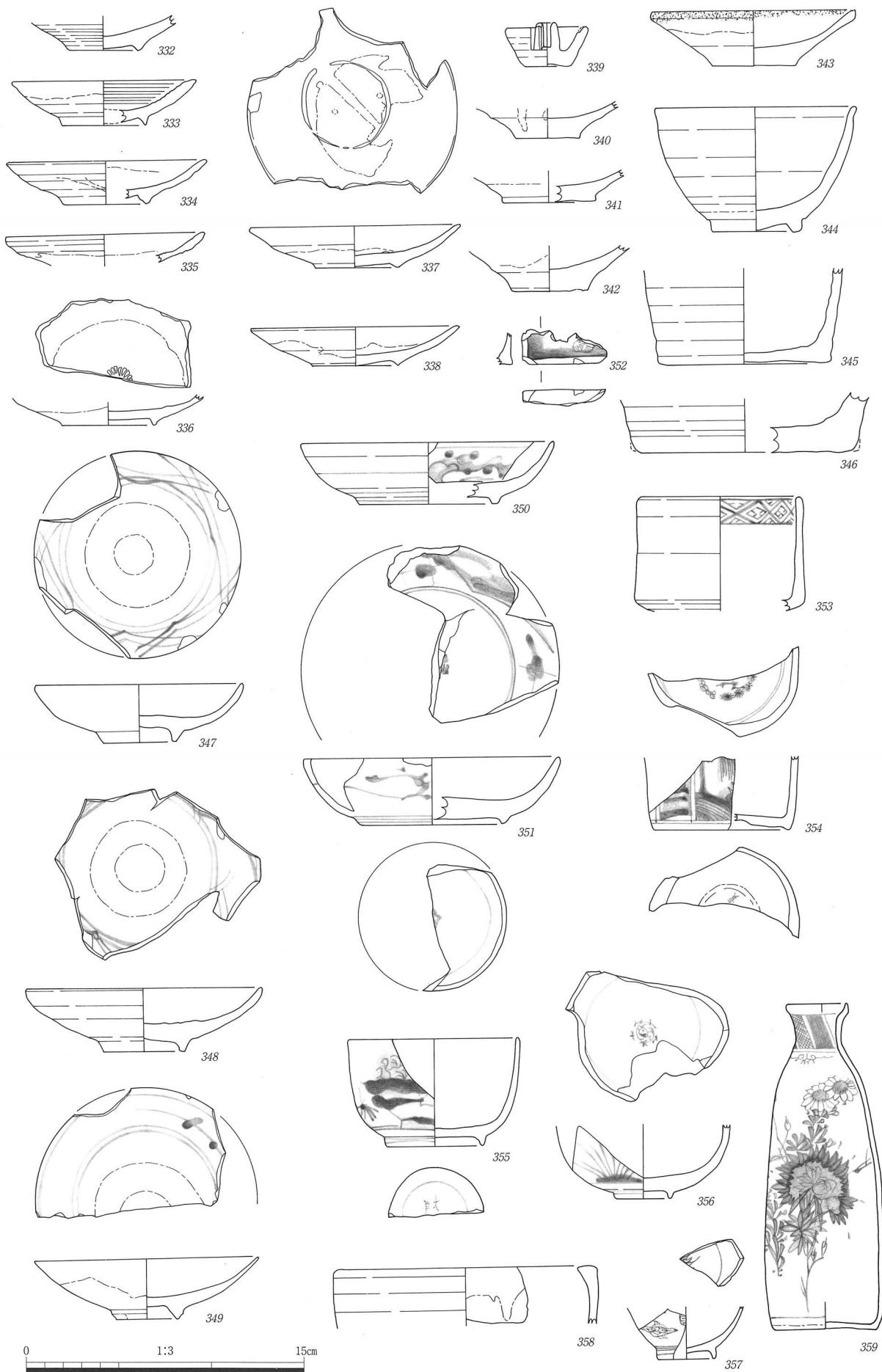
第66図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 (1/3)

SP233(290) SP243(291) SK246(292) SK251(287~289) SK254(293) SK258(294~296)  
 SK263(297~301) SK281(302~306) SD467(286)

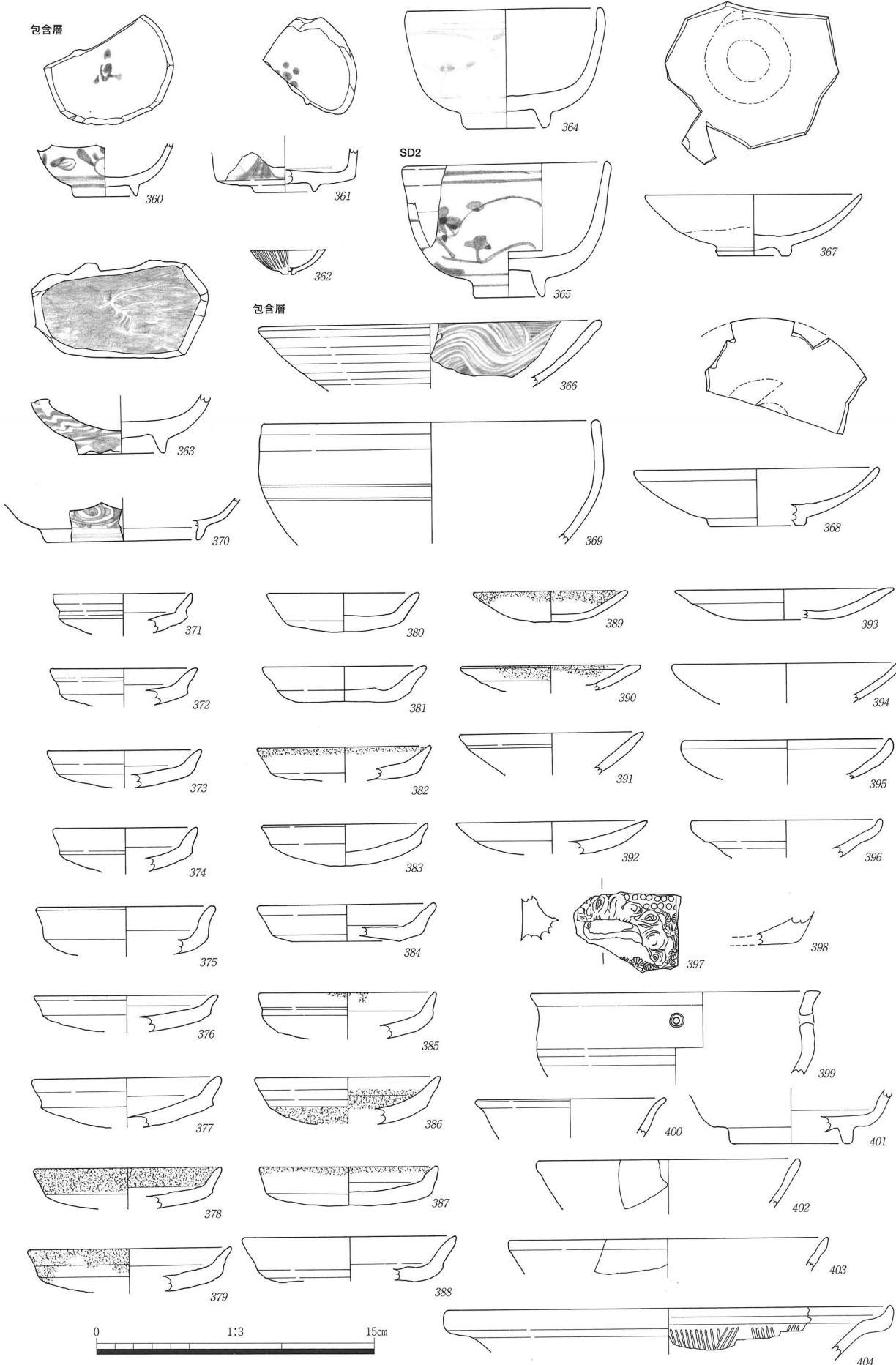


第67図 江尻遺跡 B地区 遺物実測図 (1/3)

SE501(328・329) SP272(307・308) SP283・SP400(322) SP323(310) SP353(311)  
 SP406(313) SP409(315) SP427(314) SK315(317) SK321(309) SK328(323)  
 SK355(312) SK388(316) SK395(320) SK434(321) SK448(318) SK454(319)  
 SK510(330) SD131(324) SD513(325・326) SD514(327) SD562(331)

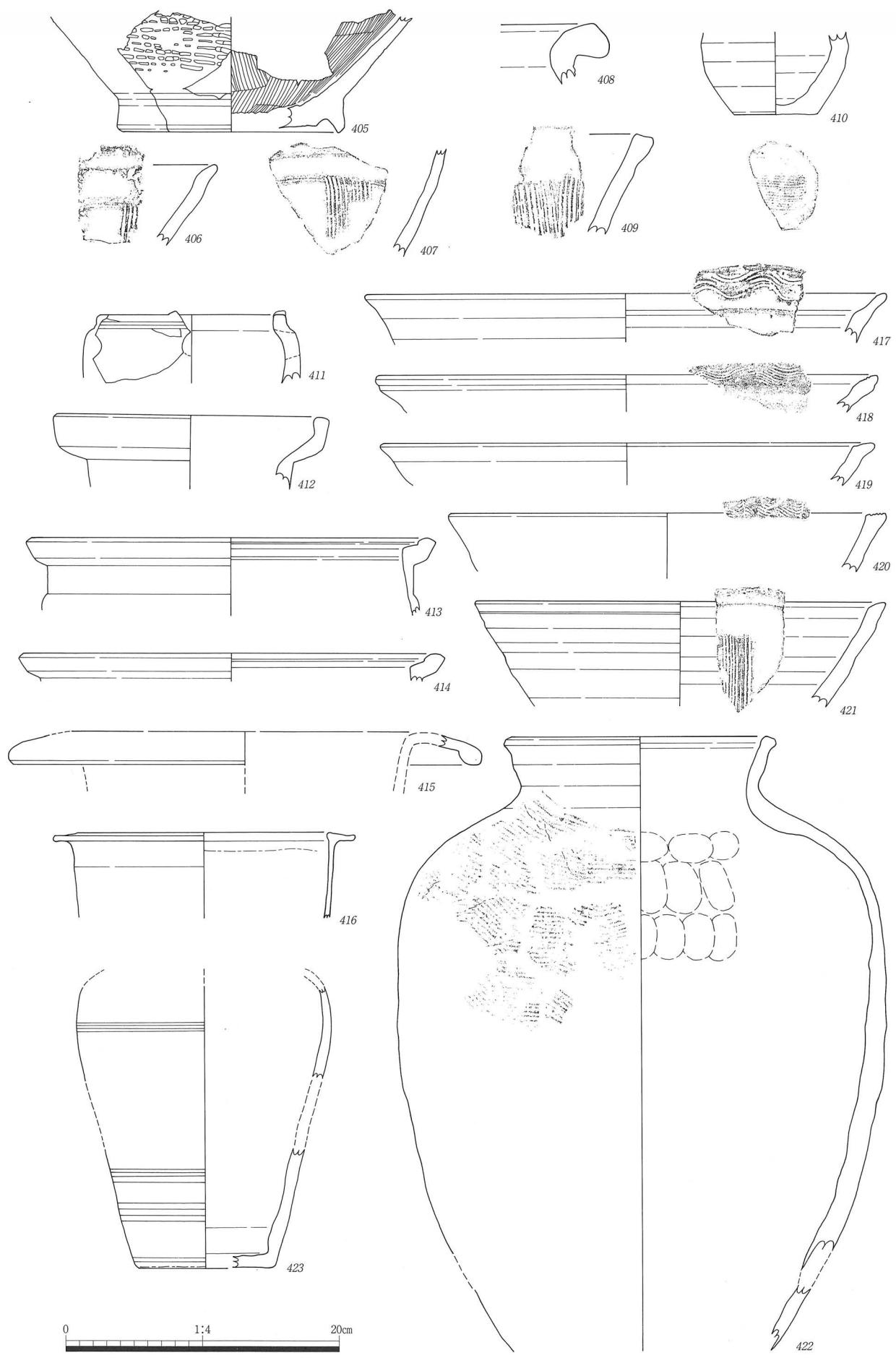


第68図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 (1/3)  
包含層

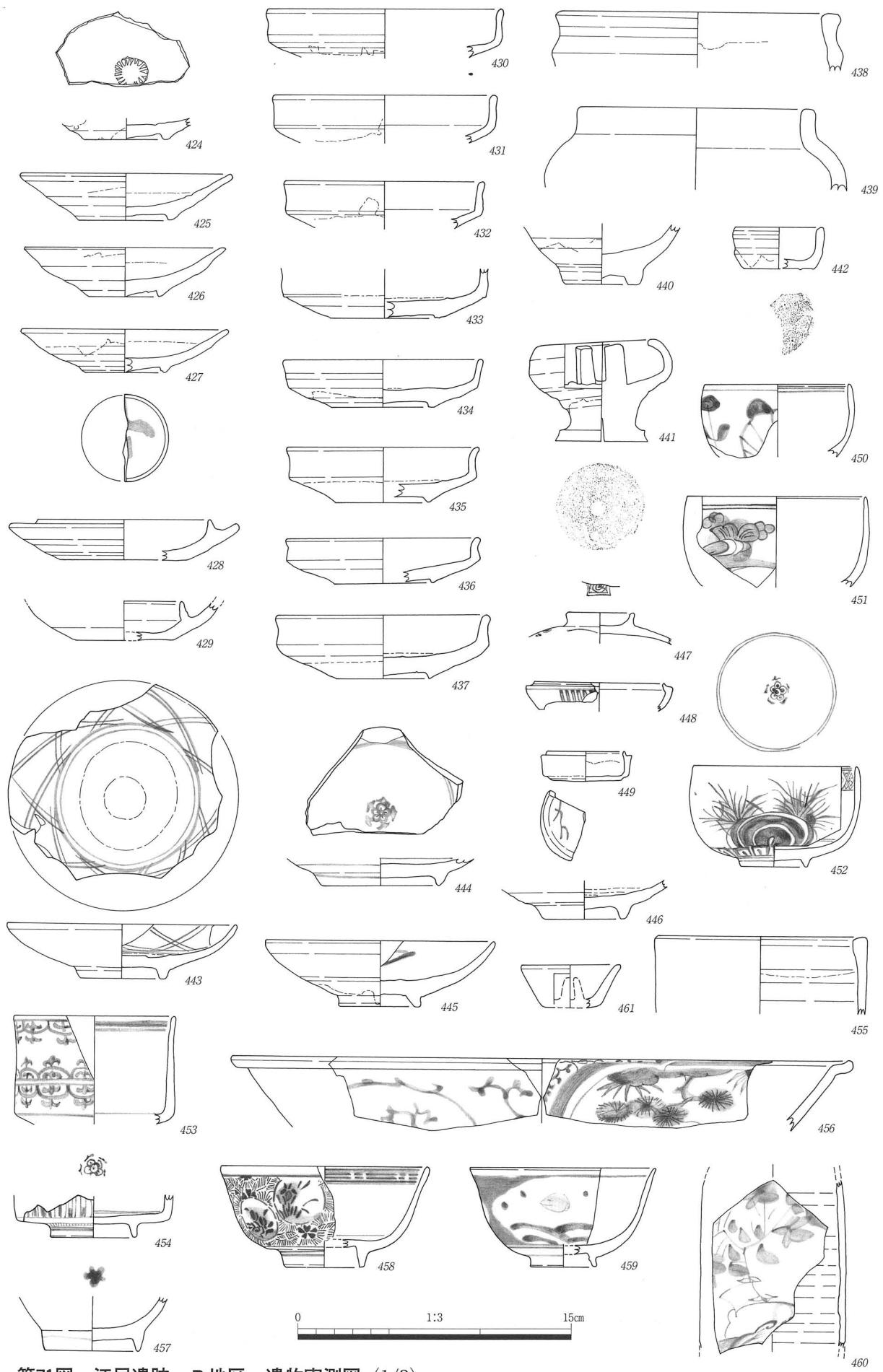


第69図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 (1/3)

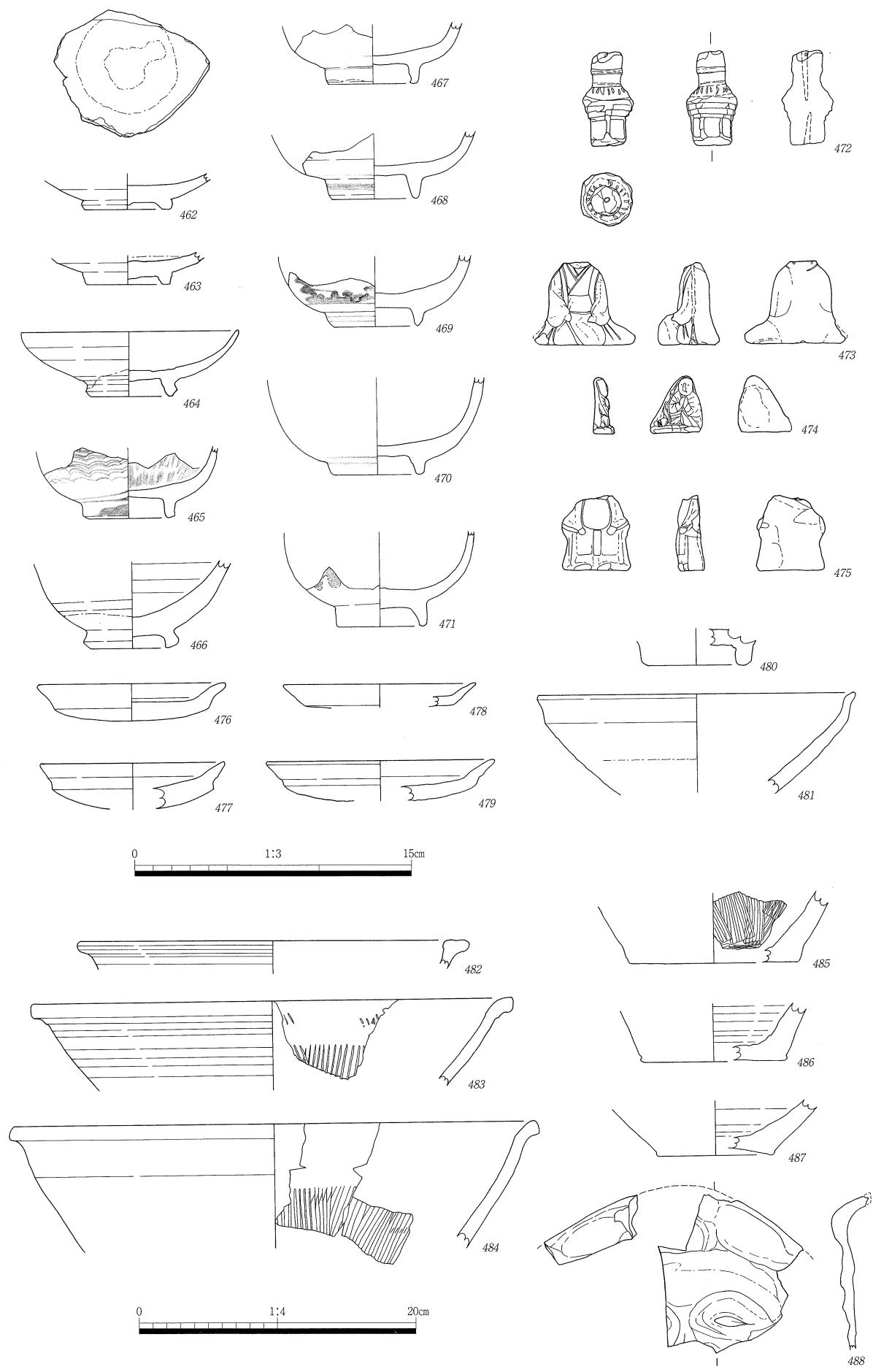
SD 2 (365) 包含層(360~364・366~404)



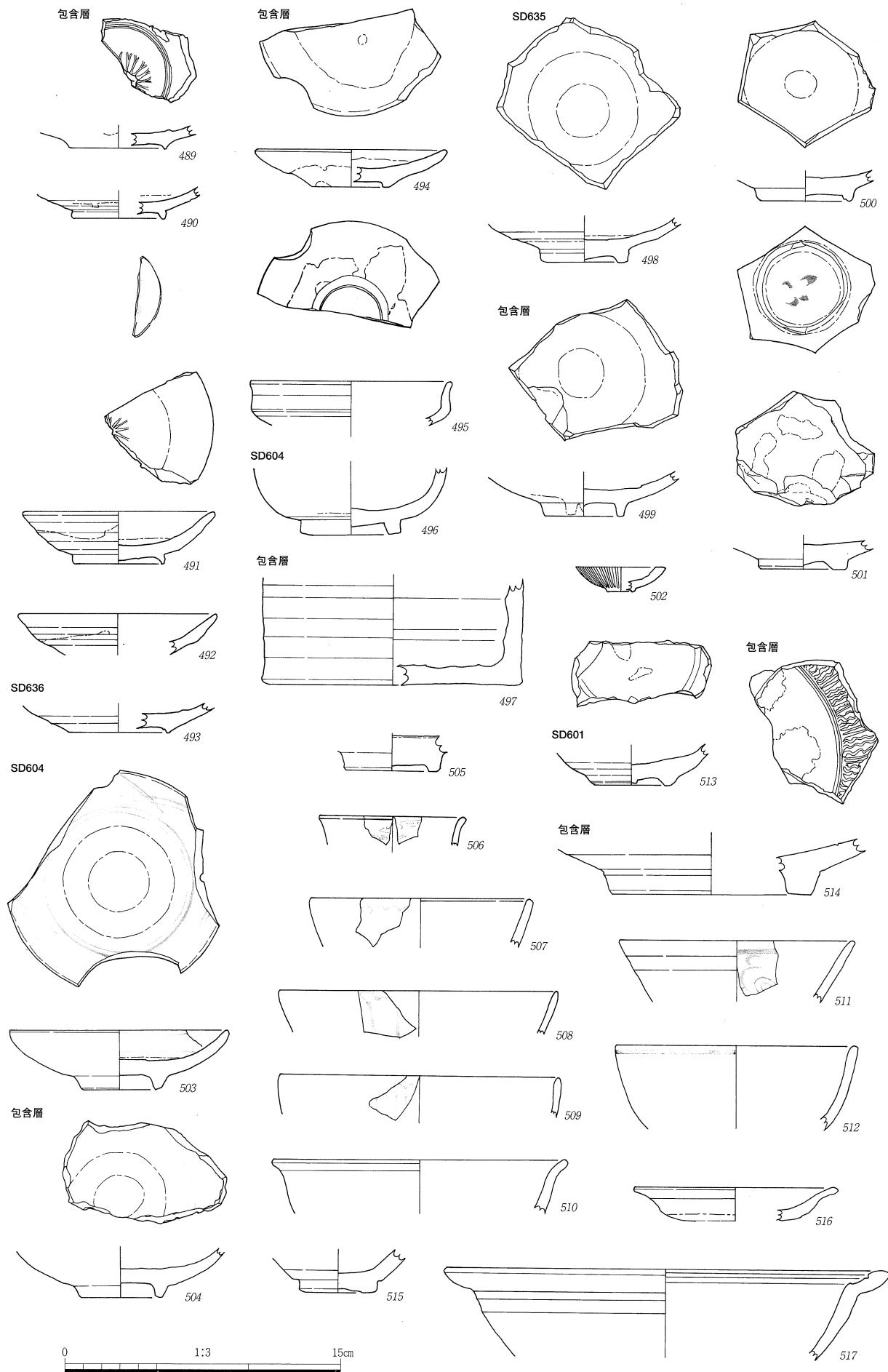
第70図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 (1/4)  
包含層



第71図 江尻遺跡 B地区 遺物実測図 (1/3)  
包含層



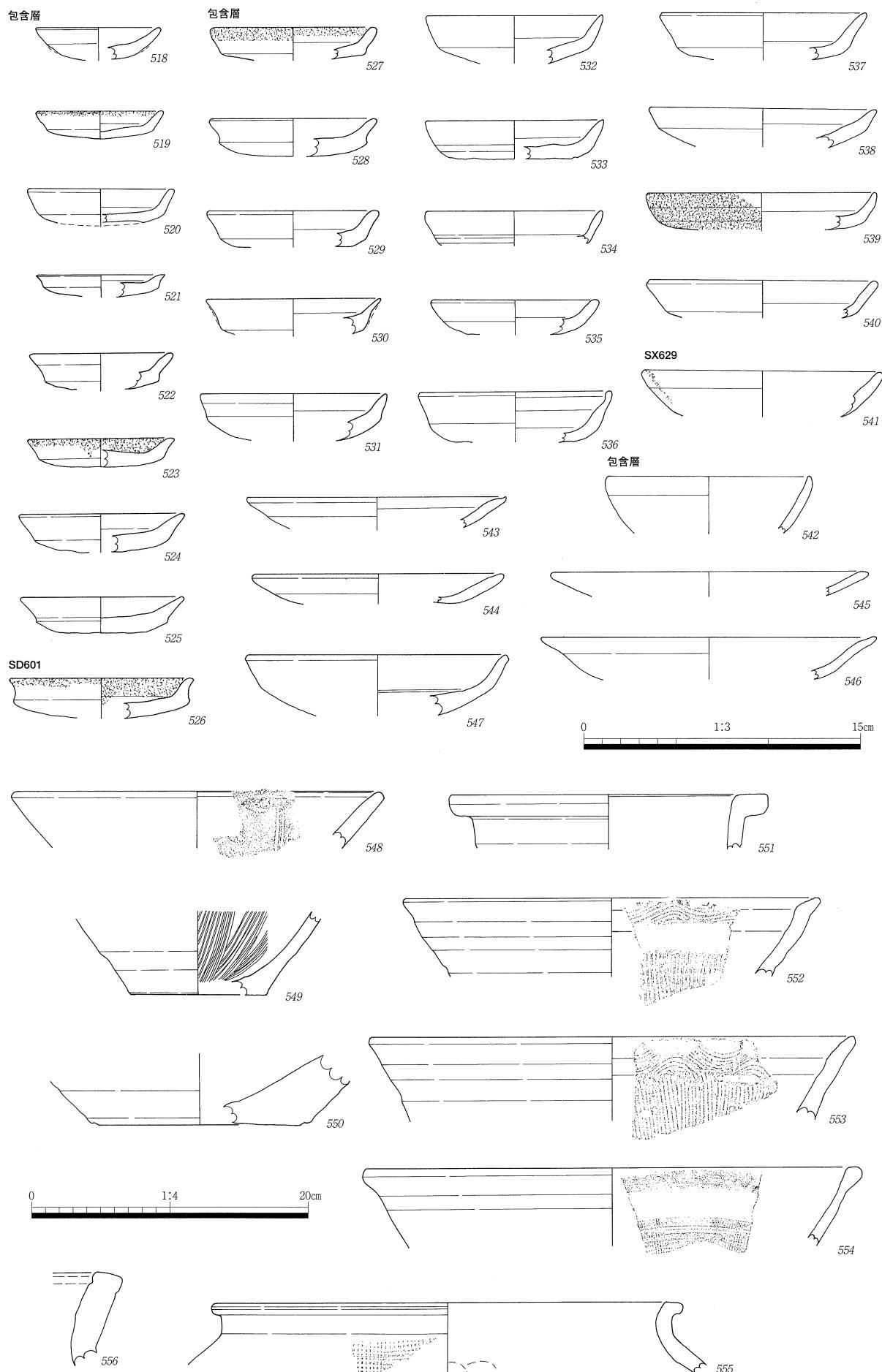
第72図 江尻遺跡 B地区 遺物実測図 (462~481 1/3, 482~488 1/4)  
包含層



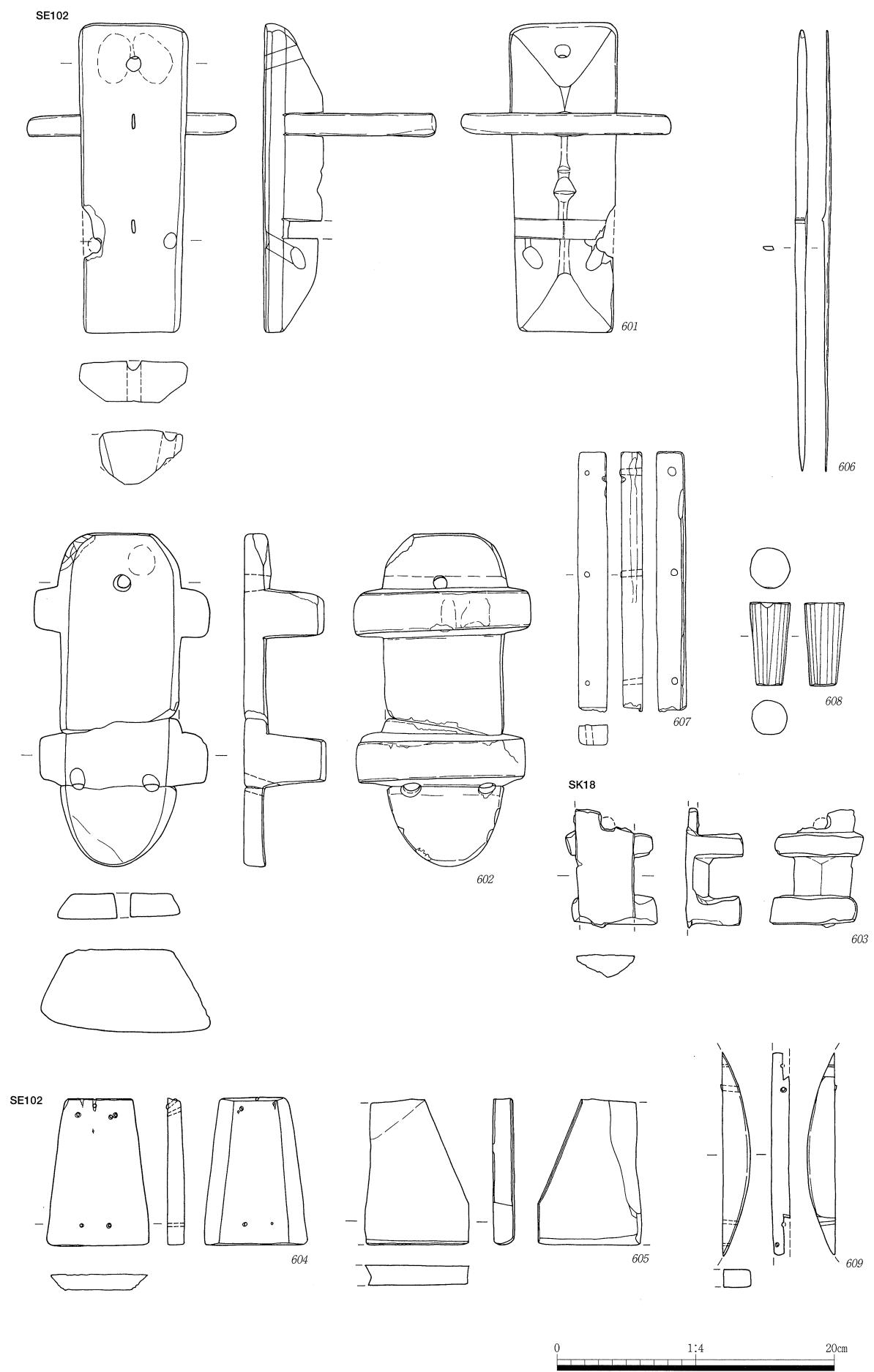
第73図 江尻遺跡 C地区 遺物実測図 (1/3)

SD601(513) SD604(496・503) SD635(498) SD636(493) 包含層(489~492・494・495・497・499~502・504~512・514~517)

3 遺 物

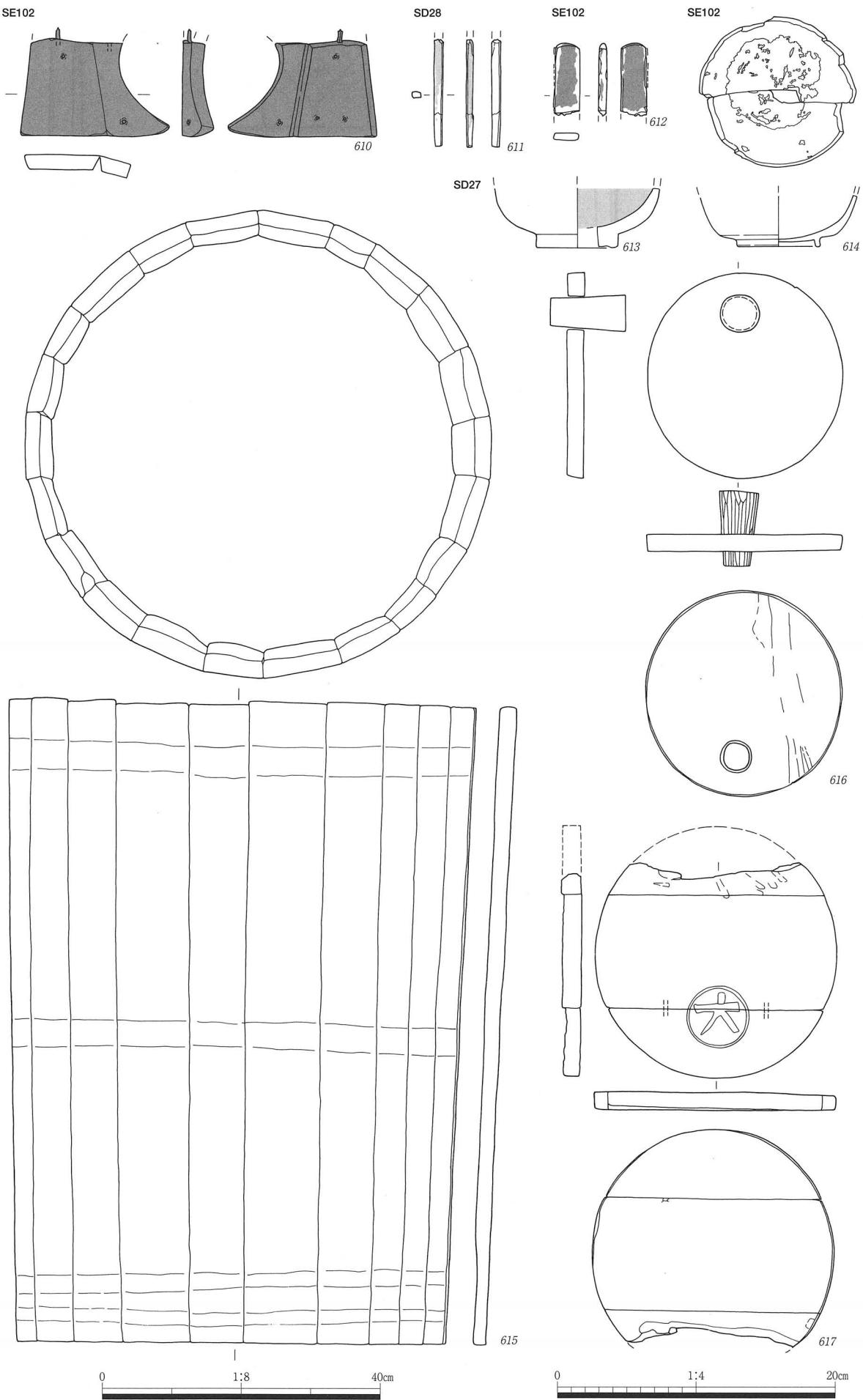


第74図 江尻遺跡 C地区 遺物実測図 (518~547 1/3, 548~556 1/4)  
SD601(526) SX629(541) 包含層(518~525・527~540・542~556)

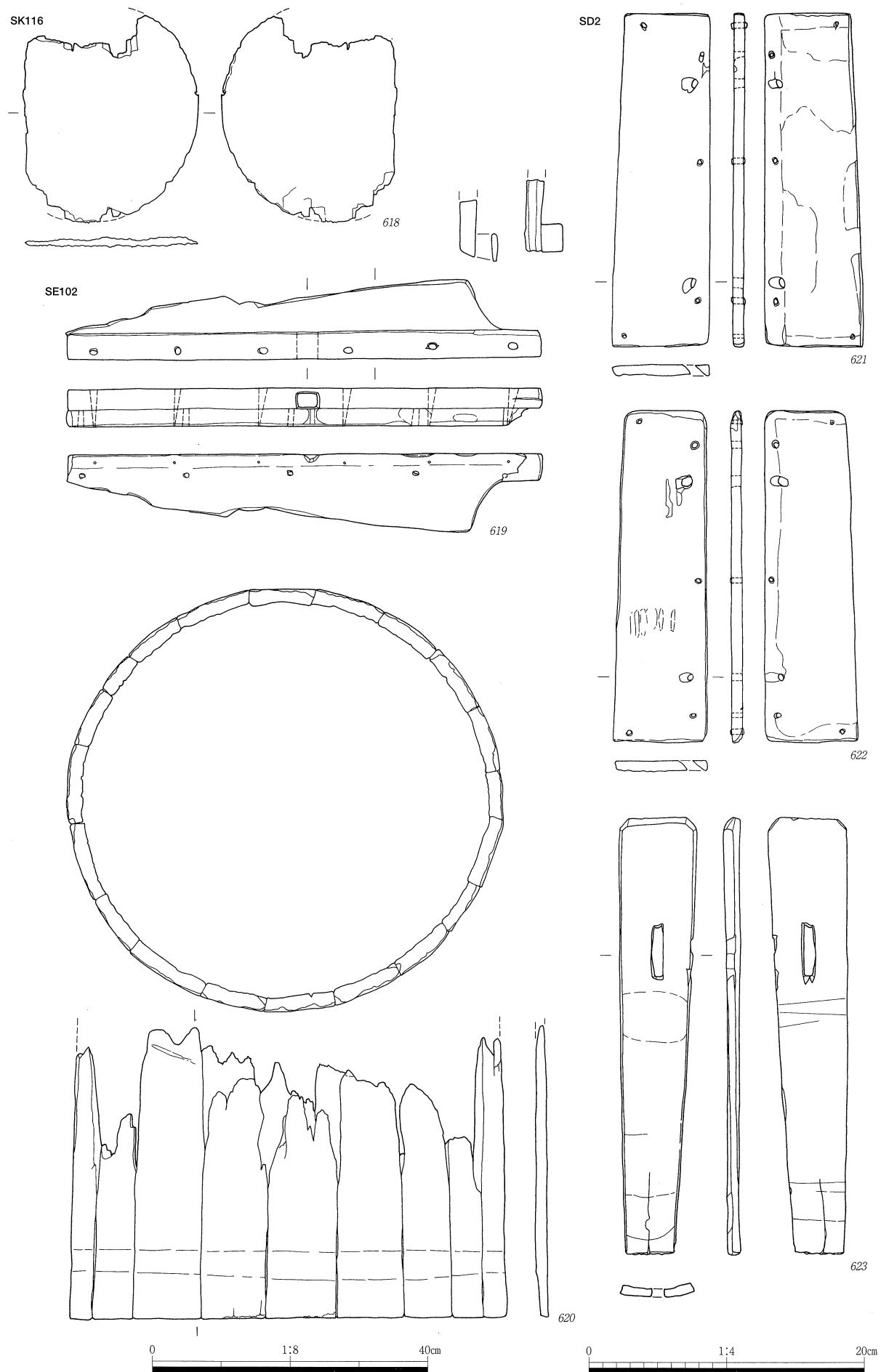


第75図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 木製品 (1/4)  
SE102(601・602・604~609) SK18(603)

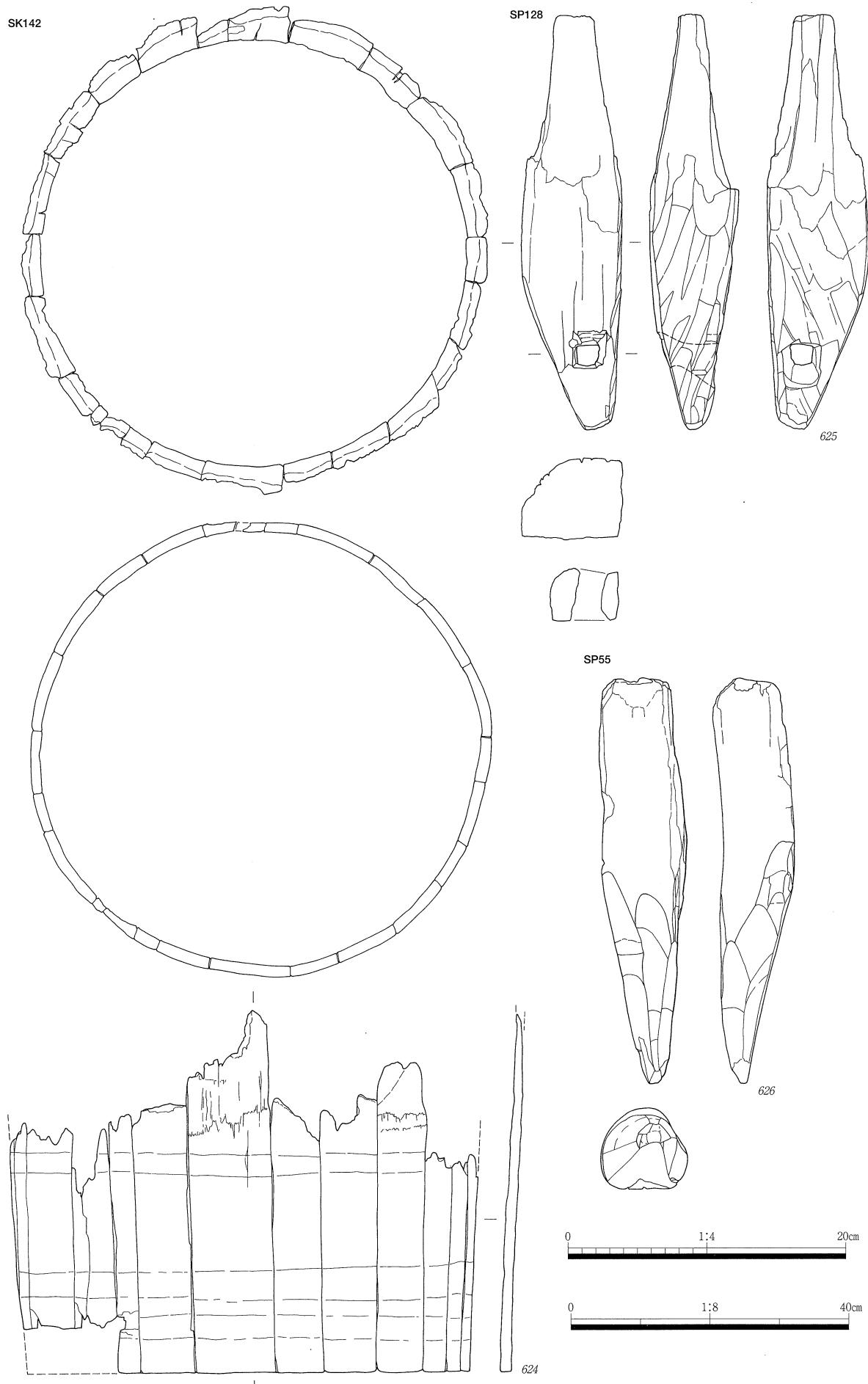
3 遺 物



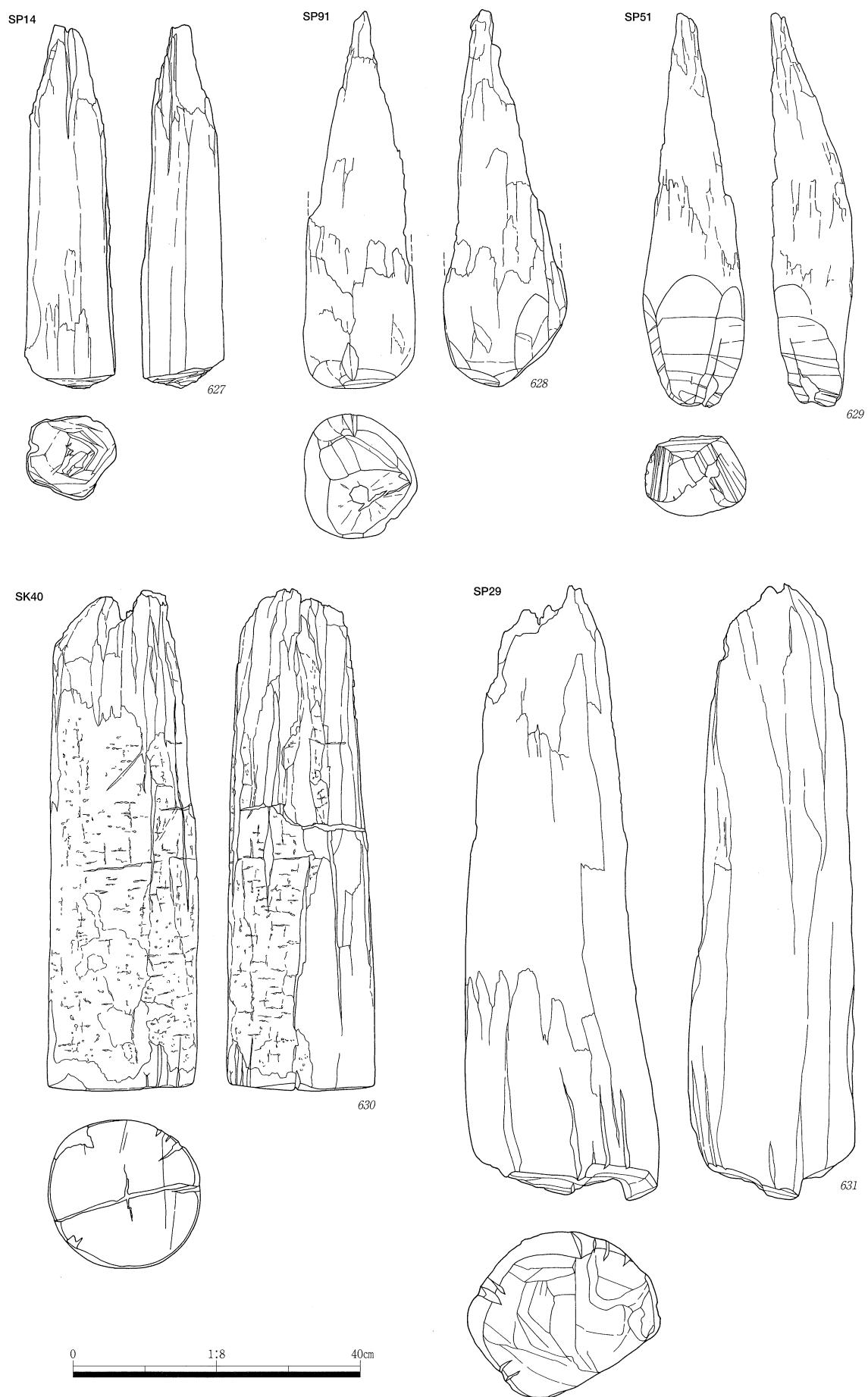
第76図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 木製品 (610~614・616・617 1/4, 615 1/8)  
SE102(610・612・614~617) SD27(613) SD28(611)



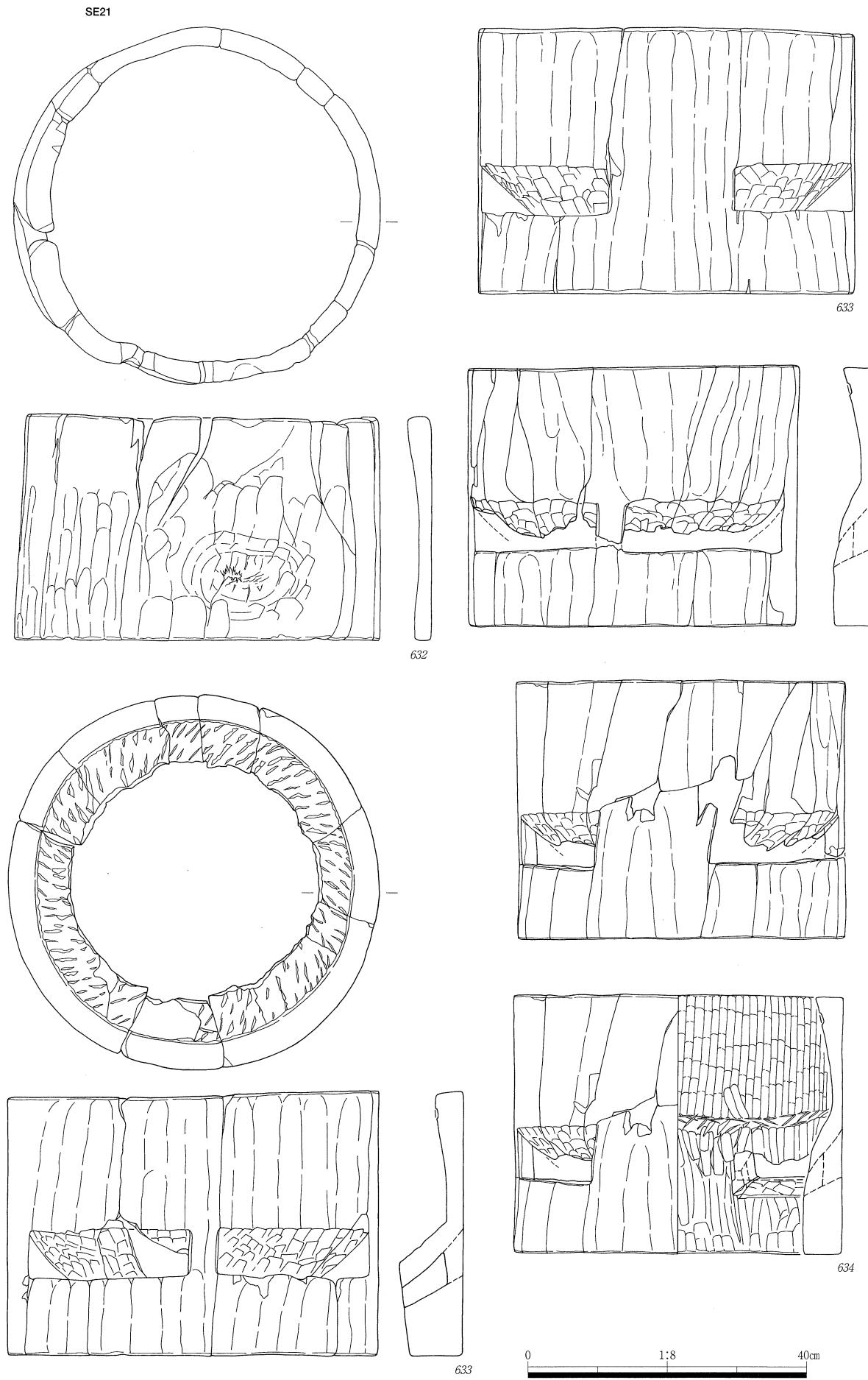
第77図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 木製品 (618・619・621~623 1/4, 620 1/8)  
SE102(619・620) SK116(618) SD2(621~623)



第78図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 木製品 (625・626 1/4, 624 1/8)  
SP55(626) SP128(625) SK142(624)

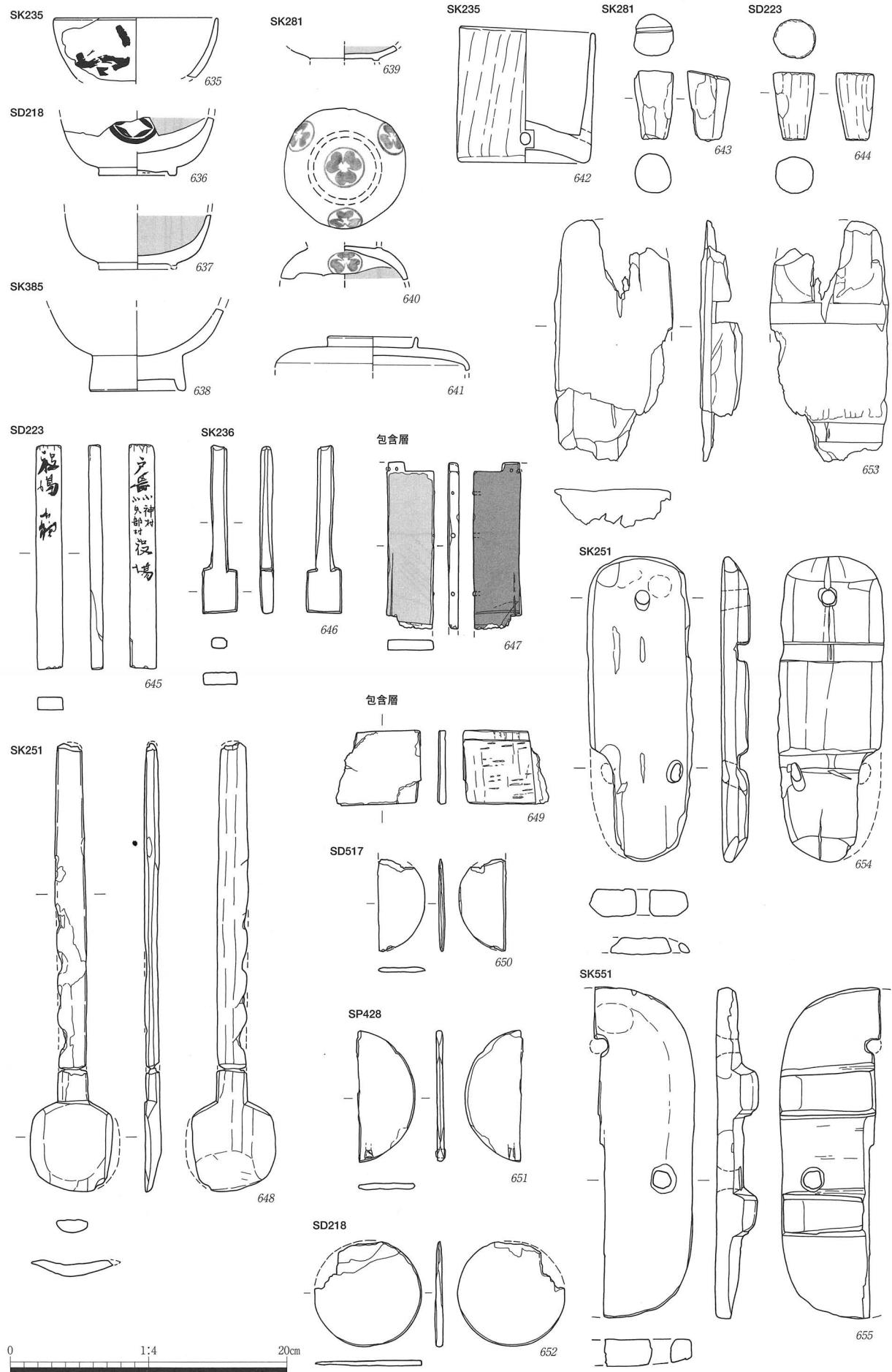


第79図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 木製品 (1/8)  
SP14(627) SP29(631) SP51(629) SP91(628) SK40(630)



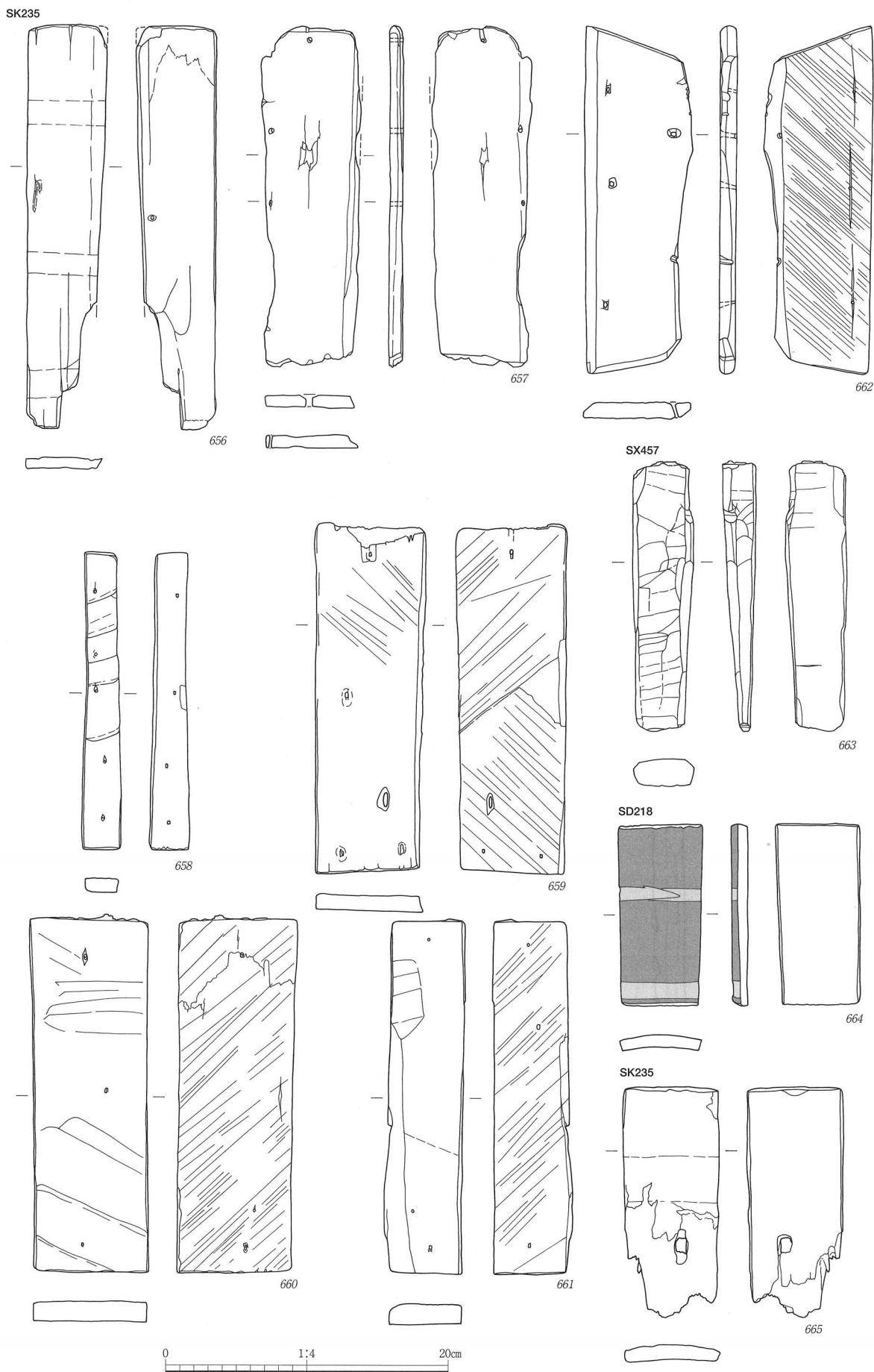
第80図 江尻遺跡 A地区 遺物実測図 木製品 (1/8)

SE21



第81図 江尻遺跡 B地区 遺物実測図 木製品 (1/4)

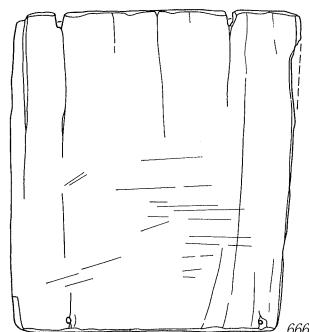
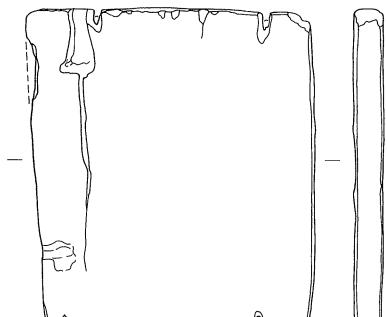
SP428(651) SK235(635 · 642) SK236(646) SK251(648 · 654) SK281(639 · 643) SK385(638) SK551(655)  
 SD218(636 · 637 · 640 · 641 · 652 · 653) SD223(644 · 645) SD517(650) 包含層(647 · 649)



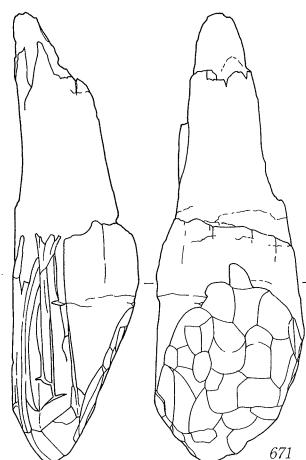
第82図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 (1/4)

SK235(656~662・665) SD218(664) SX457(663)

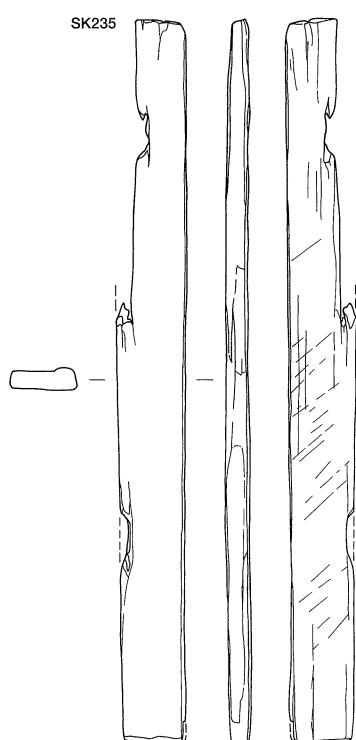
SD291



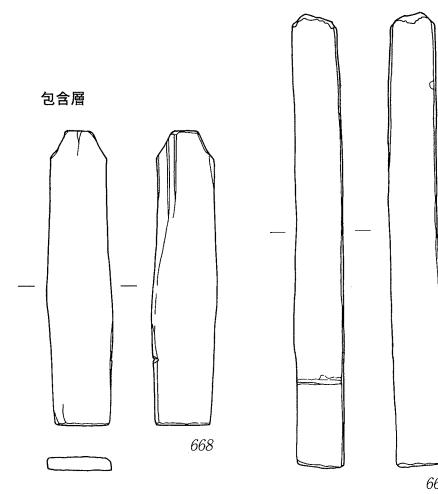
SK236



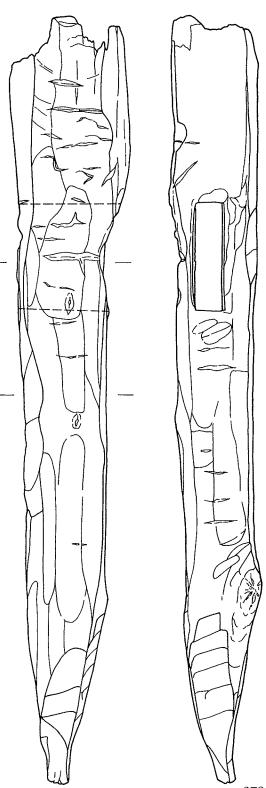
SK235



包含層



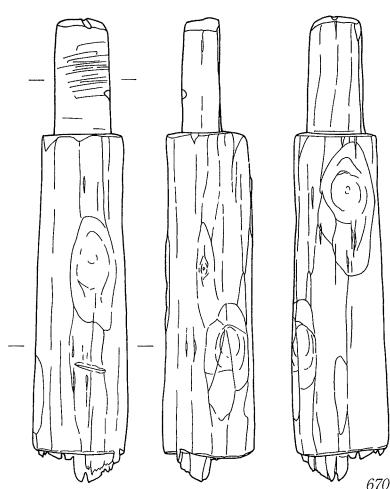
SE456



SK261



672



670



0

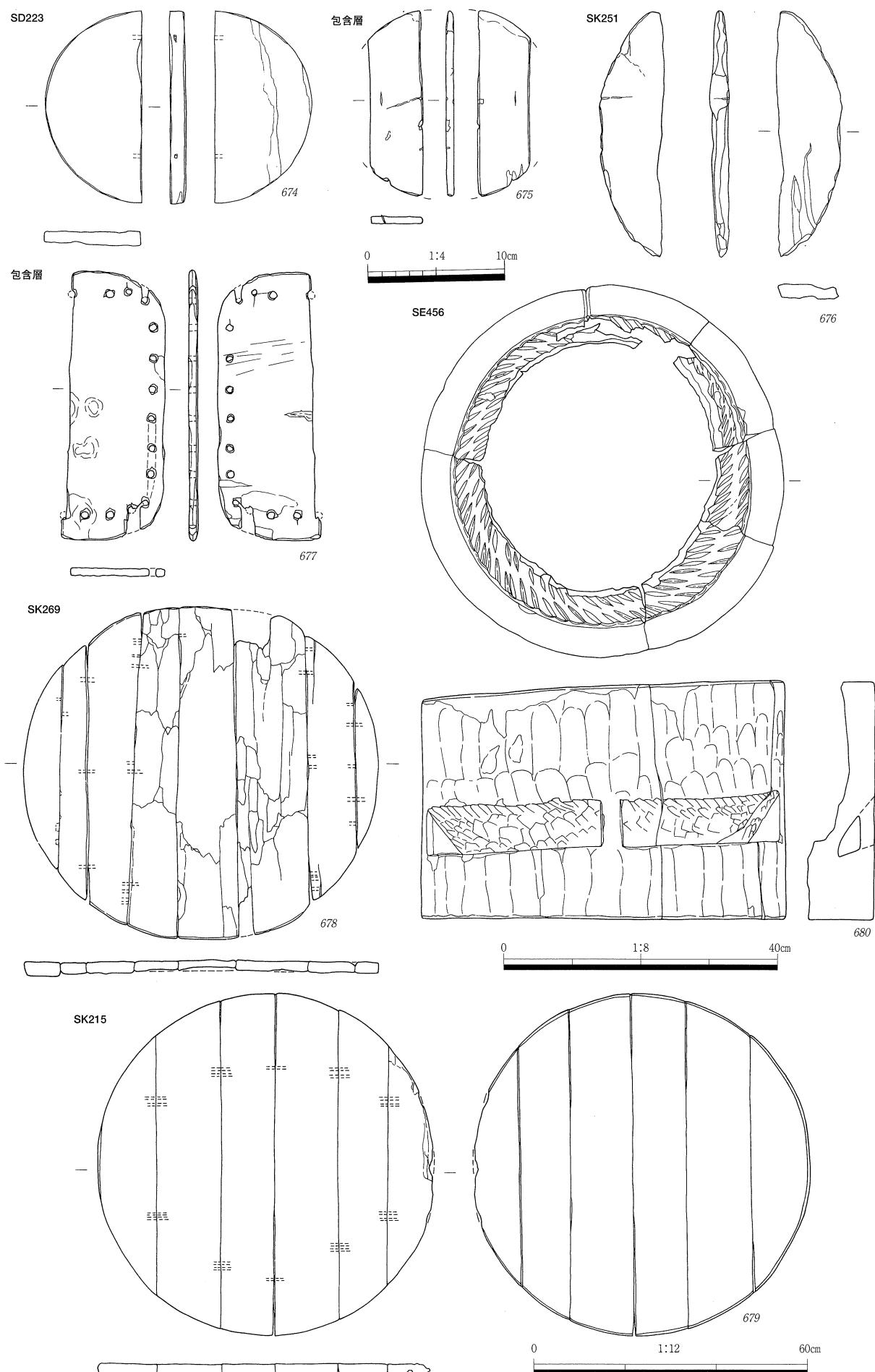
1:8

40cm

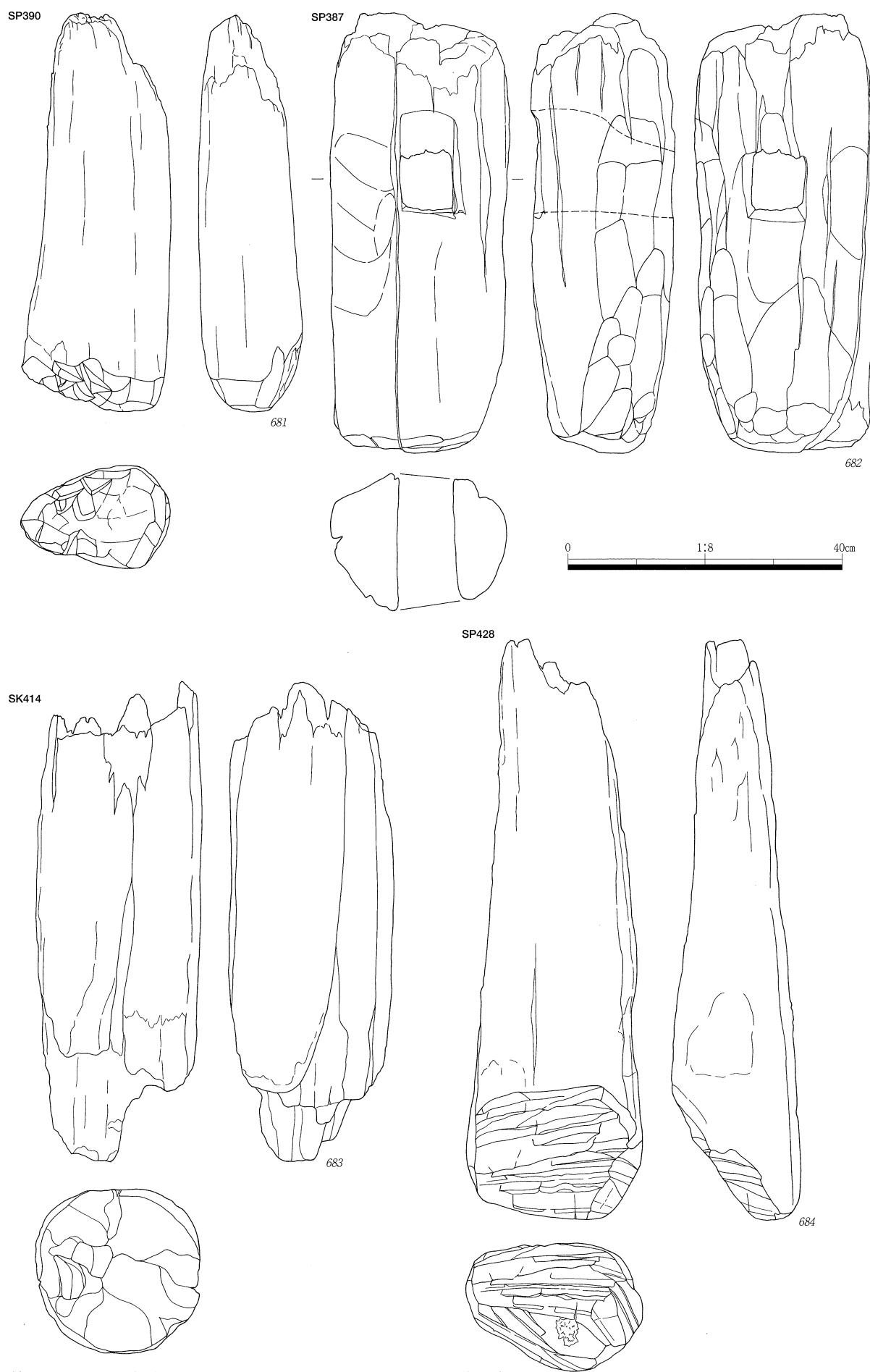
第83図 江尻遺跡 B地区 遺物実測図 木製品 (1/8)

SE456(673) SK235(667・669・670) SK236(671) SK261(672) SD291(666) 包含層(668)

3 遺 物

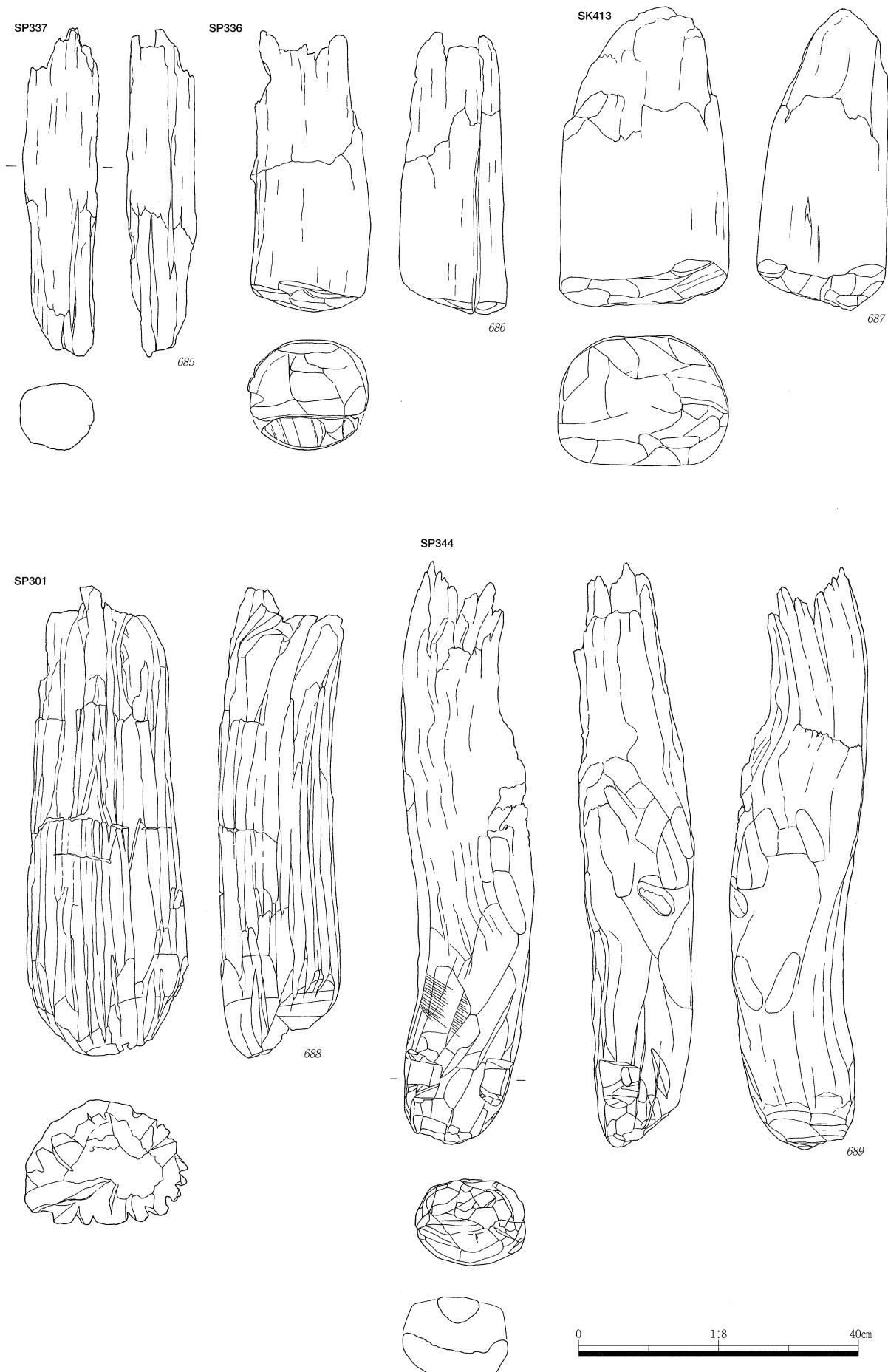


第84図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 (674~677 1/4, 680 1/8, 678・679 1/12)  
SE456(680) SK215(679) SK251(676) SK269(678) SD223(674) 包含層(675・677)

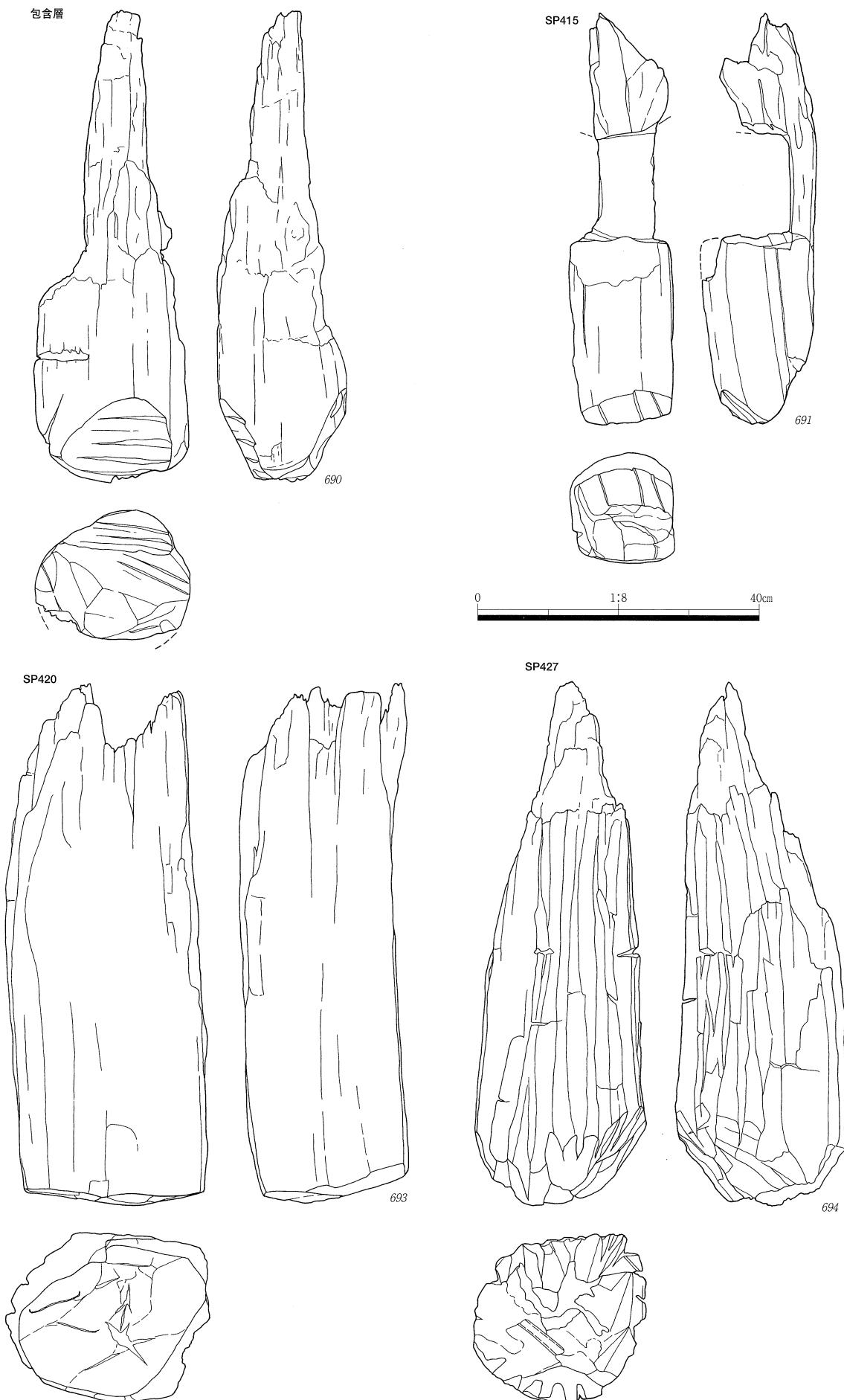


第85図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 (1/8)

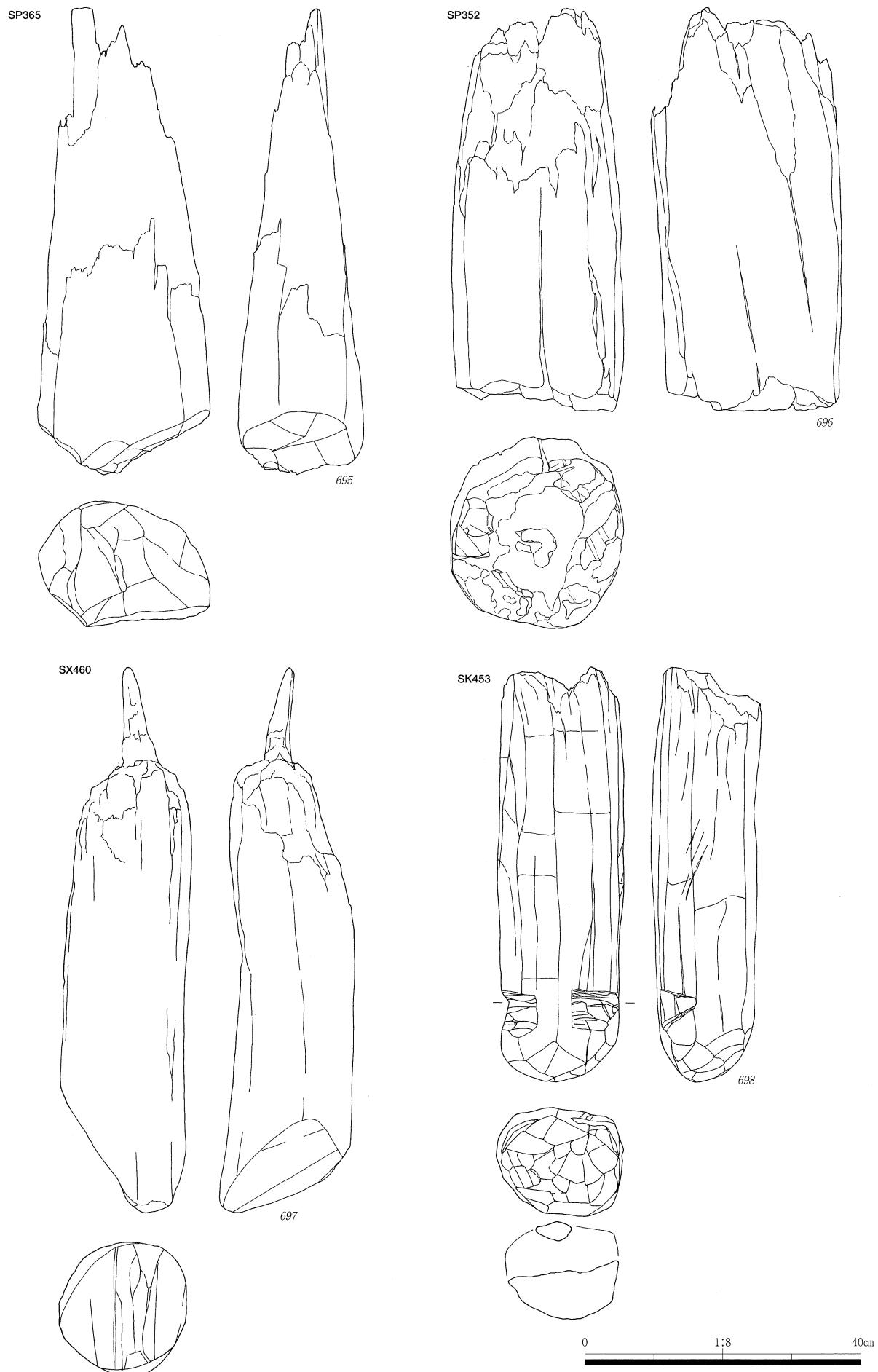
SP387(682) SP390(681) SP428(684) SK414(683)



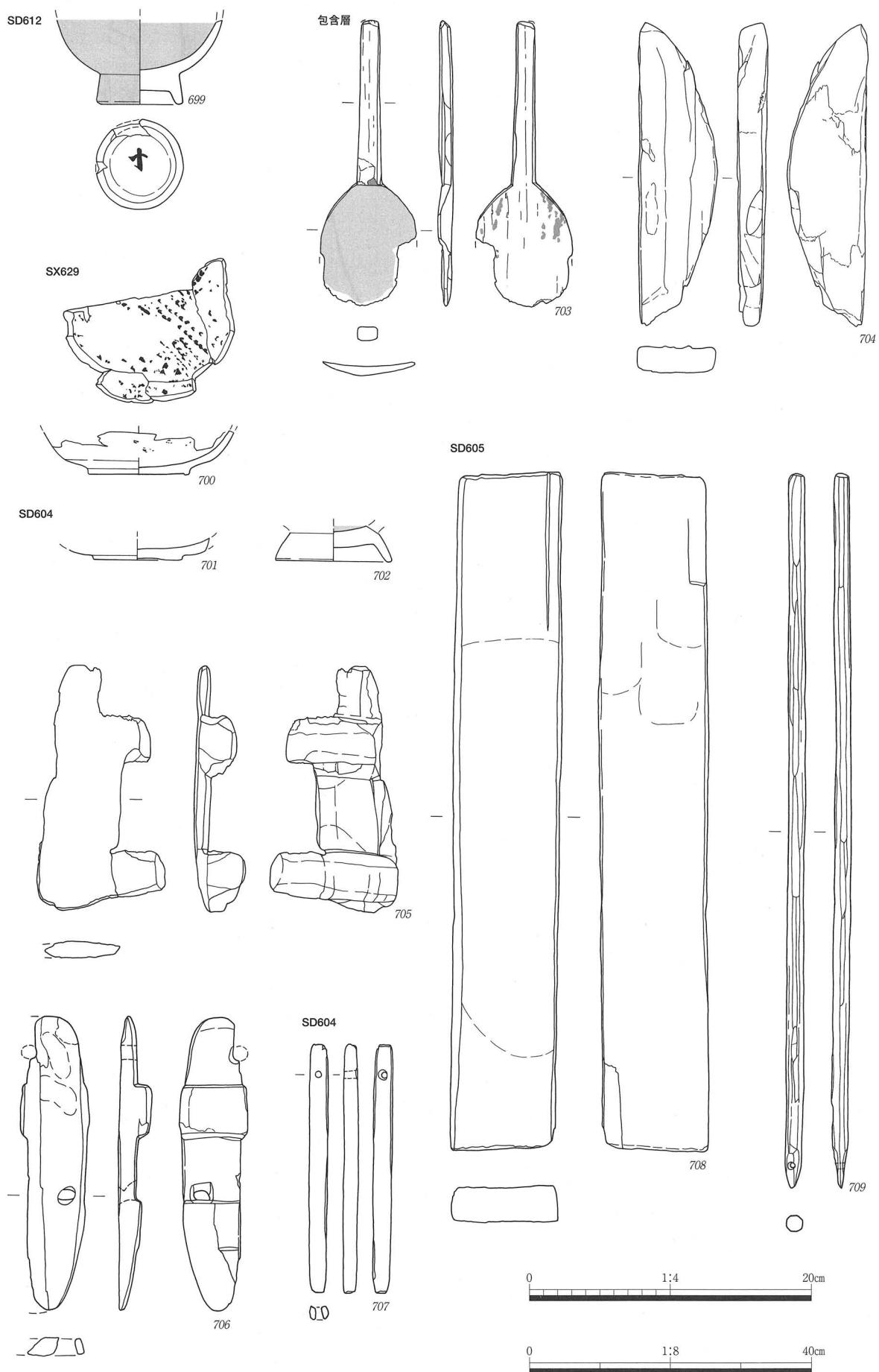
第86図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 (1/8)  
SP301(688) SP336(686) SP337(685) SP344(689) SK413(687)



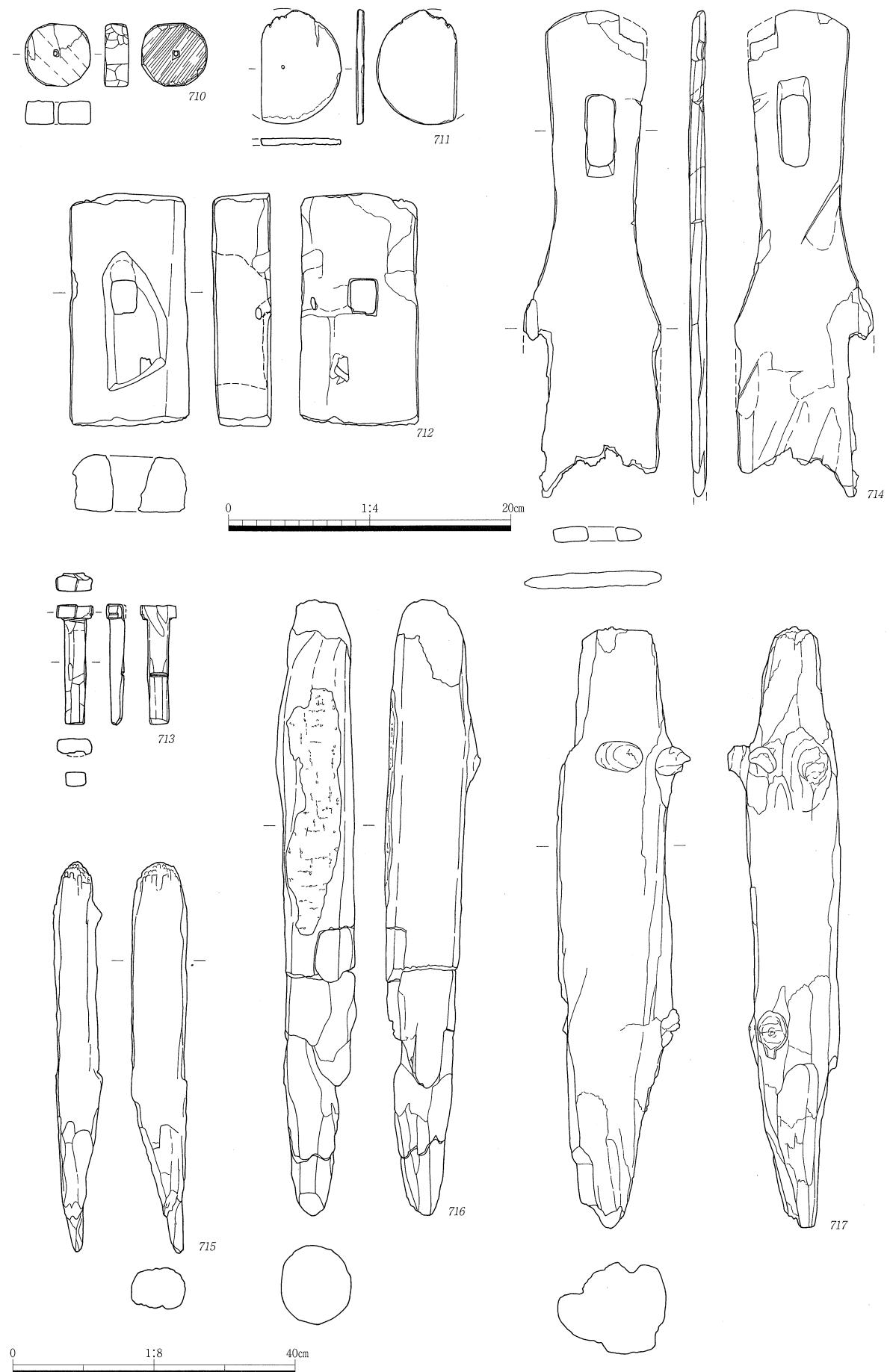
第87図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 (1/8)  
SP415(691) SP420(693) SP427(694) 包含層(690)



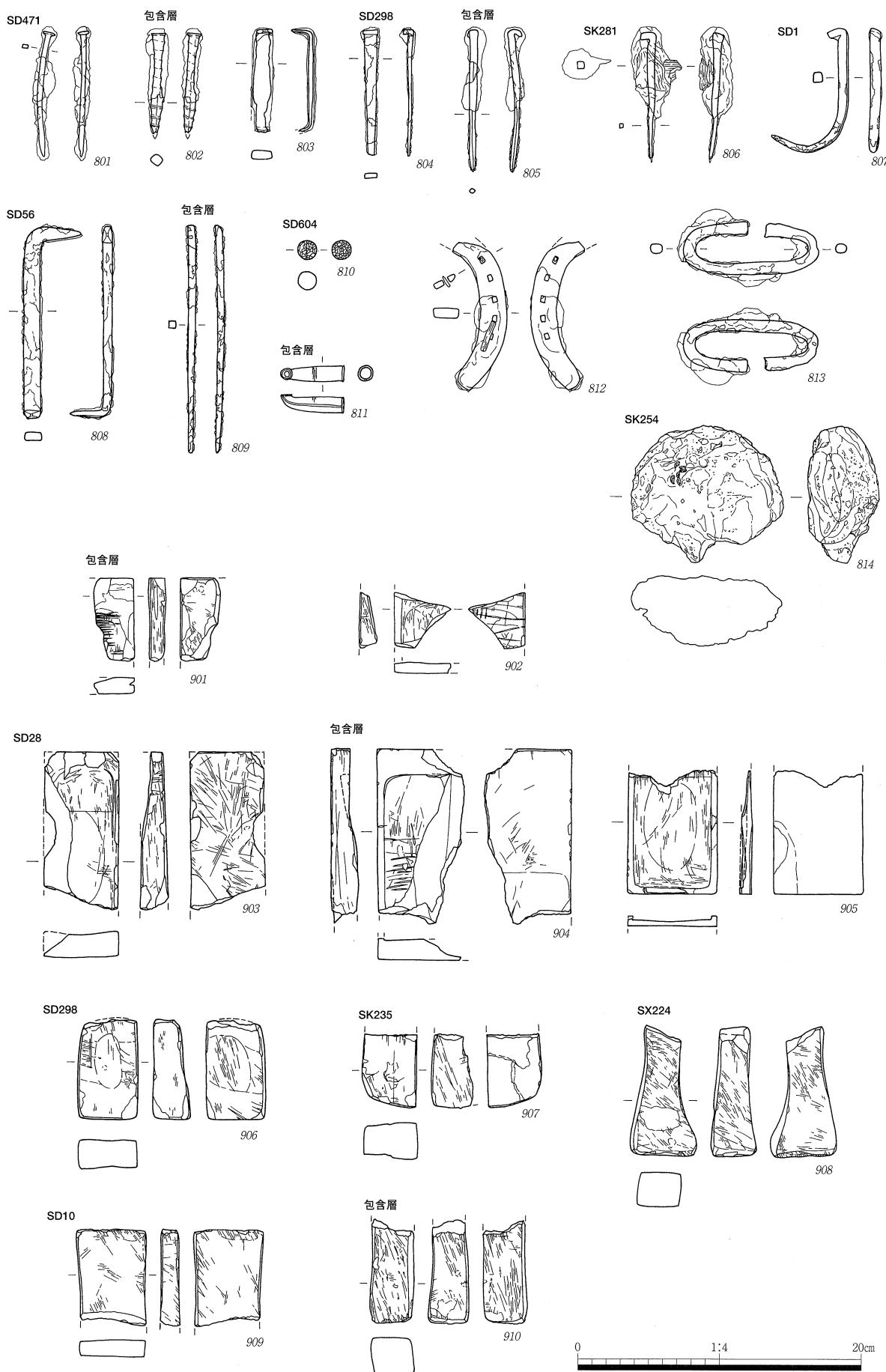
第88図 江尻遺跡 B1地区 遺物実測図 木製品 (1/8)  
SP352(696) SP365(695) SK453(698) SX460(697)



第89図 江尻遺跡 C地区 遺物実測図 木製品 (699~708 1/4, 709 1/8)  
SD604(701・707) SD605(708・709) SD612(699) SX629(700) 包含層(702~706)

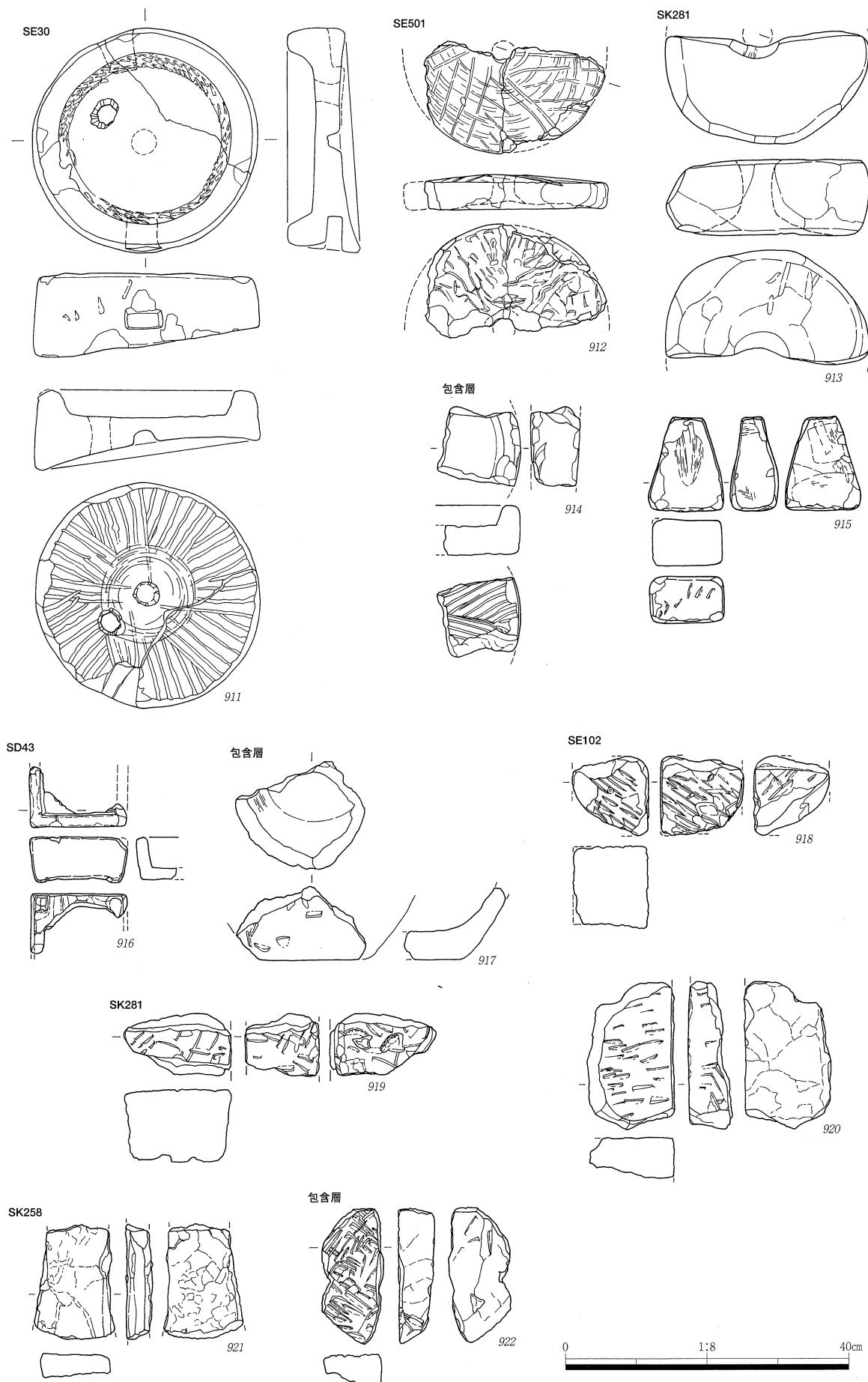


第90図 江尻遺跡 C地区 遺物実測図 木製品 (710~714・716・717 1/4, 715 1/8)  
包含層



第91図 江尻遺跡 A～C地区 遺物実測図 金属製品・石製品 (1/4)

SK235(907) SK254(814) SK281(806) SD1(807) SD10(909) SD28(903) SD56(808) SD298(804・906)  
SD471(801) SD604(810) SX224(908) 包含層(802・803・805・809・811～813・901・902・904・905・910)



第92図 江尻遺跡 A～C 地区 遺物実測図 石製品 (1/8)

SE30(911) SE102(918) SE501(912) SK258(921) SK281(913・919・920) SD43(916)  
包含層(914・915・917・922)

第8表 江尻遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

掘出番号	遺物番号	図版番号	遺構番号	座標	標	種類	器種	口径	法厚(cm)	底径	胎土色調		釉薬	時期	特記事項
											鉢	鉢			
56	1	SD131	X80Y122	縄文土器	鉢	縄文土器	鉢			10YR4/1	褐色				
	2	C	X112Y133Ⅲe層	縄文土器		縄文土器				10YR6/4	にぶい黄橙色				
3		C	X112Y133Ⅲe層	縄文土器		縄文土器				10YR6/3	にぶい黄橙色				内外面焼付着
4		SD131	X92Y117	縄文土器		縄文土器	鉢			8.4	5Y4/1	灰色			
5		A	X39Y78Ⅲb層	縄文土器	深鉢	縄文土器	深鉢	42.6		2.5Y7/2	灰黄色				
6		A	X40Y65Ⅲb層	縄文土器	浅鉢	縄文土器	浅鉢	17.8		10YR6/2	灰黄色				
7	38	SD605	X114Y131	縄文土器	浅鉢	縄文土器	浅鉢	19.8		9.4	10YR5/2	灰黄色			
8		SD131	X67Y99Ⅱ層	縄文土器	浅鉢	縄文土器	浅鉢	32.0		7.6	2.5Y6/2	灰黄色			
9	33	SD131	X49Y79Ⅲe層	縄文土器	壺	縄文土器	壺	12.5		10YR6/3	にぶい黄橙色				石英混
57		15	A	X34Y63Ⅲb層	生土器	生土器	壺	14.8		10YR7/3	にぶい黄橙色				外面焼付着
16		A	X48Y84Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	15.0		2.5Y6/2	灰黄色				石英混
17		A	X55Y69Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺	17.0		2.5Y6/2	灰黄色				外面焼付着
18		A	X44Y80Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	16.9		10YR6/2	灰黄色				
19			X44Y80-81Ⅲb層No.1-21	生土器	壺	生土器	壺	17.6		10YR7/3	にぶい黄橙色				
20		A	X50Y84Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺	19.5		10YR6/4~5/4	にぶい黄橙色				
21		A	X44Y80-81Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	20.6		10YR6/4	にぶい黄橙色				
22		A	X40Y65Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	20.9		2.5Y7/3	浅黄色				
23		A	X45Y69Ⅲc層	生土器	壺	生土器	壺	21.6		10YR7/3	にぶい黄橙色				
24		A	X44Y80-81Ⅲb層No.1-21	生土器	壺	生土器	壺	16.2		10YR7/4	にぶい黄橙色				
25		A	X37Y64Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺	21.2		10YR8/3	浅黄橙色				
26		A	X31Y62NNo.1-33	生土器	壺	生土器	壺	20.0		10YR7/2	にぶい黄橙色				
27		A	X37-40Y64-65Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	16.2	17.0	4.1	10YR6/2	灰黄色			海綿骨針混 内外面焼付着
28	25	A	X55Y76Ⅲc-d	生土器	壺	生土器	壺	16.8		10YR6/4	にぶい黄橙色				
29		A	X55Y73Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	12.0		2.5Y8/2	灰白色				
30	33	SD43	X63Y82	生土器	壺	生土器	壺	11.4		10YR7/3	にぶい黄橙色				
31		A	X37Y65Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	14.0		10YR7/2	にぶい黄橙色				
32		A	X50Y76Ⅲc-d	生土器	壺	生土器	壺	15.8		10YR7/4	にぶい黄橙色				
33		A	X34Y62Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	9.8		10YR7/3	にぶい黄橙色				
34		A	X35Y63Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	7.8		3.2	2.5Y8/3	淡黄色			
35		A	X39Y66Ⅲc層	生土器	壺	生土器	壺	9.8		2.5Y6/3	にぶい黄色				
36	25	SD131	X33Y63Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	14.0		10YR8/1	褐色				
37		A	X44Y87	生土器	高杯	生土器	壺	13.8		10YR7/4	にぶい黄橙色				
38		A	X35-37-40Y64-65Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	4.0		10YR8/4	にぶい黄橙色				
39		A	X44Y80-81Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	2.8		10YR8/6	にぶい黄橙色				
40		A	X37Y65NNo.25	生土器	壺	生土器	壺	3.4		10YR7/4	にぶい黄橙色				
41		A	X40Y65-66Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			10YR8/3	にぶい黄橙色				内面炭化物付着
42		A	X37-41Y83Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺			10YR7/3	にぶい黄橙色				外底面「十」のへらがキ
43		A	X43-44Y83Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺			10YR8/3	浅黄色				直径2mm以下の砂粒混
44		A	X63Y87Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			10YR6/3	にぶい黄橙色				直径2mm以下の砂粒混
45		A	X39Y73Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺			2.5Y8/4	淡黄色				内面赤彩, 石英混, つまみ径5.4cm
46		A	X40Y81Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺	9.8	3.1	10YR7/3	にぶい黄橙色				内面赤彩, 海綿骨針混
47		A	X53Y85Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			10YR7/4	にぶい黄橙色				内面赤彩, つまみ径3.2cm
48		A	X40Y80Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺			7.5YR8/4	浅黄色				内面赤彩, つまみ径1.8cm
49		A	X37Y64Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			10YR7/3	にぶい黄橙色				海綿骨針混, 外面赤彩, つまみ径3.2cm
50		A	X43Y83Ⅲ層	生土器	壺	生土器	壺			5YR4/6	赤褐色				内面黑色化
51		A	X47Y88Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			10YR7/3	にぶい黄橙色				
52		A	X38Y77Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			2.5Y7/1	灰白色				
53	25	SD131	X64Y77Ⅲe層	生土器	壺	生土器	壺			10YR6/3	にぶい黄橙色				石英混
54	26	A	X33Y64Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺	9.3		10YR6/3	にぶい黄橙色				
55		A	X46-48Y80-81Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			5YR4/6	赤褐色				
56		A	X83Y88Ⅲb層	生土器	壺	生土器	壺			10YR7/3	にぶい黄橙色				

第8表 江戻遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(2)

種類	器種	器高	底径	胎土色調		釉色	釉調	釉	釉期	特記事項
				口径	法量(cm)					
58	57	26	A	X33Y16III層	15.3	7.5YR6/4	にぶい橙色	石英混 内外面赤彩		
	58	26	A	X66Y84III層	17.3	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	59	26	A	X50Y84IIID層	8.4	2.5Y4/2	暗灰黄色			
	60	26	B1	X73Y107	21.6	2.5Y8/3	淡黄色			
	61	26	A	X47Y786III層	9.8	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	62	26	A	X55Y86III層No.1-3	10YR6/3	10YR8/3	にぶい黄橙色			
	63	26	A	X46Y84III層No.1-22	10YR8/3	2.5Y8/4	淡黄色			
	64	26	A	X40Y80IID層	8.3	10YR6/4	にぶい黄橙色			
	65	26	A	X54Y85III層	10YR8/4	10YR8/4	浅黄橙色			
	66	26	A	X54Y87III層	10YR8/6	10YR8/6	黄橙色			
	67	26	A	X41-51Y85IIIb層	10YR8/6	10YR8/3	浅黄橙色	外面赤彩,径2mm以下の砂粒混,穿孔3ヶ所		
	68	26	A	X44Y107	10YR8/3	10YR8/3	浅黄橙色	外面赤彩,穿孔4ヶ所		
	69	26	B1	X47Y83III層	10YR6/4~6/6	10YR6/4~6/6	明黄褐色	穿孔13ヶ所		
	70	26	A	X47Y83III層	10YR7/2	10YR7/2	にぶい黄橙色	海綿骨針混		
	71	26	B1	X61Y91	13.6	10YR7/2	にぶい黄橙色			
	72	26	SD121	X73Y108	15.9	10YR7/2	にぶい黄橙色	外面煤付着		
	73	26	SD218	X63-72Y94-106	15.5	10YR8/2	灰褐黄色			
	74	26	SP272	X74Y114	20.6	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	75	26	SD472-SX459	X76-77Y121	15.7	10YR8/2	灰褐黄色	口縁部~頸部煤付着		
	76	26	B1	X73Y108	10YR7/3	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	77	26	SD223	X73Y111-112II層	12.8	7.5YR6/3	にぶい褐色			
	78	26	SD299	X77Y120	13.8	10YR5/2	灰褐黄色	外面煤付着		
	79	26	SD472	X76Y121	13.8	10YR7/2	にぶい黄橙色			
	80	26	SD131	X89Y120	15.4	10YR7/2	にぶい褐色			
	81	26	SD556	X85Y120	12.6	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	82	26	SD555	X84Y122	11.3	10YR7/2	にぶい黄橙色			
	83	26	SD477	X73Y107	15.4	10YR6/3	にぶい黄橙色			
	84	26	SD223	X73Y107	16.8	10YR6/3	にぶい黄橙色	外面煤付着		
	85	26	SD477	X73Y108	16.2	5YR7/4	にぶい褐色			
	86	26	SD477	X76Y121	17.2	10YR7/3	にぶい黄橙色	外面煤付着		
	87	26	B1	X76Y121	20.0	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	88	26	SK426	X78	19.7	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	89	26	SD557	X85Y119	15.9	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	90	26	B1	X77Y108	13.9	10YR6/1	褐色			
	91	26	SK436	X85Y120	13.3	10YR7/3	にぶい黄橙色	外面全体黒斑		
	92	26	SD218	X69Y98	11.9	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	93	26	SD223	X72Y107	16.9	10YR6/3	にぶい黄橙色			
	94	26	SD131	X72Y107	15.6	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	95	26	SD223	X78Y112-113II層	11.7	7.5YR6/3	にぶい褐色			
	96	26	SD477	No.7	12.6	7.5YR6/4	にぶい黄橙色	海鰐骨針混		
	97	26	SD473	X77Y117	11.1	10YR6/3	にぶい黄橙色	内外面赤彩		
	98	26	B1	X70Y104	12.5	7.5YR8/4	浅黄橙色			
	99	26	SD223	X74-~6Y100-107-108	2.8	10YR7/4	にぶい黄橙色			
	100	26	B1	X69Y108	5.8	10YR6/2	灰黄褐色			
	101	26	B1	X76Y112-113II層	0.9	10YR7/3	にぶい黄橙色	底部穿孔		
	102	26	B1	X64Y197	10YR8/2	灰白色				
	103	26	SD477	No.2	13.2	3.4	10YR6/3	にぶい黄橙色		
	104	26	SD292	X76Y110	2.8	10YR7/3	にぶい黄橙色			
	105	26	B1	X62Y100排水溝	10YR7/3	10YR8/3	にぶい黄橙色			
	106	26	B1	X63	10YR8/3	10YR7/2	にぶい黄橙色	外面赤彩		
	107	26	SK359	10YR7/2						

第8表 江戸遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(3)

挿図番号	遺物番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	器種	口径	法量(cm) 器高 底径	胎土色調			釉薬	時期	特記事項
									10YR8/3	7.5YR7/3	2.5Y6/2			
108	B1	X74			弥生土器	蓋	10.6		にぶい黃橙色					外面塗付着
109	SD131	X79Y108			弥生土器	鉢	15.0		灰黄色					外面塗付着
110	41	SP352	X72Y110		弥生土器	鉢	10.7		にぶい黃橙色					外面赤彩
111	SD131	X75Y108			弥生土器	器台			10YR7/4	にぶい黃橙色				内外面赤彩
112	SD131	X72Y107			弥生土器	高杯	11.6		10YR8/3	浅黃橙色				内外面赤彩, 内面指頭压痕
113	SD131	X68Y92			弥生土器	高杯	14.0		10YR7/3	にぶい黃橙色				内外面赤彩, 内面指頭压痕
114	37	SD292	SX459	X76Y121 I層	弥生土器	高杯	14.7		10YR7/3	にぶい黃橙色				内外面赤彩, 直径1mm以下の砂粒混
115	40	SD291	X75Y112 II層		弥生土器	高杯			7.5YR7/3	にぶい黃色				内外面赤彩
116	37	B1	X30-32-35Y64-68II層		弥生土器	高杯	20.7		10YR7/3	にぶい黃橙色				内外面赤彩
118	B1	X75Y105			弥生土器	高杯	6.0	2.5Y6/2	灰黑色					内外面赤彩
119	SD477				弥生土器	高杯		9.2	10YR6/2	灰黃褐色				
120	26	SD477			弥生土器	高杯			10YR7/3	にぶい黃橙色				外面赤彩
121	26	SD289	X72-73Y107		弥生土器	高杯	3.4		3.5	10YR7/3	にぶい黃橙色			外面赤彩
122	26	SD473	X76Y117		弥生土器	高杯		8.0	10YR6/2	灰黃褐色				外面赤彩
123	SD298	X78Y117 II層			弥生土器	高杯			10YR7/2	にぶい黃橙色				縫合4ヶ所
124	B1	X62Y92			弥生土器	高杯			10YR7/3	にぶい黃橙色				外面赤彩
125	SD131	X72Y107			弥生土器	高杯			10YR8/3	浅黃橙色				外面赤彩
126	B1	X63Y191			弥生土器	高杯			10YR7/3	にぶい黃橙色				外面赤彩
127	B1	X69Y108			弥生土器	高杯			10YR7/3	にぶい黃色				外面赤彩
128	B1	X68Y91			弥生土器	高杯			10YR7/3	にぶい黃橙色				外面赤彩
129	26	SD131	X76-77Y107-109		弥生土器	鉢	30.8		10YR6/3	にぶい黃橙色				
130	C	X93Y148 II層			弥生土器	甕	16.8		10YR6/3	にぶい黃橙色				
131	C	X91Y147 II層			弥生土器	甕	16.6		5YR6/4	にぶい橙色				
132	38	SD605	X91Y135		弥生土器	甕	16.8		10YR7/2	にぶい黃橙色				
133	C	X93Y146 II層			弥生土器	甕	17.8		10YR7/2	にぶい黃橙色				
134	C	X105Y135 IIId層			弥生土器	甕	17.4		2.5YR6/4	にぶい橙色				
135	25	SD613	X116-117Y136		弥生土器	甕		2.8	2.5Y6/2	灰黄色				頸部直径15.0cm
136	25	C	X108Y124 III層		弥生土器	小鉢	11.1		10YR7/4	にぶい黃橙色				外面欠け
137	25	SD605	X94-95Y134-135		弥生土器	小壺	13.0		10YR6/2	灰黄色				ノケメ原体幅2.1cm20本?, 内面塗付着
138	C	X105Y131 IIIc層			弥生土器	甕		2.0	2.5Y6/3	にぶい黃色				
139	38	SD605	X88Y134		弥生土器	甕		2.2	10YR7/2	にぶい黃橙色				
140	C	X94Y151 II層			弥生土器	甕		6.0	2.5Y6/2	灰黄色				海綿骨針混, 内面5Y2/1黒色
141	38	SD615	X90Y147		弥生土器	小鉢			10YR7/3	にぶい黃橙色				
142	C	X93Y148 II層			弥生土器	高杯			7.5Y5/1	灰色				
143	C	X91Y142 II層			弥生土器	蓋			10YR6/4	にぶい黃橙色				
144	C	X105Y166Y122-124 IIIc層			弥生土器	長頸甕	14.4		14.4	にぶい黃橙色				
60	145	32	SD1	X57Y68	伊万里	皿	13.3	3.5	5.2	5YR7/1	明褐色			波佐見窯, 蛇の目輪制
146	32	SD1	X58Y72	伊万里	皿	12.8	2.5	4.4	N8/0	灰白色				18C
147	29	SD1	X60-61Y82	伊万里	磁器	碗	8.3	4.4	3.2	N8/0	灰白色			波佐見窯, 蛇の目輪制
148	32	SD1	X58Y73	伊万里	水滴			3.1	N8/0	灰白色				18C
149	32	SD1	X57	伊万里	紅皿		4.4	1.4	0.9	5Y8/1	灰白色			白磁
150	32	SD1	X57-63Y68-88	伊万里	鉢				8.4	N8/0	灰白色			透明釉
151	32	SD1	X58Y711U層	伊万里	碗				11.2	N8/0	灰白色			透明釉
152	32	SD1	X57-60-61Y67-81-86 IIIb層	唐津	椀		10.4	6.2	5.0	5Y6/1	灰白色			透明釉
153	32	SD1	X58-60Y72	唐津	椀		9.0	6.4	4.6	7.5Y6/1	灰白色			透明釉
154	32	SD1	X58Y73	伊万里	酒杯		6.0	4.1	2.3	10Y8/1	灰白色			染付7.5B6/3青灰色
155	32	SD1	X60-61Y82	越中瀬戸	皿				4.4	7.5YR7/6	灰褐色			外青磁, 蛙の口高台
156	28	SD1	X61Y87	越中瀬戸	皿		11.0	2.7	4.1	2.5YR5/6	にぶい黄色			染付7.5PB5/3すんだ青色
157	32	SD1	X61Y61	越中瀬戸	壺		11.7		10Y8/4	5YR3/2	暗赤褐色			回転系切
158	32	SD1	X60Y74-75	唐津	壺		37.9		2.5YR7/8	7.5YR3/2	黒褐色			粗止めの段

#### 第8表 江尻遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(4)

第8表 江戸遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(5)

擲出番号	遺物番号	遺物番号	基 標	種 類	器 種	法量(cm)	胎土色調	釉 菓	時 期	特記事項	
										口径	器高
210	34	SD218	X66Y97	伊万里	碗	4.8	2.5Y8/1	灰白色	透明釉	1630-1640	
211	34	SD218	X70Y100	磁器	碗	3.4	7.5Y8/1	灰白色	透明釉		染付5BG5/1青灰色,真入
212	34	SD218	X73Y99	伊万里	丸形湯飲み	3.3	5Y8/1	灰白色	透明釉		染付2.5PB3/6すんだ青色
213	33	SD218	X73Y99	伊万里	鉢	3.0	N7/0	灰白色	透明釉		染付5B6/1青灰色,内面墨文,二次被焼
214	33	SD218	X63Y93	伊万里	鉢	7.8	N7/0	灰白色	透明釉		染付2.5B4/2暗い青灰色
215	33	SD218	X69+72Y92-97-98	伊万里	鉢	8.1	N8/0	灰白色	透明釉		波佐見窯外付5B4/1暗青灰色
216	33	SD218	X70Y100	伊万里	鉢	18.0	N8/0	灰白色	透明釉		染付5PB3/8青色
217	33	SD218	X70Y100	伊万里	中皿	17.9	11.3	10Y8/1	透明釉		唐草文内面墨ハナ染付5PB5/6すんだ青色
218	33	SD218	X70Y100	伊万里	中皿	13.9	N8/0	灰白色	透明釉		染付5PB4/6すんだ青色
219	33	SD218	X66Y97	伊万里	大皿	15.5	5Y8/1	灰白色	透明釉		染付5PB3/6すんだ青色
220	34	SD218	X66Y98	伊万里	子ば猪口	7.7	6.1	N8/0	灰白色		染付2.5PB4/6すんだ青色
221	35	SD218	X74Y100	磁器	蓋	2.5	5.0	5Y8/1	透明釉		肥前か関西,染付5PB3/8青色
222	35	SD218	X74Y100	伊万里	瓶	5.6	N8/0	灰白色	透明釉		唐草文内面墨ハナ染付5PB5/6すんだ青色
223	34	SD218	X66Y98	伊万里	香炉		2.8	N8/0	灰白色	透明釉	
224	34	SD218	X73Y98	伊万里	香炉		6.0	N8/0	灰白色	透明釉	
225	34	SD218	X73Y95	伊万里	唐津		5.0	2.5Y8/1	明緑灰	透明釉	
226	34	SD218	X70Y100	唐津	皿		4.4	10YR7/3	オリーブ灰	透明釉	
227	34	SD218	X73Y100	唐津	碗		5.6	5Y4/1	緑灰色	透明釉	
228	34	SD218	X66Y98	瓦質土器	瓦質土器			N4/0-2.5Y8/2	灰色	透明釉	
64	229	28	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	10.1	2.2	4.5	10YR7/3	灰白色
230	35	SD223	X73Y112	越中瀬戸	皿	10.6	2.3	4.6	5YR4/6	赤褐色	7.5YR2/1 印花,外腹2ヶ所墨書 印花
231	35	SD223	X73Y112	越中瀬戸	皿	9.7	2.2	3.3	2.5YR4/4	灰褐色	7.5Y5/3 オリーブ黄色
232	35	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	12.3	5.4	10YR8/2	灰白色	7.5YR3/3 高台内〇の墨書	
233	35	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	12.0	3.1	4.2	10YR8/3	浅黄橙色	7.5YR3/4 板端赤褐色
234	35	SD223	X73Y112	越中瀬戸	皿	12.6	3.0	4.8	2.5Y6/3	にぶい黄色	7.5YR3/4 板端赤褐色
235	35	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	13.5	3.5	5.1	10YR8/3	浅黄橙色	7.5YR3/4 板端赤褐色
236	35	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	10.6	2.2	4.9	7.5YR6/3	にぶい黄色	7.5YR8/4 高台内「十」の墨書
237	35	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	11.0	2.4	7.5YR6/4	にぶい黄色	7.5YR3/3 印花	
238	35	SD223	X73Y112	越中瀬戸	皿	13.0	3.2	4.7	7.5YR7/4	灰白色	7.5YR8/2 印花
239	35	SD223	X73Y113	越中瀬戸	皿	10.9	3.2	5.7	7.5YR7/3	にぶい黄色	7.5YR8/2 印花
240	35	SD223	X73Y112	越中瀬戸	皿	10.8	3.0	5.2	10YR7/1	灰白色	7.5YR4/4 印花
241	35	SD223	X73Y112	越中瀬戸	皿	5.3	10YR6/3	にぶい黃橙色	5YR4/4 重ね焼き真		
242	36	SD223	Y98	越中瀬戸	火入れ	8.6	7.5YR7/3	にぶい黄色	5YR3/3 印花		
243	36	SD223	X73Y112-113	越中瀬戸	火入れ	4.2	2.5Y6/1	灰白色	7.5YR3/4 青磁		
244	36	SD223	X73Y113	越中瀬戸	火入れ	5.2	2.5Y7/1	灰白色	7.5YR4/4 青磁		
245	36	SD223	X77Y104	陶器	皿	8.2	1.9	3.4	2.5Y8/1	灰白色	7.5Y7/2 ハリ跡
246	36	SD223	X80Y96	中世土師器	皿	7.7	1.9	2.5Y7/2	灰黄色		
247	36	SD223	X73Y112	伊万里	蓋	6.5	1.4	3.8	3Y8/1	灰白色	透明釉
248	36	SD223	X77	伊万里	香炉	7.4	N7/0	灰白色	7.5G7/1	明緑灰	
249	36	SD223	X78Y98	伊万里	香炉	10.8		N7/0	灰白色		
250	36	SD223	X75-77Y98-100	陶器	擂鉢	31.0		2.5Y7/1	灰白色		
251	36	SK263	X73Y111	越中瀬戸	猪口	11.6	2.3	4.6	7.5YR6/3	にぶい赤褐色	透明釉
252	36	SD287	X72Y94	越中瀬戸	火入れ	4.5	N8/0	灰白色	7.5YR3/4 青磁		
253	36	SD287	X72Y94	越中瀬戸	火入れ	6.0	10YR8/2	灰白色	2.5Y7/3 青磁		
254	36	SD287	X79-88-90Y113-115-117	越中瀬戸	火入れ	10.6	2.5	4.8	10YR8/4	浅黄橙色	10YR8/1 印花
255	36	SD287	X73Y94	越中瀬戸	火入れ	31.0		4.5	7.5YR6/1	褐灰色	7.5YR4/3 印花
256	36	SD287	X70Y94	唐津	擂鉢	12.4	1.4	3.8	5YR2/1	黒色	印花,重ね焼き真
257	36	SD288	X73Y100	越中瀬戸	火入れ	7.0	2.5YR6/6	橙色	10YR4/3	赤褐色	
258	36	SD288	X72Y101	越中瀬戸	茶入れ	4.6	7.5YR8/4	淺黄橙色		黒色	
259	36	SD289	X73-74Y103-108	越中瀬戸	茶入れ	5.2	10YR7/2	にぶい黄色	7.5YR1.7-1.5YR7/3	黒色・暗褐色	
260	36	SD289	X74Y103	越中瀬戸	茶入れ	13.2	3.0	5.8	2.5Y6/2	褐色	7.5YR4/3 印花

第8表 江戸遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(6)

種類	遺物番号	図版番号	遺構番号	座標	器種	法量(cm) 口径 器高 底径	胎土色調	釉色	調色	釉	乗	時	期	特記事項		
														内面化粧鉢のち透明釉(一部外面へ)、外面部鉢縁	内面化粧鉢のち透明釉(一部外面へ)、外面部鉢縁	
65	261	37	SD291	X77Y113	越中瀬戸 丸茶碗	11.2 6.4 4.3	5YR6/6 5Y5/1	明青灰色 にぶい橙色	5BG7/1 2.5Y6/2	透明釉・鍍鉢	鐵釉					
	262	37	SD291	X75Y112	越中丸山 丸茶碗	10.0 6.4 4.0	5YR7/4 5YR7/4	オリーブ黒色 にぶい橙色	5Y2/2 2.5Y6/2	透明釉	灰釉			うすい灰釉の上から長石釉の文様		
	263	30	SD291	X73Y112	越中瀬戸 丸茶碗	10.9 7.4 5.0	5.5YR7/4 5.5YR5/2	灰黄色 にぶい橙色	5YR2/1 7.5Y8/2	透明釉	鐵釉			高台内「十」の墨書		
	264	37	SD292	X73Y109	越中瀬戸 丸茶碗	11.8 2.4 5.4	5.5YR5/2 11.3 2.3 4.2	黒褐色 にぶい黄褐色	5YR2/1 5Y8/2	透明釉	鐵釉			二段の釉止めの段、印花		
	265	37	SD292	X73Y109	越中瀬戸 丸茶碗	11.2 2.8 5.4	10YR7/4 10.6 2.6 3.7	灰褐色 にぶい黄褐色	5Y8/2 7.5YR3/4	透明釉	鐵釉			高台内墨痕		
	266	37	SD292	X71-Y109-110	越中瀬戸 丸茶碗	10.6 2.6 5.6	10YR6/4 10YR6/1	にぶい黄褐色 褐灰色	7.5YR4/4	透明釉	鐵釉			釉止めの段		
	267	37	SD292	X71-Y109-110	越中瀬戸 丸茶碗	11.2 3.0 5.6	10YR6/1	浅黃褐色	5Y6/3	オリーブ黄色	鐵釉			釉止めの段		
	268	37	SD293	X73Y112	越中瀬戸 丸茶碗	10.2 4.8 5.5	7.5YR8/3	灰白色	5Y7/1	透明釉	鐵釉			全体に細かな入窓、内底面一部釉飛び、陶胎染付7.5B5/3暗青灰色		
	269	37	SD293	X73Y112	越中瀬戸 丸茶碗	10.9 7.3 4.3	7.5Y7/1	灰白色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			全体に細かな入窓、内底面一部釉飛び、陶胎染付5G6/6くすんだ青みの緑色		
	270	37	SD293	X73Y117	伊万里 瓶	10.0 8.5 8.5	N8/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			染付2.5PB4/6くすんだ青色		
	271	37	SD298	X78Y120	伊万里 瓶	13.9 2.8 3.4	10YR7/2	にぶい黄褐色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			染付N2/0黒色		
	272	37	SD298	X78Y119	伊万里 瓶形湯飲み	8.8 3.4 3.4	N8/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			染付2.5PB暗青色		
	273	37	SD298	X78Y119	伊万里 瓶形湯飲み	8.8 3.4 3.4	N8/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			染付2.5PB暗青色		
	274	37	SD298	X78Y117	伊万里 鉢	17.3 5.3 9.8	N7/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			全体凹形鉢の目台、染付2.5PB4/6くすんだ青色		
	275	37	SD298	X78Y119	伊万里 鉢	10.9 7.3 4.3	7.5Y7/1	灰白色	5.5 7.5Y1/1	透明釉	鐵釉			全体凹形鉢の目台、染付2.5PB4/6くすんだ青色		
	276	28	SE456	X78Y117	越中瀬戸 丸茶碗	10.9 2.5 4.8	10YR4/2	灰黃褐色	5Y8/2	透明釉	鐵釉			高台内「十」の墨書		
	277	28	SE456	X78Y95	越中瀬戸 丸茶碗	10.8 3.2 5.2	2.5Y6/1	黄灰色	5Y4/3	透明釉	鐵釉			高台内「十」の墨書		
	278	28	SX224	X78Y95	越中瀬戸 丸茶碗	10.7 6.0 4.1	N8/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	銅版アント液付5PB3/10	透明釉	鐵釉			銅版アント液付5PB3/10	
	279	28	SX224	X78Y95	越中瀬戸 丸茶碗	10.7 6.0 4.1	N8/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	銅版アント液付5PB3/10	透明釉	鐵釉			銅版アント液付5PB3/10	
	280	28	SX224	X78Y95	越中瀬戸 丸茶碗	10.7 6.0 4.1	N8/0	灰白色	5.5 7.5Y1/1	銅版アント液付5PB3/10	透明釉	鐵釉			銅版アント液付5PB3/10	
	281	28	SK230-S223	X79Y95-97	越中瀬戸 丸茶碗	10.4 2.6 4.4	7.5YR6/4	にぶい橙色	5Y4/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	282	28	SK230	X79Y97	越中瀬戸 丸茶碗	13.1 3.5 4.2	10YR8/3	浅黄褐色	10YR3/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	283	39	SK208	X79Y95	越中瀬戸 丸茶碗	12.4 11.5 7.2	2.5Y6/1	黄褐色	2.5Y5/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	284	39	SK235	No48	中国青磁	13.8 9.5 7.2	10YR8/3	灰白色	7.5Y5/2	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	285	31	SK235	X79Y95	越中瀬戸 丸茶碗	11.0 9.8 11.8	10YR6/4	にぶい黄褐色	5Y4/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	286	37	SD467	X70Y98	伊万里 瓶	1.5 3.5 4.2	10YR8/3	黄褐色	10YR3/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	287	39	SK251	X71	越中瀬戸 丸茶碗	13.1 3.5 4.2	10YR8/3	黄褐色	10YR3/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	288	39	SK251	X69-75Y94-96-97	伊万里 中皿	20.6 3.0 13.0	N8/0	灰白色	2.5Y5/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	289	39	SK251	X72Y97	伊万里 中皿	20.6 3.0 13.0	N8/0	灰白色	2.5Y5/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	290	39	SP233	X72Y95	唐津 船	8.4 4.2 10Y6/1	灰白色	7.5Y5/2	透明釉	鐵釉				底面部白身厚い、		
	291	39	SP243	X68Y91	越中瀬戸 楠鉢	1.5 9.8 10.5	N8/0	灰白色	5Y4/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	292	39	SK246	X63Y91	唐津 船	4.7 5Y6/1	2.5Y6/1	黄褐色	7.5Y8/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	293	39	SK254	X71Y103	越中瀬戸 丸茶碗	11.0 4.3 4.3	10YR6/1	褐灰色	7.5Y8/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	294	39	SK258	X76	唐津 丸茶碗	10.1 6.7 4.3	NA/0	灰白色	7.5Y8/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	295	39	SK258	X75-76Y106	唐津 丸茶碗	10.2 3.0 4.6	5YR7/4	にぶい橙色	5YR3/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	296	31	SK258	X44-75Y75-105	唐津 丸茶碗	29.8 11.5 9.4	10R4/6	赤色	5YR3/3	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	297	40	SK263	X77Y110	越中瀬戸 丸茶碗	10.8 2.6 5.5	7.5YR8/3	浅黄褐色	2.5Y6/3	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	298	40	SK263	X73Y111	越中瀬戸 丸茶碗	10.8 2.8 4.3	10YR5/2	灰黃褐色	7.5YR8/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	299	40	SK263	X73Y111	越中瀬戸 丸茶碗	10.5 2.5 4.8	10YR7/1	灰白色	2.5Y8/2	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	300	40	SK263	X73Y111	越中瀬戸 丸茶碗	11.0 2.2 4.5	5YR6/4	にぶい橙色	10YR3/3	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	301	40	SK263	X73Y111	越中瀬戸 丸茶碗	9.8 2.3 6.2	10Y8/1	灰白色	2.5Y8/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	302	29	SK281	X75Y91	伊万里 丸茶碗	9.9 5.8 3.6	N8/0	灰白色	2.5Y6/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	303	40	SK281	X75Y91	伊万里 丸茶碗	9.2 3.8 5Y6/1	N8/0	灰白色	2.5Y6/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	304	40	SK281	X75Y91	伊万里 丸茶碗	1.7 3.9 3.8	5Y6/1	灰白色	2.5Y6/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	305	40	SK281	X75Y91	伊万里 丸茶碗	2.1 2.1 7.5YR8/4	灰白色	2.5Y6/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、			
	306	31	SK281	X75Y91	伊万里 丸茶碗	9.8 2.3 6.2	10Y8/1	灰白色	2.5Y6/1	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	307	40	SP272	X74Y114	越中瀬戸 丸茶碗	13.0 3.2 4.8	5Y7/1	灰白色	7.5YR3/3	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	308	40	SP272	X74Y114	越中瀬戸 丸茶碗	13.0 3.2 4.8	5Y7/1	灰白色	7.5YR3/2	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	309	41	SK231	X73Y114	越中瀬戸 丸茶碗	13.0 3.2 4.8	5Y7/1	灰白色	5YR5/2	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	310	41	SP323	X76Y114	越中瀬戸 折縁皿	10.0 3.0 4.9	5YR6/4	にぶい橙色	2.5YR2/2	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		
	311	41	SP333	X71Y108	越中瀬戸 丸茶碗	10.7 2.7 3.3	5YR7/4	にぶい橙色	5YR3/4	透明釉	鐵釉			底面部白身厚い、		

第8表 江戸遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(7)

挿図番号	遺物番号	遺物番号	座標	標準	種類	器種	法量(cm)	口径	器高	底径	胎土色調			釉	薬	時	期	特記事項	
											10YR6/3	2.5YG6/2	灰黄色						
312	28	SK355	X72-75Y96-109	越中瀬戸	皿	10.7	2.7	4.6	10YR6/3	2.5YR7/4	にぶい黄橙色	10R4/3	赤褐色	灰釉	鉄釉	厚手灰釉焼け掛付	厚手灰釉焼け掛付		
313	41	SP406	X73Y7107	越中瀬戸	皿	12.2	3.4	4.7	7.5YR7/4	にぶい黄橙色	10R4/3	赤褐色	灰釉	鉄釉	内外面ターレ状のもの付着	内外面ターレ状のもの付着			
314	29	SP427	X77Y112	越中瀬戸	皿	11.1	2.7	4.4	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	7.5R8/1	灰白色	灰釉	鉄釉	高台内「土」の墨書き	高台内「土」の墨書き			
315	31	SP409	X71Y114	土製品	人形	10.4	8.8	5.6	10YR7/4	にぶい黄橙色	7.5Y8/1	灰白色	灰釉	鉄釉	底面墨書き、外面・内面口縁部のみ明灰色釉	底面墨書き、外面・内面口縁部のみ明灰色釉			
316	41	SK388	X71Y114	土製品	人形	10YR6/4	10YR7/2	1.7	10YR7/2	にぶい黄橙色	10YR6/4	にぶい黄橙色	灰釉	鉄釉	底面墨書き	底面墨書き			
317	41	SK315	X73Y93	中世土師器	鉢	7.9	1.7	10YR6/4	4.2	5YR8/3	2.5YR2/2	極暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	初期伊万里染付2.5PB3/4くすんだ青色	初期伊万里染付2.5PB3/4くすんだ青色			
318	41	SK448	X69Y108	越中瀬戸	皿	10.3	2.8	5.2	5Y6/1	灰色	5YR4/4	にぶい赤褐色	透明白	透明白	内面青磁釉、外面透明釉、染付2.5PB5/4くすんだ青色	内面青磁釉、外面透明釉、染付2.5PB5/4くすんだ青色			
319	28	SK454	X68Y109	唐津	碗	7.5	1.7	4.0	7.5Y5/1	灰色	10YR4/1	灰白色	透明白	透明白	17C前半	17C前半			
320	41	SK395	X68Y109	伊万里	大皿	8.6	10Y8/1	灰白色	N8/0	7.5G7/2	くすんだ青白色	青磁釉	青磁釉	青磁釉	青磁釉	青磁釉			
321	41	SK434	SP283SP400	X72-73Y80-97	伊万里	鉢	21.9	13.2	2.5YR6/4	にぶい橙色	10R4/1	暗赤灰色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉			
322	41	SK328	X66-67Y98-99	唐津	擂鉢	9.8	—	7.5YR7/6	橙色	N11.5/0	黑色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉			
323	41	SD131	X75Y109	中世土師器	皿	—	—	5.8	N7/0	灰白色	2.5YR4/3	にぶい赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉		
324	—	SD513	X87Y112	越中瀬戸	椀	—	—	5.3	5YR5/2	灰褐色	7.5YR4/5	褐色・黒色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉		
325	38	SD513	X88Y123	越中瀬戸	椀	—	—	4.3	5Y6/1	灰色	10YR4/1	にぶい黄橙色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉		
326	38	SD514	X87Y112	越中瀬戸	擂鉢	29.0	10YR7/4	にぶい黄橙色	10YR4/1	暗赤灰色	7.5YR5/2	褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉		
327	38	SD514	X87Y112	越中瀬戸	擂鉢	27.0	7.5YR8/2	灰白色	10YR6/1	灰褐色	7.5YR5/2	褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉		
328	40	SE501	X87Y112	越中瀬戸	壺	19.5	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄目10本	鉄目10本	鉄目10本		
329	40	SK510	X89Y118	洲洲	鉢	31.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
330	38	SD562	X87Y112	越中瀬戸	鉢	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
68	322	A	X72-73Y80-11b	越中瀬戸	皿	9.8	2.4	4.5	7.5YR7/4	にぶい橙色	5YR3/3	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
333	43	A	X72-73Y82-11b	越中瀬戸	皿	10.4	2.3	4.4	7.5YR7/4	にぶい橙色	5YR3/4	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
334	43	A	X65Y85-11b	越中瀬戸	皿	10.5	—	2.5YR5/4	にぶい赤褐色	2.5YR8/3	灰白色	淡黄色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
335	43	A	X66Y85-11b	越中瀬戸	皿	—	—	5.0	2.5Y7/1	灰白色	5Y4/3	暗オーブ色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
336	43	A	X72-73Y82-11b	越中瀬戸	皿	11.2	2.3	4.6	10YR7/4	にぶい黄橙色	5Y6/3	オリーブ黄色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
337	28	A	X65Y88-11b	越中瀬戸	皿	11.2	2.1	4.6	7.5YR7/4	にぶい橙色	5Y8/2	灰白色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
338	28	A	X65Y88-11b	越中瀬戸	皿	11.2	2.1	4.6	7.5YR7/4	にぶい橙色	5Y8/2	灰白色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
339	44	A	X43Y80-11b	土師質土器	秉燭	4.3	2.3	2.2	10YR7/3	にぶい黄橙色	5YR3/3	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
340	43	A	X66Y85-11b	越中瀬戸	皿	3.4	—	—	—	—	—	—	—	—	印花	印花	印花	印花	
341	A	A	X65Y85-11b	越中瀬戸	皿	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重ね焼痕	重ね焼痕	重ね焼痕	重ね焼痕	
342	43	A	X55Y63-11b	越中瀬戸	皿	10.9	2.4	4.5	7.5YR6/3	にぶい橙色	5Y8/2	灰白色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
343	43	A	X9YY76-11b	越中瀬戸	皿	10.6	6.7	8.3	5YR5/3	にぶい赤褐色	5YR3/3	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
344	41	A	X64Y87-11b	越中瀬戸	椀	12.0	3.2	3.4	5Y6/1	灰白色	7.5YR5/1	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
345	41	A	X65Y76-11b	越中瀬戸	皿	13.5	3.3	10.8	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR3/2	橙色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
346	41	A	X60Y73-11b	越中瀬戸	皿	13.3	3.1	4.9	7.5YR7/4	にぶい橙色	7.5YR3/2	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
347	30	A	X65Y77-11b	越中瀬戸	皿	11.1	3.1	4.1	10YR8/3	浅黄橙色	10YR3/3	暗褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
348	41	A	X62-65Y75-76	越中瀬戸	皿	12.6	3.9	4.7	7.5YR4/2	にぶい橙色	7.5YR4/2	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
349	41	A	X67Y78-80	越中瀬戸	皿	12.0	3.2	3.4	5Y6/1	灰白色	5YR3/3	暗赤褐色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
350	41	A	X60Y73-11b	越中瀬戸	皿	13.5	3.3	—	—	—	—	—	—	—	底部糸切り	底部糸切り	底部糸切り	底部糸切り	
351	41	A	X67Y78-80	越中瀬戸	皿	13.3	3.1	7.8	N7/0	灰白色	N8/0	灰白色	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
352	44	A	X63Y82-11b	越中瀬戸	水滴	—	—	—	—	—	—	—	—	—	重ね焼痕	重ね焼痕	重ね焼痕	重ね焼痕	
353	42	A	X67Y80-11b	越中瀬戸	そば猪口	8.6	—	—	—	—	—	—	—	—	鉄釉	鉄釉	鉄釉	鉄釉	
354	42	A	X68Y73-11b	越中瀬戸	伊万里	12.0	3.2	3.4	5Y6/1	灰白色	6.9	10Y8/1	灰白色	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白
355	42	A	X65Y78-82	越中瀬戸	伊万里	8.7	5.6	5.0	7.5Y8/1	灰白色	7.5Y8/1	灰白色	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	
356	42	A	X61Y78-82	越中瀬戸	伊万里	2.8	2.5Y8/1	灰白色	3.0	N8/0	灰白色	10Y8/1	明緑灰色	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白
357	44	A	X48Y72-11b	越中瀬戸	杯	13.0	—	—	—	—	—	—	—	—	青磁釉	青磁釉	青磁釉	青磁釉	青磁釉
358	44	A	X67Y80-11b	越中瀬戸	伊万里	12.0	3.2	3.4	5Y6/1	灰白色	6.9	10Y8/1	灰白色	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白
359	29	A	X68Y73-11b	越中瀬戸	伊万里	3.1	17.5	5.3	5Y8/1	灰白色	3.2	2.5GY8/2	灰白色	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白	透明白
360	44	A	X58Y72-11b	越中瀬戸	伊万里	伊万里	碗	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	
361	42	A	X58Y69-11b	越中瀬戸	伊万里	伊万里	杯	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	
362	42	A	X65Y79-11b	越中瀬戸	伊万里	伊万里	紅皿	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	伊万里	

## 第8表 江尻遺跡・土製品一覽(8)

特記事項	時期									
	釉	薬	釉色調	胎土色調	法量(cm)	器種	種類	口径	器高	底径
三島手、白泥10YR8/2灰白色	X58-61Y85-87II層	唐津	楕	10.4	4.4	10YR3/2	黒褐色	透明釉	透明釉	
陶胎染付5Y3/2オリーブ色	X60-Y77IIIb層	唐津	楕	10.7	3.6	7.5YR6/4	灰黄色	透明釉	透明釉	
陶胎染付5B5/2暗青灰色	X60-Y77IIIb層	唐津	楕	18.0		2.5YR6/2	灰褐色	透明釉	透明釉	
三島手、白泥5Y7/7浅黄色	X61-Y83II層	唐津	楕	13.1	5.3	7.5Y5/3	灰白色	灰オリーブ色	銅綠釉	
内野山蟹、此の目和剥	X69-Y77IIb層	唐津	鉢	18.0		2.5Y5/2	灰白色	銅綠釉	透明釉	
内野山蟹	X35-Y77II層	中国磁器	碗	8.4	10YR6/1	7.5G6/2	灰黃褐色	銅綠釉	透明釉	
内野山蟹	X53-Y768II層	中国磁器	碗	7.4		10YR2/3	灰白色	透明釉	透明釉	
染付7.5P6/3青灰色	X27-Y763IIb層	中国磁器	碗	7.3		5YR6/3	灰黃褐色	透明釉	透明釉	
口縁部一段の横ナデ	X53-Y772IIb層	中国磁器	碗	8.3		2.5Y6/2	灰白色	透明釉	透明釉	
口縁部一段の横ナデ	X55-Y782II層	中国磁器	碗	7.6		10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁部一段の横ナデ	X50-Y70IIIb層	中国磁器	碗	9.6		10YR6/2	灰華褐色	透明釉	透明釉	
口縁部一段の横ナデ	X46-Y70II層	中国磁器	碗	9.8		7.5YR8/4	浅黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X56-Y77	中国磁器	碗	10.0		5YR6/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
内外面焼付着	X53-Y72IIb層	中国磁器	碗	10.0		10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
海綿骨針混	X58-Y767III層	中国磁器	碗	10.8		5Y6/1	灰色	透明釉	透明釉	
海綿骨針混	X56-Y72II層	中国磁器	碗	8.0	2.1	10YR6/1	褐灰色	透明釉	透明釉	
海綿骨針混	X50-Y769III層	中国磁器	碗	8.5	1.9	10YR6/2	灰黃褐色	透明釉	透明釉	
海綿骨針混	X33-Y767II層	中国磁器	碗	9.3		10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
炭化物付着	X56-Y73III層	中国磁器	碗	8.8	2.2	10YR6/2	灰黃褐色	透明釉	透明釉	
炭化物付着	X54-Y69III層	中国磁器	碗	9.4	2.0	10YR6/4	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
赤色酸化粒・海綿骨針混	X58-Y765II層	中国磁器	碗	9.4		10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X54-Y77III層	中国磁器	碗	9.8		7.5YR7/4	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X36-Y74II層	中国磁器	碗	9.4	2.0	8.8	10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	
口縁保付着	X60-Y73II層	中国磁器	碗	11.2		7.5YR7/6	橙色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X48-Y70II層	中国磁器	碗	8.2	1.7	10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X55-Y80II層	中国磁器	碗	9.5		10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X38-Y72III層	中国磁器	碗	9.8		10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
口縁保付着	X56-Y77IIIb層	中国磁器	碗	10.2		7.5YR7/6	橙色	透明釉	透明釉	
漆繼ぎ	X39-Y73III層	中国磁器	碗	11.7	1.6	7.5YR8/4	浅黄燈色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X43-Y83II層	中国磁器	碗	12.1		7.5YR8/6	浅黄燈色	透明釉	透明釉	
海綿骨針混	X66-Y85IIIb層	中国磁器	碗	11.0		7.5YR6/4	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X41-Y72IIIb層	中国磁器	碗	10.0		10YR6/4	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
把手	X72-Y79III層	中国磁器	瓦質土器	?		2.5Y8/1	灰白色	N3/0	暗灰色	
高台墨漬、漆繼ぎ、貫入	X54-Y73II層	在地系陶器	瓦質土器	?	15.3		10YR6/2	灰華褐色	7.5YR3/3-10YR3/1	
漆繼ぎ	X30-Y64IIIb層	在地系陶器	瓦質土器	?	10.0		5Y6/1	灰白色	2.5GY7/1	
内面3本1単位のクシ目様	X56-Y76IIIb層	中国青磁	碗	13.8		10Y7/1	灰白色	明オリーブ灰	明オリーブ灰	
海綿骨針混	X41-Y72II層	中国青磁	碗	17.0		5Y7/1	灰白色	オリーブ灰	青磁釉	
内面3本1単位のクシ目様	X63-Y85III層	中国青磁	鉢	23.8		7.5Y7/1	灰白色	オリーブ灰	青磁釉	
内面3本1単位のクシ目様	X79-Y94	中国青磁	鉢			15.8	N5/6-10YR7/2	にぶい黄燈色	青磁釉	
内面3本1単位のクシ目様	X60-66-Y77-78-100IIb層	唐津	珠洲			2.5GY7/1	明オリーブ灰	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X72-Y82IIb層	珠洲	擂鉢			2.5Y6/1	黄褐色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X51-Y83III層	珠洲	擂鉢			5BG5/1	青灰褐色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X48-Y75II層	珠洲	擂鉢			10YR7/3	にぶい黄燈色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X66-Y84IIb層	珠洲	壺			6.0	N6/0	灰色	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X68-Y71II層	瓦質土器	香炉			2.5Y8/3	淡黃色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X62-Y82II層	瓦質土器	鉢			5Y8/0	灰白色	透明釉	透明釉	
内面3本1単位のクシ目様	X71-72-Y70IIb層	瓦質土器	鉢			2.5ZP7/1	灰白色	透明釉	透明釉	

### 第8表 江尻遺跡 土器・陶磁器・土製品一覽(9)

第8表 江戸遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧<sup>[10]</sup>

捕団番号	遺物番号	國版番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(cm) 口径	法量(cm) 底径	胎土色調		釉色	時期	特記事項	
									唐津	椀	灰白色	7.5Y6/1	灰色	
465	45	B1	X75Y105	唐津	椀		4.2	10Y5/1	にぶい穢色	7.5YR5/3	7.5Y6/1	17C前半	透明釉	
466	45	B1	X65Y98	唐津	椀		4.2	7.5YR5/3	灰白色	5Y7/1	灰白色	17C前半	陶胎染付2.5PB4/6くさんだ青色	
467	45	B1	X75Y97	唐津	椀		4.3	7.5Y6/1	灰白色	N7/0	灰白色	17C前半	陶胎染付10BG6/1暗青灰色	
468	45	B1	X71Y94	唐津	椀		4.4	7.5Y6/1	灰白色	5Y7/1	灰白色	17C前半	陶胎染付5B4/4くさんだ青色	
469	45	B1	X65Y101	唐津	椀		4.6	7.5Y6/1	灰白色	5Y7/1	灰白色	17C前半	陶胎染付10Y4/2つ1-ア灰色	
470	45	B1	X65Y100	唐津	椀		4.6	7.5Y6/1	灰白色	5Y7/1	灰白色	17C前半	吳磁手,透明釉の上から灰釉かけた(輪轉10Y4/2つ1-ア灰色)	
471	45	B1	X75Y94	土製品	灯籠		4.6	2.5Y8/2	灰白色	7.5YR7/6	橙色	17C前半	吳磁手,透明釉の上から灰釉かけた(輪轉10Y4/2つ1-ア灰色)	
472		B1	X75Y95	土製品	人形			7.5YR8/2	浅董褐色	10R6/8	赤褐色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色	
473		B1	X85Y110	土製品	人形			10R6/8	赤褐色	7.5YR7/4	にぶい橙色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色	
474		B1	X65Y101	土製品	人形		10.0	2.0	7.5YR5/1	褐灰色	10R6/8	赤褐色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色
475		B1	X91Y112	中世土斷器	鉢		9.4	2.4	10YR7/4	にぶい黃橙色	10R6/8	赤褐色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色
476		B1	X70Y96 II層	中世土斷器	鉢		10.0	1.2	10YR7/3	にぶい黃橙色	10R6/8	赤褐色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色
477		B1	X75Y96 II層	中世土斷器	鉢		11.6		10YR7/3	にぶい黃橙色	10R6/8	赤褐色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色
478		B1	X75Y96 III層	中世土斷器	鉢		5.0	N7/0	灰白色	2.5GY6/1	オリーブ灰色	17C前半	輪轉10Y4/2つ1-ア灰色	
479		B1	X75Y96 III層	中国青磁	瀬戸天目茶碗		16.6		灰白色	5Y6/1	5YR6/4	17C前半	印花,輪止めの段	
480	26	B1	X75Y102	中国青磁	瀬戸天目茶碗		27.8		灰白色	5YR6/4	5YR4/2	17C前半	印花,輪止めの段	
481	44	B1	X71Y93	珠洲	擂鉢		34.6		灰白色	2.5YR6/6	5YR2/2	17C前半	印花,輪止めの段	
482	45	B2	X85Y111	土製品	人面		37.8		灰白色	2.5YR6/3	5YR2/2	17C前半	印花,輪止めの段	
483	45	B1	X72Y96	唐津	擂鉢		11.8	5YR8/3	淡董褐色	2.5YR4/4	にぶい赤褐色	17C前半	印花,輪止めの段	
484	45	B1	X75Y93	唐津	擂鉢		10.0	10Y5/1	灰白色	2.5GY6/1	オリーブ灰色	17C前半	印花,輪止めの段	
485	45	B2	X92Y112	珠洲	壺		8.0	5P5/1	紫色	5Y2/2	オリーブ灰色	17C前半	印花,輪止めの段	
486	27	B1	X70Y95	珠洲	擂鉢		5.3	10YR7/6	にぶい黃橙色	10YR7/3	にぶい黃橙色	17C前半	印花,輪止めの段	
487	27	B2	X90Y110	珠洲	擂鉢		4.6	7.5YR7/3	にぶい黃橙色	10YR7/3	にぶい黃橙色	17C前半	印花,輪止めの段	
488		C	X113Y153 II層	越中瀬戸	皿		9.7	2.7	4.8	10YR7/3	にぶい黃橙色	17C前半	印花,輪止めの段	
489		C	X110-117Y136-138 II層	越中瀬戸	皿		10.5		5.1	7.5YR7/2	甲褐灰色	17C前半	印花,輪止めの段	
490	43	C	X111Y146 II層	越中瀬戸	皿		10.2	2.0	4.2	10YR8/3	灰黄色	17C前半	印花,輪止めの段	
491		C	X112Y156 II層	越中瀬戸	皿		10.6		4.6	7.5YR7/2	にぶい黃橙色	17C前半	印花,輪止めの段	
492		C	X115Y149	唐津	皿		9.0	3.5	3.8	5Y7/1	灰白色	17C前半	印花,輪止めの段	
493	38	SD636	X108Y128 II層	越中瀬戸	皿		14.3	10YR8/2	明褐灰色	7.5YR5/2	7.5YR4/2	17C前半	印花,輪止めの段	
494	43	C	X108Y128 II層	越中瀬戸	皿		4.2	10YR8/3	浅董褐色	10Y7/1	灰白色	17C前半	印花,輪止めの段	
495		C	X115Y137 II層	越中瀬戸	皿		10.6		4.6	7.5YR7/2	明褐灰色	17C前半	印花,輪止めの段	
496	38	SD604	X112Y154	越中瀬戸	椀		9.0	3.5	3.8	5Y7/1	黑色	17C前半	印花,輪止めの段	
497		C	X115Y141 II層	越中瀬戸	皿		14.3	10YR8/2	明褐灰色	7.5YR4/4-7.5YR3/2	褐色・黒褐色	17C前半	印花,輪止めの段	
498	38	SD635	X117Y155	唐津	皿		4.2	2.5Y8/1	灰白色	10GY4/1-5Y9/1	暗綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段	
499	44	C	X115Y138 II層	伊万里	皿		4.6	2.5Y8/1	灰白色	10YR8/2	黑色	17C前半	印花,輪止めの段	
500	44	C	X116Y155 II層	唐津	皿		4.5	5Y7/1	灰白色	10Y5/0	黑色	17C前半	印花,輪止めの段	
501	44	C	X115Y145試掘トレンチ	唐津	皿		4.5	5Y7/1	灰白色	7.5YR7/1	黑色	17C前半	印花,輪止めの段	
502	42	C	X115Y141 II層	伊万里	皿		1.3	1.2	N8/0	灰白色	7.5GY8/1	明綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段
503	30	SD604	X109Y156 II層	伊万里	皿		3.2	3.8	N8/0	灰白色	7.5Y7/1	明綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段
504	41	C	X115Y138 II層	伊万里	皿		4.2	4.2	N8/0	灰白色	10Y8/1	明綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段
505	26	C	X107Y152 II層	中国青磁	碗		5.0	N8/0	灰白色	5GY7/1	明綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段	
506	26	C	II層	中国青磁	小杯		7.8		N7/0	灰白色	7.5Y6/2	灰褐色	17C前半	印花,輪止めの段
507	26	C	X95Y133 II層	中国青磁	碗		11.8		10Y5/1	灰白色	7.5Y5/2	灰褐色	17C前半	印花,輪止めの段
508	26	C	X105Y131 II層	中国青磁	碗		15.0		7.5Y6/1	灰白色	10Y5/2	灰褐色	17C前半	印花,輪止めの段
509	26	C	X97Y143 II層	中国青磁	碗		15.0		5Y7/1	灰白色	7.5Y5/2	灰褐色	17C前半	印花,輪止めの段
510	26	C	X99Y139 II層	中国青磁	碗		15.8		10Y8/1	灰白色	7GY7/1	明綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段
511	26	C	II層	中国青磁	碗		12.5		N7/0	灰白色	10Y6/2	灰褐色	17C前半	印花,輪止めの段
512	26	C	II層	中国青磁	碗		12.8		10Y7/1	灰白色	7.5GY6/1	綠灰色	17C前半	印花,輪止めの段
513	38	SD601	X88Y133	唐津	鉢		3.6	5YR6/4	にぶい橙色	2.5Y7/2-7.5YR4/2	灰白色	17C前半	重ね焼き真ヶ所	
514	45	C	X119Y139 II層	唐津	鉢		10.7	5YR6/4	にぶい橙色	10YR3/2	黒褐色	17C前半	重ね焼き真ヶ所	
515		C	X101Y155 II層	瀬戸美濃	天目茶碗		3.9	5Y7/1	灰白色	10YR3/2	黒褐色	17C前半	重ね焼き真ヶ所	

第8表 江戸遺跡 土器・陶磁器・土製品一覧(1)

揮団番号	遺物番号	遺構番号	座標	種類	器種	法量(cm)	胎土色調		釉色	釉薬	時期	特記事項	
							口径	高さ					
516	C	X106Y159II層	瀬戸美濃鉢	皿	23.4	10.8	10YR7/1	灰白色	5Y6/2	灰オリーブ色	灰釉	灰釉	
517	44	C	X96Y132II層	中世土鍋器	皿	6.6	5Y8/2	灰白色	5Y6/3	オリーブ黄色	灰釉	口縁部媒付着	
74	518	C	X96Y140II層	中世土鍋器	皿	1.5	10YR6/4	にぶい黄橙色				海綿骨針混	
520	C	X97Y126II層	中世土鍋器	皿	7.8		10YR4/1	褐色				海綿骨針混	
521	C	X87Y130II層	中世土鍋器	皿	6.9		7.5YR6/3	にぶい褐色					
522	C	X101Y154II層	中世土鍋器	皿	7.3	1.5	2.5Y6/3	にぶい黄色					
523	C	X101Y130II層	中世土鍋器	皿	8.8	2.0	10YR5/2	灰黃褐色				海綿骨針, 内面媒付着	
525	C	X104Y152II層	中世土鍋器	皿	8.8	1.9	10YR5/3	にぶい黄橙色					
526	38	SD601	X86Y140	中世土鍋器	皿	9.8	2.1	10YR8/3	浅黄橙色				口縁部媒付着
527	C	X120Y150II層	中世土鍋器	皿	8.4		10YR7/4	にぶい黄橙色				口縁内外面タール状のもの付着	
528	C	X101Y148II層	中世土鍋器	皿	8.8	2.0	10YR7/3	にぶい黄橙色					
529	C	X117Y133	中世土鍋器	皿	8.5		10YR7/4	にぶい黄橙色					
530	C	X114Y148II層	中世土鍋器	皿	9.2		7.5YR6/4	にぶい橙色					
531	C	X102Y129III層	中世土鍋器	皿	10.0		10YR7/3	にぶい黄橙色					
532	C	X96Y146II層	中世土鍋器	皿	9.4		10YR7/2	にぶい黄橙色					
533	C	X92Y136II層	中世土鍋器	皿	9.4		7.5YR7/6	橙色					
534	C	X110Y142II層	中世土鍋器	皿	9.4		5Y4/1	灰				口縁外面媒付着	
535	C	X109Y131	中世土鍋器	皿	9.0		10Y3/1	オリーブ黒色				口縁外面タール状のもの付着	
536	C	X106Y126III層	中世土鍋器	皿	10.2		2.5Y5/2	暗灰黄色				口縁二段の横ナデ	
537	C	X90Y131	中世土鍋器	皿	10.2		2.5Y7/2	灰黄色					
538	C	X108Y148IIIc層	中世土鍋器	皿	12.1		10YR6/2	灰黃褐色					
539	C	X113Y141II層	中世土鍋器	皿	12.1		2.5Y6/2	灰黄色					
540	C	X101II層	中世土鍋器	皿	12.0		10YR6/2	灰黃褐色					
541	40	SX629	X98Y157	中世土鍋器	皿	12.5		2.5Y7/2	灰黄色				外面一部媒付着
542	C	X111Y134II層	中世土鍋器	皿	10.8		10YR7/4	にぶい黄橙色					
543	C	X118Y148IIIc層	中世土鍋器	皿	13.8		7.5YR6/6	橙色					
544	C	X113Y141II層	中世土鍋器	皿	13.2	1.6	2.5Y7/3	浅黄色					
545	C	X101II層	中世土鍋器	皿	16.5		10YR7/3	にぶい黄橙色					
546	C	X106Y141II層	中世土鍋器	皿	17.8		10YR8/4	にぶい黄橙色					
547	44	C	X105Y145II層	瀬戸美濃鉢	皿	13.4		2.5Y7/1	灰白色	10G17/2	緑みの灰色	灰釉	
548	C	X117Y137II層	瓦質土器	擂鉢	26.0		2.5Y7/2	灰黄色				鉤目幅2cm以上間隔2.5mm5本以上	
549	C	X106Y145II層	瓦質土器	擂鉢			9.8	2.5Y7/3				鉤目幅2.2cm9本	
550	C	X121Y148IIIc層	株洲	鉢			14.5	N7/0				鉤目幅2.1cm7本	
551	27	C	X110Y156II層	株洲	鉢?	22.7		5Y6/1	灰色				鉤目幅2.9cm8本?
552	27	C	X106Y143II層	株洲	擂鉢	20.8		7.5Y6/1	灰色				鉤目幅2.5cm15本?
553	27	C	X107Y140II層	株洲	擂鉢	34.6		2.5Y6/1	灰黑色				タカキ2種類1.5cmあたり4条・1.5cmあたり6条(格子状)
554	27	C	X100Y133II層	株洲	擂鉢	35.4		N6/0	灰色				
555	27	C	X114Y144IIId層	株洲	壺	31.6		5Y8/1	灰白色				
556	C	II層	越前	壺			2.5Y6/1	黄灰色				自然釉	

第9表 江尻遺跡 木製品一覧(1)

擲出番号	遺物番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	法量(cm)			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
75	601	46	SE102		下駄(本体)	22.3	7.8	4.3	ホオノキ	
					下駄(歯)	12.5	15.7	1.6	ホオノキ	
602	46	SE102			下駄(本体)	24.0	9.0	1.9	ホオノキ	
					下駄(歯)	4.0~5.0	12.0~13.0	3.0~4.0		
603		SK18			下駄(本体)	(8.5)	4.2	1.6		
					下駄(歯)	4.0	6.0	2.1		
604		SE102			下駄の歯	10.6	7.4	1.2		
605		SE102			下駄の歯	10.4	7.5	1.5		
606		SE102			加工棒	31.7	0.8	0.4		
607		SE102			加工棒	18.7	2.1	1.5		
608		SE102			栓	6.0	2.9	1.9		
609		SE102			桶底板	(14.6)	(2.0)	1.3		
76	610	46	SE102		漆器板状	7.0	10.7	1.0	ヒノキ科	黒色漆
	611		SD28	X64Y78	箸	(7.6)	0.6	0.4		赤色漆
	612		SE102		漆器脚部	(5.2)	1.9	0.5		黒色漆
	613		SD27	X65Y80	漆器椀		5.7	(4.4)	トチノキ	外面黒色漆,内面赤色漆
	614	47	SE102		漆器椀		5.8	(3.7)	トチノキ	内外面黒色漆,内面付着物
	615	46	SE102		桶	92.4	67.0	1.0		
	616	47	SE102		樽蓋(本体)	14.7	14.0	1.2	スギ	
					樽蓋(栓)	5.4	2.6	2.0	スギ	
	617	47	SE102		桶蓋	(18.0)	17.2	1.3	スギ	「大」の焼き印
77	618		SK116	X71Y76	桶底板	(13.0)	(12.6)	0.7		
	619		SE102		桶蓋	34.5	1.8	1.5		
	620	47	SE102		桶	(42.4)	63.2	2.2	ヒノキ科	
	621		SD2	X66Y72	木箱	24.2	7.0	0.8		
	622		SD2	X66Y72	木箱	24.2	7.0	0.8		
	623		SD2	X65Y72	桶側板	31.7	5.6	0.7		
78	624	47	SK142		桶	(52.0)	65.2	1.5	スギ	
	625	49	SP128		柱	59.6	14.2	12.8	クリ	
	626		SP55		杭	29.1	6.0	5.1		
79	627		SP14	X68Y83	柱	50.6	12.6	11.4	コナラ節	
	628	49	SP91	X71Y80	柱	53.4	15.6	17.2	クリ	
	629		SP51	X72Y80	柱	(54.4)	(14.2)		クリ	
	630		SK40		柱	35.0	10.3	10.3	シオジ	
	631		SP29		柱	42.9	13.0	11.4	クリ	
80	632	48	SE21		木臼	32.0	51.0		ブナ	下臼
	633	48	SE21		木臼	37.0	53.6		ブナ	上臼
	634		SE21		木臼	37.2	47.0	5.6	ブナ	上臼
81	635		SK235		漆器椀	11.8		(4.4)		内外面黒色漆,外面文様赤色漆
	636		SD218		漆器椀		5.6	(4.2)		外面黒色漆,内面赤色漆,外面文様赤色漆
	637	50	SD218		漆器椀		5.1	(4.0)	ブナ	外面黒色漆,内面赤色漆
	638		SK385	X78Y112	漆器椀		6.8	(6.0)		内外面黒色漆,内面文様赤色漆
	639		SK281		漆器椀			(0.9)		外面黒色漆,内面赤色漆
	640	50	SD218		漆器蓋			(2.4)	ブナ	外面黒色漆,内面赤色漆,外面文様金色漆
	641	50	SD218		漆器蓋	6.4		(2.4)	ケヤキ	内外面黒色漆
	642	51	SK235		筒状容器	10.8	10.0		エゴノキ	
	643		SK281		栓	4.9	2.7			
	644		SD223		栓	4.8	3.0			
	645	51	SD223		木札	16.3	1.9	0.9	スギ	墨書
	646		SK236		ヘラ状用具	12.1	2.5	0.9		
	647		B2	X92Y117	漆器板状	(12.0)	(3.3)	0.7		外面赤色漆,内面黒色漆
	648	49	SK251		匙	32.3	6.5	1.0	ブナ	
	649		B1	X67Y102	曲物桶	(6.1)	5.2	0.4		側板
	650		SD517		曲物底板	(6.7)	(3.4)	0.4		
	651		SP428		曲物底板	9.4	(4.0)	0.5		
	652		SD218		曲物底板		7.7	0.5		
	653		SD218		下駄	(17.4)	8.5	3.0		
	654	49	SK251		下駄	22.0	7.5	2.0	ホオノキ	
	655	52	SK551		下駄	23.8	(6.9)	1.9	スギ	
82	656		SK235		部材	28.5	5.4	0.7		
	657		SK235		部材	24.1	6.8	0.9		
	658		SK235		部材	21.1	2.8	0.1		
	659		SK235		部材	24.6	7.9	1.2		
	660		SK235		部材	25.4	8.5	1.5		
	661		SK235		部材	25.2	5.4	1.5		
	662	50	SK235		加工板	24.5	7.6	1.2	ヒノキ科	
	663		SX457		加工材	19.1	4.3	2.0		
	664		SD218		桶板	12.8	6.0	0.9		
	665		SK235		部材	(16.3)	6.8	1.0		

第9表 江戸遺跡 木製品一覧(2)

挿図番号	遺物番号	図版番号	遺構番号	座標	種類	法量(cm)			材質	備考
						長さ	幅	厚さ		
83	666	SD291			部材	17.0	14.9	1.4		
	667	SK235			部材	38.1	3.6	1.3		
	668	B2	X94Y116		部材	15.5	3.5	0.7		
	669	SK235			加工板	23.8	2.6	0.6		
	670	48	SK235		柱	24.5	5.0	4.8	スギ	
	671	SK236			柱	(47.6)	16.0		モクセイ科	
	672	SK261			杭	44.7	5.2	4.3		
	673	SE456			杭	(81.2)	12.6			
84	674	SD223			曲物底板	(14.0)	(7.1)	1.1		
	675	B1	X86Y116		曲物底板	(13.5)	(3.7)	0.5		
	676	SK251			曲物底板	17.9	(4.6)	1.0		
	677	49	B1	X80Y91	折敷	19.5	(6.9)	0.5	ヒノキ	
	678	50	SK269		桶底板	78.0	72.9	2.7		
	679		SK215		桶底板		75.0	3.0		
	680	51	SE456		木臼	34.8	54.6	9.6	ブナ	上臼
85	681	SP390			柱	(57.6)	(19.8)		ヤマウルシ?	
	682	48	SP387		柱	32.1	12.2	10.5	クリ	
	683		SK414		柱	35.1	11.9	11.9		
	684		SP428		柱	(42.0)	(13.0)		クリ	
	685		SP337		柱	46.8	10.6	9.8		
86	686	SP336			柱	20.1	8.3	7.6		
	687		SK413		柱	21.5	12.1	9.3	広葉樹環孔材(フジキ?)	
	688		SP301		柱	(33.6)	(11.5)			
	689		SP344		柱	82.0	16.2			
87	690	B1			柱	(66.4)	22.0			
	691		SP415		柱	29.1	7.3	7.9		
	693	48	SP420		柱	37.0	13.7	11.3	コナラ節	
	694		SP427		柱	(37.0)	12.2		クリ	
88	695		SP365		柱	33.8	12.5	9.0	クリ	
	696		SP352		柱	(29.2)	13.7		クリ	
	697		SX460		柱	39.2	9.0	9.0		
	698	51	SK453		柱	(60.0)	18.6		コナラ節	
89	699	SD612	X115Y134		漆器椀		5.6	(6.0)	ブナ	内外面・文様赤色漆,高台内黒色漆
	700		SX629	X99Y159	漆器椀		7.0	(3.2)	ブナ	内外面黒色漆,文様赤色漆
	701		SD604	X114Y150	漆器椀		6.0	(1.6)	ブナ	内外面黒色漆
	702	C	X109Y136		漆器椀		8.2	(2.5)	ブナ	外面黒色漆,内面赤色漆
	703	52	C	X111Y127	漆器しゃもじ	20.1	6.6	0.6	ホオノキ	身内面赤色漆,他黒色漆
	704	C	X116Y149		底板	(21.4)	(5.6)	1.9		
	705		C	X115Y137	下駄(本体)	17.5	9.0	1.1		
					下駄(歯)		9.0	3.4		
	706	C	X116Y138		下駄	20.8	(4.8)	1.3	スギ	
	707		SD604	X113Y135	加工棒	17.6	1.3	1.0		
90	708		SD605		部材	47.8	7.4	2.4		
	709	52	SD605		加工棒	101.0	1.1		スギ	
	710	52	C	X108Y149	紡錘車状		4.6	1.6	ヒノキ	
	711	C	X112Y136		底板	(8.0)	(5.6)	0.4		
90	712	52	SD604	X113Y150	部材	16.4	8.3	4.1	スギ	
	713	52	C	X105Y143	栓状	8.4	2.5	1.0	スギ	
	714	52	C	X108Y128	鍼	(32.1)	(9.7)	1.0	コナラ節	
	715	C	X93-94Y133-134		杭	(55.2)	7.6			
	716	C	X94-95Y133-134		杭	43.5	4.9			
	717	C	X94-95Y133-134		杭	42.4	8.0			

第10表 江尻遺跡 金属製品一覧

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構番号	座 標	種 類	法量 (cm · g)				特記事項
						長 さ	幅	厚 さ	重 さ	
91	801		SD471	X78Y118	釘	9.4	1.6	1.2	13.06	
	802		A	X63Y85	釘	7.5	1.6	1.4	23.66	
	803		B2	X89Y119	鎌	7.3	1.6	0.6	18.50	
	804		SD298	X78Y117	鎌	9.1	1.3	1.1	13.17	
	805		A	X60Y77	釘	10.2	1.3	1.4	22.90	
	806		SK281		釘	9.5	3.5	2.3	29.11	木質部残存
	807		SD1		釘	8.8	0.7	0.8	25.51	
	808		SD56		鎌	13.8	1.4	0.8	72.70	
	809		A	X71Y81	箸	16.1	0.7	0.6	32.64	
	810		SD604	X113Y151	鉛玉	1.3			13.23	
	811		A	X45Y80	煙管	4.5	1.1	1.1	9.06	
	812		C	X120Y147	蹄鉄	10.5	2.3	2.3	77.24	
	813		A		環状	9.9	1.7	1.7	128.54	
	814		SK254		椀形漆	10.7	9.6	5.0	670.00	

第11表 江尻遺跡 石製品一覧

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	遺構番号	座 標	種 類	法量 (cm · g)				材 質	特記 事項
						長 さ	幅	厚 さ	重 さ		
56	10		SD43	X65Y86	打製石斧	(10.3)	7.4	3.0	276.76	凝灰岩	
	11		SD131	X64Y31	打製石斧	13.4	7.8	3.0	386.54	凝灰岩	
	12		SD131	X67Y112	打製石斧	(11.7)	9.7	3.5	430.00	砂岩	
	13		SD131		打製石斧	14.0	6.8	1.4	200.00	砂岩	
	14		SD131	X92Y119	打製石斧	11.5	11.0	2.7	385.00	凝灰岩	
91	901	A	X36Y71	硯		(5.8)	(2.8)	1.2	26.66	凝灰質泥岩	
	902	B1	X73Y102	硯		(3.8)	(4.0)	1.2	130.00	凝灰岩	
	903	SD28	X67Y77	硯		(11.1)	5.3	1.9	144.47	凝灰質泥岩	
	904	A	X65Y75	硯		(12.3)	(6.1)	1.8	172.71	粘板岩	
	905	B1	X64Y99	硯		(8.6)	6.3	0.8	600.00	粘板岩	
	906	SD298	X78Y119	砥石		(7.0)	4.1	2.6	1270.00	凝灰岩	
	907	SK235		砥石		(5.1)	3.8	(2.9)	95.00	凝灰岩	
	908	SX224	X78Y95	砥石		(9.0)	4.6	3.1	150.00	凝灰岩	
	909	SD10	X65Y76	砥石		(6.7)	4.9	1.2	77.16	凝灰岩	
	910	C	X100Y153	砥石		(7.3)	3.1	2.8	105.00	凝灰岩	
92	911	53	SE30	X62Y87	石臼	31.6	32.0	11.6	7250.00	凝灰岩	
	912		SE501		石臼	15.0	14.3	4.0	1100.00		
	913		SK281		石臼	10.6	29.6	10.7	7500.00	凝灰角礫岩	
	914	B1	X72Y98	石臼		10.8	15.0	6.9	1000.00	凝灰岩	
	915	53	C	X99Y152	砥石	13.2	10.4	6.5	1095.00	凝灰質砂岩	
	916	53	SD43	X66Y87	箱状	13.5	(8.5)	6.2	304.65	凝灰岩	
	917		B1	X75Y115	石鉢	(18.0)	(10.2)	4.0	1500.00	千枚岩	
	918		SE102		加工石	11.0	10.6	11.6	1385.00	凝灰岩	
	919		SK281		加工石	14.9	8.5	10.3	1300.00	凝灰岩	
	920		SK281		加工石	(20.8)	12.0	5.9	1600.00	凝灰質砂岩	
	921		SK258		加工石	16.2	11.4	3.4	700.00	凝灰	
	922		A	X60Y85	加工石	18.9	8.2	5.0	732.00	砂質凝灰岩	